京都府遺跡調査概報

第 28 冊

1. 谷内遺跡第4次
2. 栗ケ丘横穴群
3. 園部城跡第2次
4. 平安京右京一条三坊九町（第7次）
5. 八後遺跡・恭仁京跡（作り道）
6. 京奈バイパス関係遺跡（南稲八妻城跡）
7. シゲツ窯跡・シゲツ墳墓群
8. 泉源寺遺跡
9. 八ケ坪遺跡第3次

1988

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは，京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施し，その活用及び研究を行い，先人の遺した文化財を大切にする考え方の普及育成に努めるべく，常に努力いたしております。当調査研究センターも発足して7年が過ぎ，年々事業量が増加していくなかで，一層精密な調査を実施し，一層正確な記録を作成し，これらを後世に伝えるように常に心がけています。そうした基本姿勢のもとで，昭和62年度に実施した発掘調査は，44件にのぼります。そのうち，本書に収めましたのは，谷内遺跡第4次・栗ケ丘横穴群・園部城跡第2次・平安京右京一条三坊九町・八後遺跡・京奈バイパス関係遺跡・シゲツ窯跡及び墳墓群・泉源寺遺跡・八ケ坪遺跡第3次，遺跡数にして9か所の発掘調査の概要です。

当調査研究センターでは，本書を含めて，「京都府遺跡調査報告書」・「京都府埋蔵文化財情報」も刊行しております。これらが関係各位の参考に供され，斯学向上の一助となれば幸いです。

なお，本書に掲載した調査の実施にあたりましては，発掘調査を委託された京都府峰山地方振興局・京都府企業局・京都府教育委員会・建設省近畿地方建設局・日本道路公団大阪建設局・京都府土木建築部等の関係諸機関の御協力を受けただけでなく，酷暑・極寒の中で多くの方がたが熱心に作業に従事していただきましたことを特記して，これらの方がたに厚くお礼申し上げます。

昭和63年3月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長　福　山　敏　男

凡　　例

1. 本冊に収めた概要は下記のとおりである。

   1. 谷内遺跡第4次　2. 栗ケ丘古墳群　3. 平安京右京一条三坊九町(第7次)　4. 園部城跡第2次　5. 八後遺跡・恭仁京跡(作り道)　6. 京奈バイパス関係遺跡　7. シゲツ窯跡・シゲツ墳墓群　8. 泉源寺遺跡　9. 八ケ坪遺跡第3次

2. 各遺跡の所在地，調査期間，経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 谷内遺跡第4次	中郡大宮町谷内	昭和62. 5. 7 〜 昭和62. 7. 24	京都府峰山地方振興局	細川　康晴
2. 栗ケ丘横穴群	綾部市小呂町田坂	昭和62. 7. 13 〜 昭和62. 10. 29	京都府企業局	引原　茂治
3. 園部城跡第2次	船井郡園部町	昭和62. 10. 2 〜 昭和62. 11. 19	京都府教育委員会	鵜島　三寿
4. 平安京右京一条三坊九町	京都市北区大将軍坂田町	昭和62. 7. 21 〜 昭和62. 10. 29	京都府教育委員会	石井　清司
5. 八後遺跡・恭仁京跡（作り道）	相楽郡木津町八後・宮の内	昭和62. 7. 15 〜 昭和62. 11. 5	建設省近畿地方建設局	岩松　保
6. 京奈バイパス関係遺跡	相楽郡精華町南稲八妻	昭和62. 5. 6 〜 昭和62. 7. 26	日本道路公団大阪建設局	黒坪　一樹
7. シゲツ窯跡・シゲツ墳墓群	舞鶴市字志高	昭和62. 9. 21 〜 昭和63. 1. 21	京都府土木建築部	肥後　弘幸
8. 泉源寺遺跡	舞鶴市泉源寺766	昭和62. 10. 9 〜 昭和62. 12. 18	京都府教育委員会	岡崎　研一
9. 八ケ坪遺跡第3次	相楽郡木津町相楽八ケ坪	昭和62. 11. 9 〜 昭和62. 11. 24	京都府土木建築部	小池　寛

3. 本冊の編集には，調査第1課資料係が当たった。

目　　次

1.　谷内遺跡第４次発掘調査概要…… 1
2.　栗ケ丘横穴群発掘調査概要……23
3.　園部城跡第２次発掘調査概要……43
4.　平安京右京一条三坊九町(第７次)発掘調査概要……57
5.　八後遺跡・恭仁京跡(作り道)発掘調査概要……69
6.　京奈バイパス関係遺跡(南稲八妻城跡)発掘調査概要……89
7.　シゲツ窯跡・シゲツ墳墓群発掘調査概要……95
8.　泉源寺遺跡発掘調査概要…… 113
9.　八ケ坪遺跡第３次発掘調査概要…… 125

挿 図 目 次

谷内遺跡第4次

第 1 図　調査地位置図…… 3
第 2 図　トレンチ配置図…… 4
第 3 図　土層断面模式図…… 5
第 4 図　第8トレンチ遺構実測図…… 7
第 5 図　第9トレンチ遺構実測図…… 8
第 6 図　第13トレンチ遺構実測図……10
第 7 図　出土遺物実測図(1)……12
第 8 図　出土遺物実測図(2)……13
第 9 図　出土遺物実測図(3)……15
第 10 図　出土遺物実測図(4)……16
第 11 図　出土遺物実測図(5)……17

栗ケ丘横穴群

第 12 図　調査地位置図……24
第 13 図　調査地周辺地形図……25
第 14 図　調査地地形図……27
第 15 図　1号横穴実測図……30
第 16 図　2号横穴実測図……31
第 17 図　3号横穴実測図……33
第 18 図　土坑実測図(1)……34
第 19 図　土坑実測図(2)……35
第 20 図　横穴出土遺物実測図……37
第 21 図　土坑出土遺物実測図(須恵器)……38
第 22 図　土坑出土遺物実測図(土師器)……39

園部城跡第2次

第 23 図　調査地位置図……44
第 24 図　調査地平面図……46
第 25 図　土層断面図……47

第 26 図　遺構配置図……48
第 27 図　遺構平・断面図……49
第 28 図　井戸実測図……50
第 29 図　出土遺物実測図(陶磁器・土師器)……51
第 30 図　出土遺物(瓦)……53
第 31 図　出土遺物実測図(蓋形埴輪)……54

平安京右京一条三坊九町(第7次)

第 32 図　平安京条坊図……57
第 33 図　調査地地区割図……58
第 34 図　Aトレンチ平面図および土層図……61
第 35 図　AトレンチSB33平面図……62
第 36 図　Bトレンチ遺構図……64
第 37 図　出土土器実測図……65
第 38 図　石器実測図……66
第 39 図　九町Ⅱ期建物復原図……68

八後遺跡・恭仁京跡(作り道)

第 40 図　調査地位置図……69
第 41 図　恭仁京域復原推定図……70
第 42 図　古代宮都位置図……71
第 43 図　調査トレンチ配置図……72
第 44 図　Aトレンチ検出遺構平面図……72
第 45 図　B～Eトレンチ主要遺構平面図……73
第 46 図　Bトレンチ検出遺構平面図……74
第 47 図　BトレンチSF07検出轍跡平面実測図……75
第 48 図　BトレンチSD06内検出足跡……76
第 49 図　Cトレンチ検出遺構平面図……77
第 50 図　D・Eトレンチ検出遺構平面図……78
第 51 図　各トレンチ土層実測図……79
第 52 図　出土遺物実測図……81
第 53 図　出土遺物拓本－1……82
第 54 図　出土遺物拓本－2……83

京奈バイパス関係遺跡(南稲八妻城跡)

第 55 図　調査地位置図……89
第 56 図　南稲八妻城跡平面図……90
第 57 図　B地点トレンチ配置図……91
第 58 図　検出遺構実測図(A—A′ トレンチ) ……92
第 59 図　出土遺物実測図……93

シゲツ窯跡・シゲツ墳墓群

第 60 図　シゲツ窯・シゲツ墳墓群の位置と周辺の遺跡……96
第 61 図　調査位置関係図……99
第 62 図　シゲツ窯跡(A地区)トレンチ配置図…… 100
第 63 図　シゲツ3号窯実測図…… 101
第 64 図　焼土坑実測図および1号窯最終操業面遺物出土位置図…… 102
第 65 図　第2トレンチ検出遺構実測図…… 103
第 66 図　1号窯出土遺物実測図(1)…… 104
第 67 図　1号窯出土遺物実測図(2)…… 105
第 68 図　焼土坑・第2トレンチ出土遺物…… 106
第 69 図　第2トレンチ出土石器…… 108
第 70 図　シゲツ墳墓群(B地区)測量図…… 109
第 71 図　4号墓実測図…… 110
第 72 図　シゲツ墳墓群出土遺物…… 111

泉源寺遺跡

第 73 図　調査地位置図及び周辺主要遺跡分布図…… 114
第 74 図　トレンチ配置図…… 116
第 75 図　拡張区遺構配置図…… 117
第 76 図　泉源寺2号墳実測図…… 118
第 77 図　SB01・SA01実測図…… 120
第 78 図　出土遺物…… 122
第 79 図　出土遺物(鉄器)…… 123

八ケ坪遺跡第3次

第 80 図　調査地位置図…… 126
第 81 図　地質・土層関係参考図…… 127

第 82 図　トレンチ及び断ち割り拡設定図…… 128
第 83 図　第1トレンチ断ち割り断面東壁実測図…… 129
第 84 図　第2トレンチ遺構実測図…… 130
第 85 図　第2トレンチ断ち割り断面西壁実測図…… 131
第 86 図　第3トレンチ遺構実測図…… 132
第 87 図　第3トレンチ南西壁断面図…… 133
第 88 図　第3トレンチL. N. 19西南壁断面図…… 134
第 89 図　出土遺物実測図…… 135
第 90 図　出土瓦拓影…… 137
第 91 図　出土遺物実測図…… 137
第 92 図　第1次調査・第3トレンチ平面図…… 139

付 表 目 次

栗ケ丘横穴群
付 表 1　土坑一覧表……41
八後遺跡・恭仁京跡(作り道)
付 表 2　出土遺物観察表……85
シゲツ窯跡・シゲツ墳墓群
付 表 3　出土須恵器計測表…… 107
八ケ坪遺跡第3次
付 表 4　出土遺物法量表…… 136

図 版 目 次

谷内遺跡第４次

図版第１　(1)調査地遠景(西から)　(2)８トレンチ　ＳＨ05(西から)

図版第２　(1)９トレンチ　SH13(SK09)，SK10ほか(西から)

(2)13トレンチ　SH16(西から)

図版第３　(1)13トレンチ　SH15(完掘状況，南から)

(2)13トレンチ　SH15(遺物出土状況，南から)

図版第４　縄文土器・SK10・SH16出土遺物

図版第５　SH15出土遺物(1)

図版第６　SH15出土遺物(2)

図版第７　墨書土器

栗ケ丘横穴群

図版第８　(1)調査地南半部(西から)　(2)調査地北半部(南から)

図版第９　(1)１号横穴全景(西から)　(2)１号横穴玄室(西から)

図版第10　(1)２号横穴全景(北から)　(2)２号横穴玄室(西から)

図版第11　(1)３号横穴全景(南西から)　(2)３号横穴玄室(北東から)

図版第12　(1)土坑１(北から)　(2)土坑１遺物出土状況

図版第13　(1)土坑３(北から)　(2)土坑４(北から)

図版第14　(1)土坑５(南から)　(2)土坑６(北から)

図版第15　横穴出土遺物

図版第16　土坑出土遺物(1)

図版第17　土坑出土遺物(2)

園部城跡第２次

図版第18　(1)調査地調査前全景　(2)調査地全景

図版第19　(1)石組み溝(SD01～SD03)検出状況

(2)SD01北半部検出状況(蓋石除去前)

図版第20　(1)SD01南半部検出状況　(2)SE01検出状況

図版第21　出土遺物

図版第22　出土遺物

平安京右京一条三坊九町(第7次)

図版第23　(1)Aトレンチ調査地全景(北から)　(2)同　上(東から)

図版第24　(1)Aトレンチ東半部(北から)

(2)Aトレンチ SB0766・0771完掘状態(北から)

図版第25　(1)Aトレンチ SB0733(南から)　(2)第Ⅲ期建物群復原模型

図版第26　(1)SB33　13Z区掘形(南から)　(2)SB33　9X区掘形(西から)

(3)SB33　12Z区掘形(東から)　(4)SB33　13Y区掘形(西から)

図版第27　(1)Bトレンチ全景(北から)　(2)同　上(東から)

八後遺跡・恭仁京跡(作り道)

図版第28　(1)調査前風景(Bトレンチ周り・北西より)

(2)調査前風景(Cトレンチ周り・東から)

図版第29　(1)Aトレンチ全景(東から)　(2)Bトレンチ全景(東から)

図版第30　(1)Bトレンチ SD04全景(北から)　(2)Bトレンチ SD08(東から)

図版第31　(1)Bトレンチ SD06・SD08・轍跡全景(南東から)

(2)Bトレンチ轍跡(北西から)

図版第32　(1)Bトレンチ SD06完掘状況(北西から)

(2)Bトレンチ SD06底面検出足跡(北から)

図版第33　(1)Cトレンチ全景(東から)　(2)Cトレンチ全景(南西から)

図版第34　(1)Cトレンチ SF17全景(北西から)

(2)Cトレンチ SD02・SD03(北西から)

図版第35　(1)Eトレンチ全景(東から)　(2)Dトレンチ全景(東から)

図版第36　(1)出土遺物(第52図)　(2)出土遺物(第53・54図)

京奈バイパス関係遺跡(南稲八妻城跡)

図版第37　(1)調査地風景(東から)　(2)柱穴状遺構検出状況(A′トレンチ南端)

図版第38　(1)Cトレンチ掘削状況(北から)　(2)土師器皿出土状況(Aトレンチ)

シゲツ窯跡・シゲツ墳墓群

図版第39　(1)シゲツ窯跡調査前遠景　(2)シゲツ1号窯検出状況

図版第40　シゲツ1号窯全景

図版第41　(1)土坑完掘状況　(2)杭跡検出状況　(3)第1トレンチ完掘状況

図版第42　(1)焼土坑　(2)第2トレンチ全景

図版第43　(1)シゲツ墳墓群遠景　(2)シゲツ墳墓群から志高遺跡を望む

図版第44　(1)2・3号墳・4号墓近景　(2)4号墓完掘状態
図版第45　出土遺物

泉源寺遺跡

図版第46　(1)調査地全景(西から)　(2)第1トレンチ試掘状況(南東から)
図版第47　(1)泉源寺2号墳検出状況(北北東から)
(2)第2トレンチ付近拡張区掘削状況(北西から)
図版第48　(1)第1トレンチ付近拡張区掘削状況(南南西から)
(2)SB01・SA01検出状況(南南西から)
図版第49　(1)泉源寺2号墳検出状況(北西から)
(2)泉源寺2号墳掘形完掘状況(北西から)
図版第50　出土遺物（須恵器・土師器）
図版第51　出土遺物（須恵器・鉄器）

八ケ坪遺跡第3次

図版第52　(1)第1トレンチ全景(北から)　(2)第2トレンチ調査前全景(北から)
図版第53　(1)第2トレンチ断ち割り坑No.3土層堆積状況(西から)
(2)第1トレンチ断ち割り坑No.1土層堆積状況(西から)
図版第54　(1)第2トレンチ中世溝完掘状況(北西から)
(2)第2トレンチ中世溝完掘状況(西から)
図版第55　(1)第3トレンチ遺構完掘状況(東から)
(2)第3トレンチ遺構完掘状況(北西から)
図版第56　(1)L.N.12遺物検出状況(北西から)　(2)L.N.19南壁断面(北から)
図版第57　出土遺物

1. 谷内遺跡第4次発掘調査概要

1. はじめに

この調査は，昭和62年度府営大宮地区ほ場整備事業に伴うものである。谷内遺跡は，京都府中郡大宮町谷内に所在する。谷内遺跡は，昭和58年大宮町内の遺跡詳細分布調査において若干の遺物が採取され，遺物散布地であることが確認された(注1)。そして，昭和60年，ほ場整備事業に伴う土木工事に伴い遺物が採取されるに及び(注2)，翌61年，その地点を当調査研究センターが発掘調査し，自然流路中から多量の弥生土器が出土した(第１次調査(注3))。また，この年，京都府教育委員会による遺跡の範囲確認を目的とした試掘調査も，あわせて行われ，古墳時代中期の竪穴式住居跡の検出をはじめ，成果が上がっている(第２次調査(注4))。今年度は，これらの成果を受けて，京都府峰山地方振興局から委託を受けた京都府教育委員会による試掘調査(第３次調査(注5))と当センターが発掘調査を行った。従って，ここに報告する調査は，谷内遺跡の第４次調査となる。

今回の調査の基本的方針は，京都府教育委員会と当センター間における協議の結果，当初，前年度良好な包含層を確認した北地区の山裾に当センターがトレンチを設定し，面的調査を行い，京都府教育委員会は，南地区を中心に前年度に実施した試掘調査にひき続き，さらに試掘トレンチを増設するという方針を打ち出した。しかし，北地区の調査予定か所については調査開始時，大根の作付けがなされており，面的調査が不可能であった。このため北地区については，大根の取り入れを待って面的調査を当センターが行うこととし，それまでの期間，遺跡全体の試掘を京都府教育委員会が(2，3，4，5，6，10，11，12トレンチ)，北地区の試掘(１トレンチ)と南地区の面的調査(7，8，9トレンチ)を当センターが担当することとなった。調査は，京都府峰山地方振興局から依頼を受け，昭和62年５月７日から７月24日までの約３か月にわたり，調査面積は約895m^{2}である(1，2，7，8，9，13トレンチ)。調査は，調査第２課第１係係長辻本和美，同調査員肥後弘幸，細川康晴が担当した。

現地調査にあたって，地元有志の作業員諸氏はじめ多くの方々には，雨季の激しい湧水地の中での困難な作業に従事していただいた。また，大宮町教育委員会，京都府丹後土地改良事務所，京都府教育委員会はじめ，関係諸機関の御協力を賜った。さらに，直接現地に足をお運びいただき，御教示，御指導を賜った方も多数にのぼる。この場を借りて記して感謝の意を表します(注6)。なお，調査に係る経費は，全額京都府峰山地方振興局が負担した。

2. 位置と環境

谷内遺跡は，丹後半島最大の河川，竹野川中流域にあたる中郡盆地の入り口の東南隅部に位置し，竹野川右岸の丘陵裾部に立地する。

竹野川の歴史は，丹後半島の歴史の縮図であり，古代日本海文化の一大中心地として，注目を浴びている。

大宮町の開発の歴史は古く，現在知られているところでは，縄文時代早期(約6,000年前)にさかのぼる。かつて「大宮町の歴史は，弥生時代中期に始まる。……」とされていたこの地域も，近年の相次ぐ調査で，裏陰遺跡(注7)を皮切りに，正垣(注8)，及び今回の谷内遺跡でも，押型文土器が出土している。今後さらに増加する可能性がある。つづく弥生時代では，前期にさかのぼるものは未見であるが，中期以降の住居，墓ともに近年の調査により相次いで発見されている。谷内遺跡をはじめ，集落として，裏陰・正垣・三重遺跡などがあり，墓として帯城(注9)・小池墳墓群(注10)・大谷古墳下層墳墓群(注11)がある。

このように，弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての墳墓の調査例は増加しているが，未だその変遷の画期は明らかにされていないのが実状である。

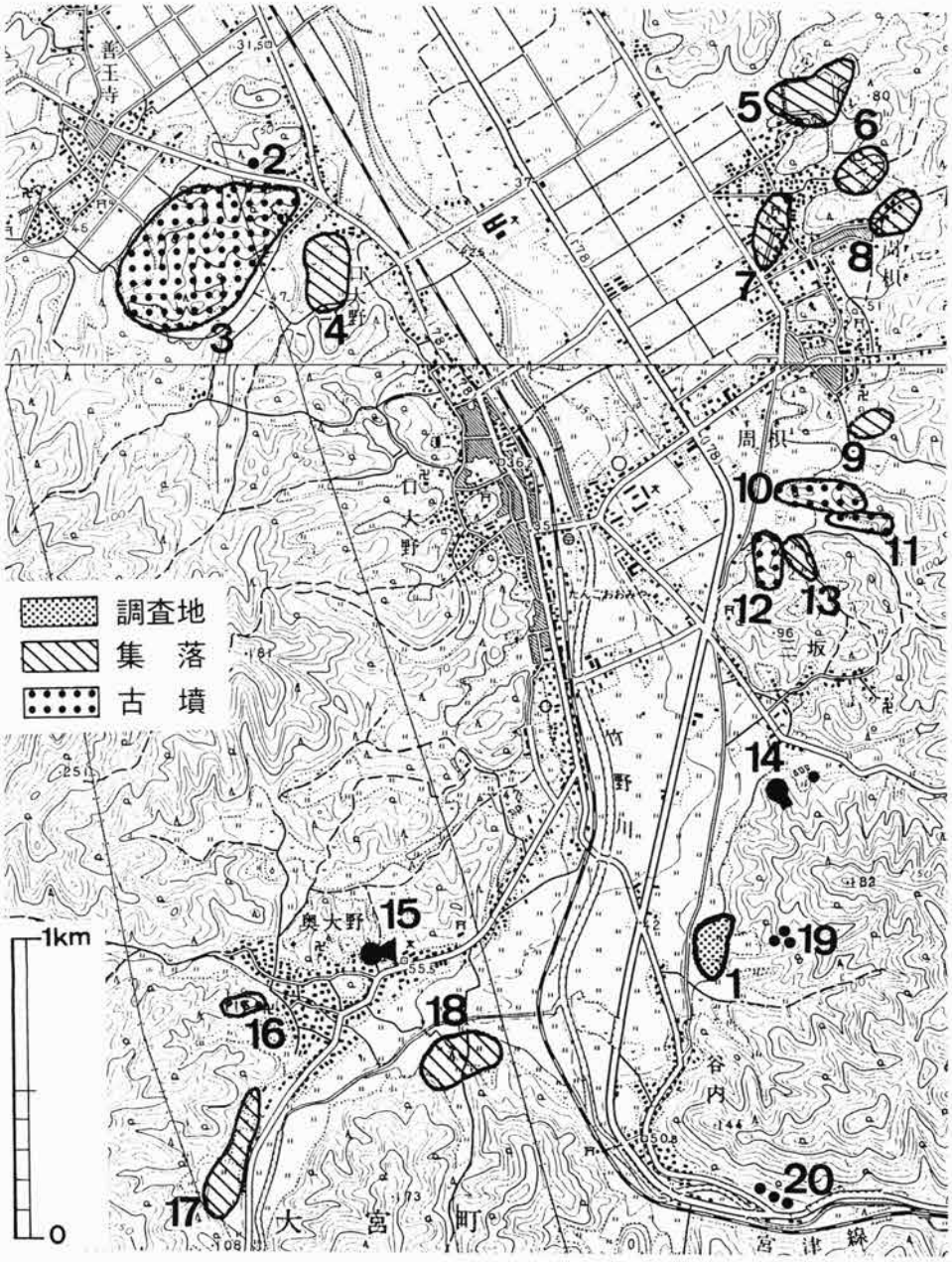
大宮町では，これまで確実な，前・中期古墳は知られておらず，当該時期における中郡盆地の古墳の中心は，竪穴式石室に，石製腕飾類を有するカジヤ古墳(注12)などに代表される，峰山町に偏っているものと考えられてきた。ところが昭和61年，谷内遺跡の北に隣接する大谷古墳が調査されるに及び，大宮町内にも首長墓の存在が知られるようになった。この古墳では，箱形石棺中から女性人骨が発見され，丹後の女王の墓として話題をふりまいた。一方，当該期の集落跡については，不明な部分が多いが，今回検出した住居跡群は，この大谷古墳に前後する時期のものである。

さらに，古墳時代後期になると，横穴式石室の導入は遅れるものの，木棺直葬墓が，尾根上に数基単位で築造される。中郡盆地の後期首長墓は，新戸古墳(注13)のように，単独墳的様相を示すが，これは石棚を有するものであり特異である。一方，石室墳では，顕著な密集性を示す群集墳は成立しないものの，横穴がこれに代わり，集団墓的である。しかし，横穴新規造営の下限は，奈良時代にまで及び墨書土器を持つなどその特殊性も指摘され，古墳時代後期から連綿と続く，墓制，階層制であるのかは，今後の検討課題である(注14)。

ほかに，奈良時代にはアバ田，三坂谷古窯跡(注15)で須恵器の生産が始まっている。両地における生産の契機については，その時代性とあいまって興味深いものがある。

3. 調査の経過

今回の調査では，まず最初に，遺跡の中で，トレンチ設定か所に測量用基準杭の設置か



第1図　調査地位置図

1. 谷内遺跡　2. 三本松古墳　3. 小池古墳群　4. 菅外遺跡　5. カンジョガキ遺跡　6. 北村遺跡　7. 大宮売神社遺跡　8. 殿遺跡　9. 左坂遺跡　10. 帯城墳墓群　11. 大田鼻横穴群　12. 有明古墳群・横穴群　13. 里山遺跡　14. 大谷古墳　15. 新戸古墳群　16. 光明寺裏山古墳群　17. 正垣遺跡　18. 裏陰遺跡　19. 小林古墳群　20. 谷内古墳群

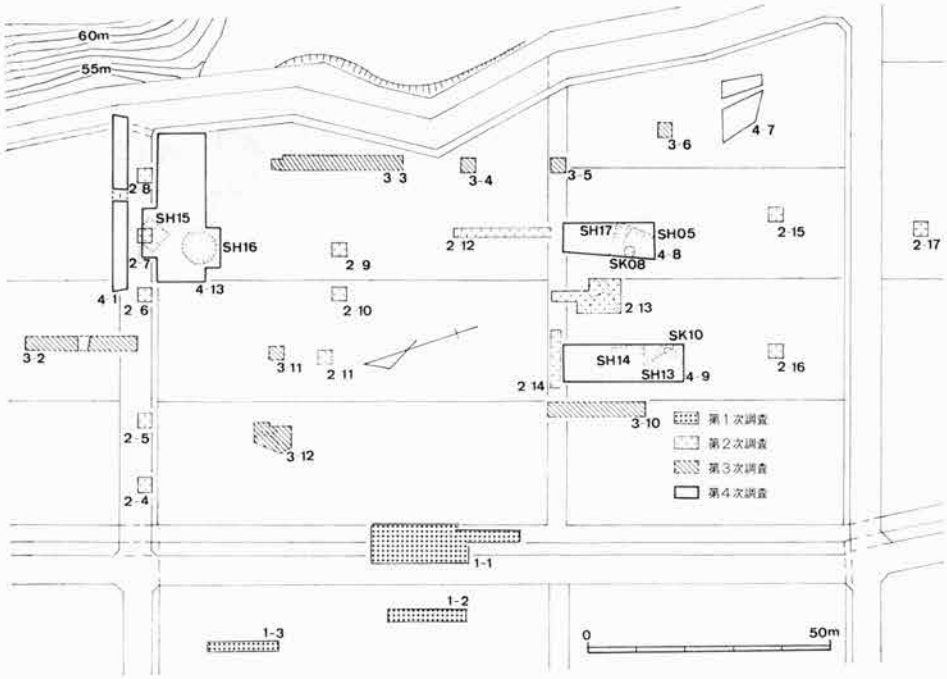
ら行った。地区割りは，すでに前年度に基準点が定められているのでこれに従った。トレンチの設定にあたっては，現地形である田畑の形状に左右され，特に暗渠排水を破壊しないよう考慮した。当初，前年度の試掘結果を踏まえ，北地区で良好な包含層が確認された86-6・7・8グリッドの南に沿って東西方向に第1トレンチを設定した。また南地区では，竪穴式住居跡が検出された86-13トレンチの上下段(東西)に隣接する水田に，南北方向で第8・9トレンチを，東へのびる丘陵端部を開墾した畑に第7トレンチをそれぞれ設定した。各トレンチの掘削は，1・8・9トレンチの表土・床土については重機を用いて除去した。

1トレンチの掘削は，雨季の調査であったこともあって激しい湧水により，調査は困難を極めた。このため，狭いトレンチでの平面精査は断念し，断面観察と記録を行い，大根の取り入れを待って，トレンチの拡張(13トレンチ)に備えた。

7トレンチは，地形的に重機の使用が困難であったので，当初，3m四方の試掘坑を設け人力により掘削したが，縄文土器の出土を見たので，隣接する上下2段の畑にわたりトレンチを拡張した。

8，9トレンチでは，重機掘削に続き，遺構面を精査したところ，遺存度は良好ではないものの若干の遺構を検出することができた。

大根の取り入れ後，1トレンチの南に平行して13トレンチを設定した。表土，床土を重



第2図　トレンチ配置図

機により除去して後，遺構面を精査したところ，トレンチ北辺及び南辺付近でそれぞれ住居跡と思われる土色の変化を確認したので，拡張して調査を進めた。

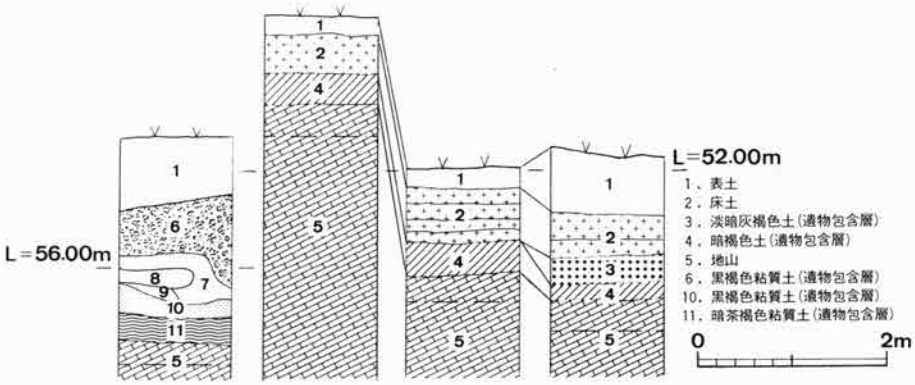
近年，大宮町内では，埋蔵文化財の発掘調査が相次ぎ，地元の関心が高まっているということも手伝って，調査期間中，地元谷内区の方々，大宮第1小学校6年生児童約130人を始め，数多くの見学者があった。このような経過を踏まえ，7月9日現地説明会を行った。天候にも恵まれ，約100人の参加を得た。7月24日，すべての現地調査を終了した。

4. 調査の概要

谷内遺跡は，現在，水田あるいは畑地と化している。1・8・9・13トレンチに共通する層序は，現地表面から深さ10～20cmの耕作土，第2層は，床土で，層厚20～40cmを測る。第3層には，13トレンチでは厚さ30cm前後の平安～鎌倉時代の遺物を含む，淡暗灰褐色を呈する遺物包含層が存在する。第4層は，遺跡のほぼ全面に広がる暗褐色土で，弥生時代後期～鎌倉時代の遺物を含む包含層で厚さ20～40cmにわたる。第4層の下層は地山であり，土質は，粘質・砂質などか所により様々である。遺構は，すべて第4層の暗褐色土を除去し，地山面を精査した段階で検出している。

以下，各トレンチの調査成果について，その概要を述べる。なお，遺構番号は，1987年度に設定されたトレンチ全体を通して(府教委調査分も含む)発見順に通し番号とした。

(1) 7トレンチ　基本的層序は，表土(層厚60～80cm)，黒褐色粘質土(30～80cm，遺物包含層)の下層に，2～3層の層厚20cm程度の粘質土がブロック状に堆積する。更に黒褐色粘質土(層厚30cm，遺物包含層)，最下層の暗茶褐色粘質土(層厚30cm，遺物包含層)を経て，暗黄褐色粘土の地山に至る。上層の黒褐色粘質土中からは，破片数50点を超える多



第3図　土層断面模式図

量の縄文土器片がややまとまって出土した。しかし，トレンチを拡張した結果，弥生時代後期の遺物が同一層内に混入することが明らかとなり，これらの縄文土器は二次堆積の遺物であると判断した。その他歴史時代(鎌倉時代以降か)の遺構として，直径0.4～1mを測る円形土坑を数基検出したが，その性格・年代等については限定できない。

(2) **8トレンチ**　このトレンチでは，遺物包含層である暗褐色土を除去し，黄褐色粘土上面を精査したところ，トレンチ南端付近で竪穴式住居跡2基(SH05，SH17)，円形土坑1基(SK08)，ピット群多数を検出した。地形的には丘陵裾部にあたる。

SH05　方形竪穴式住居跡である。北辺と東辺の一部を除いてすでに削平され，残存長2.1m×3.4mを測る。周壁溝を巡らし，残存壁高13cm，床面から溝底までの深さ5cmである。主柱穴は，おそらく4基を有するものと想定されるが，北東隅にあたる1基以外は検出できなかった。径30cm・深さ26cmを測る。床面の施設として他に東辺に沿って径60cm・深さ27cmを測る円形土坑が穿たれている。貯蔵穴として捉えておきたい。

遺物は，北辺の周壁溝上面の住居埋土下層で，出土レベルを同じくして土師器2点(50・51)が出土した。いずれも住居床面から5cm程度遊離し，また欠損している。

SH17　方形竪穴式住居跡の周壁溝の一部をわずかに検出した。北辺1.0m・東辺0.7mが残存し，幅20cm・深さ9cmを測る。

SK08　長径(南北)2.1m・短径(東西)2.0m・深さ24cmを測る円形土坑である。埋土中層から，土師器杯3点，小自然石3点が出土した。

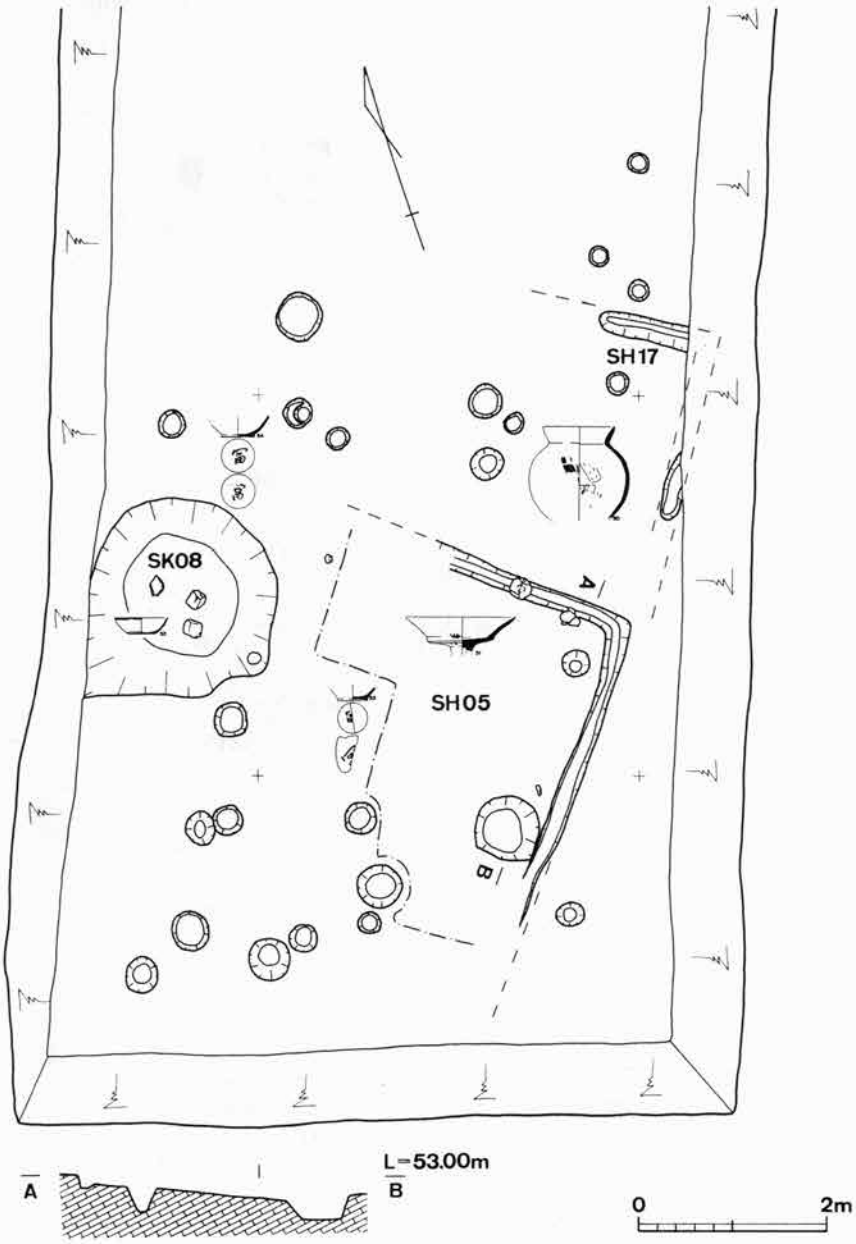
(3) **9トレンチ**　このトレンチでは，暗褐色土を除去し，地山面(灰褐色砂質土)を精査した段階で，遺構を検出した。遺構埋土は，すべて暗褐色土で，切り合い関係の識別が非常に困難であり，確認できたものは，SD23とSK09，SK10の関係のみである。主な遺構として，竪穴式住居跡2基(SH13，SH14)，方形土坑1基(SK10)，溝状遺構2条(SD23，SD24)がある。

SK10　1辺1.2m×1.5・m深さ10.2cmを測る方形土坑である。北東隅床面直上には，弥生土器器台(56)1点が，口縁部を下にし据え置かれたような状況で出土した。ただし，脚部は欠損している。他に，埋土中から鉢形土器の破片(57)・管玉の未成品(55)が出土した。北西隅をSK09により破壊されている。よって先後関係は，SK10→SK09となる。

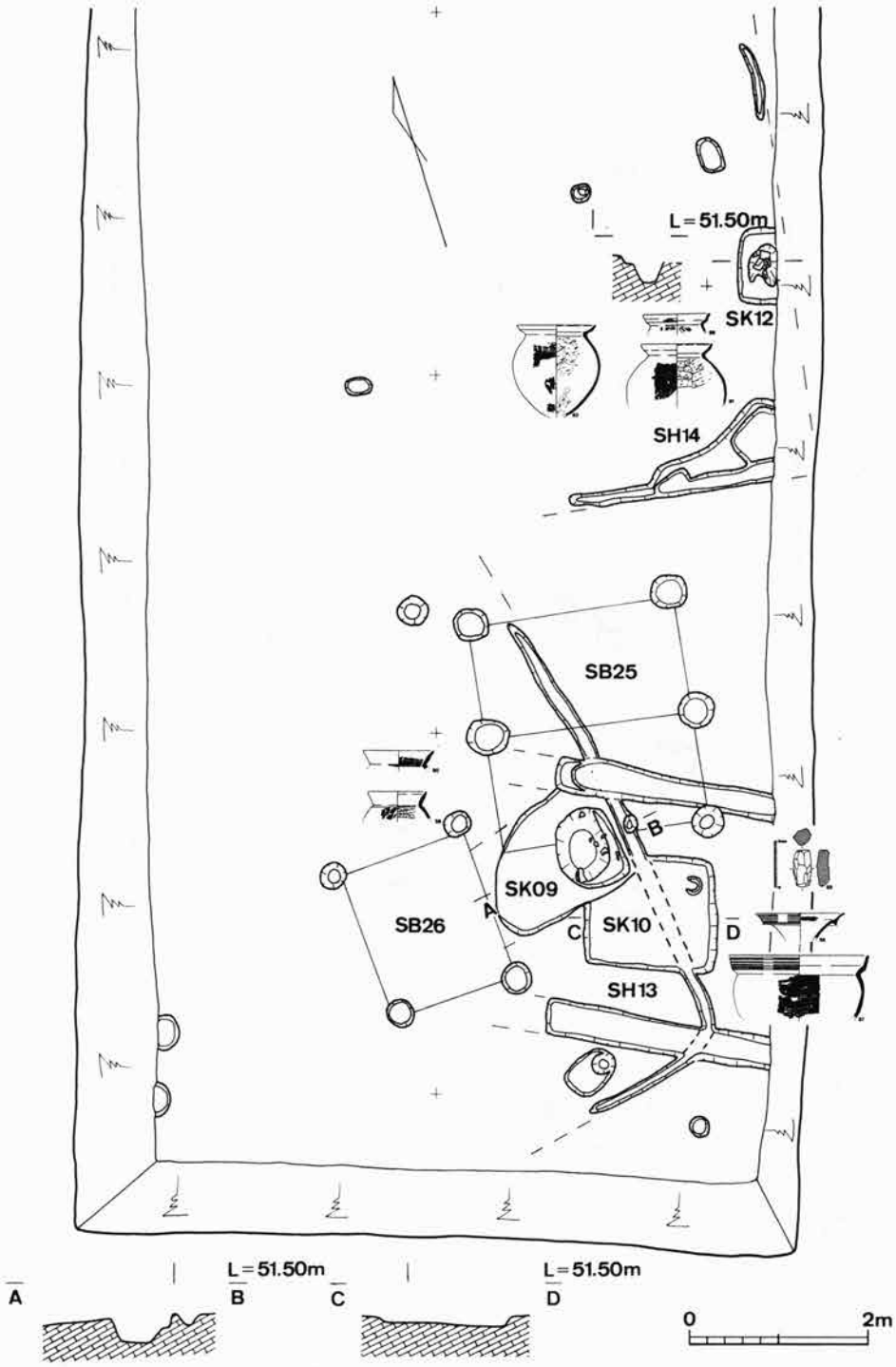
SH13　残存長5.2m×1.7m・幅16cm・深さ7cmを測る周壁溝と思われるL字溝と，それに付設する土坑SK09を検出したので，方形竪穴式住居跡と判断した。周壁溝の東隅部は，溝SD24と重複するが，隅部は，やや丸味を帯びるようである。付設する土坑SK09は，前述のようにSK10を破壊し設けられるが，北辺をSD23に破壊されている。2段に掘り込まれ，上段土坑1辺1.3m×1.6m(残存長)・深さ14cm，下段土坑は，0.7m×0.9mの半円形

状であり，深さ34cmを測る。周壁溝と土坑の接点は，幅6cmの平坦面を有し隔てられている。SK09からは，下段土坑埋土中を中心に，土師器甕片など(58, 59, 60)が出土した。貯蔵穴と考えられる。

SH14 SH13と同様，貯蔵穴を東辺に付設する方形竪穴式住居跡と考えた。周壁溝残存長は，東辺0.9m・南辺2.3m・幅16cm・深さ3cmを測る。付設する土坑SK12は，二段土坑



第4図　第8トレンチ遺構実測図



第5図　第9トレンチ遺構実測図

である。上段0.8m×0.5m(残存長)・深さ6cmを測る方形のもので，下段土坑は，径30cmのやや不整形な円形を呈し，深さ18cmを測る。出土遺物は，下段土坑埋土上層に集中し，土師器甕片(59・60・61)などが出土した。

SD23・SD24 2.4m間隔でほぼ平行する，幅30～40cm・深さ7cmを測る2条の溝状遺構である。出土遺物はなく，時期・性格などは不明である。SK09より新しい。

SB25 1間×2間の掘立柱建物跡の可能性がある。東西柱間距離2.3m・南北1.3mを測る建物であるとすれば極めて小規模であり，性格及び時期も不明であるが，SD23よりも新しい。

SB26 1間四方の柱間1.7m×1.4mを測る掘立柱建物跡の可能性がある。時期・性格は不明である。

以上，9トレンチの遺構の先後関係は，SK10→SH13(SK09)→SD23→SB25となる。

(4) 13トレンチ

SH16 直径7mを測る円形竪穴式住居跡である。壁残存高22cmを測り，周壁溝は持たない。主柱穴は四本柱であり，柱間距離は，北東から，時計回りに2.3m，2.4m，2.3m，2.4mを測る。中央に，径86cm・深さ50cmの円形土坑を穿つ。炭化層は検出されず，貯蔵穴もしくは炉跡の可能性がある。遺物は，床面に近い埋土中から出土した。すべて破片であり完形品はない。

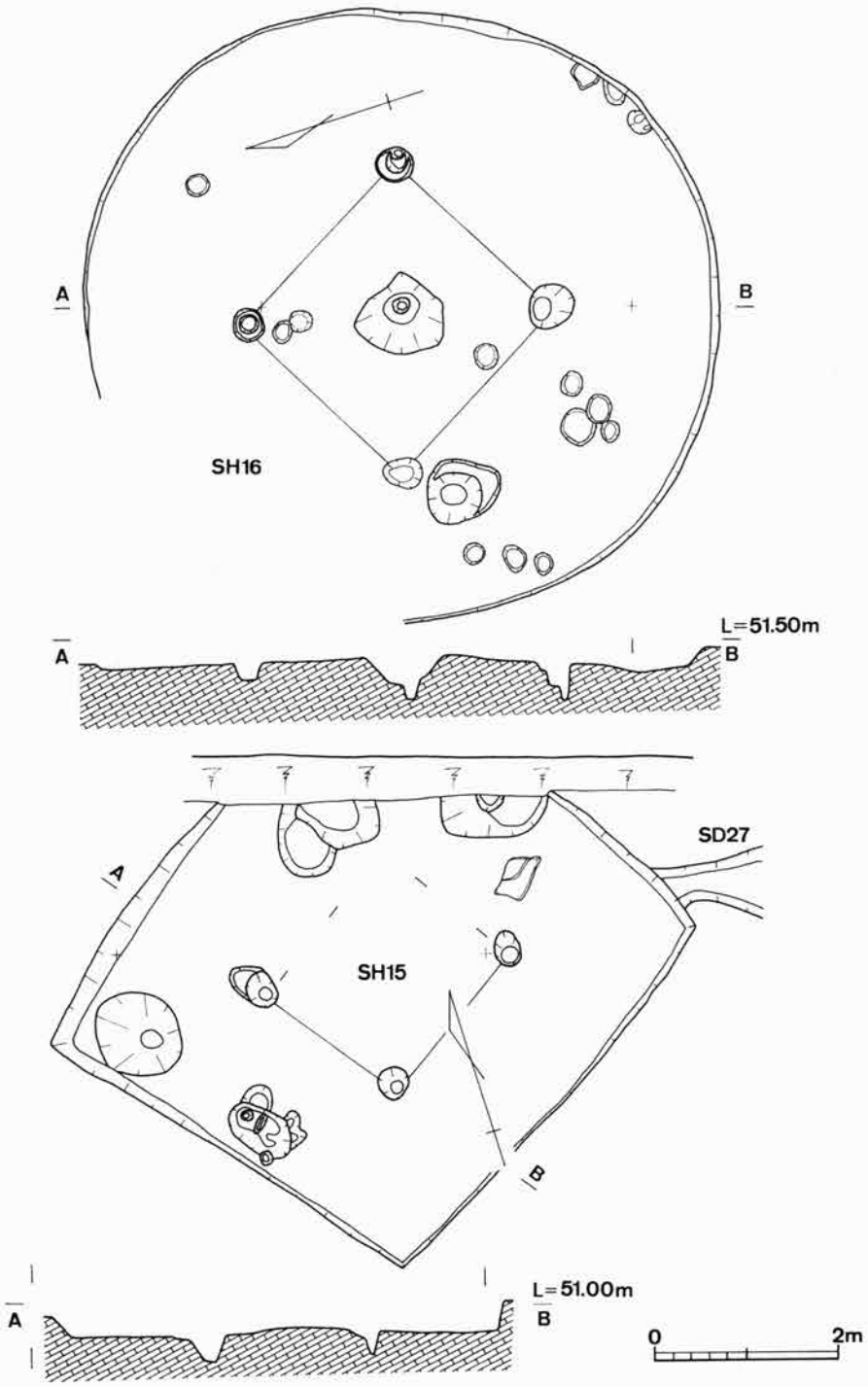
SH15 1辺4.6m×4.9mを測る方形竪穴式住居跡である。SD27を破壊して営まれた。壁残存高34cmを測り，周壁溝をもたない。主柱穴は，四本柱であると考えられるが，3基を検出したにとどまった。柱間距離は北東のものから時計回りに1.9m，1.6mを測る。主柱穴のほかに，床面には4基の土坑が穿たれるが，住居以前の土坑の可能性も考えられるが，住居に伴う貯蔵穴とも考えられる。床面中央は固く叩き締められ，北東柱穴の北には台石を据える。遺物の出土状況としては，完形品を多数含む土師器約60個体が出土したが，すべて床面より遊離していた。

SD27 SH15により西側を破壊された素掘りの溝状遺構である。残存長1.2m・幅0.8m・深さ12cmを測る。出土遺物はなく，時期，性格は不明である。

5. 出 土 遺 物

今回調査の出土遺物は，整理箱約30箱である。このうち大半が，第13トレンチの方形竪穴式住居跡(SH15)のもので，他の遺構からの出土は，極めて少ない。ここでは，時代順に説明をし，古墳時代のものについては，SH15出土のものを中心に補足を加える。

(1) 縄文時代の土器 すべて押型文土器の破片である。大半が体部片であるが，1・2・3



第6図　第13トレンチ遺構実測図

・4・5は，口縁部，23は，底部であると思われる。土器表面の文様は，押型文施文原体の相違により，A類の山形文を施すもの(6・7・8・9)と，B類の楕円文を施すものに大別できる。A類には，A_1：文様の間隔がやや荒く鋭がり気味の山形を描くもの(7)と，A_2：山形がややゆるやかで文様の間隔の狭いもの(8・9)，A_3：やや大ぶりの山形を施すもの(6)がある。6は，内面に斜行沈線を施す。A類は，B類に比べて器壁は薄く，厚さ7～8mmを測る。

B類は，楕円文の粒の大きさにより細分できる。すなわち，B_1：長径4mm・短径2mm前後の穀粒状のもの(11・12)，B_2：長径6mm・短径5mm前後のもの(1・3・5・13・14・15・16)，B_3：1辺2cm四方を測る菱形状のもの(4・17・18・19・20・21・22)。B類の器壁は，A類に比べ厚く，8～20mmを測る。内面に斜行沈線を施す。

(2) 弥生時代の遺物　13トレンチのSH16，9トレンチのSK10出土のものが遺構からの出土である。SH16出土遺物は，住居跡埋土からの出土の一括性の高い遺物であるので，これを中心に報告する。

SH16出土遺物

器種構成　壺A・B，甕A・B，高杯A，器台A，鉢A・B・C・D，蓋がある。

壺A(2)　筒状の頸部をもつ短頸壺である。口縁端部を上下に拡張する。

壺B(1・4)　ゆるやかな複合口縁をもつ短頸壺である。端面に擬凹線を施すものB_1(1)と施さないものB_2(4)がある。

壺C_1(5)　複合口縁の壺である。

甕A(6)　単純「く」の字形の口縁部を有するもの。肩部までヘラケズリする。

甕B(14・15)　複合口縁の口縁端面に擬凹線を施すもの。口縁部の外傾角度，頸部の屈曲度によりB_1(14)，B_2(15)に細分できる。底部は，17が伴うものと考えられる。

高杯A(20・21)　複合口縁の高杯で，口縁部に擬凹線を施すものである。口縁部がほぼ直立し杯部の体部と底部の境界が明瞭なものA_1(21)と，口縁部が外傾し，体部と底部の境界が不明瞭なものA_2(20)に細分できる。脚部は，22が伴うものと考えられる。

器台A(18・19)　口縁部を拡張し，端面に擬凹線を施すものである。口縁端部を下方に拡張したものA_1(18)と，複合口縁をなすものA_2(19)がある。

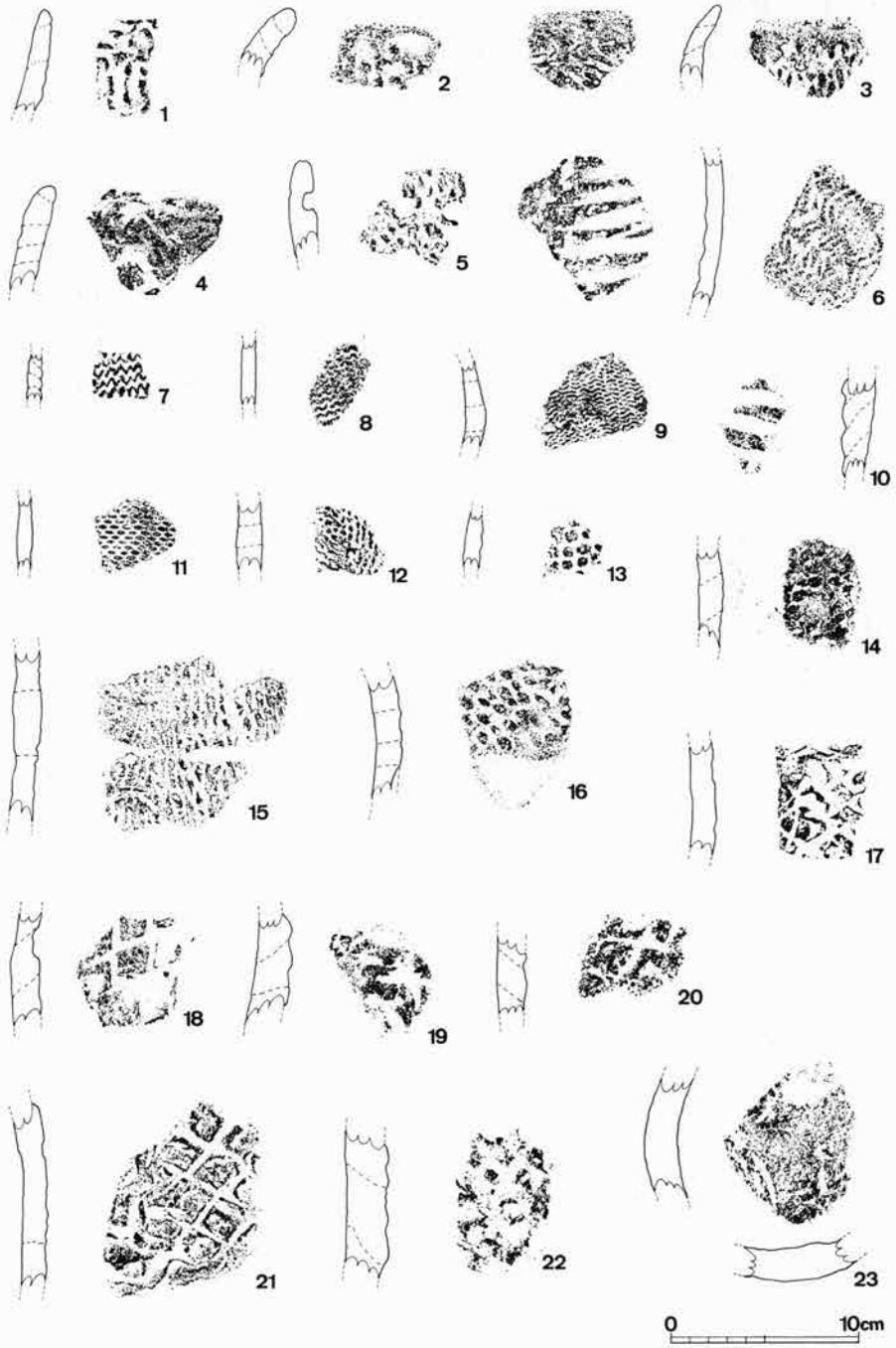
鉢A(8)　口縁部が内湾しながら立ち上がるものである。

鉢B(9)　口縁部が，やや内湾し直立する片口のものである。

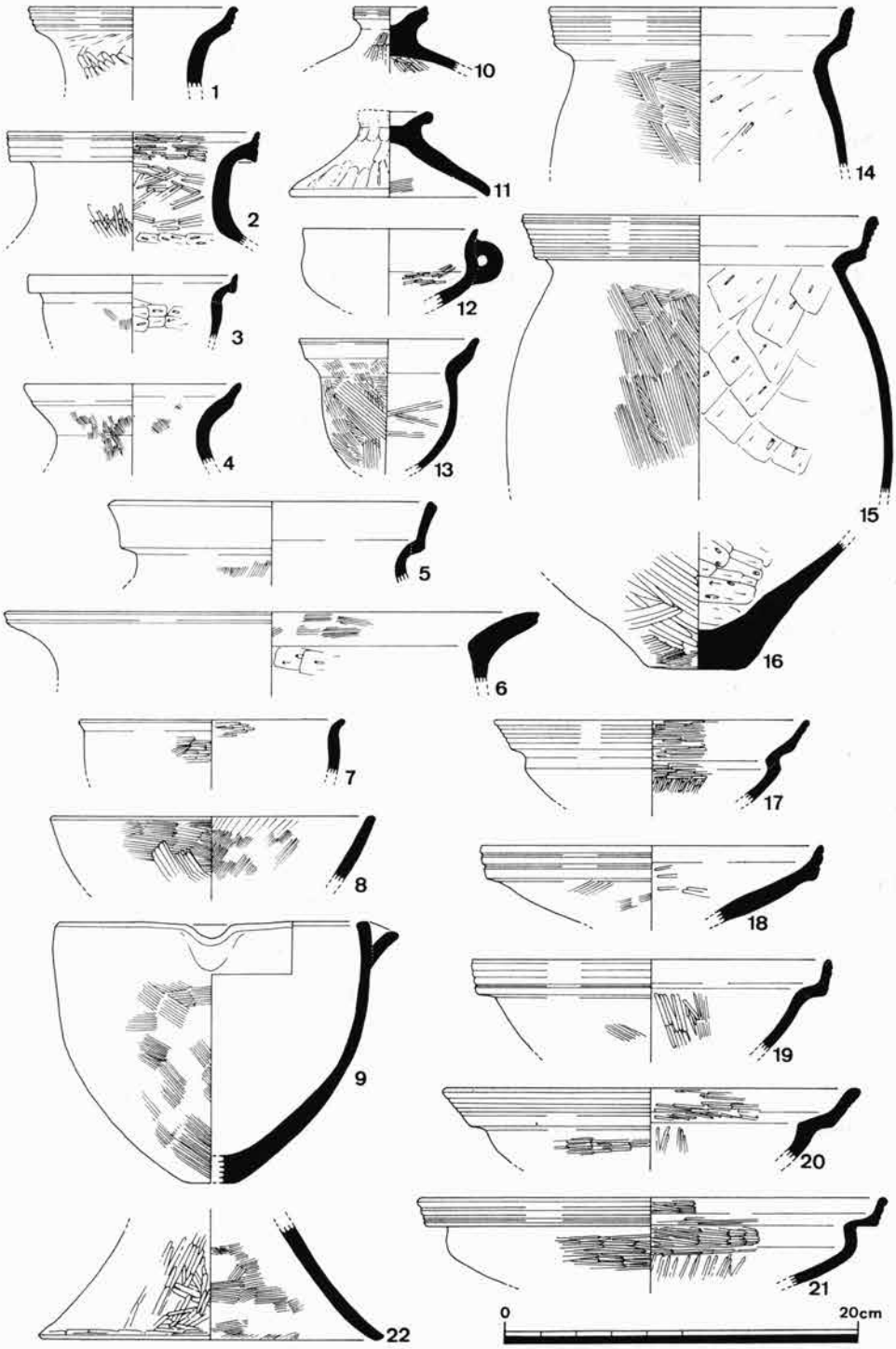
鉢C(7)　口縁部をやや外方へ「く」の字状に屈曲させるものである。

鉢D(17)　複合口縁のもの。口縁端部に擬凹線を施す。

鉢E(13)　口縁部が二段に屈曲する小型の鉢である。



第7図　出土遺物実測図(1)



第8図　出土遺物実測図(2)

鉢F(12)　小型精製の鉢。把手がつく。

蓋(10・11)　壺用の蓋であると思われる。つまみ端面に，擬凹線を施すもの(10)と施さないもの(11)がある。

SK10出土遺物　土坑埋土中からの一括遺物である。56は，器台A_3である。口縁端部を上下に拡張し，複合口縁をなす。胎土精良である。57は，鉢D_2である。口縁部は，直立気味で，器高はやや深い大型品である。55は，管玉の未成品であると考えられる。

(4) 古墳時代の遺物　8トレンチSH05，9トレンチSK09・SH13，17・13トレンチSH15出土の遺物が遺構からの出土である。SH15からは，完形品を含む多数の土師器が出土したのでこれを中心に記述を進める。

SH15出土遺物　器種構成は，壺B_3・C_1・C_2・C_3・C_4・D_1・D_2・E，甕C_2・C_3・C_4・C_5・D_3・F，高杯C_1・C_2・C_3・C_4，器台B・C，杯A_1・A_2。

壺B_3(29)　口縁部がわずかに外反して開く口の広い短頸壺である。

壺C(25・27・28・30)　二重口縁の壺である。口縁部の形態により，C_1(27)：上段口縁が短くあまり外反しないもの，C_2(28)：上段口縁が大きく外反し開き，接合部を肥厚させるもの，C_3(25)：「5」の字状口縁のもの，C_4(30)：上段口縁が内湾して立ち上がるものに細分できる。

壺D(24・26)　直口壺である。D_1(26)：頸部がやや鈍く屈曲し，直線的に立ち上がる口縁をもつものと，D_2(24)：頸部がやや鈍く，外反気味に立ち上がる口縁をもつものがある。26は，頸部に一条の沈線を施す。

壺E(23)　小型丸底壺である。口縁部は肥厚する。

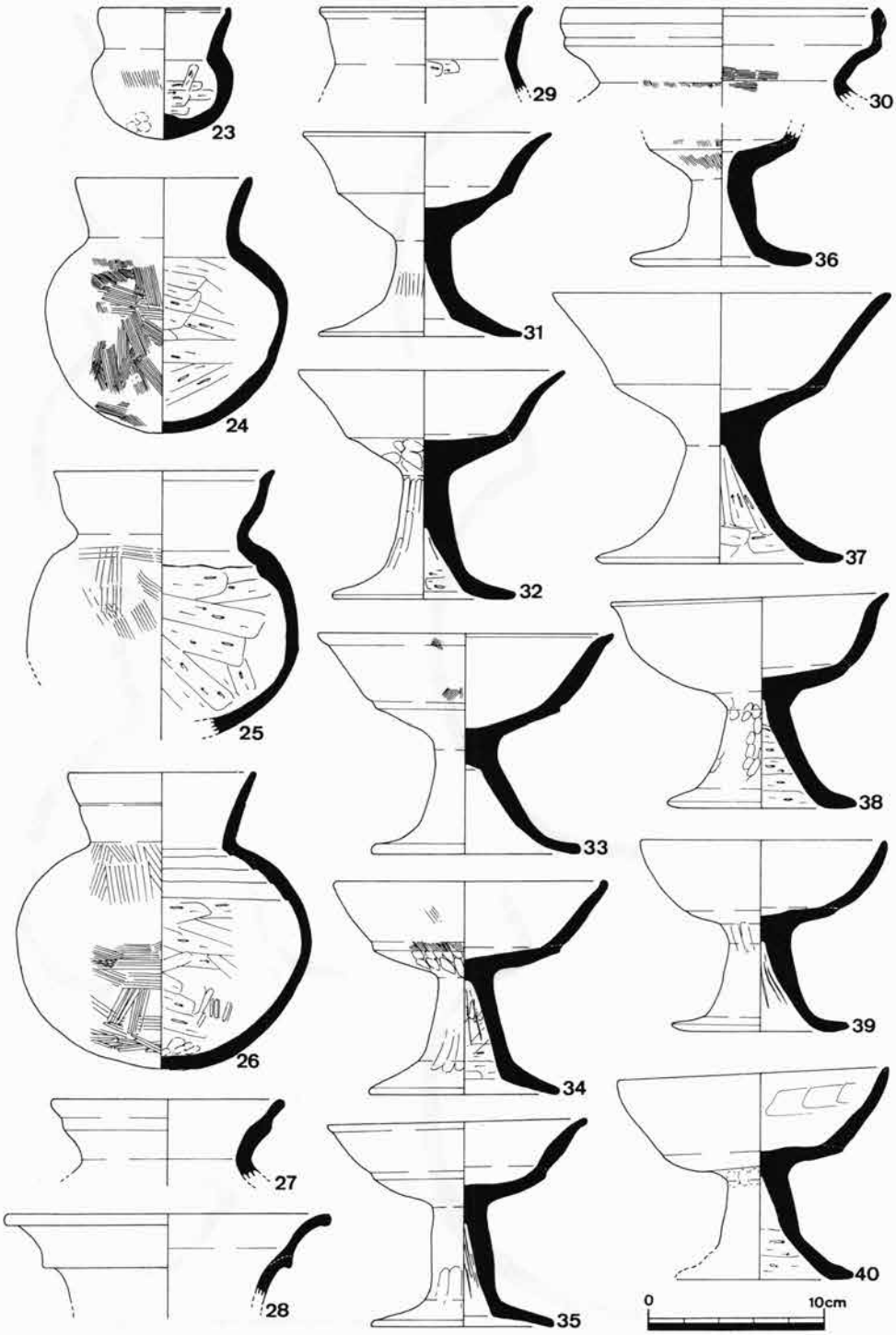
高杯C(31・32・33・34・35・37)　杯部の口縁部と底部の境界に稜をもつものである。口縁部の処理の手法によりC_1～C_4に細分できる。すなわち，C_1(31・32・37)：大きく外反する口縁をもち，端部は丸く終わる。法量に大，小がある。C_2(33・35)：口縁端部を強く横ナデするもので，C_3(34)：口縁端部内面が肥厚するものである。

高杯D(38・39・40)　半球状の椀形の杯部をもつものである。口縁部の処理の手法により，D_1(39・40)：丸く終わるもので，D_2(38)：強く横ナデし，外傾するものがある。

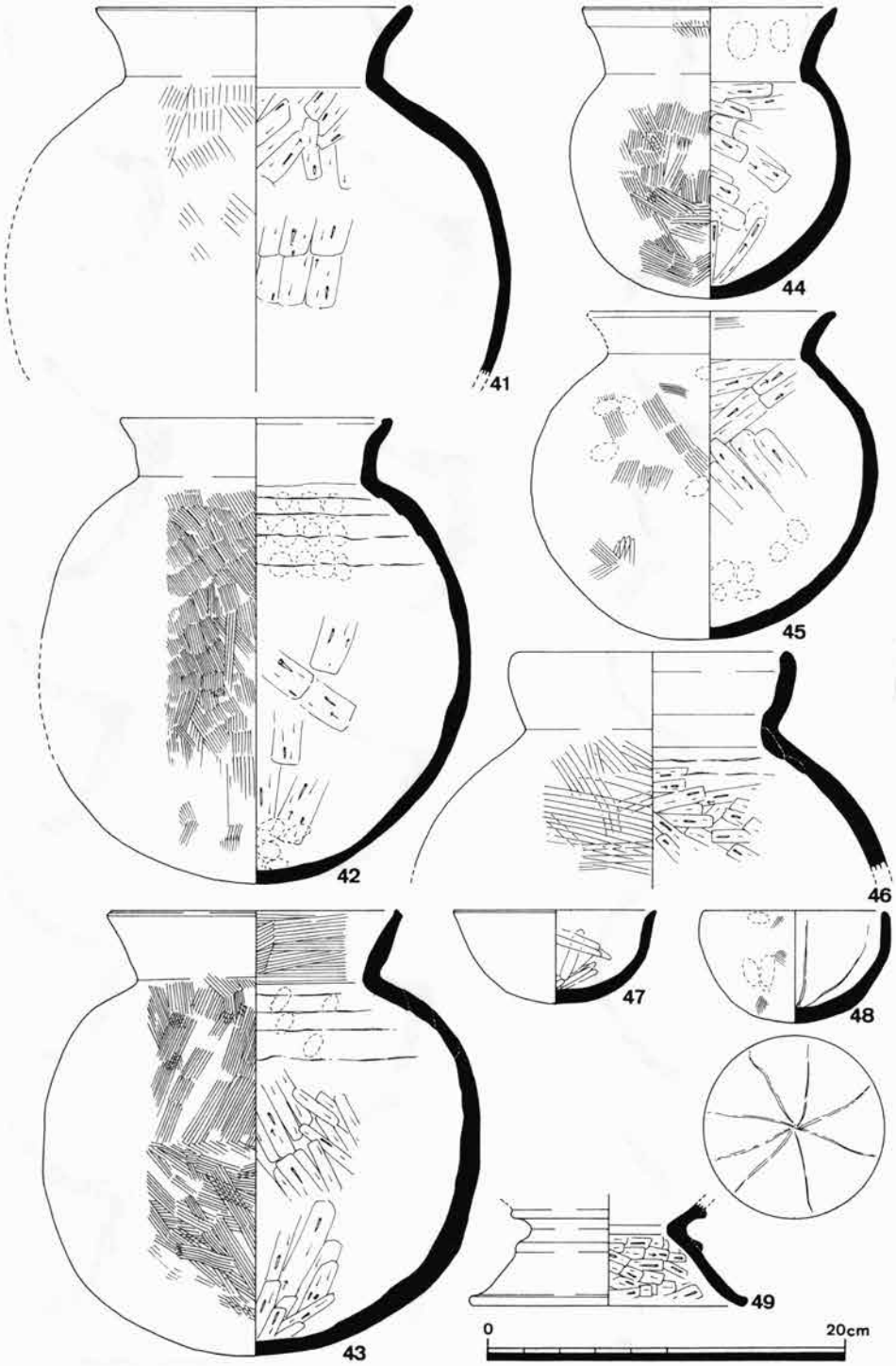
器台B(36)　小型の器台である。浅く外反する受部をもつものと思われる。

器台C(49)　鼓形器台と通称されるものである。屈曲部は鈍い突帯によって区画され，脚端部に面を有する。

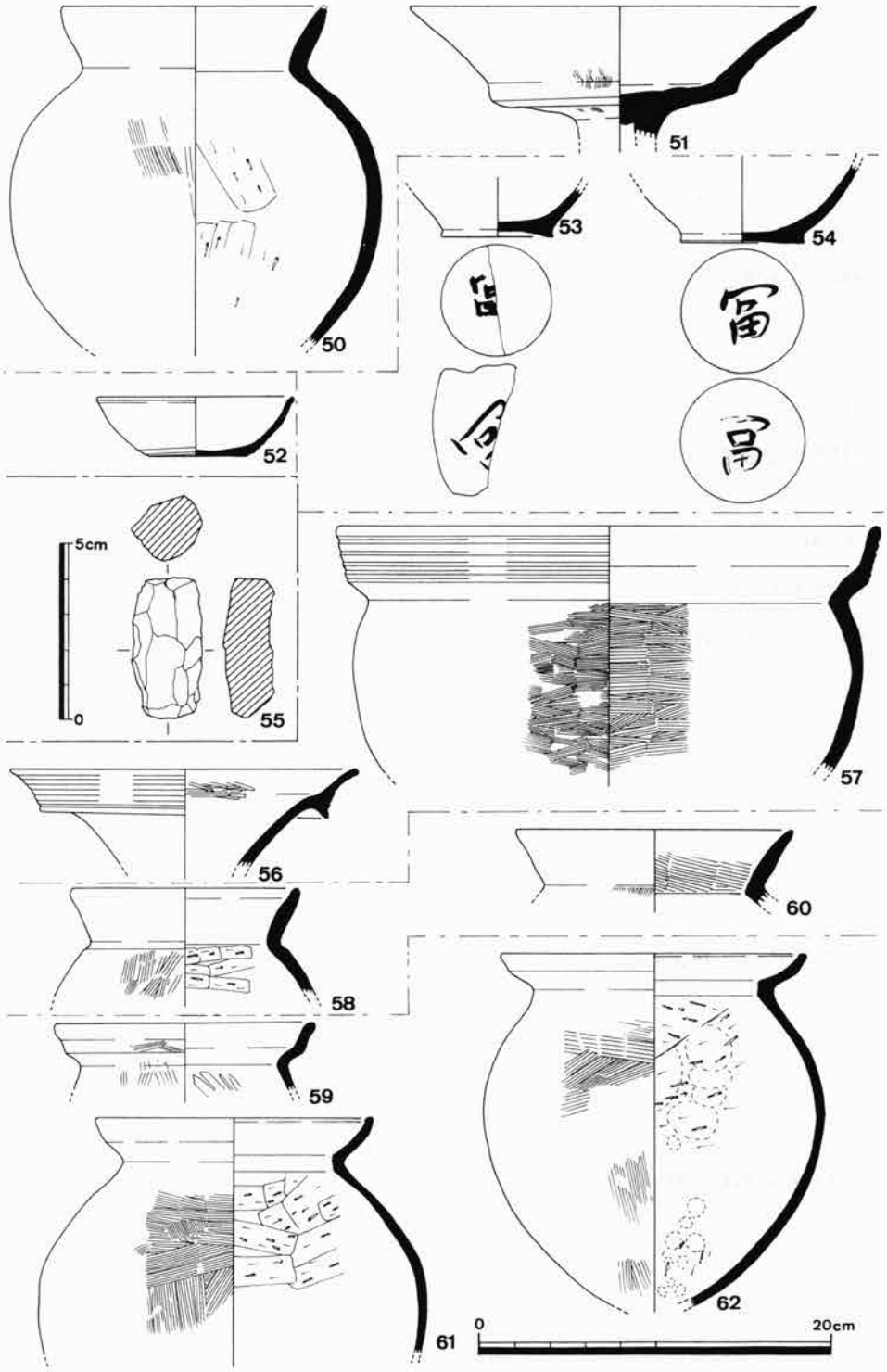
甕C(41・43・44・45)　「く」の字形に屈曲する口縁部をもつものを一括した。C_2(41)：口縁部がやや外反しつつのび，端部は丸く終わるものと，短く外反する口縁をもつものC_3(45)と，直線的に外反する口縁をもち，端面をもつものC_4(43)，口縁端部外面に幅の広い



第9図　出土遺物実測図(3)



第10図　出土遺物実測図(4)



第11図　出土遺物実測図(5)

明瞭な面を有するものC$_5$(44)がある。

甕D(42)　口縁端部が肥厚するものである。ほぼ直立気味の口縁をもつものをD$_3$(42)とする。

甕F(46)　「く」の字形に屈曲し，内湾する口縁をもつ。

杯(47・48)　半球状の体部をもち，口縁部は，ほぼ直立するものA$_1$(47)と内湾するものA$_2$(48)がある。

SK12出土遺物　SH14の貯蔵穴埋土中から一括出土したものである。59は，いわゆるナデ甕であり，複合口縁をもつが，擬凹線は施さない。61・62は甕D$_1$である。頸部内面に面をもち，二段に開く口縁を特徴とする。端部は，わずかに肥厚する。

SK09出土遺物　口縁端部がやや肥厚するD$_2$(58)と，単純「く」の字形のC$_1$(60)がある。

SH05出土遺物　「く」の字形口縁の甕C$_1$(50)と杯部の口縁部と底部に明瞭な段を有する大型の高杯B(51)がある。

(5) 歴史時代の遺物

SK08出土遺物　底部糸切りのロクロ土師器である。

8トレンチ包含層出土遺物　底部糸切りの須恵器杯である。2点とも，内外面に墨書する。すべて『富』と判読できる。

6. ま　と　め

今回の調査で，谷内遺跡の3か年にわたる調査は終わりを告げたが，ほ場整備事業に伴う限定された期間と面積の調査にもかかわらず，住居跡などを検出することができ，多大な成果を得ることとなった。以下に調査の成果を要約し，まとめにかえたい。

遺物について　縄文土器　7トレンチ遺物包含層において検出した土器群は，すべて，押型文により施文され，縄文時代早期の高山寺式に比定されるものである。京都府北部の押型文土器が出土する遺跡は，現在12例を数え，本例が13例目にあたる。しかし，谷内遺跡以外の各遺跡での出土数は，1点から数点にとどまるものばかりであり，本例は，それらをはるかに上回る量的出土が注目される。

弥生時代の遺物　SK10，SH16において，良好な一括遺物が出土した。SH16出土遺物のうち，甕B$_2$は，外傾する口縁部に擬凹線を施したものである。一方，壺C，鉢E，蓋A$_2$に見られるように，小型品には，擬凹線を施さないものも出現している。また，小型精製鉢の存在も注目される。これらの様相は，網野町林遺跡2号住居，大宮町裏陰遺跡C1区包含層出土遺物が最も類似した様相を示し，丹後地方における弥生時代後期末の様相を示すものと考えられる。SK10出土遺物も，器種の接点がないが，ほぼ同時期のものと

捉えられる。

古墳時代の遺物　SH15を中心に，SH13，SK09，SH14，SK12において，良好な一括遺物が出土した。SH15出土遺物は，粗製の直口壺D_2，高杯，甕C_2を主体としている。また，杯，高杯D_1を含むことは，古墳時代後期(6世紀代)へ続く新しい傾向であると思われる。しかし，小型丸底壺E，「5」の字口縁の壺C_2，二重口縁壺C_1・C_2・C_3，鼓形器台C，甕Fなどの存在は，古墳時代前期から続く伝統的器形であり，古い様相を示している。また，第2次調査第7グリッドで出土した須恵器は，TK208型式に比定されるべき古式須恵器であり，5世紀後半の暦年代が付与されている。包含層出土遺物とは言え，位置的にSH15の上層の位置からの出土であり，示唆的である。さらに，壺D_1は，直線的にのびる口縁，頸部に施された一条の沈線など器形的に須恵器の影響を強く受けた可能性がある。以上のことから，SH15出土の土器群は，5世紀中葉から後葉にかけての土器様相を示すものと考えておきたい。

一方，その他の住居跡出土遺物は，量的に僅少ではあるが，それぞれが，貯蔵穴出土などの一括遺物であるため，その各器形の共伴関係と先後関係が注目される。それぞれに互いに切り合い関係を持たないので，型式学的方法に頼り試案を述べる。

SK12出土遺物では，ナデ甕B_3と布留傾向甕D_1が共伴する。B_3は，擬凹線を施す甕と同時代性を有するものであり，一方，D_1も倒卵形の体部や，鋭がり気味の底部，特徴的な大きく開く口縁，口縁端部の肥厚度が極めてわずかであることなど，布留式甕の影響をわずかに受けながらも，むしろ極めて在地色の強いものになっている。以上のことから，これらの土器群は，谷内遺跡の古墳時代初頭の土器様相を示すものと捉えられる。

次に，SK09出土遺物は，「く」の字形口縁の甕C_1と布留傾向甕D_2が共伴する。D_2は端部に非常に浅い沈線を施すことにより，端部をわずかに肥厚させるのと同じ効果を生んでいる。肩部の張りも小さく，完全な球形体部にあらず，未だ布留甕の定型化には至っていない。C_1は，頸部が鈍く屈曲し，口縁は直線的にのびる在地の甕である。つまり，SK09出土遺物は，SK12出土遺物よりも新相を示し，これに続く型式であると考えることができる。

次に続く型式として，SH05出土遺物が設定できる。甕C_1は，SK09よりも頸部の屈曲度が鈍く，段のある高杯Bを伴う。SH05とSH15の出土遺物には，若干時間差があるのかも知れないが，SH15がこれに続く。

遺構について

立地と分布　過去4次にわたる谷内遺跡の調査による限り，全体として遺構の分布密度は低い。

縄文時代の遺構は検出されていないが，7トレンチでは，ややまとまった量の土器群が出土したので，扇状地を見下ろす丘陵端部に，何らかの遺構が存在していたのであろう。縄文土器は，このほか8・13トレンチでも数点出土しているが，二次堆積の遺物である。

弥生時代の遺構には，SH16，SK10がある。SH16は，弥生時代後期末の円形住居跡である。主柱穴は，四本が四角形に配され，中央に円形土坑が穿たれ，炉跡であると考えられる。谷内遺跡で検出された唯一の弥生時代の住居であるが，1次調査で検出された自然流路中からは，多量の同時期の遺物が含まれていたので，他に，もう数基，当該期の住居が存在したのであろう。SK10は，住居に伴う貯蔵穴の可能性もあるが，遺物(器台)の出土状況から，何らかの祭祀に伴う土坑，あるいは墓の可能性もある。

古墳時代の遺構は，その可能性のあるものも含めて，すべて方形竪穴式住居跡で，計5基を検出した。それぞれ微妙に時間差はあるものと思われる。SH15を除き周溝を持ち，周溝の消滅期がこの時期前後に求められるのかも知れない。また，一辺に二段に掘りくぼめた貯蔵穴が取りつくことも共通する可能性がある。主柱穴は，四本柱であると思われるが，確認できたのはSH15のみであった。規模についても遺存度が悪く，SH15以外は明らかにし得なかったが，おおむね1辺5m前後であったのであろう。特筆すべきこととして，SH15の遺物の出土状態が挙げられる。焼失家屋でもなく廃絶した住居跡としては，異様に出土遺物の多さが目立つのである。さらに，完形品を多数含んでいたことから，単に一括廃棄として捉え切れるかどうか疑問が残る。しかし，出土した土器は，すすが付着し，あるいは，かなり長期にわたって使用に耐えた使用痕を持つものばかりであり，日常雑器として使用されたことは明らかである。現状では如何とも判断し難いが，今後の検討の課題としたい。

歴史時代の遺構は，今回，円形土坑SK08を検出した。その性格については，単独で存在していることや，埋土中からわずか3点の土師器杯と小石材のみを検出したことにとどまり，明らかにし得ない。しかし，上層で検出した墨書土器は，同時期の所産であり，示唆的である。2次調査では，石帯の出土も報告されており，奈良時代から平安時代にかけて，一定の下級官人層の居住を示唆するものかも知れない。

以上，谷内遺跡の変遷を時代に即して述べたが，もとより，限られた面積の調査に加え，自然あるいは人工による遺構の消滅の前では，十分変化の画期を明らかにし得なかった。しかし，「谷内」の名が示すように，扇状地性の谷をはさむ台地上に立地する小規模な集落が谷内遺跡の実態であったと思われる。類似した様相を示す集落として，近隣の裏陰，正垣遺跡が挙げられる。これら3遺跡は，約800mの等間隔で，一直線上に並び，各時期を通じて互いに密接な関係を持っていたものと考えられる。大宮町内では，これらから傑出し

た拠点的集落については現在に至るまで知られておらず，奈良・平安時代に至るまでは，これら3遺跡に見られるように，均衡状況を保ちながら，各集落が分立していたのであろう。しかし，正垣遺跡に見られる，大規模な方形掘形をもつ掘立柱建物群は，律令制の施行に伴い，正垣遺跡の傑出性を示しており興味深い。谷内遺跡は，この段階において，官人層が居住していたものと思われるが，地形的にも中心的存在にはなり得なかったのではあるまいか。奈良時代には，三坂谷では須恵器生産が開始され，北方へ1.5kmの大田鼻横穴群では，最も造墓の盛んな頃である。このように谷内遺跡の発掘調査により周辺地域を含め，これら断片的に垣間見た縄文人の足跡，弥生集落の変遷，無数に町内に存在する古墳と集落の関係，律令制下の大宮町の実態など新たに提起された問題はあまりに多い。今後の研究に待ちたい。

（細川康晴）

注1　大宮町分布調査による。

注2　久保哲正「昭和160年度大宮町内圃場整備地区遺跡発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報(1986)』京都府教育委員会）　1986

注3　藤原敏晃「府営ほ場整備関係遺跡昭和160・61年度発掘調査概要　(1)谷内遺跡」（『京都府遺跡調査概報』第22冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　1987　なお，調査次数は，文化財保護法に基く，文化庁への発掘届提出順とした。

注4　奥村清一郎「大宮町内圃場整備地区遺跡昭和161年度発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報(1987)』京都府教育委員会）　1987

注5　奥村清一郎「大宮町内圃場整備地区遺跡昭和162年度発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報(1988)』京都府教育委員会）　1988

注6　調査参加者

作　業　員　川口　林・大木次夫・奥野不二・山添幸子・今西作治・吉村行雄・村尾喜佐雄・本城富子・田中浅治・大木　昇・吉岡定一・本城チカ・荒木与志枝・深田儀一・山添英夫・鈴木定治・松田武次郎・大同房夫・西村久枝・辻　しげ・小牧利男・山添敏正・鈴木光男・長谷川ハナ

調査補助員　金下玲子

協　力　者　岡田晃治・片岡　肇・後藤公一・平良泰久・田中光浩・坪倉利正・中井　均・中川和哉・中嶌陽太郎・浪江庸二・羽渕賢良・三浦　到・安田　章

注7　杉原和雄・長谷川達・佐藤晃一ほか『裏陰遺跡発掘調査概報(大宮町文化財調査報告第1集)』大宮町教育委員会　1979

注8　竹原一彦「府営ほ場整備関係遺跡昭和160・61年度発掘調査概要　(2)正垣遺跡」（『京都府遺跡調査概報』第22冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1987

注9　岡田晃治・肥後弘幸・細川康晴・森　正・倉本まり子「国営農地開発事業関係遺跡昭和61年度発掘調査概要〔1〕　帯城墳墓群Ⅱ」（『埋蔵文化財発掘調査概報(1987)』京都府教育委員会）1987

注10　鈴木忠司・下条信行・植山　茂・山田邦和ほか『小池古墳群(大宮町文化財調査報告第3集)』大宮町教育委員会　財団法人古代學協會，平安博物館　1984

注11　奥村清一郎・中井英策・森　正ほか『大谷古墳(大宮町文化財調査報告第4集)』大宮町教育委員会　1987

注12　杉原和雄ほか『カジヤ古墳発掘調査報告書』峰山町教育委員会　1972

注13　注７に同じ

注14　岡田晃治・羽渕賢良・細川康晴・森　　正「国営農地開発事業関係遺跡昭和61度発掘調査概要〔2〕大田鼻横穴群」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1987)』京都府教育委員会)　1987

注15　杉原和雄「京都府北部の須恵器生産について」(『丹後郷土資料館館報』第２号　京都府立丹後郷土資料館)　1981

岡田晃治・森下　衛「大宮町三坂谷窯跡の須恵器」(『太邇波考古』第５号　両丹技師の会)　1985

2. 栗ケ丘横穴群発掘調査概要

1. はじめに

栗ケ丘横穴群は，綾部市小呂町田坂に所在する。昭和60・61年度に発掘調査を実施した栗ケ丘古墳群(注1)がある丘陵の斜面に位置している。

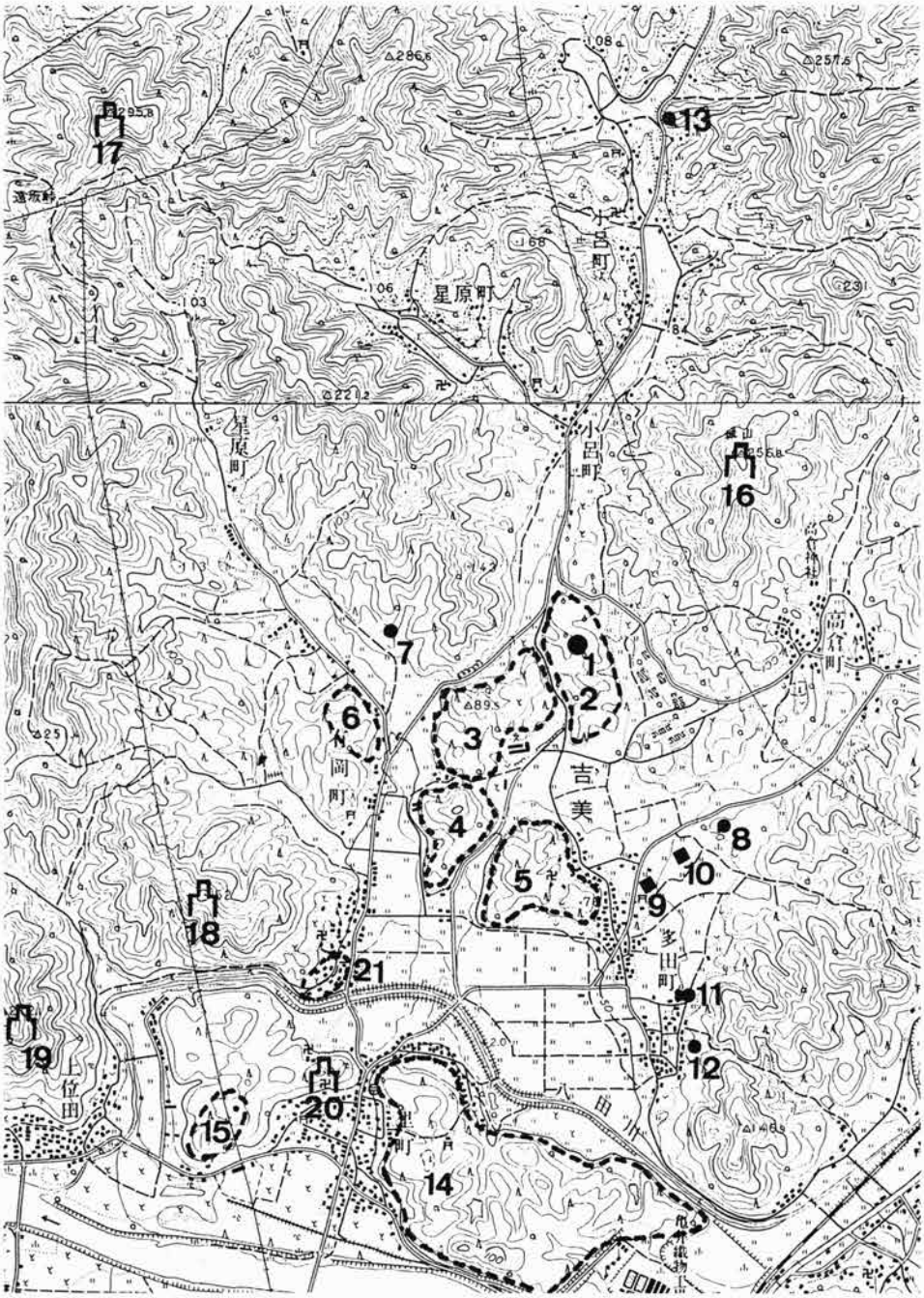
今回の調査は，古墳群と同様，綾部工業団地造成工事に伴うものである。昨年度，古墳群の調査中に，古墳群内に工事用道路が敷設され，そのために削り取られた丘陵断面に，逆台形状の黒色土の落ち込みが露呈した。その落ち込みの底部には，土師器甕とみられる土器片が含まれていた。なんらかの遺構である可能性が高く，古墳群の調査が一段落した時点で，急遽，周辺の試掘および黒色土の掘削を行ったが，年度末のため，その性格をつきとめるにはいたらなかった。そのため，本年度も引き続き調査を行うこととなった。現地での調査は，京都府企業局の依頼を受けて，当調査研究センター調査第2課調査第1係係長辻本和美と主任調査員引原茂治が担当した。

調査にあたっては，京都府企業局をはじめ，京都府中丹教育局・綾部市教育委員会などの関係諸機関に御協力いただいた。また，現地作業では，調査補助員・整理員・作業員として，大学生諸君や地元および近隣市町の方々の御協力があったことを記して感謝したい(注2)。また，綾部市教育委員会技師中村孝行氏からは，格別の御協力・御教示があったことを特記して感謝したい。

なお，栗ケ丘古墳群については，これまでの概要報告で1号墳としていたものが古墳ではないことが判明している。それで，『京都府遺跡地図　第2分冊〔第2版〕』(京都府教育委員会　1987)の記載に従い，これまで2号墳としていたものを1号墳とし，13号墳としていたものを2号墳とする。なお，調査に係る経費は，京都府企業局が全額負担した。

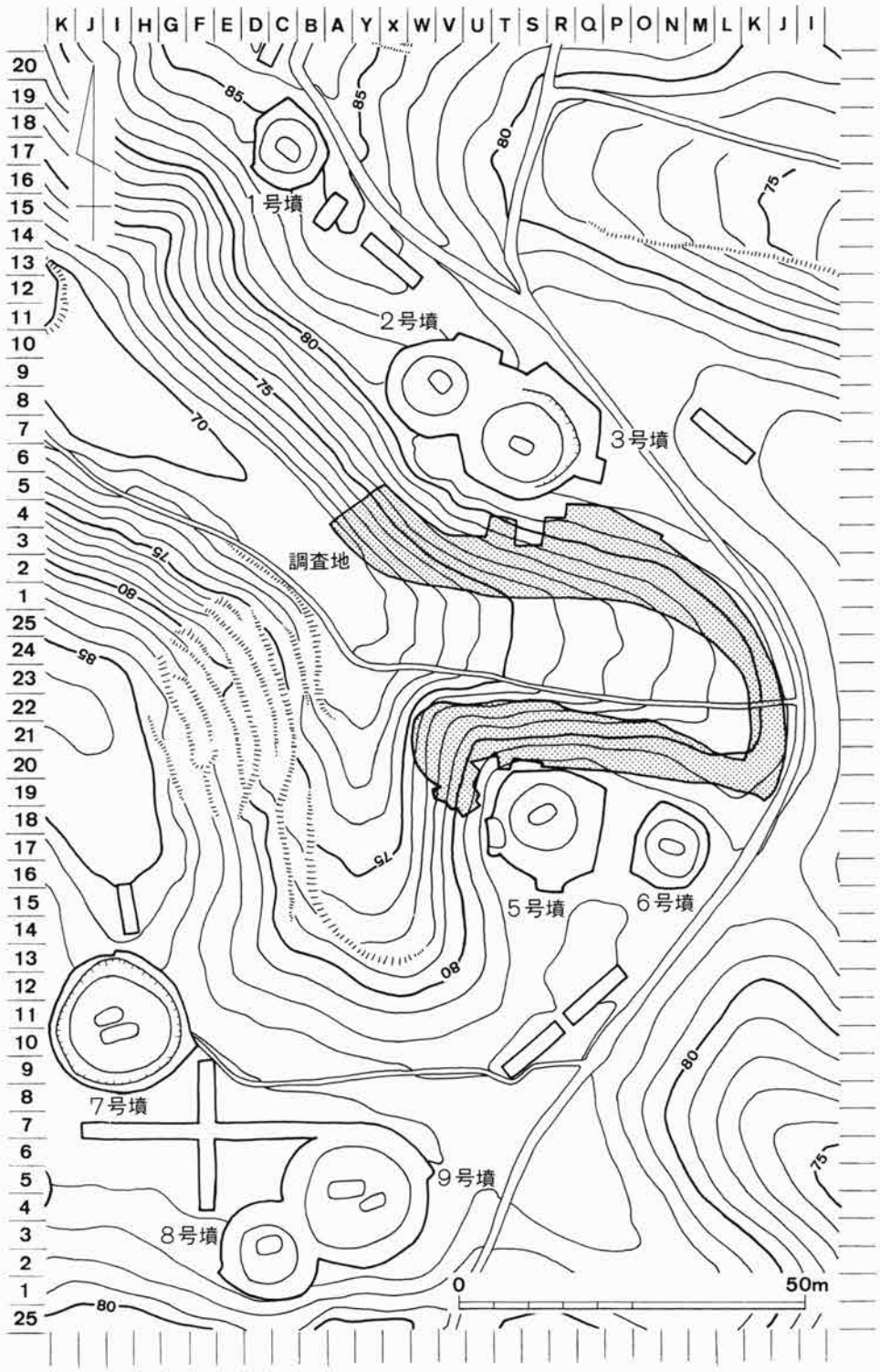
2. 位置と環境

綾部市街地から，由良川や久田山などの丘陵地をへだてた北側に，旧村名によって吉美と通称される地区がある。この吉美地区は，周囲を丘陵に囲まれた小盆地である。この吉美の盆地の北側に，中世山城跡の高倉城跡がある城山がそびえている。この城山の麓から盆地内へL字状にのびる低い丘陵地には，栗ケ丘古墳群をはじめ，田坂野・石井根・坊主山の古墳群があり，あたかも「墓の丘」の様相を呈する。栗ケ丘古墳群は，6世紀前半から後半にかけて築造された木棺直葬の円墳12基からなる古墳群である。田坂野古墳群は，



第12図　調査地位置図（1／25,000）

1. 栗ケ丘横穴群　2. 栗ケ丘古墳群　3. 田坂野古墳群　4. 石井根古墳群　5. 坊主山古墳群　6. 二ノ宮古墳群　7. 奥地古墳　8. 上多田古墳　9. 聖塚古墳　10. 菖蒲塚古墳　11. 城跡古墳　12. キツネ塚古墳　13. 小谷横穴　14. 久田山古墳群・久田山遺跡　15. 里古墳群　16. 高倉城跡　17. 高波山城跡　18. 有岡城跡　19. 位田城跡　20. 仏南寺城跡　21. 散布地



第13図　調査地周辺地形図

14基の円墳からなる古墳群であるが，昭和40年にそのうち5基が発掘調査されている。(注3) いずれも木棺直葬の円墳であり，築造時期は6世紀から7世紀にかけてとされる。坊主山古墳群には墳丘規模がやや大きいものや方墳があるが，そのほかの古墳は，直径8～17mの円墳で，埋葬主体は木棺直葬とみられる。坊主山古墳群の一部以外は，規模の小さい円墳であり，古墳時代後期の吉美地区周辺の在地の有力者たちの奥津城とみられる。栗ケ丘横穴群は，栗ケ丘古墳群のうちの2・3・5・6号墳がある丘陵の斜面に位置する。

横穴については，綾部市を含む丹波地域では，綾部市小呂町小谷の小谷横穴と船井郡瑞穂町三ノ宮の三ノ宮校裏山横穴の2か所が知られているのみである。京都府内では，丹後地域や南山城地域に，横穴が多数分布する。

3. 調　査　経　過

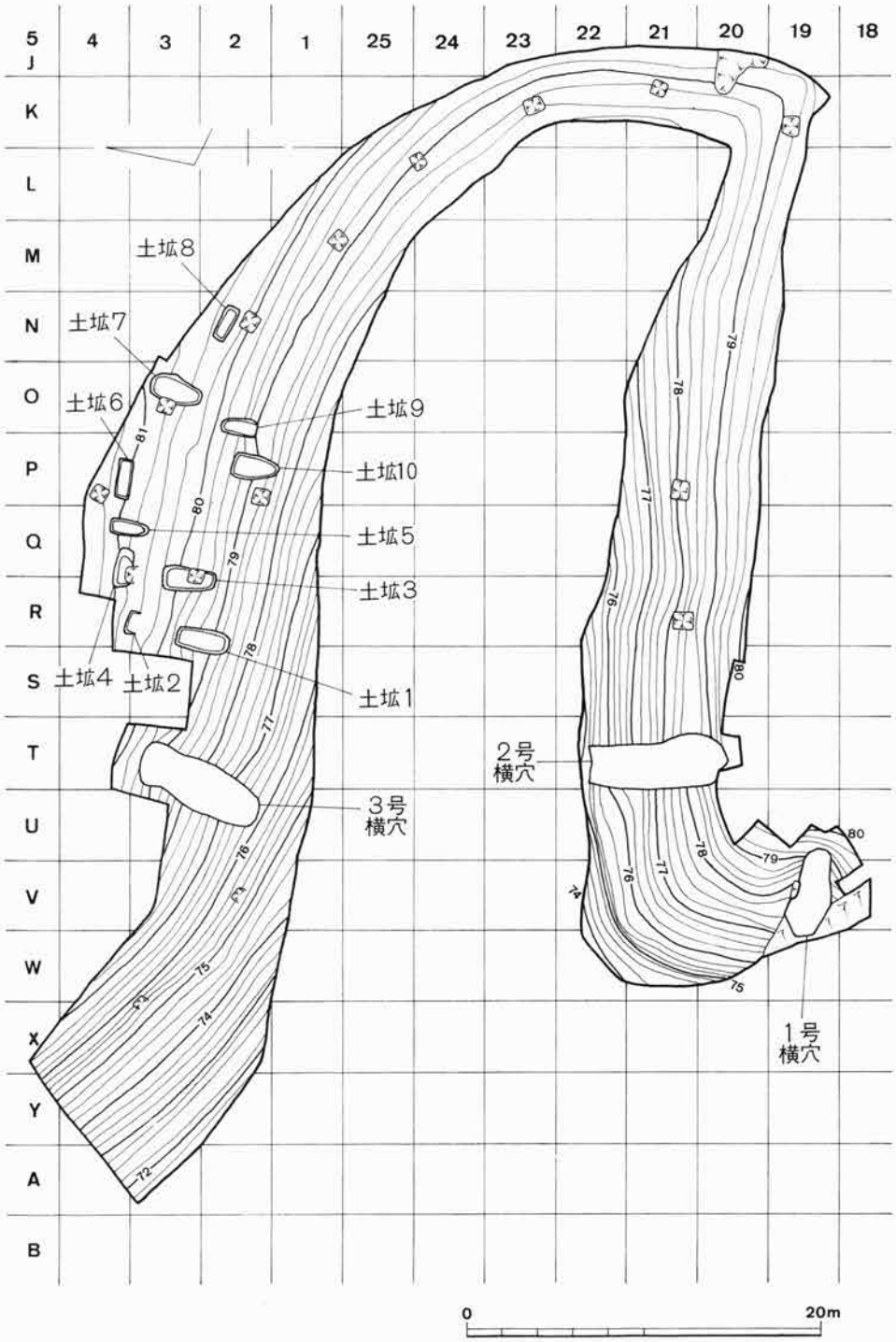
調査地は，北西側に開口する谷の最奥部である。この谷の最奥部には，栗ケ丘5・6号墳のある丘陵が張り出し，東西方向と南北方向の支谷に分岐し，Y字状の谷となる。主に調査を実施したのは，東西方向の支谷の斜面である。南北方向の支谷には，工事用道路が貫通している。

本年度の現地調査は，昭和62年7月13日から開始した。まず，昨年度工事用道路の断面で確認した落ち込み部分の掘削を行った。この位置は，5号墳の西側斜面にあたる。また，5号墳の北側斜面にも落盤によるものとみられる落ち込みがあり，5号墳の西側から北側の斜面を重機によって表土掘削した。5号墳西側の落ち込み部分では，底部から排水溝だけでなく，須恵器・土師器などの土器類と鉄製品を検出し，これが横穴であることを確認した。

続いて，5号墳北側の落ち込み部分も掘削し，蓋石をもつ排水溝および棺台とみられる石，須恵器・土師器などの土器類や鉄製品を検出したので，これも横穴であることを確認した。それで，西側斜面のものを1号横穴，北側斜面のものを2号横穴と名付けた。

2号横穴のある斜面と向かいあう2・3号墳南側斜面にも横穴があることが予想されたので，再度重機によって表土掘削を行った。その結果，黄色の地山面に「こけし」形の黒色土を検出した。黒色土および落盤で堆積した土を掘削し，底部から排水溝・棺台とみられる石・須恵器を検出したので，これを3号横穴とした。また，墓とみられる土坑を2基検出した。須恵器・土師器・鉄製品が出土した。

さらに，遺構が存在する可能性があるので，東西方向支谷の斜面未掘部分を重機によって表土掘削した。その結果，3号墳南側斜面から，墓とみられる土坑を8基検出した。このほかには，遺構はなかった。


5
4
3
2
1
25
24
23
22
21
20
19
18
J
K
L
M
N
O
P
Q
R
S
T
U
V
W
X
Y
A
B
土坑8
土坑7
土坑6
土坑9
土坑10
土坑5
土坑3
土坑4
土坑2
土坑1
2号
横穴
3号
横穴
1号
横穴
0
20m

第14図　調 査 地 地 形 図

現地調査は，10月29日をもって終了した。この間，９月５日に現地説明会を実施した。一般市民の方や，教育関係者など約70名が参加された。

4. 調 査 内 容

今回の調査では，横穴３基と，墓とみられる土坑10基を検出した。

(1) １号横穴(第15図)

５号墳西側の丘陵斜面に位置する。ほぼ東西方向に主軸をもち西方向に開口する。天井部は落盤しており，旧状をとどめていない。旧天井部の落盤土の範囲からみて，羨道部は切り通しであったものとみられる。床面の形状からみると，玄室と羨道の境はあまり明瞭ではないが，奥壁部から開口部にむかって約2.9m付近の若干のくびれ部がそれにあたるとみられる。玄室床面はほぼ平坦で，玄門部から羨道の床面は緩やかに傾斜して下降する。

工事用道路で削平されており，本来の規模は不明であるが，残存する限りでは，全長6.4mである。玄室長2.9m・最大幅1.3m，羨道部3.5m・最大幅0.9mを測る。玄室から羨道にかけて幅20～50cm・深さ10cm以下の排水溝を設ける。

玄室からは，須恵器杯蓋１点・杯身３点・壺１点，土師器杯１点・高杯４点，刀子とみられる鉄製品１点，あわせて11点の副葬品が出土した。このうち，須恵器杯蓋・杯身，土師器杯・高杯など８点は，玄室奥南側壁付近からまとまって出土している。その他，副葬品の出土状態からみて，遺体は玄室中央に東西方向に安置されていたものとみられ，追葬はなかったものとみられる。また，羨道西端部から，この横穴群発見のきっかけとなった土師器甕１点が出土している。

(2) ２号横穴(第16図)

５号墳北側の丘陵斜面に位置する。ほぼ南北方向に主軸をもち北方向に開口する。天井部は，玄室の奥壁から約60cmの部分までは旧状をとどめているようすであるが，そのほかは落盤している。旧天井部の落盤土の範囲からみて，羨道部は切通しであったものとみられる。玄室の床面平面形はいわゆる「小判」形を呈し，羨道を含めた全体の形状はいわゆる「しゃもじ」形である。玄室床面はほぼ平坦で，羨道床面は緩やかに傾斜し下降する。

この横穴は，全長9m，玄室長3.5m・幅1.9m，羨道長5.5m・幅0.9mを測る。玄室奥壁部から羨道の約2/3付近まで，幅30～40cm・深さ10cm以下の排水溝を設ける。この排水溝は，玄室部では蓋石をもつ。また，玄門付近に，排水溝をはさんで２個の石が置かれる。排水溝の蓋石とともに，棺台となっていたものか。

玄室からは，須恵器杯蓋３点・杯身３点・提瓶１点・台付長頸壺１点・土師器甕１点，

刀子とみられる鉄製品１点，ガラス製小玉２点，珪化木製棗玉１点，あわせて13点の副葬品が出土した。このうち，玉類は，須恵器台付長頸壺の中につまっていた土に含まれていた。副葬品の出土状態や，棺台とみられる石の状況から，遺体は玄室中央に南北方向に安置されていたものとみられ，追葬はなかったものとみられる。

(3) 3号横穴(第17図)

３号墳南側の丘陵斜面に位置する。ほぼ北東から南西に主軸をもち，南西方向に開口する。この横穴は，羨道前面が幅広くなり，前庭部状をなす。天井部は落盤しており，旧状をとどめていない。落盤土の状況から，玄室のみに天井があったものとみられる。玄室の床面平面形は，台形気味の長方形である。玄室床面はほぼ平坦であり，羨道・前庭部は緩やかに傾斜して下降する。

この横穴は全長7.1m，玄室長2.7m・最大幅1.7m，羨道長1.9m・幅0.9m，前庭部長2.5m・幅1.8mを測る。玄室奥壁から北西側壁に沿って排水溝がめぐる。玄門付近にも主軸に直交する排水溝があり，玄室西隅で合流し，「F」字状を呈する。排水溝は，玄門から羨道へ出た部分で，羨道床面の傾斜に沿って消滅する。玄室内には，棺台とみられる石が置かれている。

玄室からは，須恵器杯蓋２点・杯身２点・提瓶１点，刀子とみられる鉄製品１点，あわせて６点の副葬品が出土した。また，羨道から須恵器横瓶１点，前庭部から須恵器台付長頸壺１点が出土した。

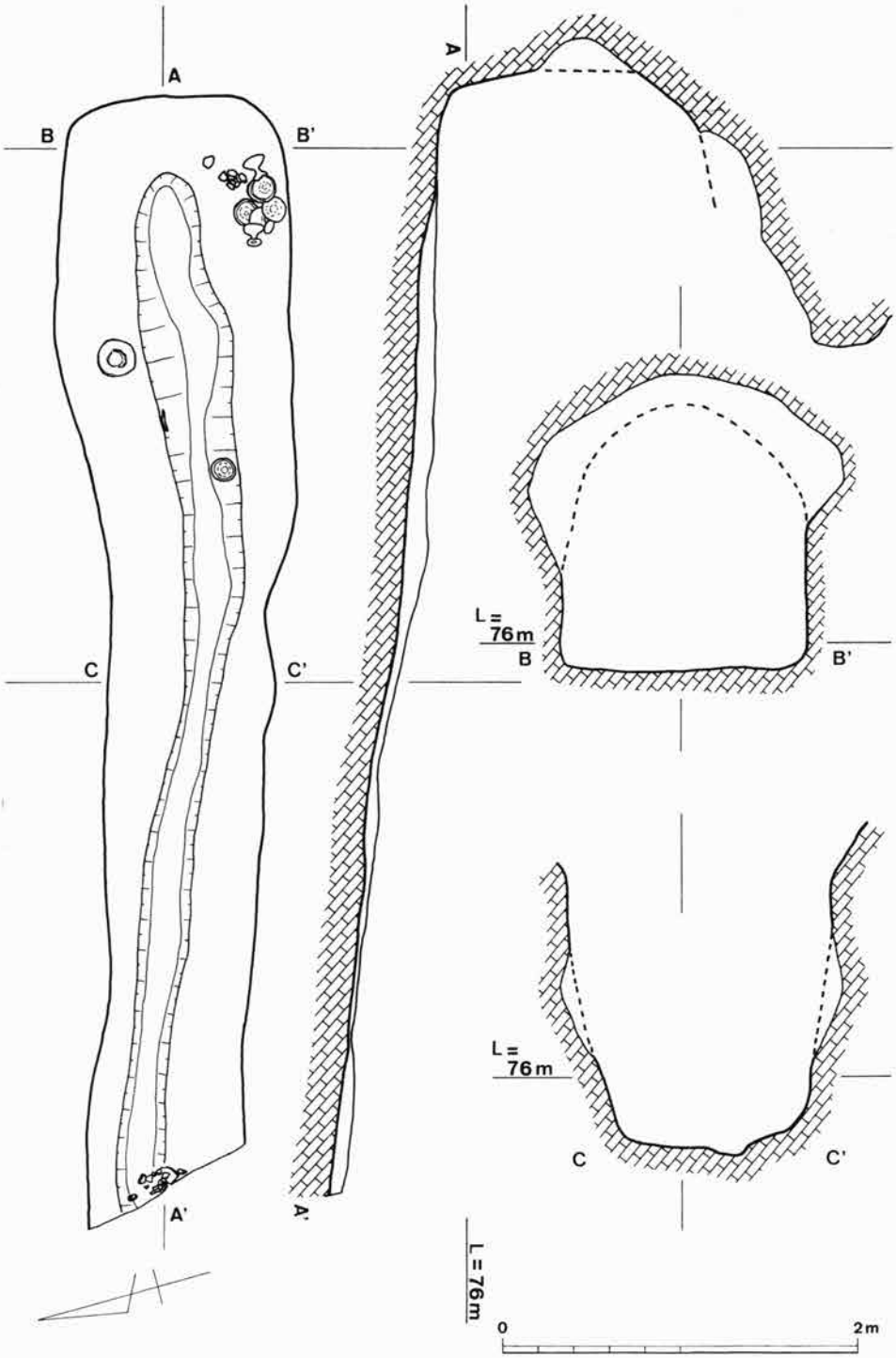
玄室の棺台とみられる石の状況から，遺体は玄室ほぼ中央に主軸に平行して安置されていたものとみられ，追葬はなかったものとみられる。

(4) 土坑(第18・19図)

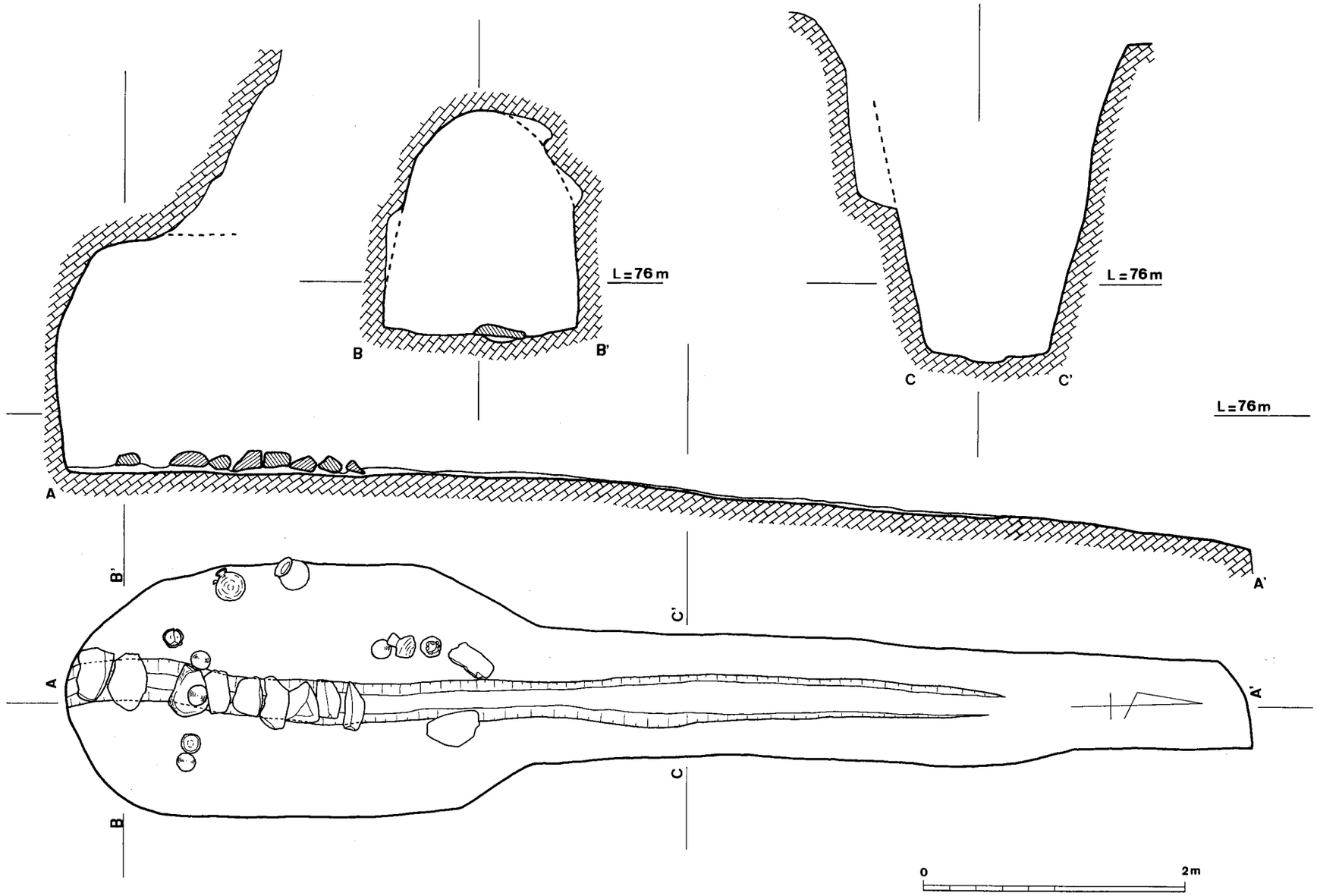
３号墳南側，３号横穴東側の丘陵斜面に10基の土坑が散在する。ほぼ長方形の平面形をもつ。斜面の等高線に直交して掘られているもの(主軸が南北方向)と，平行して掘られているもの(主軸が東西方向)がある。傾斜地に掘り込まれているので，特に南北方向に主軸をもつものは，床面も傾斜している。これらの土坑は，その形態や遺物の出土状況から，墓とみられる。土坑の概要は，付表１を参照していただくこととし，若干の説明を加えるにとどめる。

土坑１は，南北方向に主軸をもつもので，確実にこの土坑に伴う遺物が18点出土している。この遺物数は，他の土坑や横穴を上回るものである。また，栗ケ丘古墳群の各埋葬主体部から出土した遺物数と比べても，上回る，もしくは匹敵するものである。

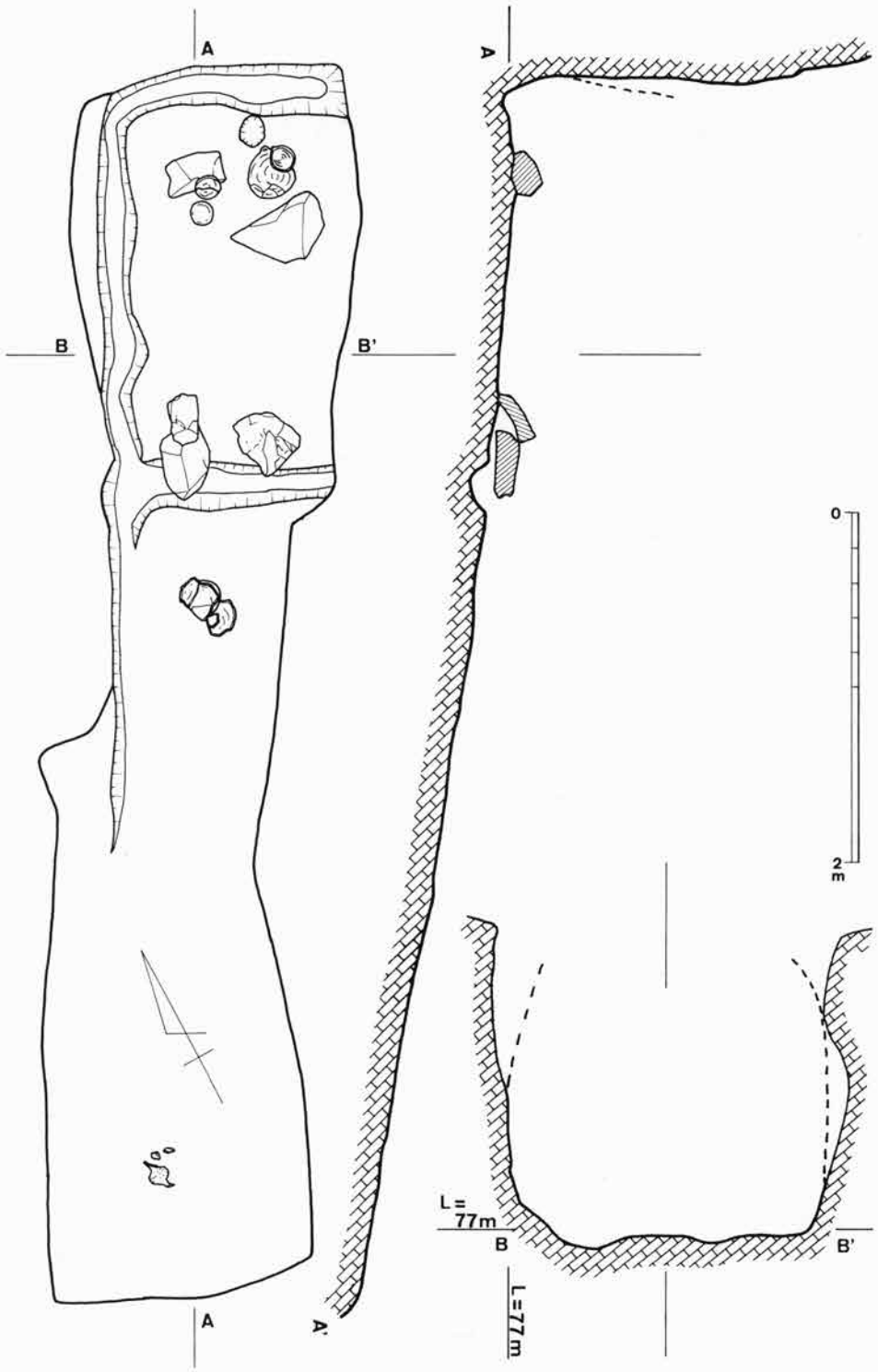
この土坑１の底部北端から，土師器高杯６個体が，棺の木口板の外側に並べられたと推定できる状態で出土している。土坑７でも，同様の状態で，須恵器高杯６個体が出土して



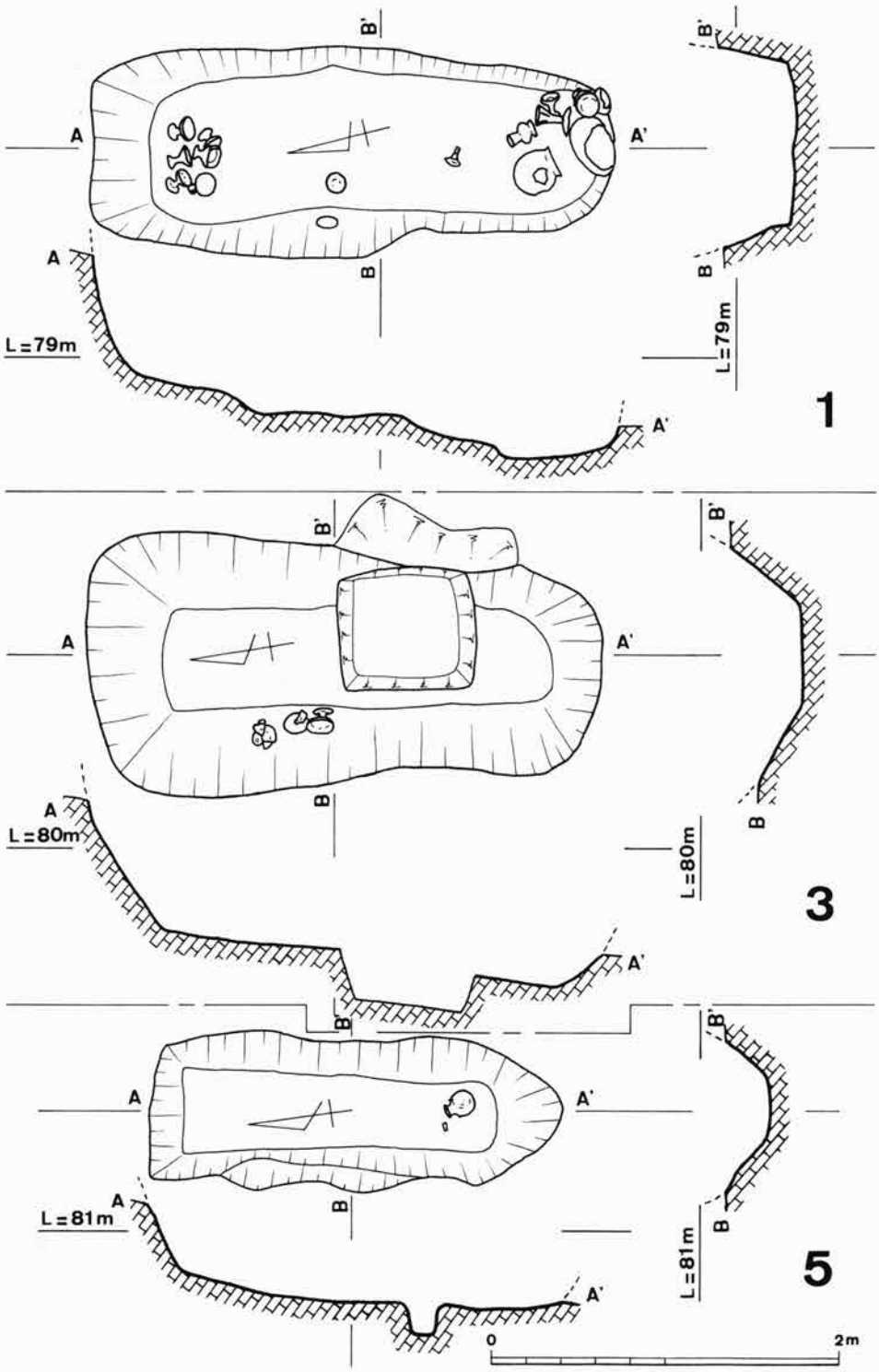
第15図　1 号 横 穴 実 測 図



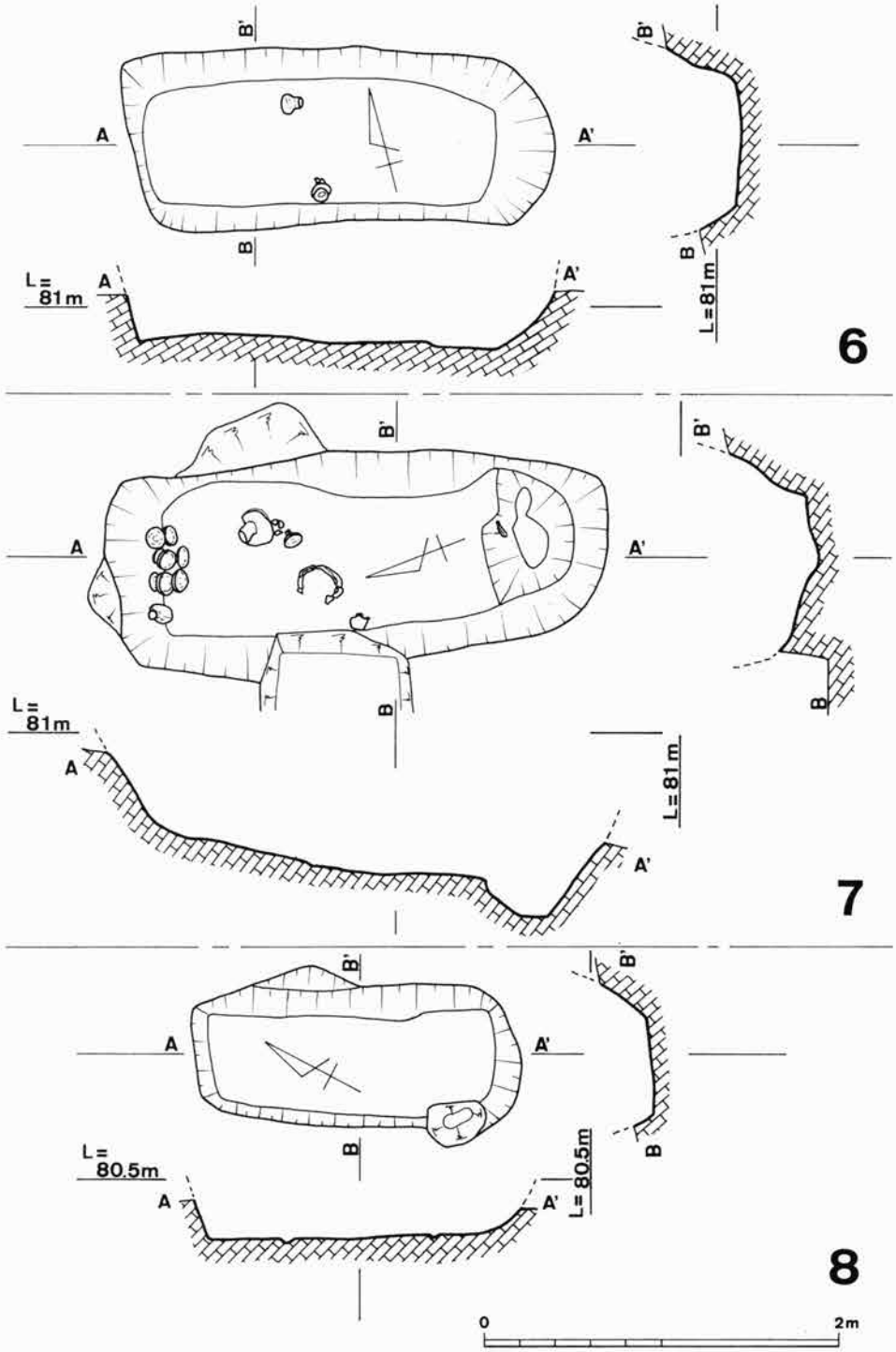
第16図　2　号　横　穴　実　測　図



第17図　3 号 横 穴 実 測 図



第18図　土 坑 実 測 図 (1)



第19図　土 坑 実 測 図 (2)

いる。埋葬時の供献のありかたの一例といえよう。

土坑4から出土した須恵器は，他の土坑出土のものより古い形式を示している。この土坑は，今回検出した土坑のなかでは最も古いものといえる。また，横穴出土の土器と比べても，それに先行するものである。

5. 出　土　遺　物

今回の調査では，須恵器・土師器などの土器や，鉄製品・玉・砥石などが出土した。本稿では，そのうちの土器の一部について，その概略を述べる。

(1) 1号横穴出土土器(第20図)

須恵器杯蓋1は，天井部がやや広くヘラ削りされ，口縁端部はまるくおさめる。須恵器杯身は，扁平気味で立ち上がりの高いもの(9)，立ち上がりの低いもの(7)，ややロ径の小さいもの(8)などがある。須恵器壺15は，口縁端部をやや肥厚させてまるくおさめ，体部外面はカキ目調整する。

土師器杯18は，底部外面ヘラ削り，外面口縁端部から内面はナデ調整である。土師器高杯は，杯部外面をヘラ削りするもの(19・20)と，外面全体をハケ目調整するもの(21・22)がある。

(2) 2号横穴出土土器(第20図)

須恵器杯蓋2・4は，やや丸味を帯びた形状であり，口縁端部はまるくおさめる。杯蓋3のように，側面観が台形気味のものもある。須恵器杯身10・11・12は，内傾する高い立ち上がりをもつ。須恵器提瓶17は，体部が叩き後カキ目調整である。カギ状把手をもつ。

(3) 3号横穴出土土器(第20図)

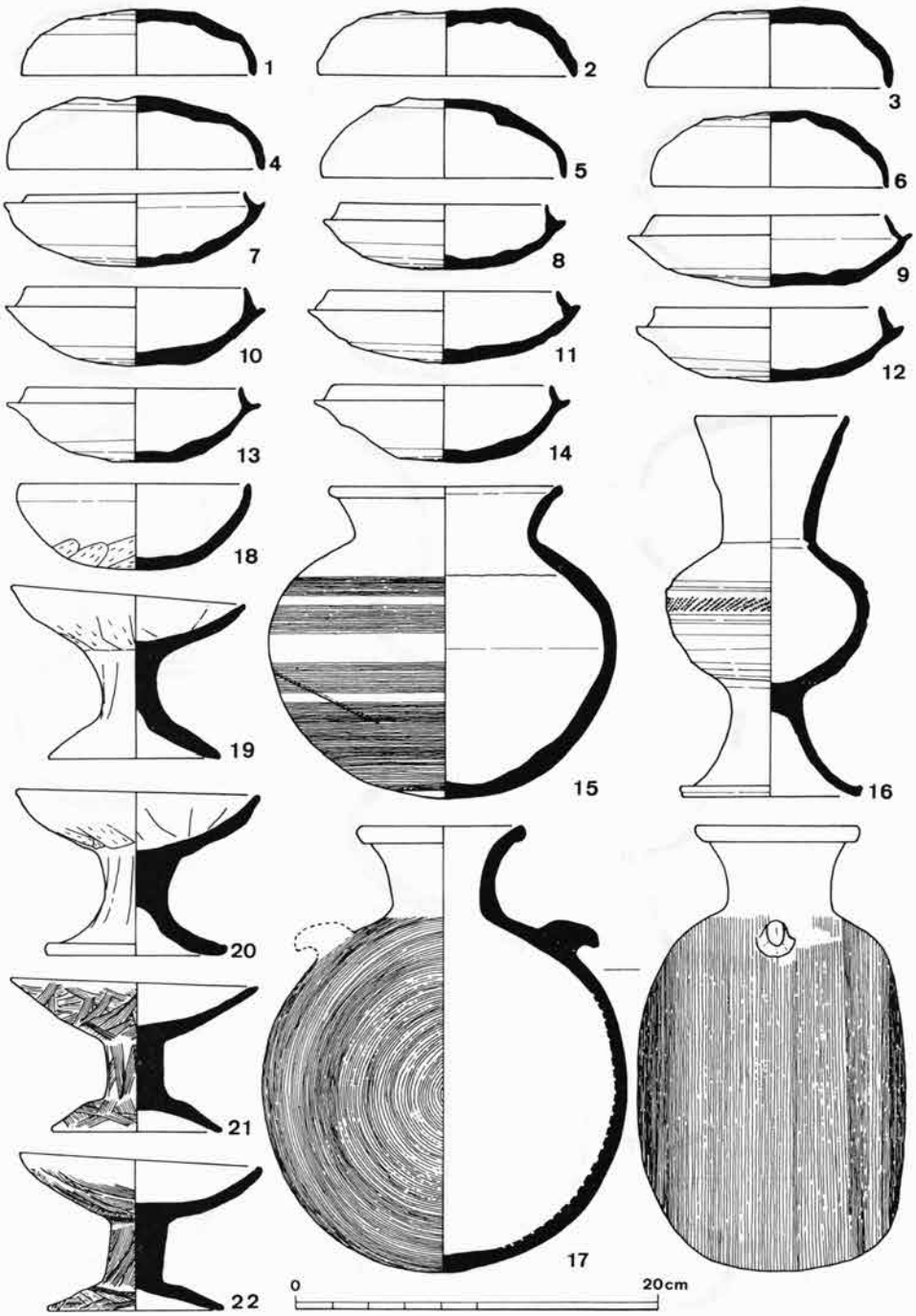
須恵器杯蓋5・6は，側面観が台形気味であり，口縁端部はまるくおさめる。須恵器杯身13・14は，他の横穴出土のものと比べて，若干口径が小さくなる。この傾向は，杯蓋にもみられる。須恵器台付長頸壺16は，脚部にすかしをもたない。

(4) 土坑出土土器(第21・22図)

須恵器杯蓋23・24は，形骸化した稜をもち，口縁端部に内傾する段をもつ。須恵器杯蓋25・26・27は，やや丸味を帯びた形状であり，稜はない。須恵器杯蓋28は，台形気味の側面観をもつ。

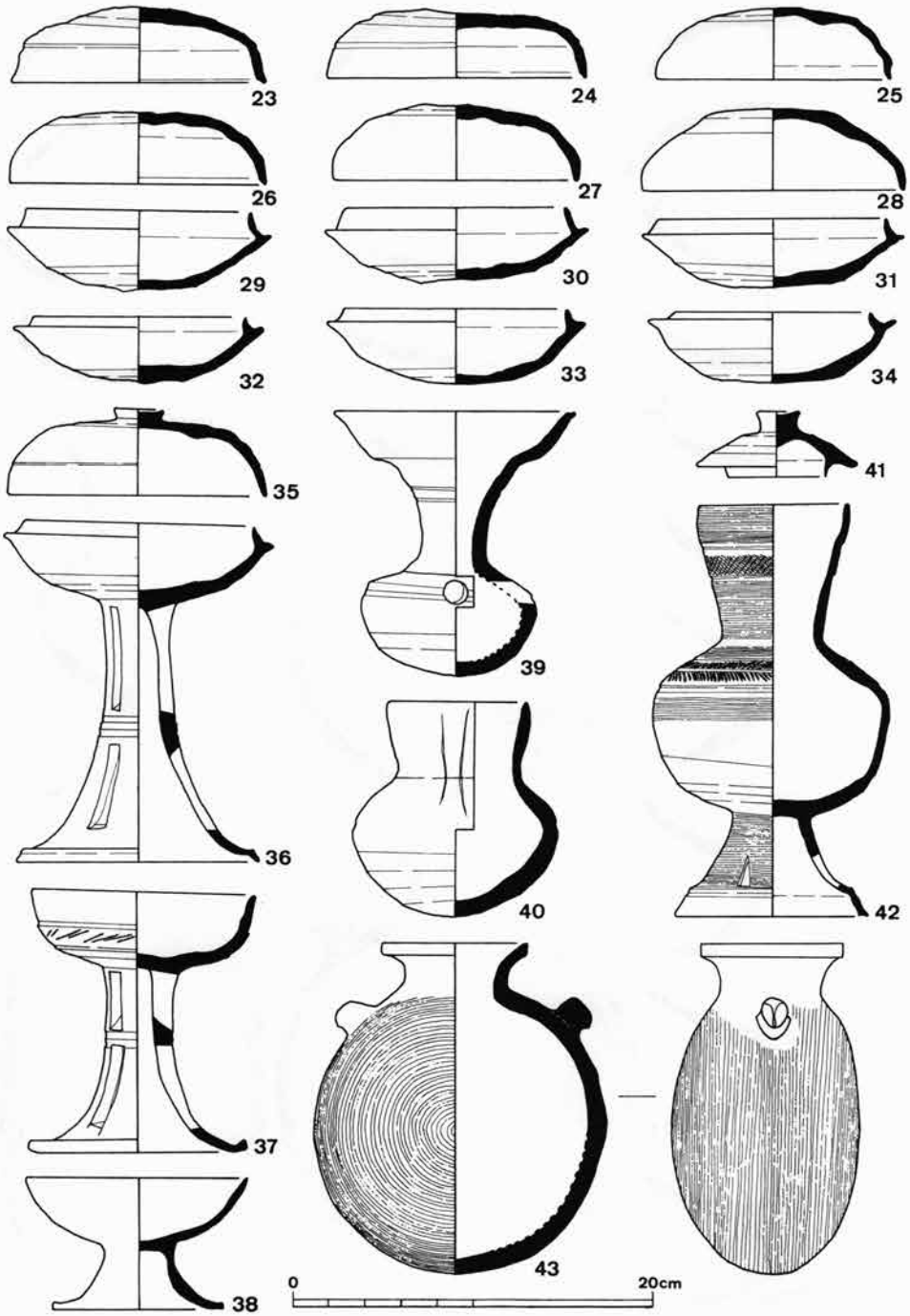
須恵器杯身29・30は，高い立ち上がりをもつ。須恵器杯身31・32・33は，立ち上がりがやや低くなる。須恵器杯身34は，口径が小さくなり，立ち上がりも低い。

須恵器有蓋高杯35・36は，蓋にはわずかに稜の痕跡がみられる。高杯は，長脚で二段三方に長方形のすかしをもつ。須恵器高杯37は，二段三方に長方形のすかしをもつ長脚高杯



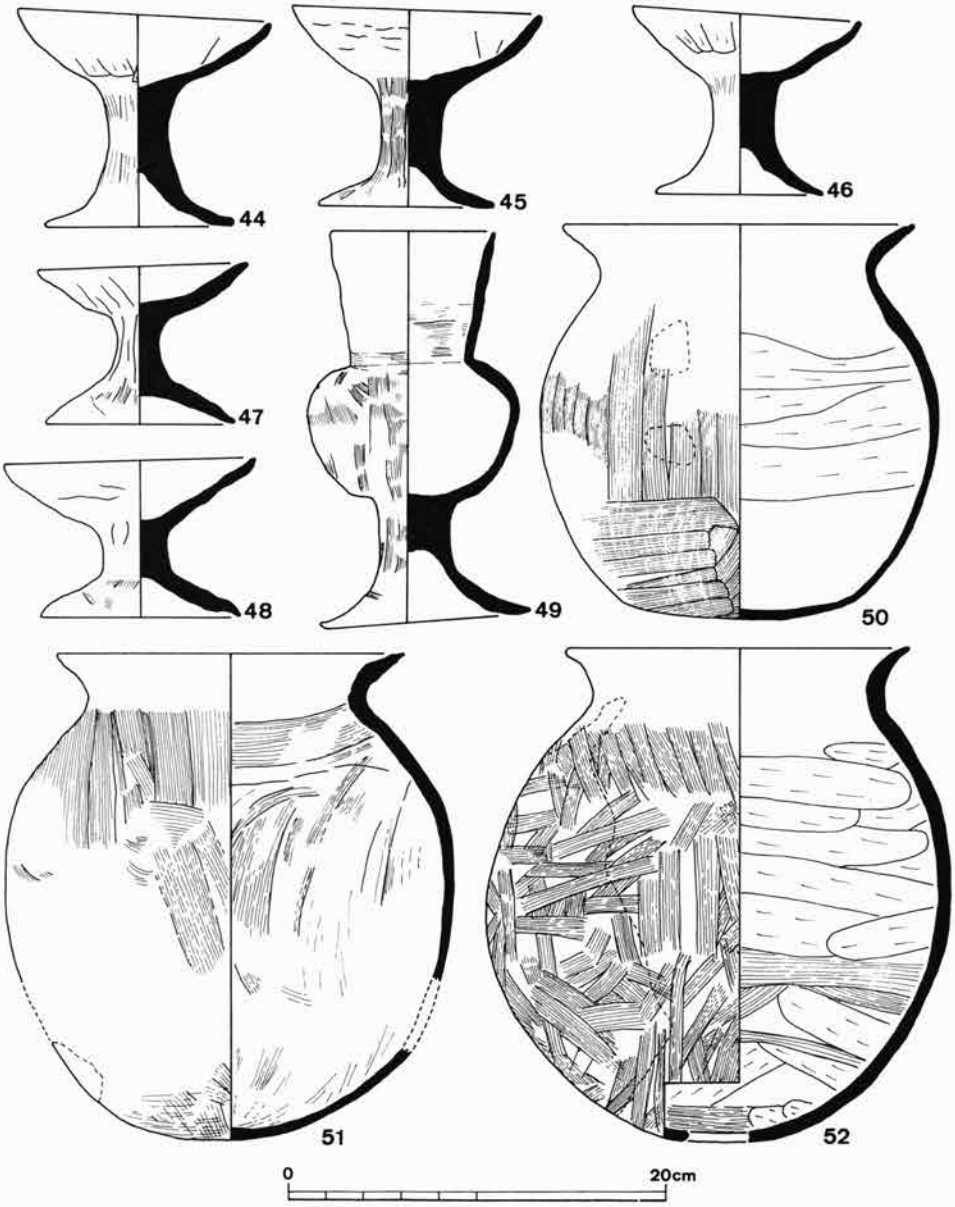
第20図　横穴出土遺物実測図

1・7・8・9・15・18・19・20・21・22—1号横穴，2・3・4・10・11・12・17—2号横穴
5・6・13・14・16—3号横穴



第21図　土坑出土遺物実測図（須恵器）

25・26・31・32・35・36・39―土坑1，27・33―土坑2，28・34―土坑3
23・24・29・30・41・42―土坑4，43―土坑5，40―土坑6，37・38―土坑7



第22図　土坑出土遺物実測図（土師器）
44・45・46・51・52―土坑1，47・48―土坑3，49―土坑6，50―土坑7

である。須恵器高杯38は，焼成はあまい。脚部にすかしをもたない短脚高杯である。

須恵器甕39は，頸部は細く，口縁部は大きく開く。須恵器壺40は，口縁部外面から肩部にかけて，縦一文字のヘラ描き沈線２条が施される。須恵器有蓋台付長頸壺41・42は，口縁部外面から体部上半と脚部外面に，細かいカキ目や波状文が施される。脚部には，三方に三角形のすかしがある。須恵器甕43は，退化したカギ状把手をもつ。

土師器は，高杯・甕がほとんどである。高杯は，比較的整美な器形のもの(44・45・46)と，雑なもの(47・48)がある。甕は，体部外面はハケ目がみられる。内面は，削りのみられるもの(50・52)と，ハケ目の残るもの(51)がある。なお，甕52は，底部穿孔される。台付長頸壺49は，特異な器形である。

6. 小　　結

京都府下においては，丹後地域の中郡峰山町・大宮町周辺，南山城地域の八幡市・綴喜郡田辺町周辺に横穴が多数確認されているが，丹波地域では，ほとんどその存在が知られていない。横穴の存在しない地域というのがほぼ定説化している。今回確認した栗ケ丘横穴群を含めても，まだ3例目であり，その定説をくつがえすには至らない。しかし，この横穴群の付近には小谷横穴があり，さらに三ノ宮校裏山横穴の存在を考慮すると，丹波地域北半部にはさらに横穴が存在する可能性がある。

この横穴群から出土した須恵器は，陶邑編年(注4)ではⅡ形式4段階から5段階に並行するものとみられる。ほぼ6世紀後半から末頃であろう。この横穴群では，1号横穴出土の蓋杯が，他の横穴出土のものより若干古様を示しており，1号横穴が，他の横穴よりやや早く築造されたものとみられる。

京都府下の横穴は，ほぼ6世紀後半から末頃に築造の開始があり，その後，7世紀に築造が盛行し，密集した横穴群を形成する。この横穴群は，他地域が築造盛行期をむかえる以前のものであり，その盛行期には築造されていない。この横穴群が，密集した群を形成せず，まばらに散在するのはそのためであろう。いずれにしても，この横穴群は，京都府下では古いものである。

この横穴群の横穴の特色の一つとして，排水溝をもつことがあげられよう。これは，湧水が多い地質にも関係するものであろう。1号・2号横穴は床面中央に，3号横穴は玄室奥壁から側壁に沿って排水溝を設ける。2号横穴では，その上に蓋石を置く。あたかも横穴式石室を意識したかの感がある。

今回は，墓とみられる土坑も検出した。これらの土坑は，傾斜地にあり，丘陵上平坦地には設けられていない。これらの土坑のうち，土坑4は，出土した須恵器が，陶邑編年のⅡ形式3段階頃に並行するものとみられ，最も古いものであろう。土坑3は，埋土から出土した須恵器がⅡ形式6段階に近い頃のものとみられ，最も新しくなるようすである。その他の土坑は，出土遺物のないものや明確な判定基準となる遺物のないものを除いて，ほぼⅡ形式4・5段階に並行するようすである。

これらの土坑には，東西方向に主軸をもつもの(斜面の等高線に平行)と南北方向に主軸

付表1　土　坑　一　覧　表

土坑番号	規　模(m)	主軸方向	出　土　遺　物
1	3.1×1.1	南北	須恵器　杯蓋2 杯身2 高杯3（有蓋1） 提瓶1 台付長頸壺1 横瓶1 土師器　高杯6 甕1 鉄製品　不明1
2	1.3×0.8	東西	須恵器　杯蓋1 杯身1
3	3.1×1.5	南北	土師器　高杯4
4	2.4×1.0	東西	須恵器　杯蓋2 杯身2 台付長頸壺1（有蓋）
5	2.4×0.8	南北	須恵器　提瓶1 石製品　砥石1
6	2.5×1.0	東西	須恵器　壺1 土師器　台付長頸壺1
7	2.9×1.1	南北	須恵器　高杯7 横瓶1 土師器　甕2 鉄製品　鏃4以上
8	1.9×0.8	東西	なし
9	?×0.8	南北	なし
10	2.6×1.1	南北	なし

をもつもの(斜面の等高線に直交)がある。最も古い土坑4は，東西方向に主軸をもち，最も新しい土坑3は，南北方向に主軸をもつ。東西方向に主軸をもつ土坑は，丘陵上平坦地に近い傾斜の緩い場所に設けられている。明確な判断基準となる遺物が出土した土坑が少ないので断定はできないが，その立地なども考慮すると，東西方向に主軸をもつ土坑が，南北方向に主軸をもつ土坑に先行するのではないか。

土坑4から出土した須恵器は，横穴から出土したものより古様であり，土坑4が横穴に先行するようすである。栗ケ丘では6世紀前半から中葉頃にかけて古墳が盛んに築造され，後半頃の6号墳をもって古墳築造が終了する。そして，6世紀後半から末頃に横穴が築造される。土坑は，古墳・横穴築造と並行して設けられているものとみられる。

土坑の出土遺物は，古墳の主体部や横穴から出土した遺物と比べてもあまり大差はみられない。古墳や横穴は，在地の有力者の墓とみられるが，土坑も，内容的にはそれに匹敵する。そういう点で，土坑も在地有力者にちかい者の墓とみられるが，古墳・横穴と単なる土坑という，いわゆる墓の形態の違いは，在地有力者のなかにも何らかの格差および規制があったことを窺わせる。　（引原茂治）

注1　伊野近富「栗ケ丘古墳群昭和60年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第20冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1986
引原茂治「栗ケ丘古墳群昭和61年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第23冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1987

注2　調査補助員　赤井敏行・佐竹尊樹・西田博紀・谷口康夫・大槻智彦・山本賢治・田中英行
作　業　員　今井助雄・今井和三郎・安野正夫・白木　茂・白木良夫　（登録順・敬称略）
調査協力者　藤山眞理・渡辺節子・大槻純子・斎藤啓子・仲井美香子

注3　堤圭三郎「田坂野群集墳発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会)　1972

注4　中村　浩ほか『陶邑』Ⅲ・Ⅳ(大阪府文化財調査報告書第30・31輯　大阪府教育委員会)　1978・1979

3. 園部城跡第２次発掘調査概要

1. はじめに

園部城跡は，京都府船井郡園部町小桜97に所在し，『京都府遺跡地図』には「園部町遺跡番号31」として登載された城跡である。現在では，標高約145mの小高い丘陵の本丸跡地に京都府立園部高等学校が建設されている。

園部城は，城地交換により，但馬国出石城主小出信濃守吉親の陣屋として，元和５(1619)年に築城され始め，約３年の年月を要して元和７年に開城している。以後，約250年間園部藩主小出氏の居城として，権勢を誇り，その間幾度かの城内の修築がなされた。また，幕末慶応４(1868)年から明治２(1869)年にかけては，明治天皇の行幸を想定した大規模な城普請が行われている。しかし，明治４年の廃藩置県以降，城内の主な造作物は移築・解体され，また明治20年の船井郡立高等小学校建築により，現在では，櫓門・巽櫓・石垣の一部のみが遺存するにすぎない。

今回の発掘調査は，園部高等学校武道館建設工事に先立ち，京都府教育委員会から事前の調査を依頼されたものである。当調査研究センターでは，昭和56年度において，同校校舎増築工事に際し発掘調査を実施した。その際，園部城跡の石組み溝・塀跡等を検出し，その下層から古墳時代中期の方墳２基も検出している。(注1)

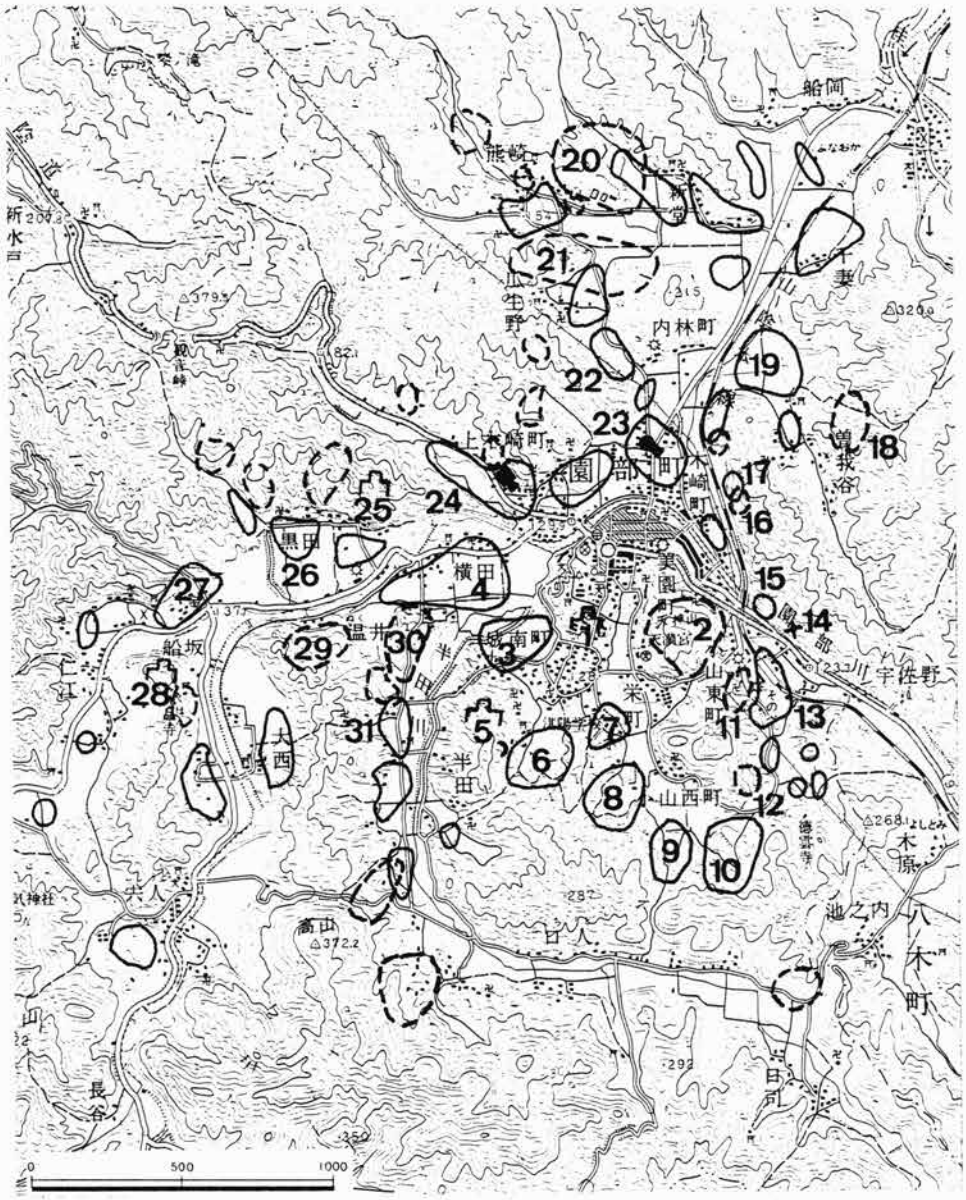
今回の調査地は，園部城本丸北隅の一画にあたる。現存する園部城に関する絵図である「園部城古図」ではこの位置に倉庫等の建物が描かれており，当初，園部城に関する遺構や築城以前の古墳が検出される可能性も考えられた。

発掘調査は，京都府教育委員会の依頼を受けて，調査第２課調査第２係長 水谷寿克・同係調査員 鵜島三寿が担当し，昭和62年10月２日から11月19日まで，武道館建設予定地，約150m²について行った。調査中には，調査補助員・整理員として有志学生諸君に協力していただき，(注2) また，京都国立博物館資料調査研究室長 難波田徹氏には専門的立場から御指導を賜った。記して謝意を表したい。なお，調査に係る経費は，全額京都府教育委員会が負担した。

（水谷寿克）

2. 位置と環境(第23図)

園部城跡は，園部盆地を流れる半田川と園部川の合流点の南，約250mの小麦山丘陵に位置する。



第23図　調査地位置図（1／25,000）

1. 園部城跡　2. 天神山古墳群　3. 大門遺跡　4. 横田遺跡　5. 大村城跡　6. 壺ノ谷古窯跡群　7. 堂田遺跡　8. 桑ノ内古窯跡群　9. 高杭古窯跡群　10. 大向古窯跡群　11. 天神山古墳群　12. 宮越古墳群　13. 小山東遺跡　14. 向ケ原経塚　15. 向ケ原遺跡　16. 善願寺古墳群　17. 善願寺遺跡　18. 山の井古墳群　19. 曽我谷遺跡　20. 西ノ下遺跡　21. 瓜生野古墳群　22. 上金沢古墳　23. 垣内古墳　24. 中畷古墳　25. 黒田城跡　26. 岩谷サイス遺跡　27. 北台上ノ段遺跡　28. 船阪城跡　29. 袋谷古墳群　30. 横田古墳群　31. 半田遺跡

園部盆地において，考古学的遺構・遺物の発見は，縄文時代までさかのぼることができる。垣内古墳下層[注3]で縄文土器片，曽我谷遺跡[注4]で尖頭器・石鏃等が検出されているが，すべて遺構に伴わないものであるため，縄文時代の様相はほとんどわかっていない。また，曽我谷遺跡では，「V」字形溝状遺構も検出され，豊富な弥生式土器とともに注目を集めた。

古墳時代に入ると，園部盆地の遺跡の中でも，特に注目すべき垣内古墳[注5]が出現する。垣内古墳は，全長84mの前方後円墳である。豊富な出土遺物の中でも，三角縁仏獣鏡は，桂川水系に属する百々ケ池古墳・寺戸大塚古墳から出土の仏獣鏡と同型鏡である。桂川は，諸々の河川の合流によって形成されるが，上流へ遡ると，大堰川・園部川へとたどることができる。その意味においても，垣内古墳とこれらの古墳との関連性を重要視すべきであろう。古墳時代後期になると，数基から10数基の古墳が密集して築かれ群集墳を形成する。能崎・天の山・新堂池・瓜生野・山の井・穴武士・桜池・宮の口などの古墳群を認めることができる。これらの多くは横穴式石室を内部主体とする円墳である。

一方，園部盆地では，小西山丘陵一帯に多くの須恵器窯跡(大向窯跡群[注6]・私市窯跡群・桑ノ内窯跡群)の分布が確認されている。これらは，古墳時代後期から平安時代までのものである。奈良時代になると，亀岡市の篠窯跡群が大規模な生産を開始するが，その前段階の古墳時代から操業を開始する点で，当窯跡群の意義はきわめて高いものと言える。この他には，奈良時代の官衙的様相の強い宮ノ口遺跡[注7]，平安時代から室町時代の遺跡と思われる善願寺遺跡[注8]，その南方には平安時代後期から鎌倉時代にかけてのものと思われる向川原経塚，向川原遺跡などを認めることができる。

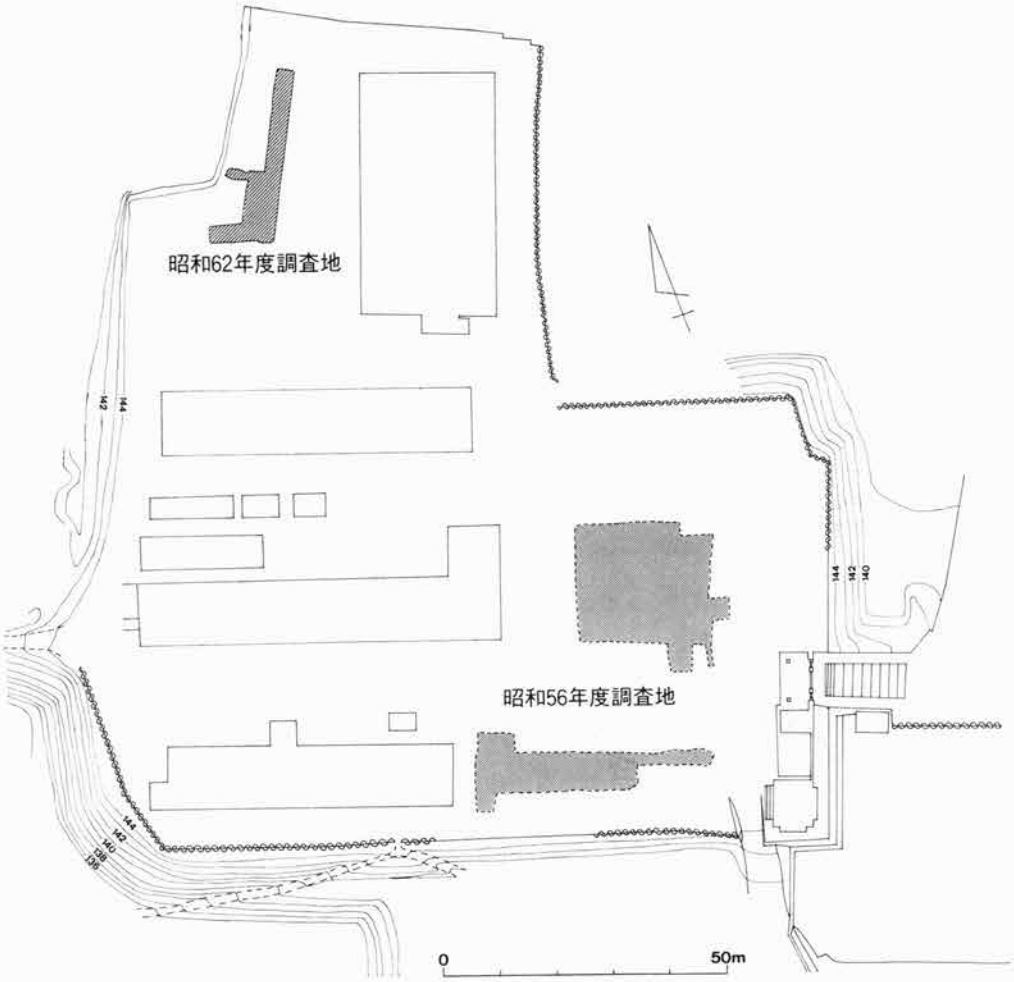
中世末期には，丹波地方一帯において多くの山城が築かれるが，園部盆地では，黒田城・小山城・大村城等が確認されている。その後，江戸時代になると，今回発掘調査した園部城が小出氏により造営された。

このように，園部盆地には数多くの遺跡が点在するが，いまだ点在する遺跡群を線あるいは面的に結びつけてとらえる段階までには至っていない。

2. 調 査 経 過

現地調査は，昭和62年10月2日から開始した。掘削にあたっては，学校敷地として表土が非常に固くしまっていたため，除去には重機を使用した。調査区の設定については，建設予定の建物の東縁部から南縁部にあわせ，幅3mのトレンチを「L」字状に入れた(南北30m，東西9m；第24図)。

遺構の残存状況はきわめて悪く，調査地全体にわたって旧校舎の基礎等の攪乱が及んでいた。これまで数度にわたる校舎の建設によって，削平もかなり行われていた。そのため



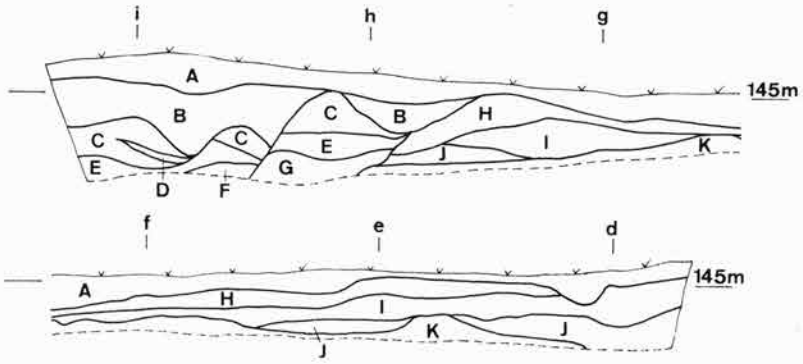
第24図　調 査 地 平 面 図

先述の絵図から推定された土蔵等の痕跡(礎石など)を検出することはできなかった。

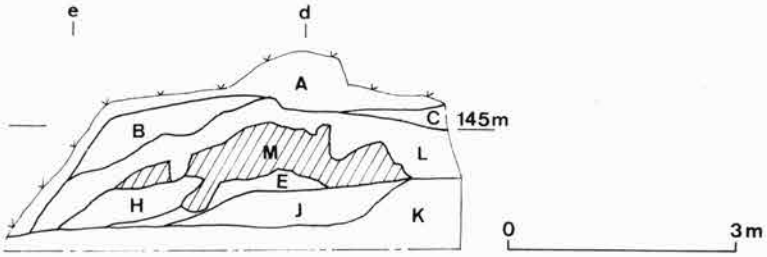
検出した園部城関係の遺構には，石組み溝3条(SD01～SD03)や，廃城時に設けられたと考えられる瓦溜り(SK01)の他に，用途不明の土坑状遺構などがある。また出土遺物には，多量の瓦片をはじめ，陶磁器・土師器などがある。以上の成果をあげ，11月12日に関係者説明会を行い，19日には器材を撤収して現地調査を終了した。

3. 層　　序(第25図)

調査地の基本的な層序は，表土・整地土・黄褐色粘質土の順である。表土は，学校建設に伴う盛土である。厚さは約5～35cmで，土層の状況から少なくとも2回以上盛土されているようすである。整地土は，廃城時の整地に伴うもの，園部城築城時及び改築時に伴う



A．表　土　　B．淡灰褐色粘質土　　C．淡黄褐色粘質土　　D．炭
E．黄褐色礫質土　　F．暗褐色礫質土　　G．淡赤褐色粘質土
H．赤褐色粘質土　　I．赤色粘質土　　J．橙色粘質土　　K．暗橙色粘土
L．暗黄灰色土　　M．黄灰色土(漆喰含む)



第25図　土 層 断 面 図（上：東壁，下：SD01蓋石部北側）

ものがあるが，攪乱などのため，それぞれを明確に分層することはできなかった。整地層の厚さは，約5～95cmである。この下層は，黄褐色粘質土および赤色礫質土の地山となる。なお，遺構は主に黄褐色粘質土上面で検出したが，石組み溝などは整地層上面で検出した。

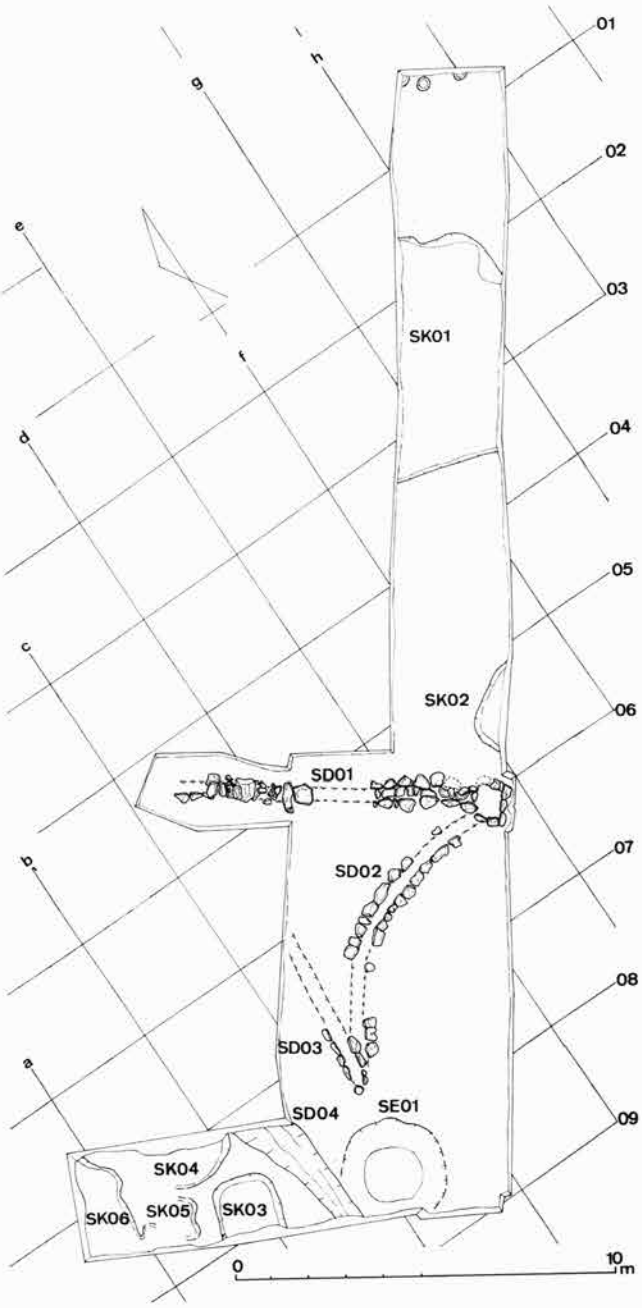
4. 主な検出遺構(第21図・図版第18の(2))

今回の調査地は，上記のように学校建築による削平・攪乱によって，遺構の遺存状態はきわめて悪かった。また，園部城に関係する建物礎石などは遺存しておらず，その詳細は確認できなかった。園部城に関係する遺構には，石組み溝(SD01～SD03)，廃城時に不要となった瓦などを捨てたとみられる瓦溜り(SK01)，性格の不明な土坑状遺構(SK03～SK06)などがある。

なお，近世園部城と同じ小麦山丘陵上に位置したと考えられる中世薗部城に関連する遺構・遺物は認め得なかった。

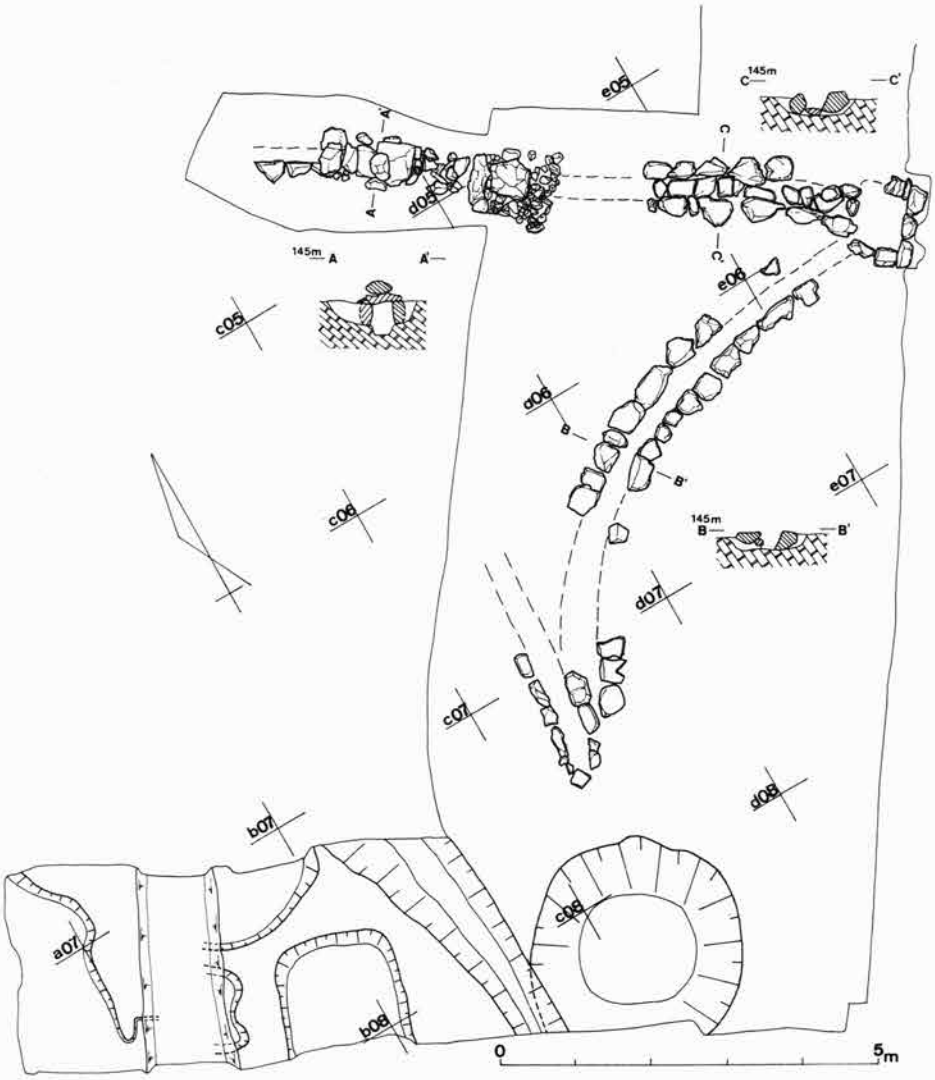
(1) 石組み溝(SD01～SD03)（第27図・図版第19の(1)）

SD01は，調査地東辺部の一画から北西方向へ，すなわち本丸から外へ向かってのびる溝である。方形に石を並べた枡状施設を起点とする。この溝は，枡状施設から約3mの攪乱部を境としてその構造が異なる。攪乱部までは人頭大の石を横積みし，底部には敷石を設けるものである。これに対し，攪乱部より先は，蓋石を設け暗渠状とし，底部に敷石は設けていない。溝に蓋をするにあたっては，まず一辺30～50cm大の石を用いて蓋をし，次にその周囲に拳大の石と平瓦の小片，完形に近い軒丸瓦等を積み重ねて蓋部を形成している。蓋石部横の土層観察及び断ち割りによって，土層中(第25図)に漆喰の痕跡を確認した。このことから，暗渠状にした部分は，この上部に何らかの構築物が存在したことが推測される。なお，枡状部の南東側には，何ら遺構は確認されなかった。



第26図　遺構配置図

SD02は湾曲してのびる溝である。湾曲させた目的は，SD02の周囲が調査地の中でも特に後世の削平が著しいため不明である。ただ可能性としては，溝の東側の空間利用との関



第27図　遺構平・断面図

係(建物の存在)や，SD01でも推測した西側の構築物との関係が考えられよう。なお，この溝の掘形は，溝に沿って屈曲せず，溝の両端を結ぶ直線に近い形態をとる。また，溝に沿った南側で，裏込めに使用したと思われる集石を検出した。

SD03は，調査地南東隅部から北へ向かってのびる溝である。SD02と切り合いを有し，明らかにSD02より後に構築されたことが確認できる。攪乱を受けているため，3m程遺存しているにすぎない。なお，SD03の起点から南約1mのところで井戸跡を検出した。

(2) **溝**(SD04)

断面は，「V」字形を呈し，SE01の西を南北に走る溝である。この溝は，当初古墳の周

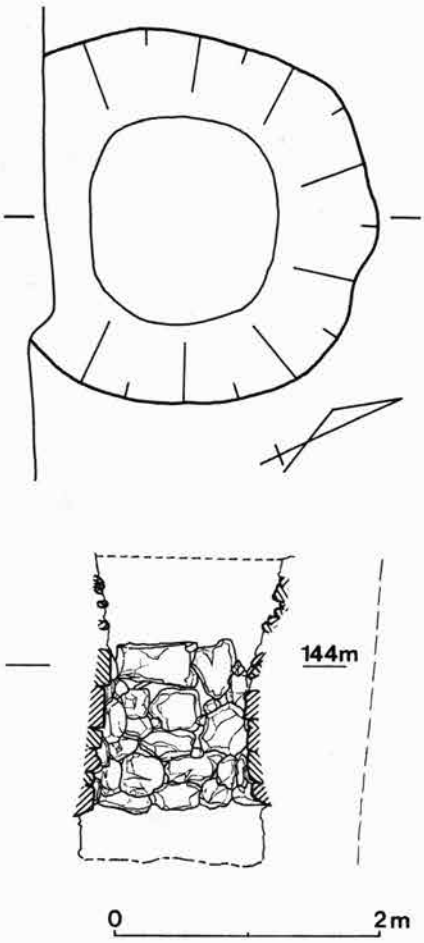
溝の一部かと思われたが，切り合い関係の検討によって，後述する井戸(SE01)が構築された後，掘られたものと確認した。なお，溝の埋土から蓋形埴輪片が出土している。

(3) 瓦溜り(SK01)

調査地の北半部で検出した。幅3mの部分で，一部を確認したにとどまり全容は不明である。南北幅約4.8～6.4mを測り，深さは東壁側で約6cm，西壁側で約20cmを測る。多量の近世瓦片にまじって，陶磁器片なども少量出土した。これらの遺物は廃城時に投棄されたものと思われる。

(5) 井戸(SE01)(第28図)

調査地南辺部で検出した。上縁径約1.7mを測り，平面形は円形を呈する。深さは，2.4m以上である。検出面から，深さ0.6～1.9mの部位に石組みを構築している。おそらく，石組みの上部には木製の枠状のものがあったと思われる。



第28図　井戸実測図

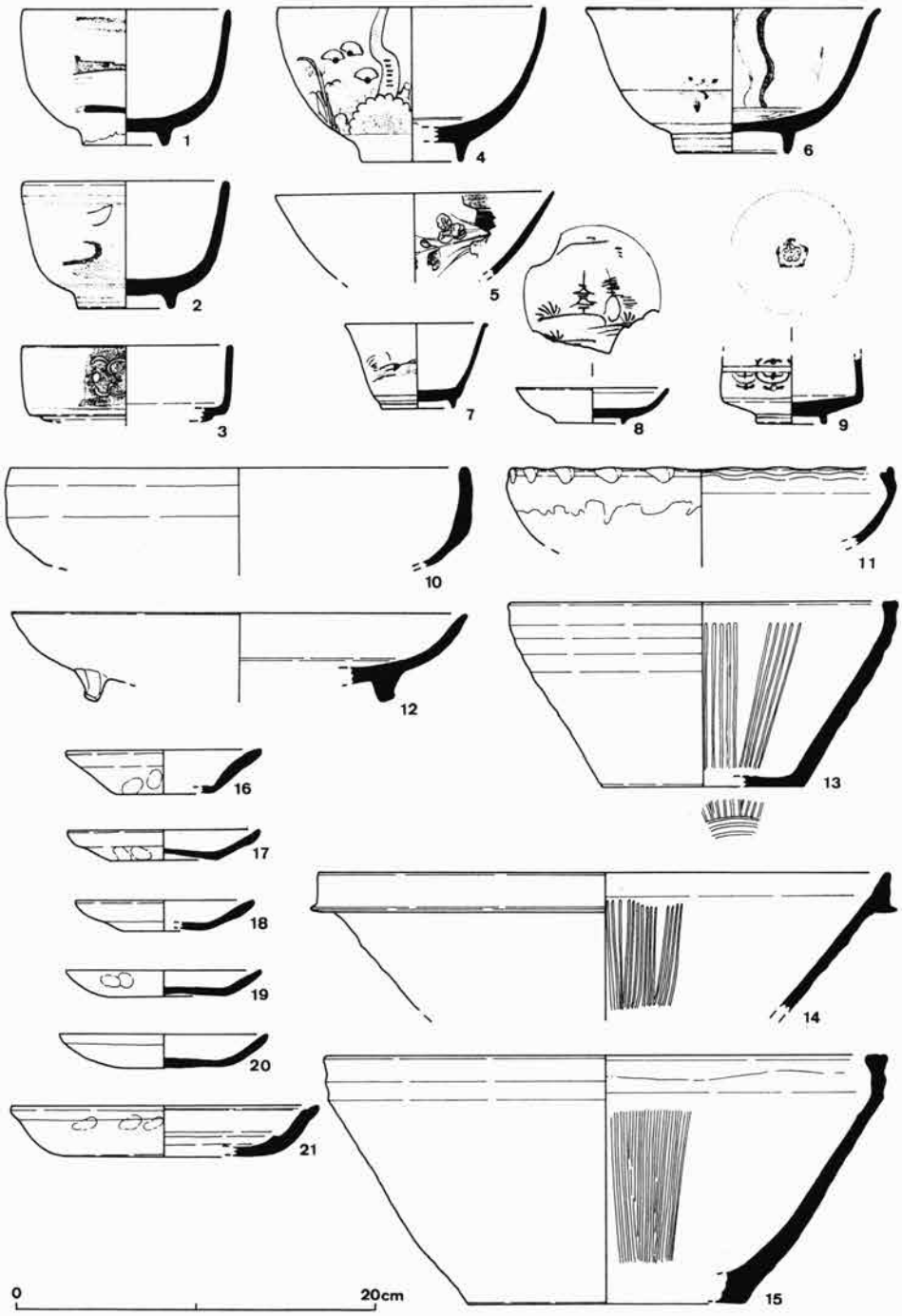
5. 遺　　物

今回の調査で出土した遺物は，SK01から出土した多量の瓦片をはじめ，陶磁器・土師皿など近世に属するものが主体を占める。この他には，SD04から出土した古墳時代の埴輪片を数点認めることができた。以下にその概要を記す。

陶磁器(第9図・図版第21)

伊万里・唐津・備前・丹波・京都とすべて国内製品である。器種としては，椀・皿・鉢・擂鉢などである。

染付椀(1)は，伊万里系のものである。絵付けの発色も悪く，外面に灰緑色の釉が施されている。高台付近は，釉がたまっており凹凸が著しい。椀(2)も，灰緑色の釉が施されている。高台のみ釉を施していない。1・2とも，17世紀後半頃の製品であろう。鉢(3)は，伊万里系の赤絵である。全面に施釉した後，赤彩を施す。器種としては，重ね鉢と呼ばれるものである。染付椀(5)は，いわゆる「広東茶椀」に入る可能性がある。椀(4)は，伊万



第29図　出土遺物実測図
（陶磁器・土師器）

里系のものである。全体に白釉を施す。18世紀後半頃の製品であろう。椀(6)も，伊万里系のものである。内外面とも透明釉がかかる。高台のみ無釉である。染付盃(7)は，17世紀後半の伊万里である。染付皿(8)は，内面に山水画を描く。これも，17世紀後半の伊万里の製品であろう。椀(9)は，「向付」と呼ばれるものである。内面に五弁花，外面に花紋を描く。18世紀後半以降の伊万里のものと思われる。

平鉢(10)は，土師質に焼かれている。「炮烙」とよばれる在地的なものであろう。平鉢(11)は丹波焼である。口縁端部を指で押さえ凹凸をつくる。平鉢(12)は，伊万里系の青瓷である。

擂鉢(13・14・15)は，丹波焼である。13は，内面に櫛状の器具で5本を単位とする沈線を施す。14は7本を単位とする沈線を施す。13・14とも色調は明褐色を呈する。15は，丹波焼でも新しいものである。内面の沈線は，密にひかれほとんど摩滅しておらず，色調は暗褐色を呈する。

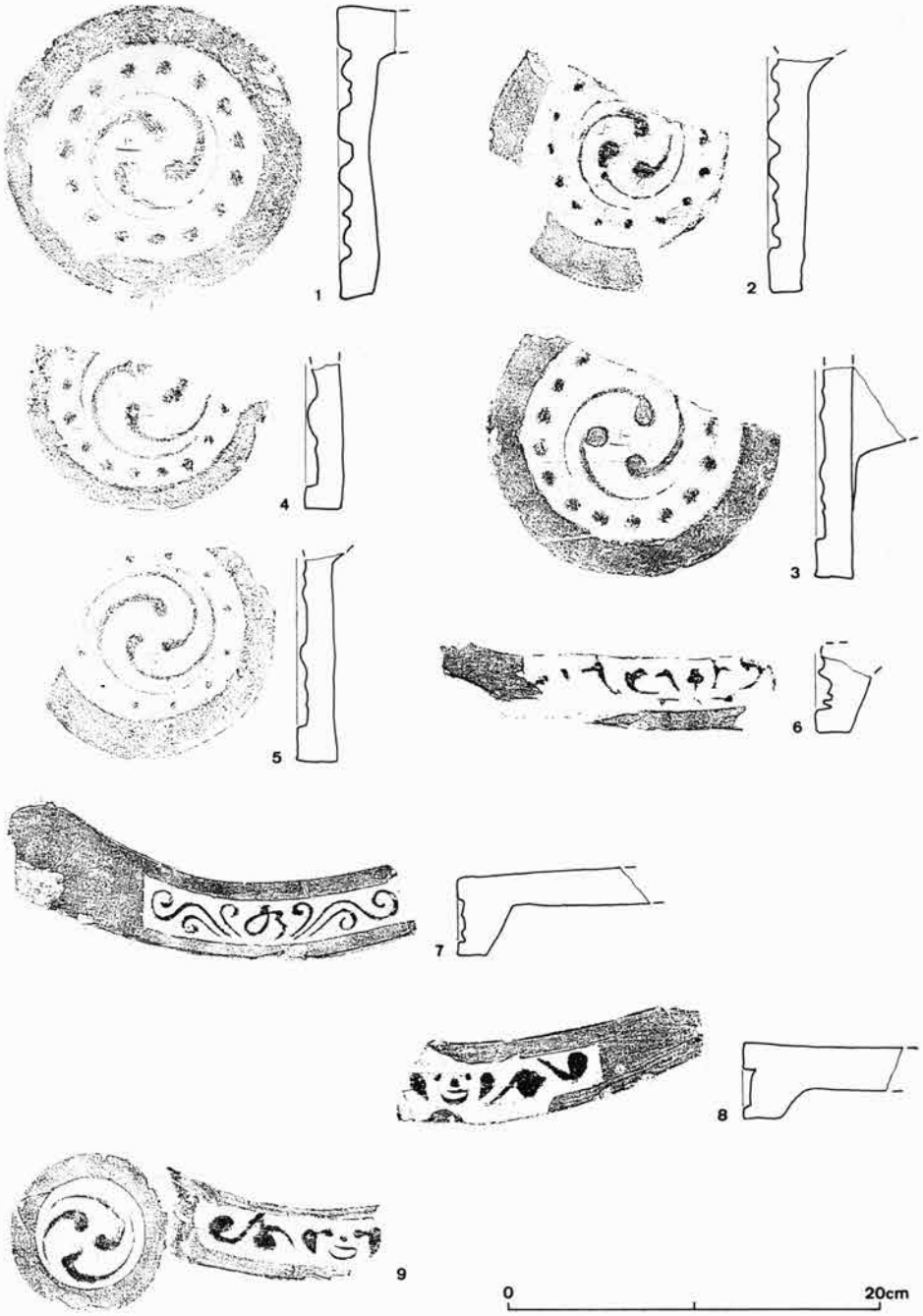
土師器　今回の調査で出土した土師器は，すべて皿である。口縁部に煤が付着し，灯明皿として使用されたと思われるものもある。出土点数はあまり多くなく，遺存状態のよいものも少ない。

土師皿(16)は，外面に指押さえの痕が残り，外反気味に立ち上がる。内面は，指ナデ調整である。内面の見込みと立ち上がり部分が明瞭に分かれる。土師皿(17～20)は，口径約9～11cmをはかる。いずれも内面の見込みと立ち上がり部分が明瞭に分かれず，口縁端部が丸くおわる。土師皿(21)は，口径約17cmの大型である。底部と口縁部の途中にナデによる明瞭な段を有する。口縁端部の内側は面を有し，やや外反気味におわる。調整は，内面に横方向のナデ，外面に指圧痕が残り荒いナデを施す。

瓦(第29図・図版第22)

出土遺物のうちで，最も多数を占めるのは瓦類である。軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・棧瓦・道具瓦と種類も多い。これらはすべて近世の瓦である。SK01から多量に出土した。

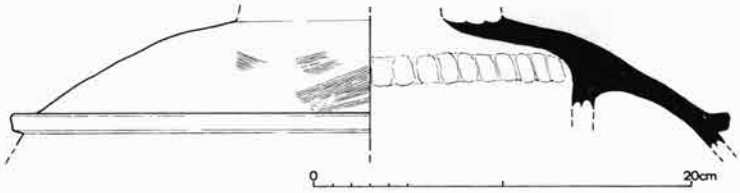
軒丸瓦　瓦当文様は，すべて三ツ巴文で，その周囲に連珠文を配する。1は，直径15.8cmで15個の連珠文をもち，左三ツ巴文である。巴文の尾は長く彫りも深い。2は，瓦当文様は1と同様であるが，破片のため直径は不明である。3は，直径15.5cmで，15個の推定復元の連珠文を配する。巴文の尾は比較的短くなり，彫りも浅くなっている。4は，直径13cmで，推定15個の連珠文を配する。これも左三ツ巴文である。5は，推定復元すると，直径13.5cmで，12個の連珠文を配する。巴文の尾は，4と同様に長い。4・5は，1～3のものとは，胎土・焼成が明らかに異なり，瓦当面に離れ砂の付着も著しく，直径も一まわり小さい。



第30図　出 土 遺 物（瓦）

軒平瓦　６は，クローバー状の中心飾りを有する均正唐草文瓦の小片である。７は，「水」の字の中心飾りを有する均正唐草文瓦の小片である。８は，瓦当の中心に宝珠文状の中心飾りを有する唐草文瓦(注9)である。ただし，これは桟瓦の可能性もある。

桟瓦　9は，連珠文帯を有さない三ツ巴文の丸瓦当部と，宝珠文状の中心飾りを有する唐草文の平瓦当部[注10]からなる桟瓦である。他にもう1点，連珠文を12個配する左三ツ巴文の丸瓦当部も出土している。



第31図　出土遺物実測図（蓋形埴輪）

丸瓦　図示はしていないが，10点程出土している。外面はヘラ削りされ，内面には布目を残す。周囲は面取りされている。

平瓦　図示はしていないが，多量に出土している。表面はナデ調整，裏面は板の木口で削った後ナデ調整を施す。

道具瓦（図版第22の8・9）　8・9とも表面，裏面にナデ調整を施す。8は，裏面にり十七」の文字が彫られている。9の裏面は「ノ内」もしくは「ノ四」の文字が彫られている。

金属製品

今回の調査において，出土した金属製品はきわめて少ない。古銭（寛永通宝）・キセル・瓦どめの鉄釘等が出土したのみである。

埴輪（第31図・図版第21の8）

埴輪片は，SD04の埋土から出土した。蓋形埴輪1点及び少量の円筒埴輪片がある。図示したものは，蓋形埴輪の笠の一部である。外面はヨコハケ調整を行い，内面は不正方向のナデ調整を行っている。笠の部分から円筒に変わる部分には指圧痕がみられる。色調は内外面とも乳褐色で，焼成は軟である。

6. 小　　結

今回の調査で検出した園部城関係の遺構は，後世の削平や攪乱のため遺存状況が悪く，断片的に確認したにとどまった。しかし，園部城の旧状を知る上でいくつかの新知見は得ることができたと言える。

調査地は，『園部城郭図』によると，本丸北辺中央部に位置し，土蔵が1棟描かれているにすぎない。今回の調査では，明確な遺構は確認されなかったものの，調査地の西隅から出土した漆喰のかたまりやSD01の土層観察，また，SD04の西側には三和土のようにつき固められた所もあったことから，何らかの建物を想定することができる。

今回検出した石組み溝に関しては，古絵図を参照してもその所在が記されていない。加えて，古絵図の製作年代も不明であり，古絵図自体の描写法にも問題がある。そのため，

園部城本丸の全容は，今回の調査成果を踏まえた上で，今後の成果に期待せねばならない。石組み溝の使用目的については，SD03の南約1mのところに井戸が検出されたことなどから，やはり井戸に関係する排水施設であったと考えるのが最も妥当であろう。

一方，古墳時代の遺物としては，蓋形埴輪や円筒埴輪片が出土した。昭和56年度の調査においては，埴輪片や方墳２基が検出されている。これらのことから，現在，園部高校が建設されている小麦山丘陵には，埴輪を有する古墳が存在していたことが判明する。その後，園部城築城時に古墳を削平して整地したのである。

今回の発掘調査は，面積は狭いながらも，園部城に関する諸々の新知見を得ることができた。その意味において，園部城の全貌を解明する貴重な資料を追加することができたと言える。

（鵜島三寿）

注１　引原茂治他「園部城跡発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第４冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1982

注２　調査補助員　山室　繁・川勝　修・松田靖史・船越正美
調査協力者　田代美穂子・山本弥生

注３　森　浩一・大野左千夫『園部垣内古墳調査概報』（『同志社大学文学部考古学調査記録』第１号　同志社大学文学部文化史学科考古学研究室）　1973

注４　平良泰久『曽我谷遺跡発掘調査概報』（『園部町埋蔵文化財調査報告書』第２集　園部町教育委員会）　1977

注５　注１に同じ

注６　堤圭三郎「大向窯跡発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会）　1971

注７　高橋美久二「園部町の古窯址群」（『京都考古』第７号　京都考古刊行会）　1974

注８　堤圭三郎「国道９号バイパス関係遺跡発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会）　1976

注９　この瓦の中心飾りは，一見すると宝珠文には見えず，布袋を意匠したものかとも思われる。しかし，昭和56年度の発掘調査において出土した同様の文様が退化したと解し，ここでは宝珠文状の中心飾りとする。

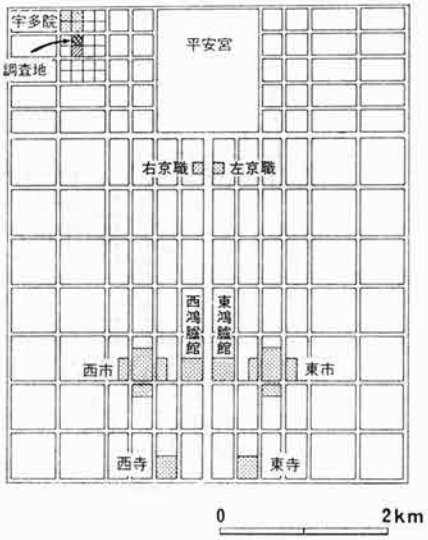
注10　注９に同じ

4. 平安京右京一条三坊九町(第7次)発掘調査概要

1. はじめに

京都市北区大将軍坂田町にある京都府立山城高校は，延暦13(794)年に山城国へ遷都された平安京の条坊区画では，平安京右京一条三坊九・十町に相当する。

この山城高校では，昭和54年の校舎改築工事に先立つ発掘調査(第1次調査)において(注1)，古墳時代後期の竪穴式住居跡群と平安～鎌倉時代の掘立柱建物跡が検出された。これらの建物のうち，平安時代の建物は，中心建物(SB09)とその左右対称の位置に西脇殿(SB07・SB10)と，東脇殿(SB12・SB17)があり，建物配置などが注目された。



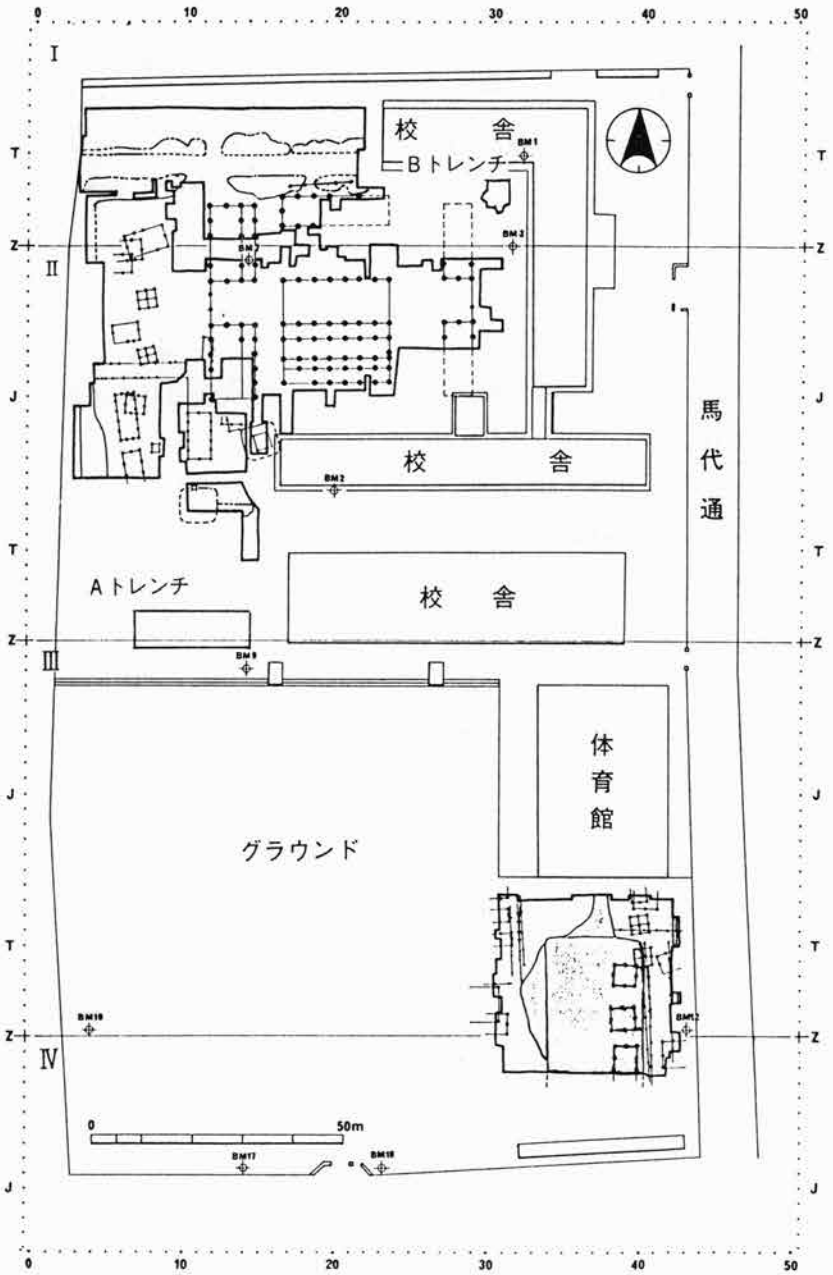
第32図　平安京条坊図
(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-2)』より転図)

続く昭和55年度の調査(第3～第5次調査)では(注2)，中心建物の後方に梁行規模を一間分縮小した建物(SB119)があり，中心建物(SB09)を「コ」の字形に囲むように建物が配されていること，また建物群を囲むように築地とその両側の側溝が確認され，推定規模約120m(一町)四方の敷地を占有する貴族の邸宅跡と考えられるようになった。また，昭和55年度の調査では九町の南側の十町域の調査も行われ，平安時代の苑池(SG177)も確認した。

このように山城高校の調査では，平安時代前期の建物群を中心に古墳時代～鎌倉時代の遺構を確認し，山城高校敷地全域に遺跡の存在が予想されたが，京都府教育委員会では，昭和62年クラブボックス等の老朽化に伴い，体育振興施設および便所棟の増改築が計画された。この体育振興施設の予定地は，昭和54年度に解体されたプールに接しており，平安時代を中心とした遺跡は旧工事によって破壊されていると予想したが，調査が進むにつれ，注目される遺構が検出された。以下，これまでの調査成果と今回の調査成果について簡単に説明を行う。

なお，調査は，京都府教育委員会の依頼を受けて，当調査研究センター調査第2課調査第3係長小山雅人，同調査員石井清司が担当し，調査期間は昭和62年7月21日～同年9月29日

の2か月を要した。この間，京都府教育委員会・京都府立山城高校・山城高校歴史クラブの方々のご協力を得た。また多くの学生諸氏には調査補助員・整理員として調査の協力を得た。(注3) 本書の製図は平野仁佳子氏が，また執筆は主に石井が行い，石器については調査員黒坪一樹によるものである。なお，本調査にかかる経費は，京都府教育委員会が全額負担した。



第33図　調査地地区割図（『埋蔵文化財発掘調査概報（1981-2）』より転図，一部加筆）

2. これまでの調査成果

平安京右京一条三坊九・十町に位置する山城高校敷地内の発掘調査は，昭和54年度を最初として現在までに7回にわたって行われた。

ここでは，これまでに行った6次にわたる発掘調査の成果を簡単に列記し，今回の第7次調査との関連を指摘しておきたい。

昭和54年度に始まった山城高校の敷地内の発掘調査は，昭和59年までに6次にわたって行われた。その結果，山城高校敷地内の遺跡は，第Ⅰ期；古墳時代後期(6世紀末～7世紀初め)を中心とした平安京造営以前の時期(花園遺跡の一部として位置づけられている)，第Ⅱ期；平安京の条坊制が施行された時期，第Ⅲ期；第Ⅱ期の大規模な建物が解体し，ある空白期間を置いてふたたび建物が造られた時期の3期にわたることが判明し，各時期の遺構・遺物を検出した。以下，第Ⅲ期の遺構を中心に，この時期区分によって年次ごとに説明を行う。

第1次調査　第1次調査は，九町の北半中央の調査であり，第Ⅱ期主要建物群の調査である。この調査では，SB08・SB09の正殿とSB07・SB10の西脇殿，SB12・SB13の東脇殿を検出した。正殿であるSB08・SB09は，SB08を切ってSB09があり，SB08の造営途上の仮設的な主殿を整備し，廂・孫廂により規模を拡張し，さらに瓦葺建物に整備したSB09へ変化する。なお，第1次調査で検出された第Ⅱ期の中心建物群は，現在盛土を行いテニスコート・駐車場として保存されている。

第2次調査　第2次調査は，第Ⅱ期の中心建物群の西方で長い南北トレンチを入れて行った校舎改築に伴う調査である。この調査では，第Ⅱ期の関連遺構として井戸(SE60)のほか，中心建物と付属屋を画する柵列(SA107・SA108)，西・北の築地に伴う内溝(SD57・SD45)を検出した。また，この調査では第Ⅱ期の建物群のほか，第Ⅰ期に属する掘立柱建物跡(SB33・SB34・SB54)，第Ⅲ期に属する掘立柱建物跡(SB58・SB59)も検出した。

第3次調査　第3次調査地は，第1・第2次調査地の北西部の東西に長いトレンチである。この調査では，正殿の北側に柱列をそろえた後殿(SB119)と，第1次調査で検出した西脇殿(SB10)の規模を確認した。また，九町の北限遺構である2条の溝状遺構(SD45・SD120)と，その溝状遺構の間に平坦面があることも判明した。この溝状遺構および平坦面については，北から土御門大路の側溝(SD120)・築地(SA150)・宅地内の溝(SD45)と考えられる。

第4次調査　第4次調査は，西脇殿(SB07)の南約300m^{2}を対象として発掘調査を行った。この調査では，SB07の西柱列の延長線に柱筋を揃えた南北棟の掘立柱建物跡(SB155)を検出した。この建物は，柱間が狭く，近接して井戸があるため厨房の建物と考えられている。

また，この第４次調査では，調査地の南端に宅地の内溝(SD57)に取り付くと推定される区画溝(SD157)を検出した。第Ⅱ期以外の遺構としては，古墳時代の竪穴式住居跡，平安時代以降の井戸・土坑などを検出した。

第５次調査　第５次調査地は，山城高校敷地内の南端にあり，平安京の条坊復元では十町域に相当する部分の調査である。この調査では，９世紀前半に大規模な池(SG177)が掘られ，その後，池が埋められたあと，10世紀末～11世紀初頭に小規模な掘立柱建物が濫立する。

第６次調査(注4)　第６次調査は，昭和59年度に行われたもので，昭和54・55年度(第１～第５次)の調査が，校舎の増改築工事に伴う広範囲な調査であるのに対し，この調査は下水道整備工事に伴う調査であり，調査範囲も狭い。この第６次調査では，九町域の北側トレンチ(第６トレンチ)で宅地内の内溝であるSD45の延長遺構と考えられるSD0605・SD0606を検出した。また，SB09などの中心建物群の南を画する溝(SD153)の延長線上に設定したトレンチ(第１～第３トレンチ)では，溝(SD153)の延長は検出できず，奈良時代の掘立柱建物跡などを検出した。

3.　第７次調査の概要

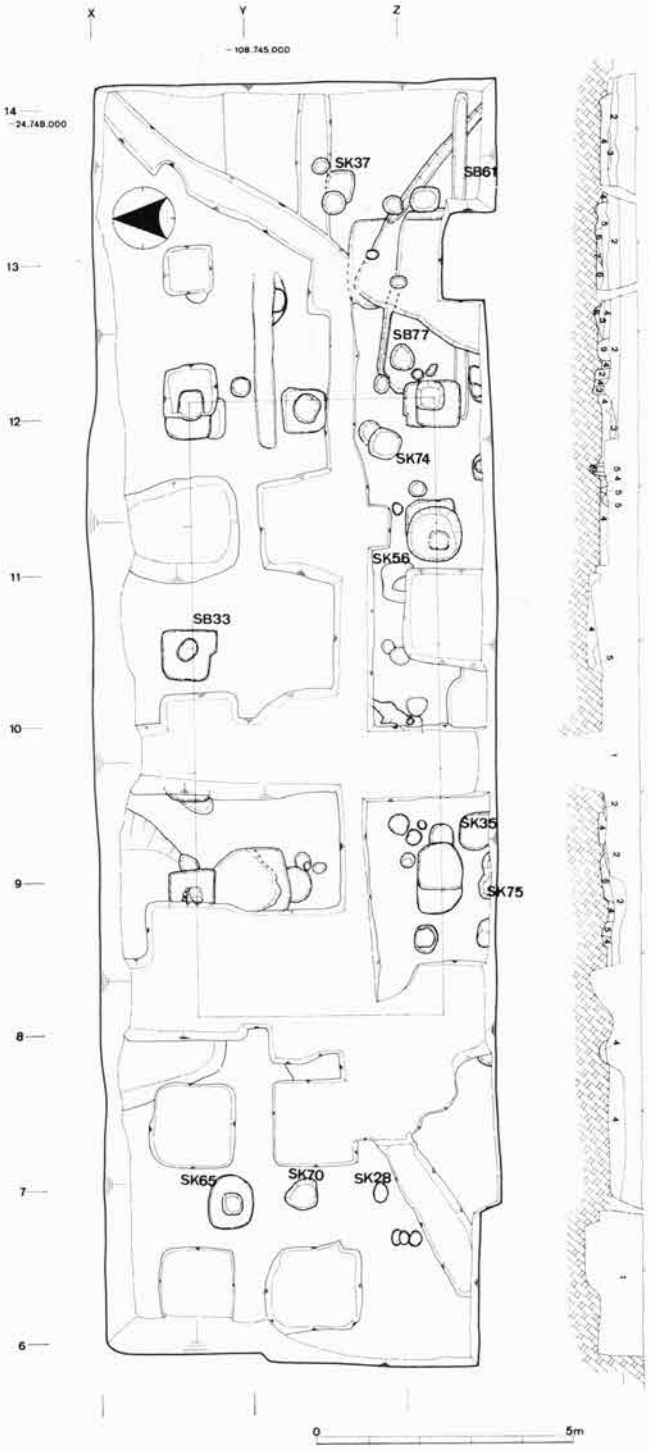
第７次調査は，前述のように，体育振興施設(Ａトレンチ)および便所棟(Ｂトレンチ)の建物予定地の調査であり，調査対象面積約260m²について，昭和62年７月21日から同年９月29日までの約２か月間を要して調査を行った。

この体育振興施設予定地(Ａトレンチ)は，これまでに行われた第１～第６次調査の調査結果から推定すると，第Ⅱ期(平安時代前期)の遺構である中心建物群の南を画する溝(SD153)の南にあたり，推定南門とSD153の中央部の西半分の位置にあたる。また，便所棟予定地(Ｂトレンチ)は，第６次調査で，検出した宅地の内溝(SD0606)の南に接した部分である。以下，Ａトレンチ・Ｂトレンチで検出した遺構および遺物について簡単に説明を行う。なお，遺構番号については第６次調査の記入方法を踏襲し，四ケタの数字で表わす。すなわち0701の07は第７次調査を示し，01は検出した遺構の順番を表わす。

a．層位

平安京右京一条三坊九町域の地形については，昭和55年の『発掘調査概要』において詳細に記述されているため割愛し，ここでは各トレンチの層位について簡単に説明を行う。

Ａトレンチは，山城高校敷地内の中央，西寄りのトレンチである。このＡトレンチでは，前述のように昭和54年度の旧プールの解体，昭和55年以降の新校舎の増築に際し，厚さ約

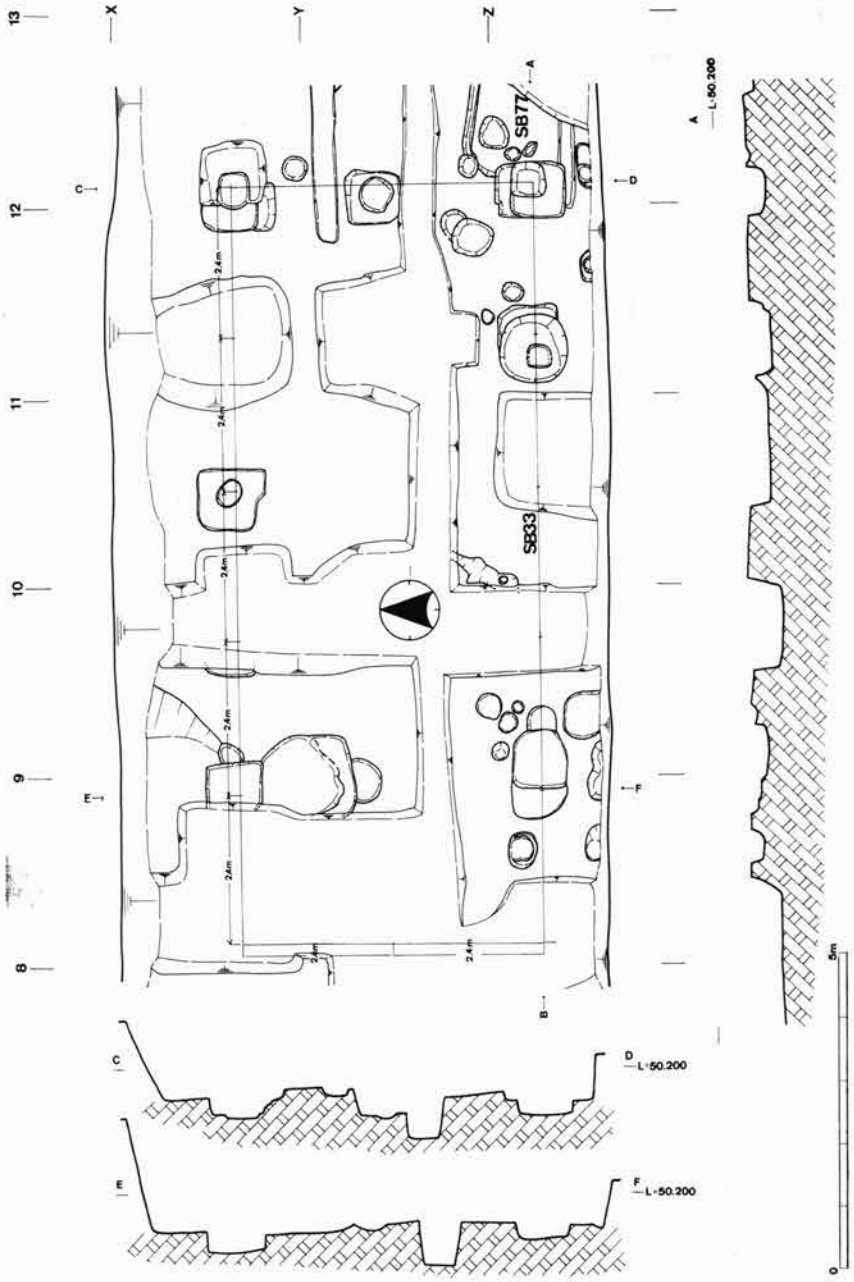


第34図　Aトレンチ平面図および土層図(補注)

1.5mにわたって置土を行っており，その置土を除去した標高約50m前後から遺構の精査を行った。置土を除去したのちの基本層位は，上層から淡灰褐色砂質土（厚さ約10～20cm)，黒褐色粘質土(厚さ約10～25cm）であり，以下地山面となる。この基本層位は，Bトレンチでも同様であるが，Bトレンチの置土は厚さ約10cm認められる程度であり，また，淡灰褐色砂質土も薄く堆積しているにすぎず，極端なところではコンクリートを除去した段階で遺構面が検出できた。

b. Aトレンチの遺構

Aトレンチは，前述のように，推定南門と中心建物を区画する溝(SD153)の間にあるトレンチである。このAトレンチは，昭和54年度に解体された旧プールの設置されていた部分に近接し，また，第6次調査においてAトレンチの北側に設置



第35図　　Aトレンチ　SB33平面図

したトレンチでも攪乱部分が認められたため，今回の調査では遺構の検出はむずかしいと考えていたトレンチであるが，予想に反し，明瞭な遺構を検出した。検出した遺構は，土坑・溝状遺構のほか，性格の明らかなものとして，竪穴式住居跡(SB0761・SB0777)・掘立柱建物跡(SB0733)がある。

竪穴式住居跡(SB0761・SB0777)は，Aトレンチの東南隅で検出したもので，2基が重複してある。SB0761は，北辺と西辺の一部を検出したのみで，南側については排水溝および電柱が南に隣接していて拡張が不可能のため，竪穴式住居跡の規模は不明である(北辺では検出全長4.4mを測る)。SB0761の遺存状態は悪く，検出面から床面までは深さ約10cmを測る。床面では，周壁溝の北辺の一部が認められるのみで，西辺については確認できなかった。また柱穴も調査範囲が狭く不明である。SB0761内からは細片の土師器・須恵器が出土したが，時期を明確に示す遺物は出土しなかった。SB0777は，SB0761に切られた竪穴式住居跡である。SB0777は，SB0761と同様，全体は調査していないが，北側で一辺を確認したところでは，一辺約3.6mを測る隅丸方形の住居跡である。床面の遺存状況は悪く，検出面から床面までは約15cmを測る。床面の周壁溝は北辺および東辺で確認したが，西辺は確認できなかった。出土遺物は，SB0761と同様，土師器・須恵器の細片のみで，図化できる資料は少ない。

掘立柱建物跡(SB0733)は，Aトレンチの中央で検出したもので，南北2間×東西5間の建物と思われるが，西端の梁行部分が旧プールの建物基礎によって攪乱を受け不明である。SB0733の掘形は，一辺約0.8～1.2mの方形であり，柱穴の直径は確認した部分で約50cmを測る。各柱間は約2.4m(8尺)の等間隔である。出土遺物は，柱穴および掘形内から少量の土師器・須恵器・瓦片が出土した。このSB0733は，出土遺物・建物方位から第Ⅱ期の中心建物に関連した遺構と考えられる。

その他の遺構：Aトレンチでは竪穴式住居跡・掘立柱建物跡のほか，土坑・溝状遺構などを50か所以上検出したが，各遺構とも出土遺物が少なく，また不整形の遺構が多く，性格の明らかな遺構はなかった。

c. Bトレンチの遺構

Bトレンチは，中心建物群を構成する東北脇殿(SB12)の西北部にあたり，第6次調査の第6トレンチの南に隣接した部分に設けたもので，当初8m×8mのトレンチを設定したが，東・南については攪乱が著しく，最終的には遺構面が残っていたのは，東西約4.8m×南北約5.7mの小規模な範囲であった。

Bトレンチでは遺構検出面が浅く，機械によるコンクリートを除去した段階で遺構を検出した。Bトレンチで検出した遺構は，土坑(SK0702・SK0703・SK0704)・溝状遺構(SD0701)がある。

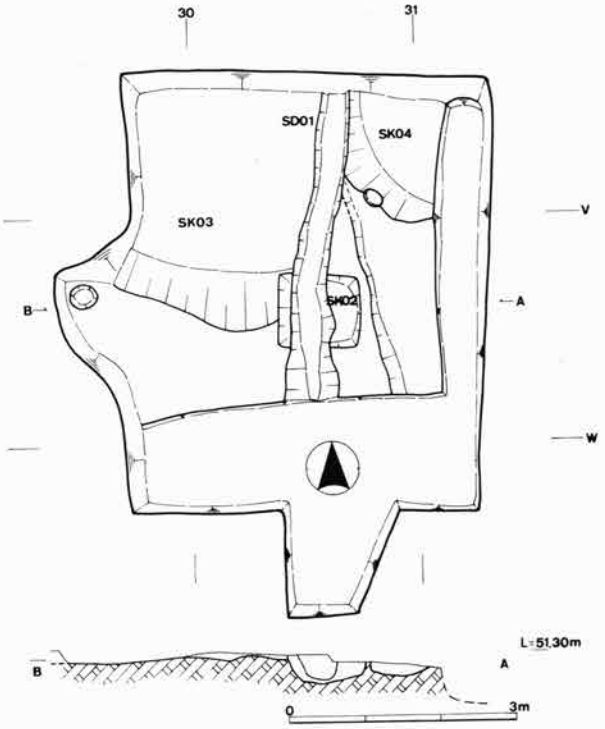
SK0702は，SD0701・SD0703を切る方形の土坑であり，当初建物の掘形を想定したが，柱穴がみつからず，底部も不整形であること，攪乱を受けていないトレンチの東側にSK

0702に関連した遺構がないことから，建物に関連した掘形とは考えられなかった。

SK0703・SK0704の土坑は，第6次調査で検出したSD0606と同一の遺構であり，宅地内の内溝(SD45)の延長部のSD0606の南肩を確認したことになる。

SD0701は，SK0702・SK0703・SK0704を切る南北方向の溝状遺構である。SD0701は上面幅約30～40cm・深さ約20cmを測り，断面は_/形を呈する。SD0701からは，平安時代前期の土師器・須恵器が出土した。

Bトレンチでは遺構の切り合いがあるにもかかわらず，各遺構は第Ⅱ期である平安前期に帰属する遺構と考えられる。



第36図　Bトレンチ遺構図
(紙面の関係上，第7次調査を示す上二ケタ07は省略)

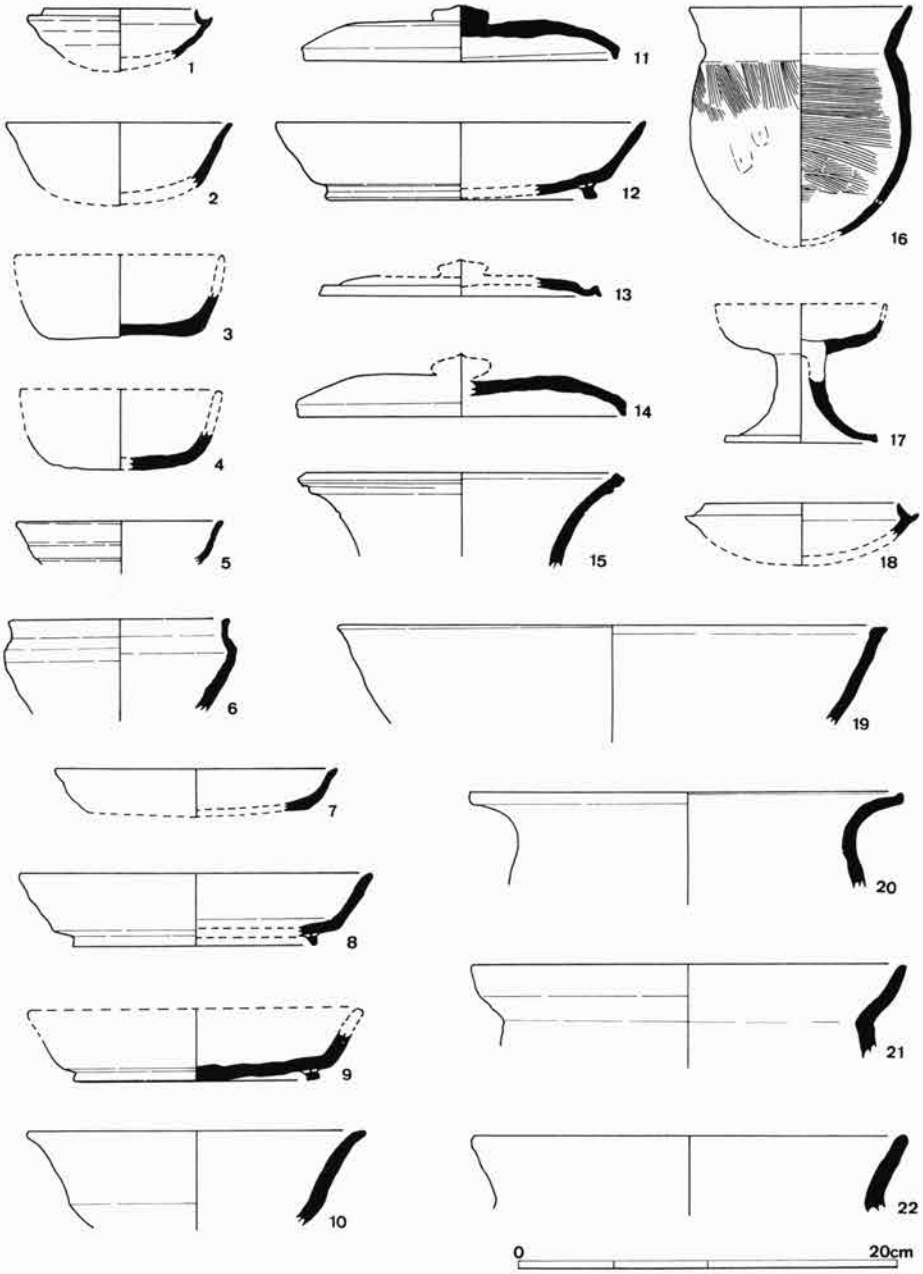
d. 出土遺物

今回の調査は，調査面積が狭く，また遺物を多量に含んだ遺構もなく，整理箱にして8箱程度の土器類・瓦類・石器類などが出土したのみである。

〔土器〕

各土器類・瓦類は細片がほとんどであり，また各遺物とも遺存状態はよくなかった。土器類は土師器・須恵器であり，図化しえたものはBトレンチSK0704のほかSK0703，AトレンチSK0770などがある。瓦類は平瓦・丸瓦の細片であり，SK0733の掘形内のほか，攪乱土中に混在して出土したものが大半である。このため，瓦類の説明は割愛し，土器類についてのみ遺構別でなく，器種ごとにその説明を簡単に記述する。

古墳時代後期の遺物は，黒褐色粘質土の整地層内(17)のほか，SK0704の平安時代の遺構内(1)，あるいは攪乱土内(15・18)から出土した。須恵器杯身(1・18)は，口径8.1cm(1)，10.2cm(18)と小さく，受け部の立ち上がりも短い。無蓋高杯(17)は，浅い椀状の杯

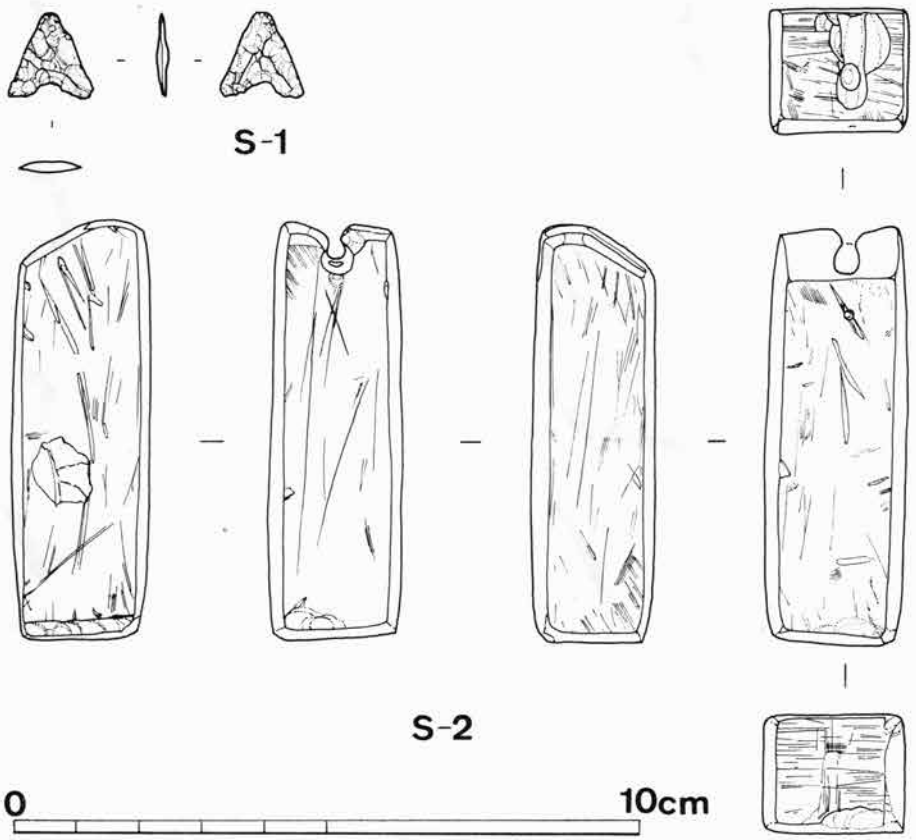


第37図　出土土器実測図

1～4・10；SK0704, 7；SK0728, 11・12；SK0770, 13；SK0722, 16；SK0756, 20；SK0703, 21；SK0766, 22；SK0737, 黒褐色粘質土内；5・6・8・17～19, 攪乱内；9・14・15

部から裾開きの脚部へ続くものである。壺(15)は，口縁部片で，口縁端部に2条の沈線がめぐる。

平安時代の遺物としては，SK0704のほか，SK0703・SK0728・SK0737・SB0761・SK0766・SK0770から細片の須恵器・土師器が出土している。土師器甕(16)は，口径11.4cm・推定器高12.5cmを測る小型甕である。体部外面の調整は，上半を縦方向のハケ，下半をヘラ削りののちナデ調整で仕上げるものである。体部内面は，底部近くまでを横方向のハケ調整で，底部のみナデ調整で仕上げ，底部には明瞭な接合痕が残る。須恵器杯A(2・3・4)は，丸みをおびた底部から斜め上方に立ち上がる口縁部へ続くもので，口縁部内・外面はロクロナデ，内底面はナデ，底部外面は不明瞭である。須恵器皿A(7)は浅い皿で，口縁部内・外面にはロクロナデ，須恵器杯B(8・9・12)は，底部と口縁部の屈曲部から内側に断面三角形(8)あるいは台形(9・12)のやや外方に踏んばった高台を貼り付けたものである。須恵器壺(6)は，肩部の張った体部から口縁部は短く直立ぎみに立ち上がる。口縁部内・外面は，ロクロナデ調整を施す。須恵器蓋(11・13・14)は平坦な天井部から口縁



第38図　石器実測図

部へ続き，天井部中央には扁平な宝珠形つまみを貼り付ける。10は，須恵器の杯あるいは高杯と思われる。19は，須恵器盤の口縁部片である。

〔石器〕

石器は，凹基鏃と砥石が1点ずつの計2点あり(第38図)，石鏃は13Y区の黒褐色粘質土内から，砥石はSB0761の竪穴式住居跡からそれぞれ出土している。石鏃は先端部をわずかに欠損し，残存長1.4cm・幅1.3cm・厚さ2mmを測る。風化が激しく，摩耗している。しかし，元来の剝離加工痕は全体に細かく，入念な仕上がりをみせる。基部の抉りは明瞭に入っている。石材はサヌカイトである。

砥石は，長さ6.6cm・幅2.2cm・厚さ1.9cmを測り，断面積がほぼ正方形の細長いものである。両先端を含む6面ともよく研磨され，艶やかなまでに滑らかである。幅1mm以下の微細な線条痕が，長短とりまぜてさまざまな方向に走っている。形態上の特徴として，鈍角で斜方向に下ろされた一方の先端部に，直径5mm程度の孔が穿たれていることがあげられる。石材によく厳選された軟質でしかも良質のシルト岩を用いていることとあわせ，実用品であるのか疑問である。副葬品や供献遺物としての性格を帯びたものとも言える。

4. ま　と　め

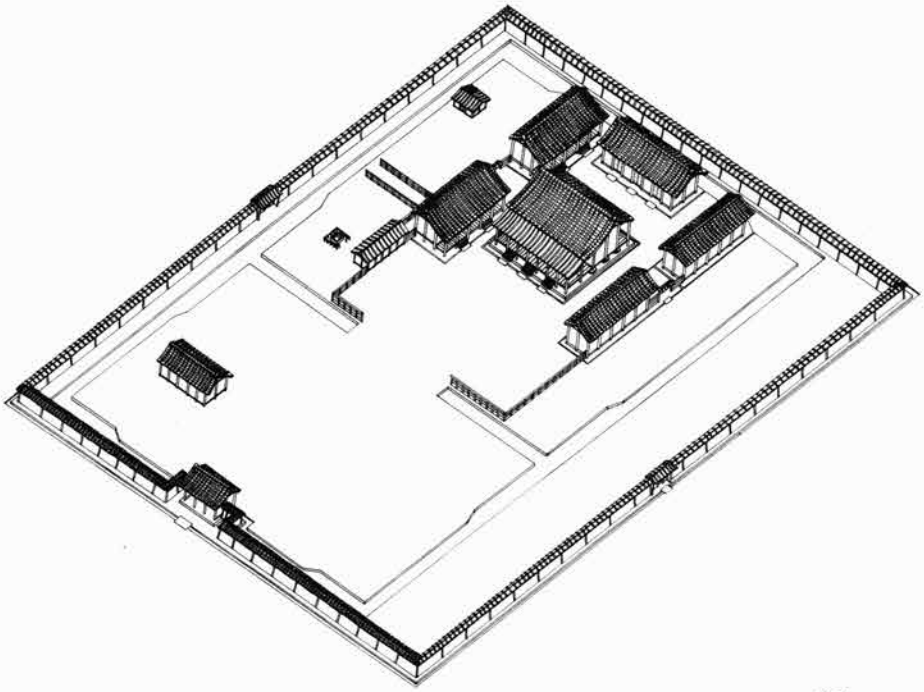
平安京右京一条三坊九町における第7次調査は，調査面積が狭く，また現代の攪乱が著しい部分の調査ではあったが，当初の予想に反し多大な成果をおさめた。

Aトレンチでは，第Ⅱ期に属する東西方向の掘立柱建物跡(SB0733)を検出し，第1次調査で検出した中心建物との関連が考えられる。このSB0733は，約2.4m(8尺)の等間隔に柱列が並び，掘形も1m前後と大きく，10尺等間の中心建物群には及ばないまでも，厨房区にあると考えられる桁行6尺等間×梁行7尺等間の建物(SB155)より規模は大きい。このSB0733の位置は，第1～第4次調査で検出した第Ⅱ期の建物配置でみると，九町の南半分で，推定南門と推定内門の中間よりやや南西寄りにある。SB155の東側柱筋・SB07の西側柱筋の延長線上に，SB0733の東より1間目の柱筋が揃い，その規格制が考えられる。

Aトレンチでは第Ⅱ期の遺構とともに，第Ⅰ期に属する竪穴式住居跡を2基検出した。第Ⅰ期の遺構については，第1次調査以降，竪穴式住居跡を検出しており，第Ⅰ期の集落の南への広がりが認められた。

Bトレンチでは，第6次調査で検出したSD0606と同一遺構であるSK0703を検出し，第1次・第3次調査で検出したSD45と合わせ，宅地内の内溝の延長線を明らかにした。

このように，今回の調査では調査面積が狭く，一部現代の攪乱が及んでいるにもかかわらず，各時期の遺構，特に第Ⅱ期に属するSB0733を検出したことは，九町の南半分の南



第39図　　九町Ⅱ期建物復原図（『昭和55年度発掘調査概要』より一部加筆・修正(注5)）

門と内門の間に整然とした建物群が予想でき，今後の調査に期待がもたれる。

（石井清司）

注1　平良泰久・石井清司・常盤井智行「平安京跡(右京一条三坊九町)昭和54年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-3)』，京都府教育委員会)　1980

注2　平良泰久・伊野近富・常盤井智行・杉本　宏・谷口智樹・村川俊明「平安京跡(右京一条三坊九・十町)昭和55年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-1)』京都府教育委員会)　1981

注3　補　助　員　福富　仁・平野仁佳子・駒沢啓二・重松麻里子・藤波　武・吉永和加

注4　山口　博「平安京跡右京一条三坊九町　昭和59年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第16冊，財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1985

注5　平良泰久「平安時代貴族の邸宅跡―平安京右京一条三坊九町―」(『月刊文化財』11)　1983において，『昭和55年度発掘調査概要』収録の「九町Ⅱ期建物復原図」の訂正を平良氏は考えておられ，それをもとに一部修正・加筆を行った。

補注　南壁土層埋土　1.現代の置土　2.淡灰褐色土　3.暗茶褐色土　4.黒褐色粘質土　5.黒褐色粘質土（4よりやや茶色味をおびる。SB61の埋土）　6.淡茶褐色粘質土　7.黄褐色粘質土　8.明茶褐色粘土　9.淡茶褐色粘質土

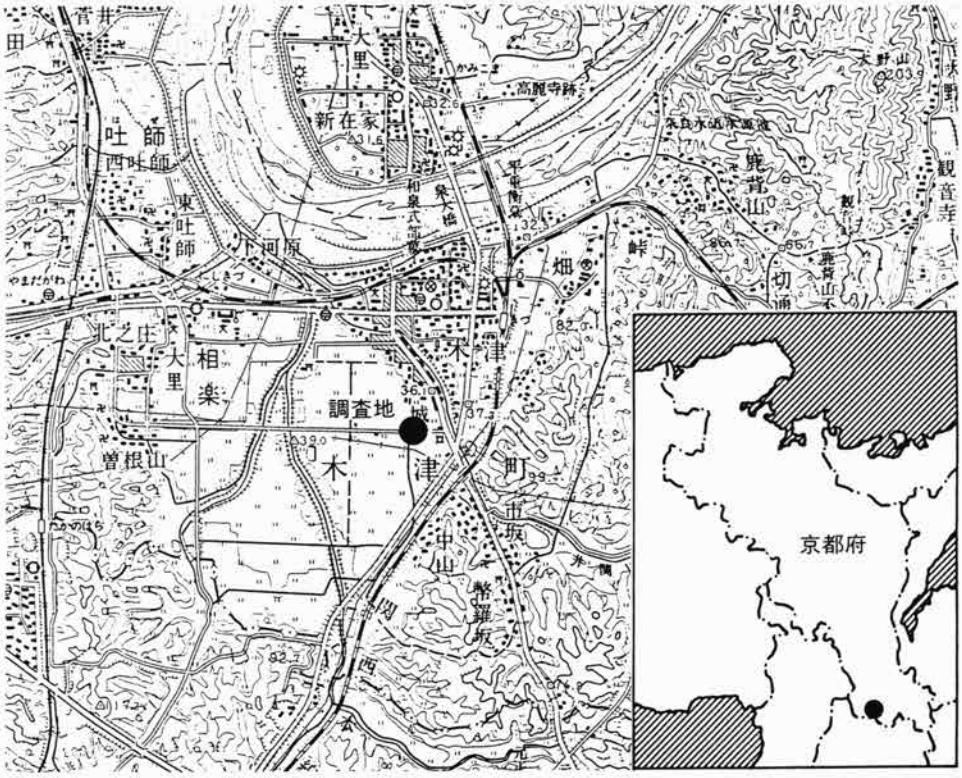
5. 八後遺跡・恭仁京跡(作り道)発掘調査概要

1. はじめに

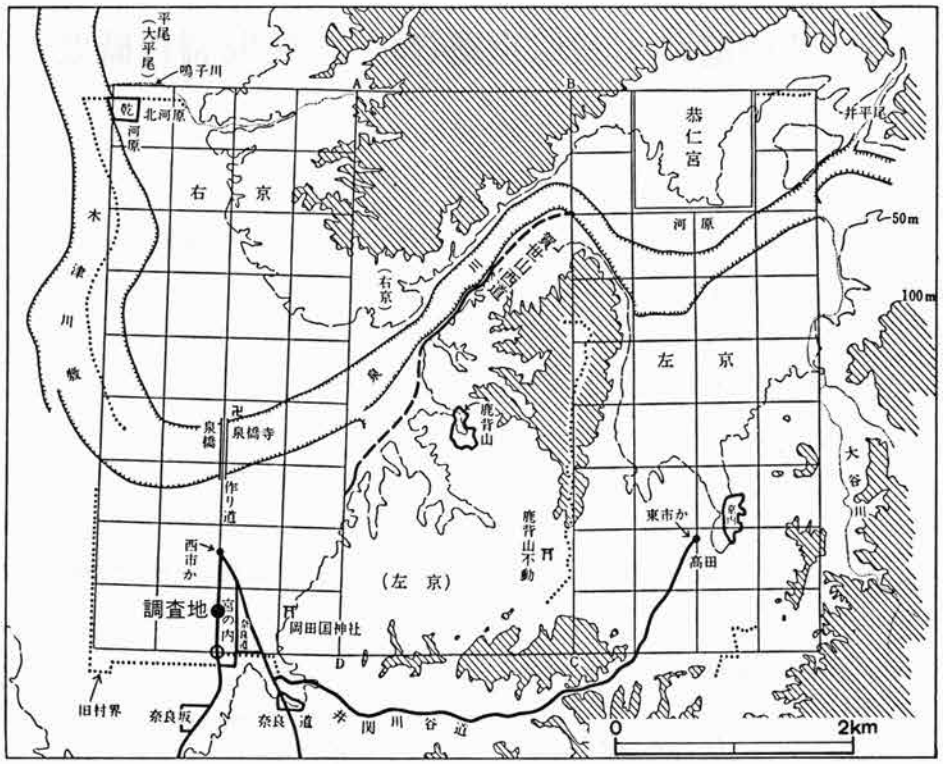
今回の恭仁京跡・八後遺跡の発掘調査地は，木津町平野部の中央部東側に位置し，字八後・宮の内地内に所在する(第40図)。八後遺跡は奈良時代の土器片の散布地として知られているが，その実態についてはよく知られていない。一方，恭仁京跡の作り道は，恭仁京右京域の南北中心線・計画道路として歴史地理学の立場から推定されている道路であり，今回初めて発掘調査を実施するものである。

今回の調査は，一般国道163号バイパスの建設に伴う事前調査で，建設省近畿地方建設局浪速国道工事事務所の依頼を受け，当調査研究センター調査第2課調査第3係係長小山雅人・主任調査員戸原和人・調査員岩松 保が担当した。遺跡内の開発対象地約2,200m²のうち約640m²の調査を行った。

現地調査は，昭和62年7月15日に着手し，まず試掘調査の形で，約300m²の調査を行っ



第40図　調査地位置図(1／50,000)



第41図　恭仁京域復原推定図
(上田正昭編『日本古代文化の探究都城』社会思想社 1976より加筆・転載)

た。その結果，南北方向の路面状遺構(Cトレンチ SF17)と北から約30°西へ振れる路面に伴う側溝(Bトレンチ SD07・SD04・SD08)が検出された。そのため，9月2日に当調査研究センターと京都府教育委員会，建設省近畿地方建設局浪速国道の三者で協議をした結果，試掘トレンチで検出した遺構の性状・形態を更に明確にするため，約340m²の拡張を行い，発掘調査を実施することとなった。拡張部は，9月8日から重機掘削にかかり，11月5日に現地作業はすべて終了した。発掘調査は約60日間を要した。

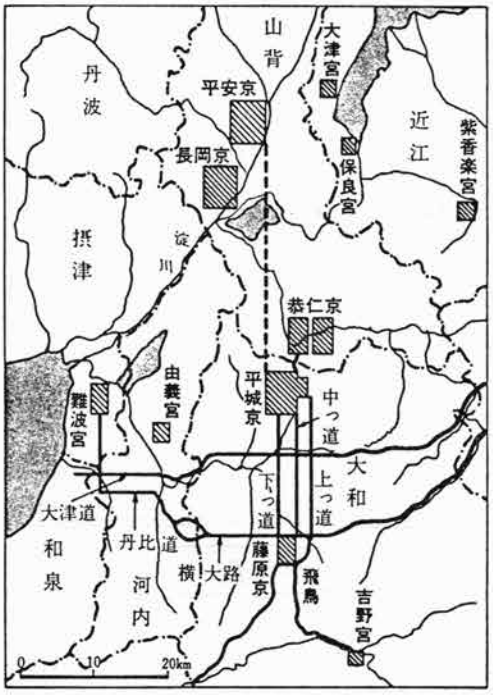
現地調査及び整理期間中には多くの方々の御助力・御援助をえた。ここに記して感謝の意に替えます。(注1)

なお，発掘調査に係る経費は，全額建設省近畿地方建設局が負担した。

2. 恭仁京と「作り道」

恭仁京は，746年から750年の間にわたって置かれた都であるが，都としては短命であり，史料の記載も少なく不明な部分が多い。宮域に関しては京都府教育委員会が昭和48年から

発掘調査を実施しており，その様相は徐々に判明しつつある。(注2) しかし，京域に限っていえば，発掘調査を実施した地点は少なく，しかも京に直接結びつく遺構の検出も皆無で，その規模・整備状況に関してはほとんどわかっていない。(注3) 唯一，木津町上津遺跡の第2次調査で検出された遺構群は，平城京の外港「泉津」に設営した官の施設と位置づけられており，同時に検出されたSD01は，東西総延長166mにわたって確認され，六条坊門路に近い位置を占める道路状地割の南側溝と推定されている。(注4)



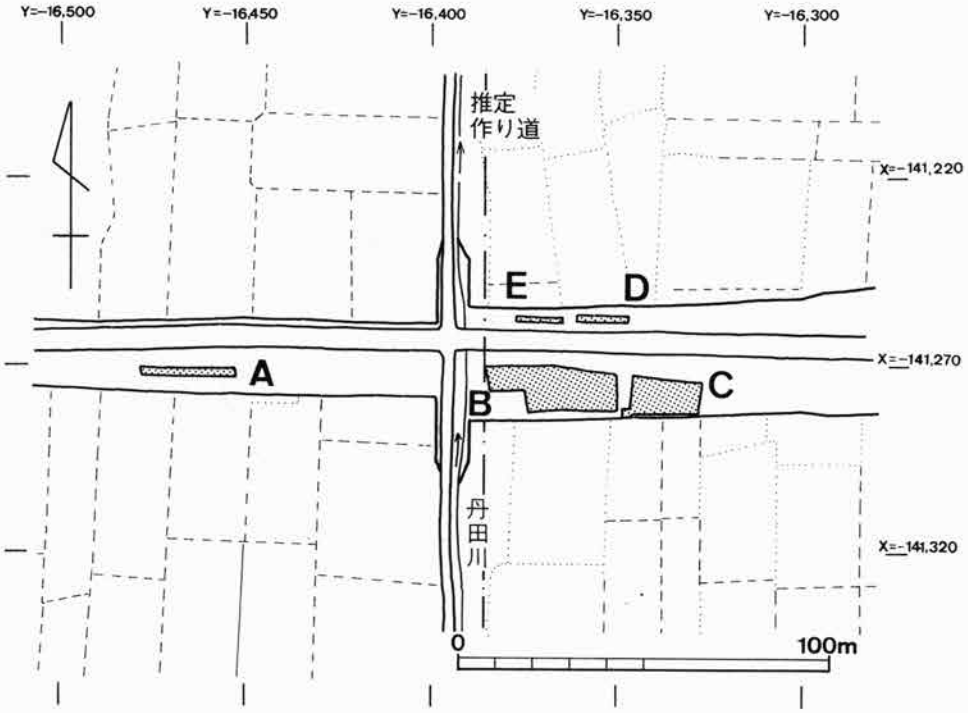
第42図　古代宮都位置図
(坪井清足編『古代を考える 宮都発掘』吉川弘文館1987 より転載)

『続日本紀』によると，聖武天皇は天平12(746)年12月に遷都の詔を発し，恭仁京の造京に着手している。13年条には「遷平城二市於恭仁京」，「班給京都百姓宅地従賀世山西道以東為左京」とあり，右京・左京を併せもつ都城が計画されたことがわかる。さらに，9月には「為供造宮差-潑大養徳河内摂津山城四国役夫五千五百人」，14年1月には「賜家入大宮百姓廿人爵一級，入都内者，无間男女並賞物」とあり，恭仁京・宮の造営は精力的に行われたことが推察される。しかし，遷都から3年後の15年12月には14年11月から行われていた紫香楽宮の造営のため国庫が逼迫し，このため恭仁宮の造作は停止された。翌年の閏1月には難波宮に天皇は遷り，2月には難波宮を都とする旨が発表された。

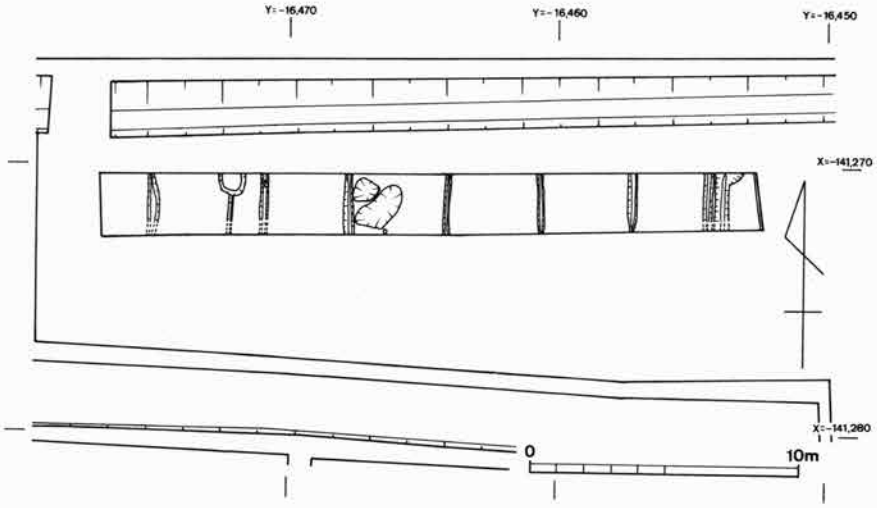
恭仁京域は，歴史地理学の立場で復元案が提示されている。現在通説化しているのは，足利健亮氏のものである。(注5) 足利氏の復元(第41図)は，現在の鹿背山の西麓に「賀世山西道」を設定することから始めた。そして，鹿背山の東側の加茂町に左京域を，西側の山城町・木津町に右京域を設定した。つまり，左京と右京が朱雀大路の両側で対面する通有の都城のあり方ではなく，左京・右京が低山地を挟む形態をとる。そうした京の形態の中で，「作り道」は，平城京四坊大路の北の延長線上に位置する南北道路で，右京域の中軸を設定した計画道路と復元している。この計画道路は，中ツ道の南北延長線上とも一致している(第42図)。「作り道」の名称は，山城町に現存する「東作り道」・「西作り道」の小アザ名より与

えたもので，丹田川の東に沿った南北に連なる幅10m内外の細長い水田面をそれに当てている。また，井関川谷道を右京・左京にそれぞれ設けられた東西両市を結ぶ古道と想定している。

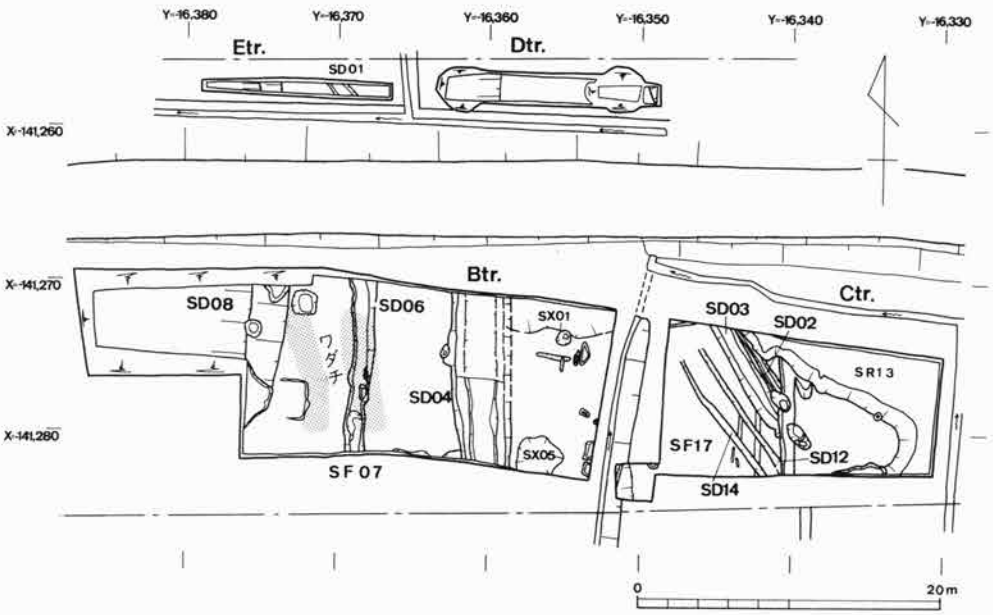
さらに，吉本昌弘氏(注6)は地形図の子細な検討から「作り道」を中心として，東西に幅84mの



第43図　調査トレンチ配置図



第44図　Aトレンチ検出遺構平面図



第45図　B～Eトレンチ主要遺構平面図

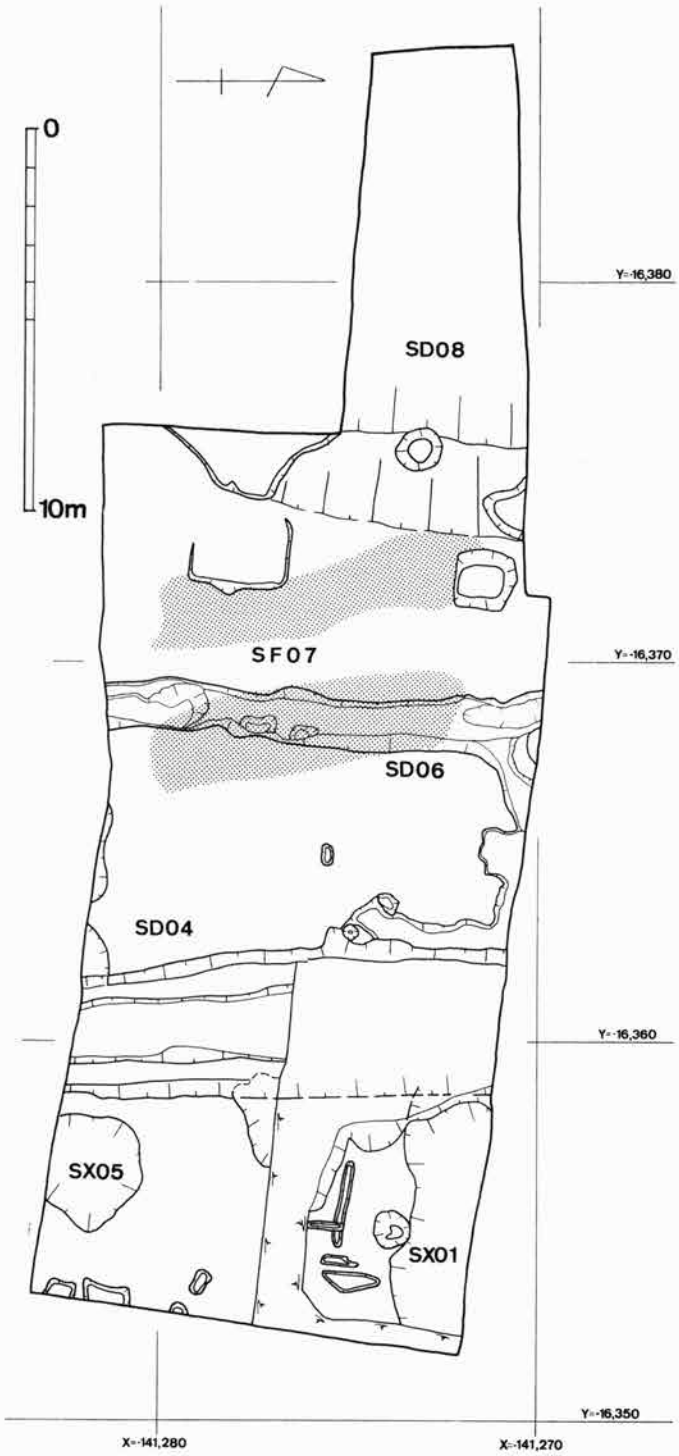
「余剰帯」を設定し，これを朱雀大路の痕跡としている。そして，足利氏の復元よりも35m西へ右京域をずらして復元した。千田稔氏(注7)は，この「作り道」を賀世山西道と同一視し，京域については左京・右京が「作り道」を挟んで相対する復元案を提示している。これらの案にあっても「作り道」を恭仁京の主要な南北道路に推定することに変わりなく，「作り道」は恭仁京を考える上で重要な位置を占めている。(注8)

木津町内には奈良時代に官衙・寺院の木屋所が設けられており，平城京の外港としての「泉津」をなしていた。陸上・河川交通及び交易の重要な地として，木津と平城京を結ぶ幹線道路が存在したことであろう。「作り道」は中ツ道の延長線上に位置していることから，この幹線道路である蓋然性は高く，と同時に奈良時代の北陸・東山道として利用されていたと考えられる。こうしたことから「作り道」は，恭仁京の右京域の計画道路であり，かつ奈良時代の交通・交易の主要な道に復元されている。

3. 調 査 概 要

調査は拡張後5本のトレンチを設定して行った(第43図)。トレンチにはA～Eのアルファベットを付してトレンチ名とした。以下，各トレンチ毎にその概要を報告する。

(1) **Aトレンチ**(第44図・図版第29-1)　現地表下約50cmで地山に達した。基本土層は，水田耕作土一明褐色土(床土)一黄色混灰色土一地山である。ここでは，南北方向の素掘り溝



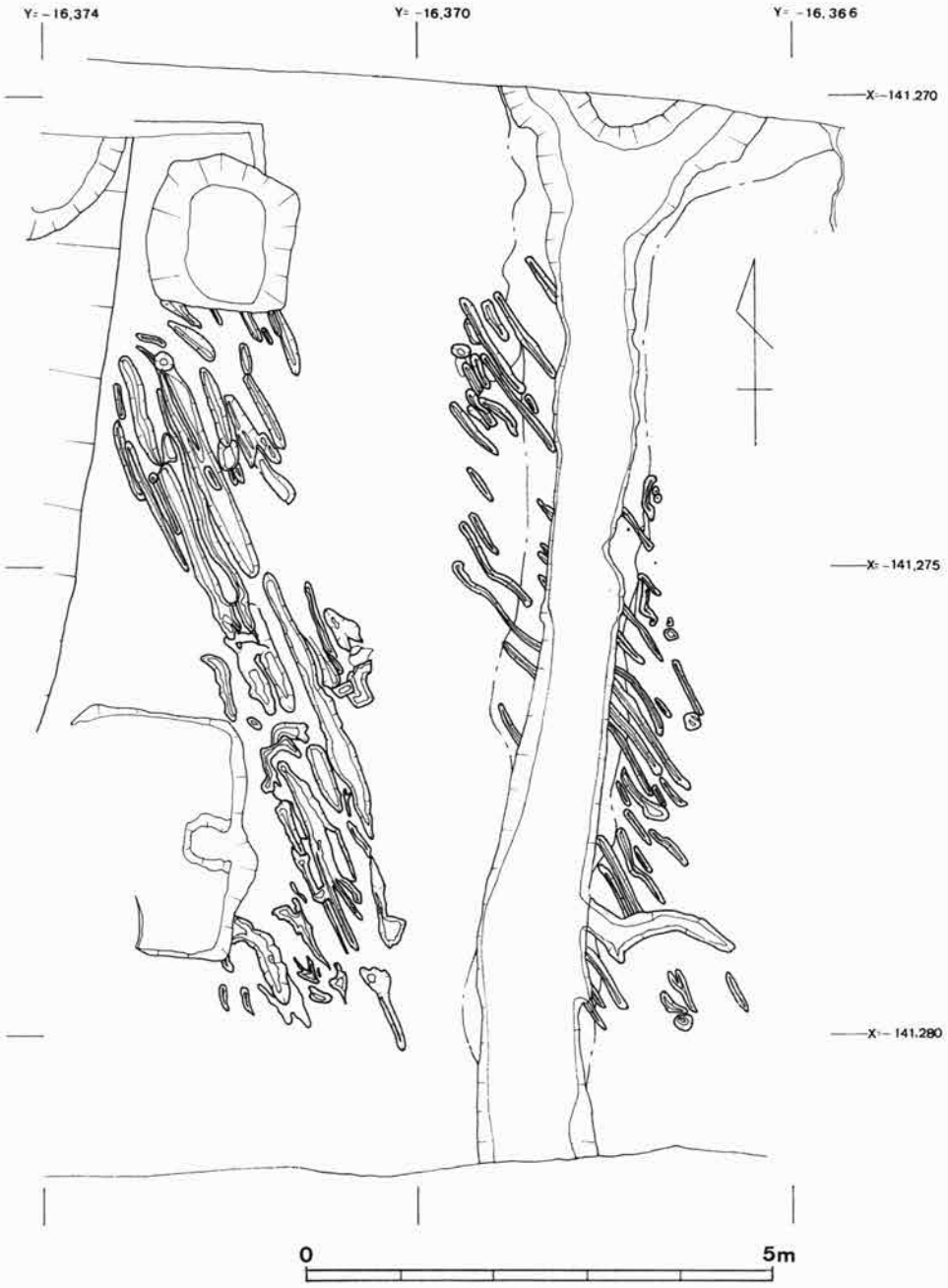
第46図　Bトレンチ検出遺構平面図

(幅約20cm)を9本以上確認した。これらの溝は，約3.8mの間隔で掘られている。検出面は地山直上であるが，出土土器から中世のものと判断する。

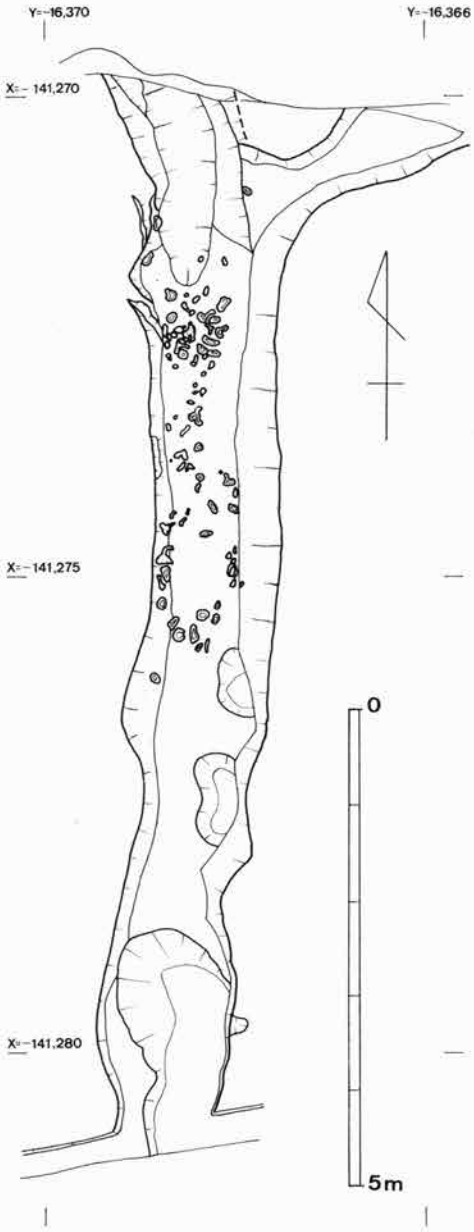
(2) **Bトレンチ**(第46図・図版第29-2) ほぼ南北に穿たれた3本の溝及び土坑等を確認・検出した。このトレンチの基本土層は，水田耕作土一明褐色土・茶褐色混灰色土(床土)一淡暗灰色土一黄色混淡灰色土一路面整地層一地山である。

SD04　幅2.9～3.7m・深さ0.3～0.4mである。狭い調査地ではあるが，調査地南半ではほぼ真北(第6座標系の北方位:以下同じ)を向き，北半でやや屈曲して約4度東に振れる方向を持つ。溝底に礫が固く締まっていた。遺物の出土はいたって少なく，底付近より布目瓦片，須恵器鉢(平安時代前期)が出土した(図版第30-1)。

路面遺構(SF07)　SD04・SD08によって画さ



第47図　Bトレンチ SF07検出轍跡平面実測図



第48図　Bトレンチ SD06内検出足跡

れた平坦面である。現在のSD08は，中世の掘削または改修になるもので，正確な路面幅はわからないが，確認した幅は，13.3m程度を測る。この路面は2層にわたって整地されており，下層が黄色混淡灰色土で，上層は黄色混黒褐色砂混土である。整地層の厚さは，約25cmを測る。上層の黄色混黒褐色砂混土は固く締まっており，この層が道路面と判断される。この中央部(SD06上面)とやや西よりで二群の轍跡・牛の足跡を検出した(第47図・図版第31-1・2)。黄色混灰色粘質砂土が埋土で，それを除去すると路面上に残された轍跡・牛の足跡を検出した。それぞれの群内ではその方向が一定しているが，群相互間では若干の方向のズレがある。路面上からは，須恵器小片が出土している。

SD06　幅1.3m・深さ0.3～0.6mを測る。方位は北より約4°東に振れる。調査地内では南下する傾斜を持ち，自然地形とは逆の傾斜を有する。埋土は，上から，黄色混灰白色粘質砂一黄色混淡灰色砂一黄色砂一黄色礫砂である。土層の観察では，路面遺構(SF17)の整地層を切り込んでおり，しかも，路面の黄色混黒褐色砂混土がこの溝の一部を覆っていた。これらのことから，SF17の整地→SD06の掘削(→埋め戻し)→SF17の供用という図式が成り立つ。この溝底の北半でも，多くの人・牛の足跡を検出した(第48図・図版第32-1・2)。溝の用途に関してはわからない。出土遺物は，須恵器・土師器の小片がある。

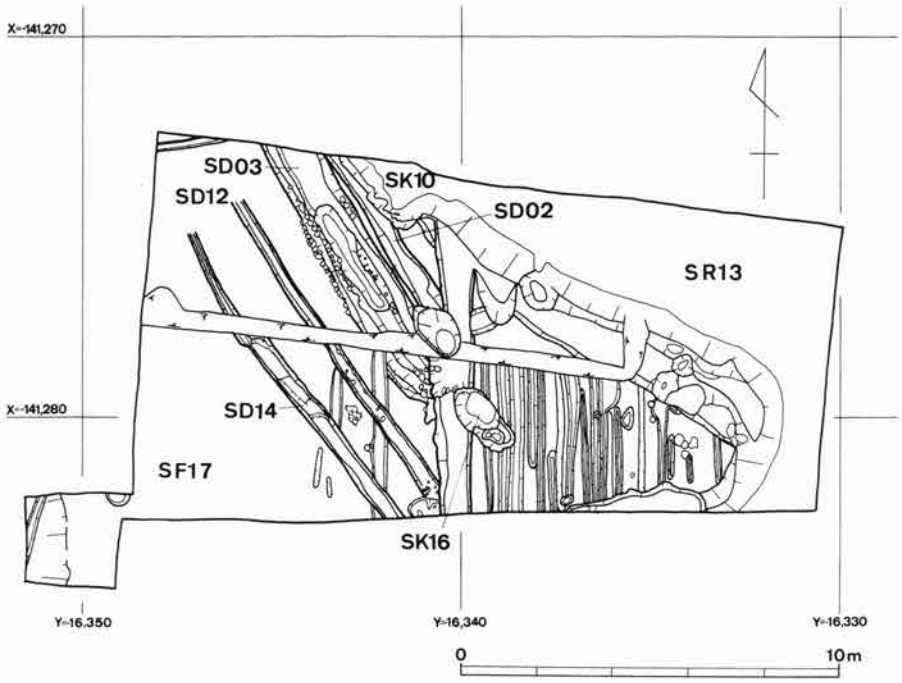
SD08　「作り道」跡に比定されている水田の真下で検出した大溝である。この溝は，緩やかに傾斜するためその肩は判然としないが，幅15m以上・深さ1.3m(路面上の平坦地からの深さ)を測る(図版第30-2)。この溝は，SF07上の轍・足跡の一部を削平している。調

査地内では北下する傾斜を持つ。規模・形状から，流路運河と考えられる。出土土器は，ほとんどないが，溝底付近から中世の土器片が出土している。

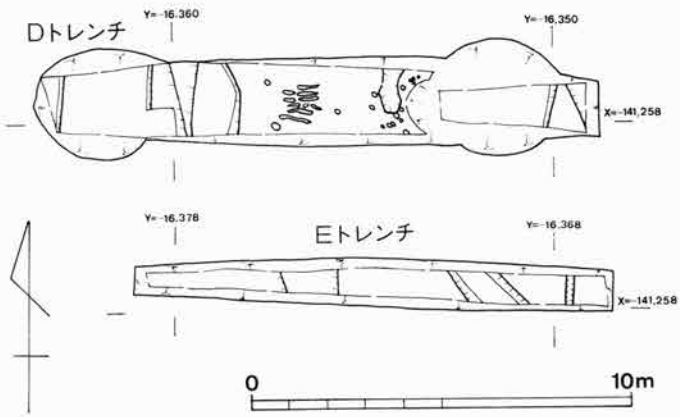
SD04の東側は，後世に削平されており，当時の遺構は検出されていない。土坑・素掘り溝等は，中・近世の時期と考えられる。

(2) **Cトレンチ**(第49図・図版第33-1・2)　このトレンチでの基本土層は，水田耕作土一明褐色砂混土(床土)一灰色砂混土(奈良時代)一地山である。西半では，近世の整地層である褐色粒混灰色土が堆積している。このトレンチでは灰色砂混土上面と地山面の2面で遺構を検出した。上面では水田に伴う排水路の跡を検出し，下面では，西半で路面遺構とそれに伴う轍跡・側溝，東半は中・近世の開墾により削平されており，検出した遺構は，流路・素掘り溝等である。

路面遺構(SF17)　東側をSD02，SD03で画された平坦面で，方向は，北より約30°西へ振れている。この面の上には轍跡(SD12・14)がある。西側は，中・近世の削平のため確認できなかった(図版第34-1)。この削平は，当地周辺の木津町東南部は，東南から北西に北下する傾斜を持つため，水利の管理を図って大きく水田の区画整理をした際のものである。土層の観察によると，盛土を最大60cmの厚さで行い路面を作っている。路面上からは，須恵器・瓦小片が出土している。



第49図　Cトレンチ検出遺構平面図



第50図　D・Eトレンチ検出遺構平面図

SD12・SD14　路面中央で1.6mの間隔を保ち平行する溝で，検出長9.8m・幅40～50cm・深さ20cmである。一定の間隔で平行することと，断面の形状が浅い皿状を呈していて，荷車が同じ所を何度も通ったもの一轍跡と推定される。これらの遺構の埋土から土師器・須恵器小片が出土している。

SD02・SD03　両溝は，SF17の東側を画する側溝であり，隣接・平行して検出した。SD02は，幅0.6m以上・深さ10cm，SD03は幅1.3m・深さ35cmを測り，その肩部に小ピット列を検出している(図版第34-2)。東側は，中世の開墾・近世の溝によって削平を受けている。

SK16　長軸2m・短軸90cmの土坑である。埋土から須恵器・土師器片が出土している。また，埋土は灰色砂礫土で，路面遺構直上の奈良時代の包含層と類似する。出土遺物からSF17と同時期のものと考える。

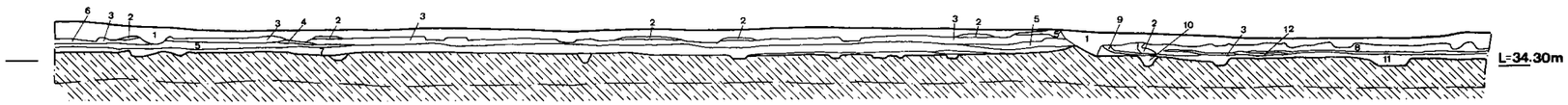
SR13　中世の素掘り溝を切って検出した。西北の隅には木枠で井戸(SK10)が設けられていた。出土遺物から近世のものといえる。

(4) Dトレンチ(第50図・図版第35-1)　SF17，BトレンチSD04の続きが検出されるものと期待された。基本土層は，水田耕作土一灰色土一地山である。トレンチの西で幅5m以上の溝状の落ち込み(高さ70cm)を検出した。この溝底の高さは，33.8m(標高：以下同じ)でSD04の33.9mと近似する。しかし，この溝状の落ち込みは，近世の土器片を出すこと，埋土が砂質であり，SD04の粘質土とは異なることから，同一のものではないと考える。Eトレンチの地山高が33.8mであるので，これにつづく「段差」と考えるのが妥当かも知れない。

SF17の検出高は，Cトレンチの南側で35.4m，北側で35.2mと南から北に傾斜する。Dトレンチ中央部の地山面は，34.4mと約0.8mの高低差があり，SF17の傾斜分より下がっている。Dトレンチのある地区は後世の削平をかなり受けているものと思われる。

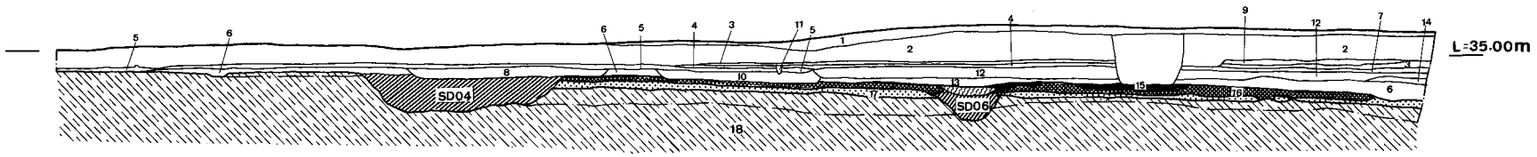
CトレンチのSR13の続きと考えられる落ち込みを東端で検出した。中央部では，小ピット・小溝を検出している。

Aトレンチ南壁土層図



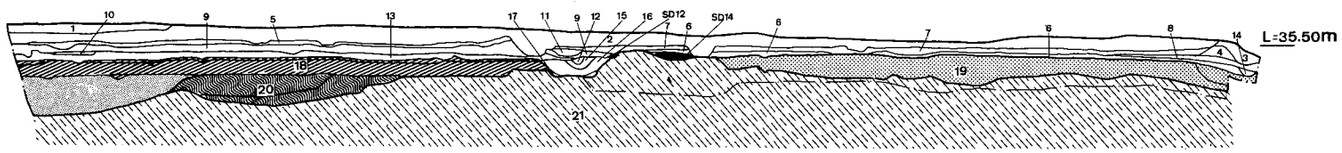
1. 水田耕作土
2. 灰色砂土
3. 明褐色土
4. 褐色混灰色砂土
5. 褐色混灰色土
6. 黄色混褐色砂
7. 黄褐色砂土
8. 明褐色粒多混灰色土
9. 黄褐色粘土
10. 白灰色粘質土
11. 黄色混灰白色土
12. 明褐色混暗灰色土

Bトレンチ南壁土層図



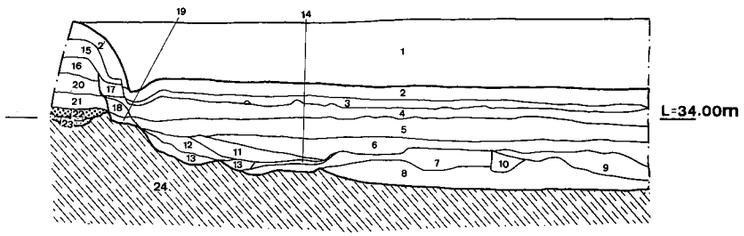
1. 置　土
2. 水田耕作土
3. 暗褐色土
4. 茶褐色混暗灰色土
5. 淡暗灰色土
6. 黄色混淡灰色土
7. 淡灰色土
8. 茶褐色混淡灰色砂土
9. 黄色混淡暗灰色砂土
10. 灰色砂土
11. 暗灰色土
12. 灰　色　土
13. 黄色混灰色土
14. 淡暗灰色土
15. 黄色混灰色粘質砂
16. 17. 路面整地
18. 地　山

Cトレンチ南壁土層図



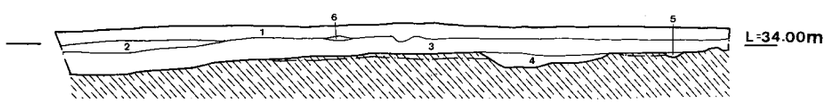
1. 置　土
2. 水田耕作土
3. 茶褐色土
4. 淡茶褐色土
5. 暗灰色砂土
6. 灰色砂混土
7. 明褐色砂混土
8. 黄褐色混淡灰色土
9. 黄褐色混灰色土
10. 褐色斑混淡灰色土
11. 白砂混黄色混淡灰色砂土
12. 灰色混褐色砂土
13. 灰色混黄褐色土
14. 淡灰色土
15. 淡灰色砂土
16. 黄褐色混灰色粘土
17. 茶褐色混灰色砂土
18. 近世整地(茶褐色斑混灰色土)
19. 路面整地
20. 砂礫層(奈良時代)
21. 地　山

Cトレンチ SD08内土層図



1. 盛　土
2. 水田耕作土
3. 褐色粒混淡灰色土
4. 黄褐色粘土
5. 青灰色粘土
6. 淡青灰色粘土
7. 淡青灰色砂
8. 淡青灰色粘質砂
9. 暗茶褐色粘土
10. 淡暗茶褐色粘質砂
11. 淡青灰色粘土混暗茶褐色粘質土
12. 褐色砂混暗茶褐色粘質土
13. 淡褐色砂混暗茶褐色粘土
14. 褐色礫混砂
15. 黄色混淡暗灰色砂土
16. 明褐色土
17. 黄色淡灰色土
18. 淡灰色粘質土
19. 黄白色砂混淡灰色粘土
20. 灰色土
21. 淡暗灰色土
23. 23. 路　面
24. 地　山

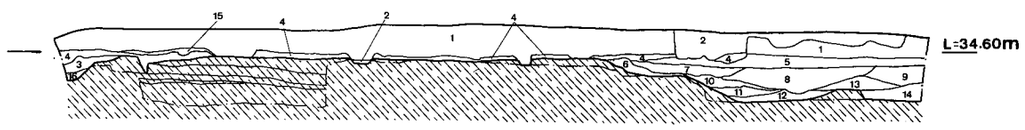
Eトレンチ北壁土層図



1. 水田耕作土
2. 褐色粒混青灰色砂土
3. 青灰色砂土
4. 淡灰色砂
5. 青灰色砂土(細)
6. 灰白色砂

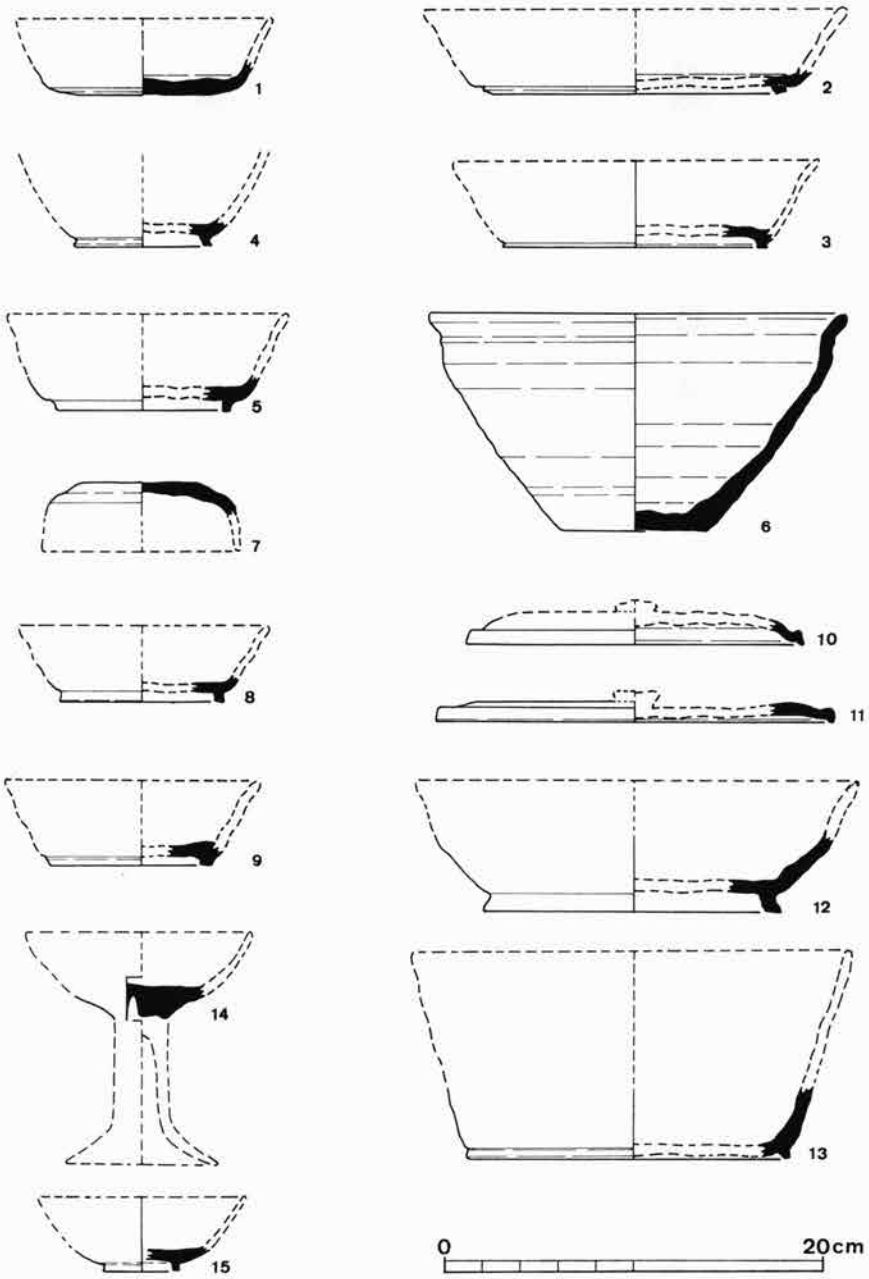
0　10m

Dトレンチ南壁土層図



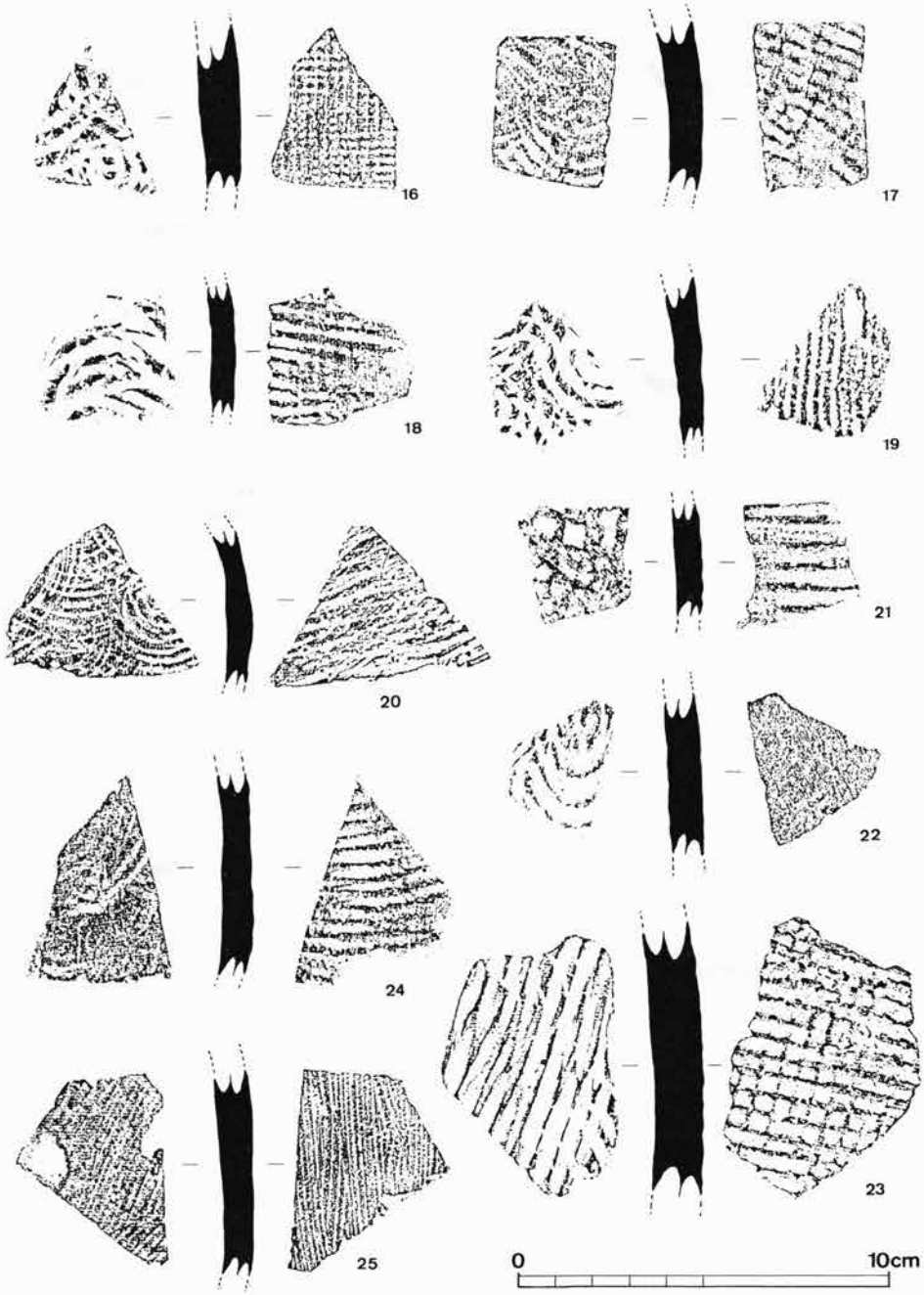
1. 水田耕作土
2. 攪 乱 土
3. 黄色混淡青灰色粘土
4. 灰 色 土
5. 暗灰色砂(やや粗い)
6. 黄色混褐色砂
7. 暗灰色砂(中粒砂)
8. 褐色混淡灰色砂
9. 黄色混淡暗灰色砂土
10. 黄褐色混淡青灰色砂
11. 淡青灰色砂
12. 灰色礫混砂
13. 淡灰色礫混砂
14. 淡青灰色粘土
15. 黒褐色粘質土
16. 青灰色粘土

第51図　各 ト レ ン チ 土 層 実 測 図



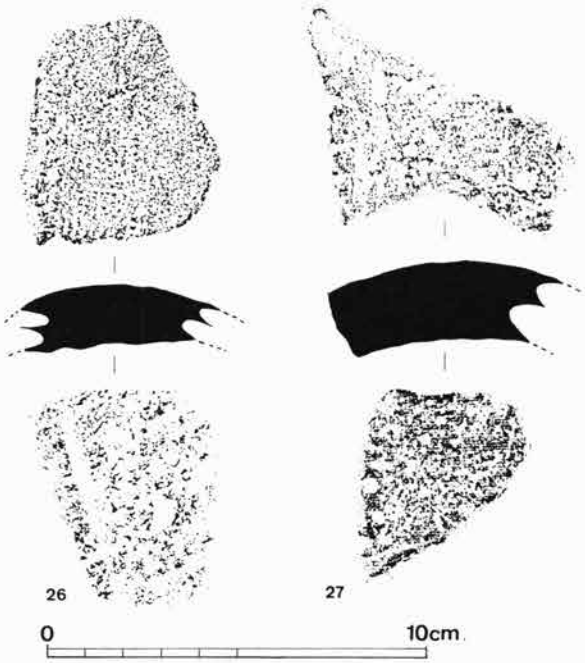
第52図　出土遺物実測図

（1～13：須恵器，14：土師器，15：中国製陶磁器）



第53図　出土遺物拓本－1
（16～25：須恵器甕）

(4) **Eトレンチ**(第50図・図版第35-2) このトレンチの基本土層は，水田耕作土一青灰色砂土一地山である。Dトレンチと同様，後世の開墾により，路面遺構(SF07)は，削平されていた。Eトレンチの中央部での地山高は33.8mで，SF07の路面高は，34.4mを測る。トレンチの西側で，緩やかに下る傾斜地を確認しており，BトレンチSD08の続きと考える。SD01内からは瓦器片が出土している。



第54図　出土遺物拓本—2 (26・27：瓦)

4. 出土遺物(第52・53・54図，図版第36)

出土遺物は，土器が大多数を占め，他に木片が数点出土した程度である。時代は，古墳時代から近世にいたるものである。出土量は，整理用コンテナ・バットにして約4箱分であるが，細片が多く，実測図におこせるものは僅少であった。また，実測しえないものについては，主だった布目瓦片・須恵器片の拓本を第53・54図に掲げる。

第52図1～3は，Aトレンチの地山直上の層から出土している。これらの層中からは中世の遺物も出土している。地山面付近では明確に分層できないが，奈良時代の土器のみが出土する。4・5は，Bトレンチ中央部の路面の直上付近で出土している。6は，BトレンチSD06の底面で検出した。SD06の最下層には礫層があり，その一部が掘り返されている中で検出した。産地や時期については不詳であるが，類例として亀岡市篠窯跡群西長尾5号窯(注9)や西播地方の那波乳母ケ懐3号窯(注10)のものが挙げられる。平安時代前期のものである。7から15は，Cトレンチで検出したものである。このうち，8は，SF17の路面上で，7・12は，その直上包含層である灰色砂混土層中から出土しており，SF17の使用時期の一端を示すものと考えられる。10・11は，ともにSK10から出土している。14は，SD03から出土している。9・13・15は，西半部の近世の整地層から出土しており，遺構の時期を示すものではないと判断される。須恵器類は大体，9世紀後半から奈良時代の間に収まると考えられる。

第53図16～25は，須恵器甕の体部片の拓本である。須恵器片は，包含層中から出土したものは多くあるが，ここではSF07・SF17に関わるもののみを抽出した。外面に平行叩きの痕跡が残るもの(17～21・24・25)，格子叩きが残るもの(16・23)，叩きをナデ消しているもの(22)がある。格子叩きが残るものは，細かいもの(16)と粗いもの(23)とがある。内面は，同心円・円弧叩きが大多数で，25は，内面もナデ消している。概ね，中村浩氏の編年で，Ⅲ型式3段階からⅣ型式の間に収まるものと判断する。(注11)

瓦類は，今回の調査では10数点出土しているが，すべて小破片で，摩耗も夥しく，詳述することは難しい。これらの瓦は，形状から軒瓦(軒平瓦か軒丸瓦かは不明)・丸瓦・平瓦などに分類され，奈良時代後期～江戸時代後半期の長期間のものといえる。ここで取り上げる3個体の丸瓦(第54図26・27，図版第36-2)は，いずれも路面側溝内から出土した。26は，凸面にきめ細かい縄目叩きを縦位に施し，凹面には布目痕が見られ，さらに布袋の継目痕までが明瞭についている。焼成は普通で，胎土は石英粒を含むものの緻密である。表面黒灰色を呈し，内面は灰白色である。27は，全体的に摩滅が顕著なため，内面にきめの粗い布目痕を観察できるに過ぎない。乳白色を呈し，焼成軟質で，胎土は極めて緻密である。図版36-2の28は，内外両面ともに青灰色をなす硬質の丸瓦小片で，凹面に細かい布目痕がみられ，凸面は，縦位の縄目叩きを施した後にていねいなヘラナデ調整で仕上げている。側端面は，一回の面取りを行う。胎土は，27に類似する。これら3点の丸瓦片は，小破片で，摩耗が著しいため，年代の決め手に欠くが，大概，奈良時代後半期を相前後する時期に比定して大過なかろう。　(岩松　保・松井忠春)

5. ま　と　め

Aトレンチでは残念ながら顕著な遺構は確認できなかった。しかし，出土遺物から奈良時代の遺構が周辺に包蔵されていることは間違いない。

今回の調査地のB・Cトレンチでは奈良時代に遡る路面遺構が二条確認できた。Cトレンチで検出した路面遺構は，北から西へ約30°の振れをもって設けられている。この道を南に延長すると，東西両市を結ぶ「井関川谷道」と一致する。東西両市が平城京から移された記事や，遷都に関して市人に意見を聴収したことが『続日本紀』に記載されている。実際として，両市を結ぶ道があったものと思われる。SF17はこの「井関川谷道」である可能性がある。

一方，SF07は，歴史地理学の立場で考えられている恭仁京右京中軸線の推定「作り道」(中ツ道)に極めて隣接して検出された。足利氏の復原案によると，右京域は約3°東に振れるものとされているが，SF07の軸線の方位はこれに近似する。SF07を恭仁京の「作り道」

と断言する資料は，調査面積が少ないこともあり，残念ながら今回の調査では確認できなかった。このことについては，京域の整備状況を木津町・山城町域での発掘調査に期待したい。ただ，その使用時期と位置関係から最低限いえることは，SF07が奈良時代の主要幹線の一つであって，いわば，「木津一平城線」(=「中ツ道」)とも言えることであろう。以下，このことに関して若干の考えをまとめておきたい。

付表2　出土遺物観察表

須恵器・土師器・磁器（第52図，図版第36-1）

遺物番号	器種	法量(cm) 器径	法量(cm) 器高	残存率	出土地点	胎土	焼成	色調	調整 外面	調整 内面	備考
1	須恵器 杯身		1.5		Aトレンチ 黄色混淡灰色土	密	良	青灰色	ヘラケズリ 指ナデ	指ナデ	
2		高台 15.0	1.3		Aトレンチ 褐色混灰色土	密	良	外・青灰色 内・淡青灰色	ヘラケズリ	指ナデ	貼付高台
3		高台 14.0	1.2		Aトレンチ 褐色混灰色土	密	良	外・青灰色 内・淡青灰色	ヘラケズリ 指ナデ	指ナデ	貼付高台
4	須恵器 壺	高台 7.2	1.5		Bトレンチ 黄色混淡灰色土	密	良	青灰色	ヘラケズリ 指ナデ	指ナデ	貼付高台
5	須恵器 杯身	高台 9.0	1.35		Bトレンチ 黄色混淡灰色土	密	良	青灰色	ヘラケズリ	指ナデ	貼付高台
6	須恵器 鉢	口縁 21.8	11.4	1:5	Bトレンチ SD04	密	良	青灰色	ヘラケズリ 指ナデ	指ナデ 指おさえ	
7	須恵器 杯蓋		1.7		Cトレンチ 灰色砂混土	ヤヤ密	良	青灰色	ヘラケズリ 指ナデ	指ナデ	
8	須恵器 杯身	高台 8.7	1.4		Cトレンチ SF17 路面上	密	良	青灰色	ヘラケズリ 指ナデ	指ナデ	貼付高台
9		高台 8.5	1.2		Cトレンチ 茶褐色斑混灰色土	密	良	青灰色	ヘラケズリ 指ナデ	指ナデ	貼付高台
10	須恵器 杯蓋	口縁 17.7	1.9		Cトレンチ SK10	密	良	青灰色	指ナデ	指ナデ	
11		口縁 21.0	1.0		Cトレンチ SK10	ヤヤ密	良	淡青灰色	指ナデ	指ナデ	
12	須恵器 杯身	高台 15.7	4.6		Cトレンチ 灰色砂混土	密	良	淡青灰色	ヘラケズリ 指ナデ	指ナデ	貼付高台
13		高台 17.0	3.7		Cトレンチ 茶褐色斑混灰色土	ヤヤ密	軟	淡茶色	摩滅	摩滅	貼付高台 生焼け
14	土師器 高杯	不明	1.8		Cトレンチ SD03	密	軟	淡茶褐色	指ナデ	指ナデ	
15	白磁椀	高 4.0	1.25		Cトレンチ	密	良	乳白色			削出高台

須恵器・丸瓦拓本（第53・54図，図版第36-2）

遺物番号	器種	法量(cm)	厚み	出土地点	胎土	焼成	色調	調整 外面	調整 内面
16	須恵器甕	4.3×3.5	1.1	Bトレンチ　SD06	密	良	灰褐色	格子目タタキ	同心円タタキ
17		4.5×3.0	0.9	Bトレンチ　SD06	密	良	灰褐色	格子目タタキ	同心円タタキ
18		4.0×3.5	0.6	Bトレンチ黄色混灰色粘質砂	密	良	淡灰色	格子目タタキ	同心円タタキ
19		4.5×3.5	0.8	Bトレンチ黄色混灰色粘質砂	密	良	淡灰色	平行タタキ	同心円タタキ
20		6.0×4.2	0.7	Bトレンチ黄色混灰色粘質砂	密	良	青灰色	平行タタキ	同心円タタキ
21		3.0×2.5	0.7	Bトレンチ　SD04	密	良	淡青灰色	平行タタキ	タタキ
22		4.0×3.5	0.9	Bトレンチ　黄色混灰色土	密	良	淡青灰色	タタキのちナデ消し	同心円タタキ
23		7.0×5.0	1.4	Bトレンチ　SD04最上層	密	良	淡青灰色	格子目タタキ	平行タタキ
24		5.5×3.5	0.8	Cトレンチ 茶褐色斑混灰色土	密	良	淡青灰色	平行タタキ	タタキ ナデ
25		6.0×5.0	0.9	Cトレンチ　SD06	密	良	淡青灰色	ハケ	ハケ
26	丸瓦	6.0×5.0	1.5	Bトレンチ　SD04最下層	粗	軟	上面黒 下面灰色	摩滅	摩滅
27		6.5×6.3	2.2	Bトレンチ　SD06	粗	軟	淡灰色	摩滅	摩滅
28		4.0×2.9	1.9	Bトレンチ　SD06	密	良	淡青灰色	ナデ	布目

足利健亮氏が「作り道」に復原した「狭長な帯状地状」(注12)は，「道路かことによると人工的な水路の遺構ではないかとの印象を得たのである」と感想を述べた上で，道路と判断して「作り道」の跡とした。しかし，概述のようにこの直下ではBトレンチSD08を検出した。この流路は，Eトレンチでもその肩の一部が確認されている。また，現地住民の話では，調査地の北方約200mの地点に，防火槽を設けたとき地表下約2～3mのところから石塔片が出たとのことで，この流路が北に続いて行くことは間違いない。そうすると，「作り道」に復原した「狭長な帯状地状」は，足利氏が同論文中で指摘するもう一つの可能性―「堀川」の跡となろう。

SD08では，肩部底付近で中世の土器が出土しており，SF07の年代観とは大きく異なる。土層の観察では，SD08は，SD07をほぼ直に切って掘り込んでいるが，その直前でSF07の路面がわずかに傾斜し始めていて，SF07に本来的に伴う溝の存在を窺わせる。平城京朱雀大路下の下ツ道の運河側の傾斜は，緩やかに始まり段を持って下るものであり，(注13) SD08に先行する側溝―運河状の「堀川」があったものと推測できる。翻って，先行する「堀川」があった故に，中世においてSD08として再掘削・改修がなされたものと考える。

中山修一氏は木津から平城に運ぶ米を18万石，牛車1往復／日，積載量2石／台，1年300日稼働として1日300輌の車の往来を計算した。(注14) これ以外の物資一京・寺の建材，各国からの貢納等を考えると，その運搬にかかった車両の数はこの比ではない。(注15) この膨大な物資を運搬するのにSF07=「中ツ道」が供用されていたといえる。加えて，大量輸送を可能にするために運河を掘削し，そこに船を浮かべて物資を運んだのであろう。さらに，万葉集巻1の「藤原京の役の民の作れる歌」では，藤原京建設のために建材を運搬した経路が記されている。これによると，藤原京への材木の運搬に木津町を経由したことは間違いない。この藤原京への建材の運搬にもこの道が利用されていたのかもしれない。

従来不明であった推定恭仁京域で，その時代の関連遺構と判断できうる遺構を検出したことは，今後の京域内での発掘調査に期待したい。　(岩松　保)

注1　現地調査中には多くの方々の御教示を得た(敬称略)。
原口正三・都出比呂志・高橋誠一・堤圭三郎・高橋美久二・奥村清一郎・久保哲正・長谷川達・森　浩一・鈴木重治・辰巳和弘・波多野徹・松本秀人・毛利光俊彦・岩井照芳・二滝泰輔・木津の文化と緑を守る会
現地調査・整理作業には多くの方々の参加を得た(敬称略)。
鈴村祐司・吉川啓太・井上直樹・中井英策・湯浅研史・鎌田敏史・斉藤和久・佐藤正之・橋本錦児・藤本忠嗣・江　介也・中西　修・齊部麻矢・野村道江・木村絹子・辻　道子・神山久子・野田侑記子・西川悦子・山尾　摂ほか。

注2　狩野　久・横田拓実・今泉隆雄「恭仁宮跡昭和48年度調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会)　1974
中谷雅治・安藤信策・上原真人他「恭仁宮跡昭和49年度～61年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会)　1975～1987
中谷雅治「恭仁京(紫香楽宮・保良宮・由義宮)」(坪井清足編『古代を考える　宮都発掘』吉川弘文館　1987)　に簡潔に紹介してある。

注3　木津町の推定恭仁京右京域内の発掘調査報告は次のものがある。
平良泰久・山田繁蔵他「上津遺跡Ⅰ」(『木津町埋蔵文化財調査報告書』第1集　木津町教育委員会)　1977
平良泰久・奥村清一郎「相楽遺跡」(『木津町埋蔵文化財調査報告書』第1集　木津町教育委員会)　1977
奥村清一郎『上津遺跡Ⅱ　木津町埋蔵文化財調査報告書』第2集　木津町教育委員会)　1978
平良泰久・奥村清一郎「上津遺跡第2次発掘調査概報」(『木津町埋蔵文化財調査報告書』第3集　木津町教育委員会)　1980
大槻真純「木津遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第2冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1982
小山雅人「木津遺跡第4次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第20冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1986

注4　平良泰久・奥村清一郎「上津遺跡第2次発掘調査概報」(『木津町埋蔵文化財調査報告書』第3集　木津町教育委員会)　1980

注5　足利健亮「恭仁京の歴史地理学的研究，第一報――現景観の観察・測定にもとづく朝堂院・内

裏・宮域および右京『作り道』考一」(『史林』52巻3号)　1969
足利健亮『日本古代地理研究』大明堂　1985
注6　吉本昌弘「恭仁京の条里地割について」(『歴史地理学』第110号)　1980. 9
注7　千田　稔「都城選地の景観を視る」(岸俊男編『日本の古代第9巻　都城の生態』中央公論社)　1987
注8　他に「上津遺跡第2次発掘調査概報」の中で奥村清一郎氏の復原案がある。
注9　水谷寿克・石井清司『京都府遺跡調査報告書』第2冊　篠窯跡群Ⅰ　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　1984
注10　西播地方の那波乳母ケ懐3号窯の資料に関しては，森内秀造「平安時代の窯業生産一播磨地方の須恵器生産を中心に一」(『北山茂夫追悼　日本史学論集　歴史における政治と民衆』日本史論叢会刊　1986. 1)　を参考。
注11　中村　浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房　1982
注12　注4に同じ
注13　『平城京朱雀大路発掘調査報告』奈良国立文化財研究所　1982
注14　中山修一「長岡京から平安京へ一交通と地形一」(上田正昭編『日本古代文化の探求　都城』社会思想社)　1976
注15　平城宮の諸官衙の建物の木材量はおよそ75,000立方メートルと坪井清足氏の算定がある。　八賀　晋「都城造営の技術」(上田正昭編『日本古代文化の探求　都城』社会思想社)　1976

6. 京奈バイパス関係遺跡(南稲八妻城跡)昭和62年度発掘調査概要

1. はじめに

本報告は，昭和62年度における京奈バイパス道路建設に伴う発掘調査の概要である。

京奈バイパス関係遺跡の試掘および発掘調査は，日本道路公団の依頼を受け，昭和59年度から毎年行ってきた。南山城地方の城陽市から精華町に至る総延長19.6kmの路線帯に含まれる遺跡の調査で，これらには古墳・集落跡・城館跡などがある。

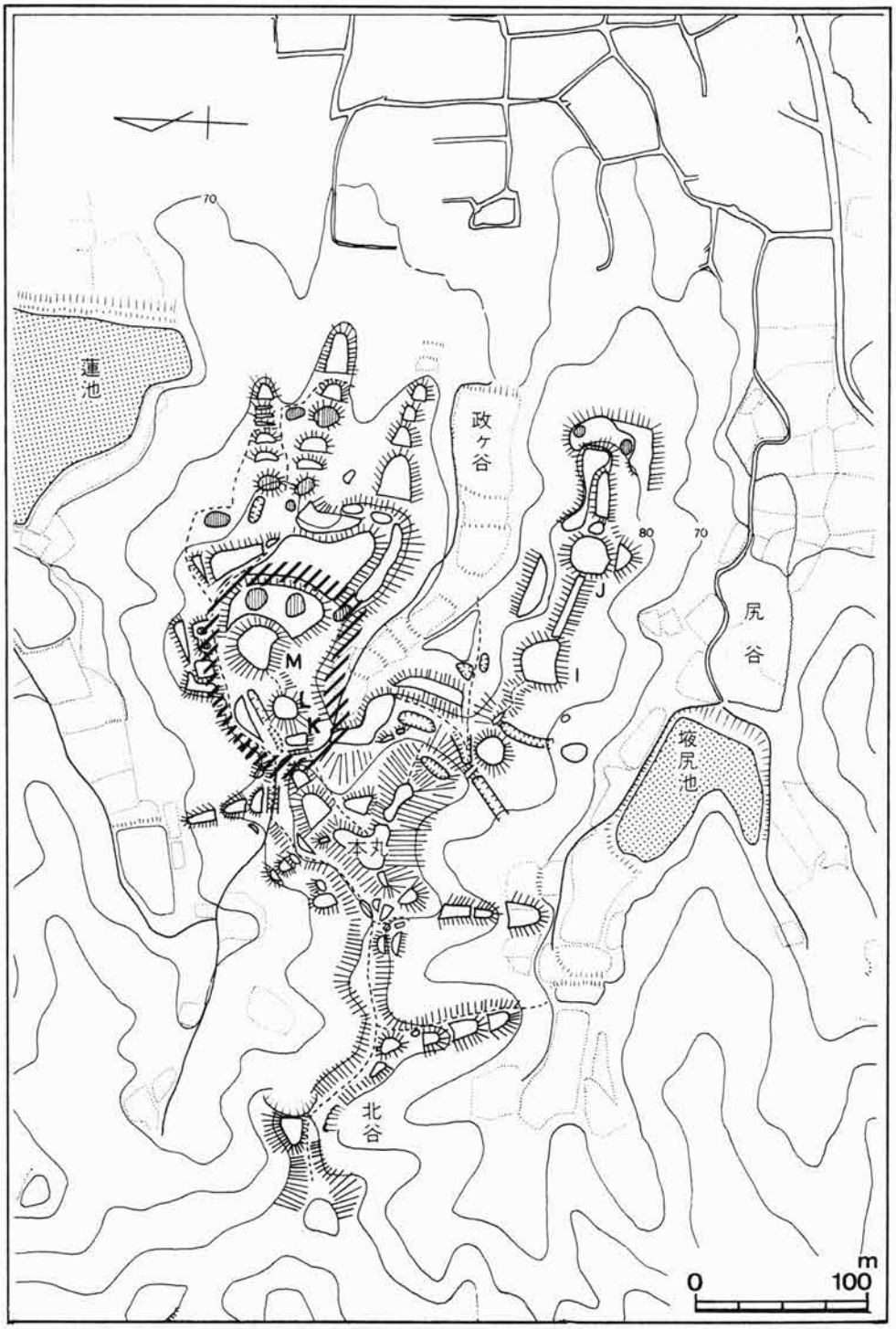
本年度調査したのは，相楽郡精華町南稲八妻に所在し室町時代の連郭式山城とされる推定南稲八妻城館跡のみである(第55図)。調査期間は，昭和62年5月6日から同年7月26日までである。現地調査は，調査第2課調査第3係長小山雅人と同係調査員黒坪一樹が担当した。調査期間中は，日本道路公団大阪建設局京奈バイパス工事事務所・京都府教育委員会・精華町教育委員会の協力をいただき，学生諸氏や地元の方々からも有形無形の援助を受けた(注1)。特に今回の調査では，南稲八妻城館跡についての論考(注2)を発表されている奥田裕之氏から有意義な御教示を受けた。この山城の成立した地理的背景や規模・構造，さらに掘削の方法などについても熱心な助言をいただいた。調査の結果，奥田氏の見解とは逆に，A地点(注3)と同様，B地点でも山城の痕跡を窺わせるものはなく，大きな成果は得られなかった。しかし，本丸部を含む周辺地区の地理学・考古学的調査は，将来とも重要であることに変わりはない。今回は推定南稲八妻城跡(第56図)のK・L・M郭を包括するB地点について，実際のトレンチ内での状況を中心に報告するものである。今後の課題としてとり組まなければならない点は多く，山城跡の発掘調査の難しさを痛感した次第である。

なお，本調査に係る経費は，全額日本道路公団大阪建設局が負担した。

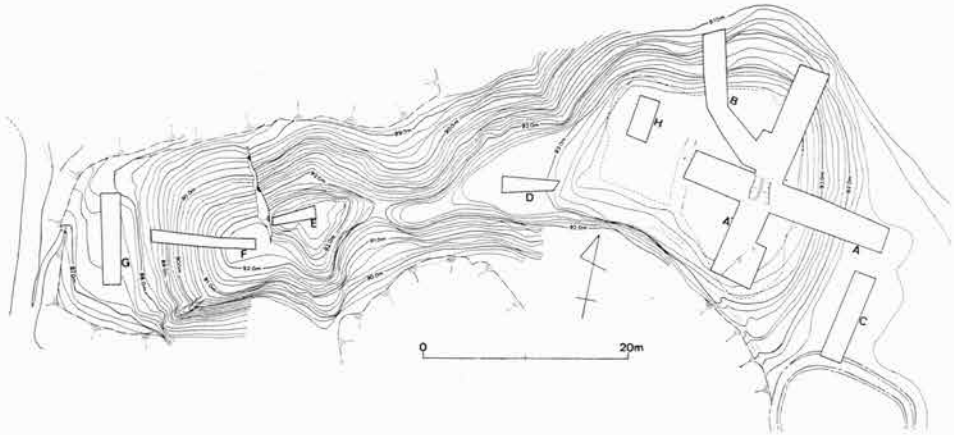
第55図　調査地位置図(1/50,000)

2. 調査の経過

B地点の調査は，昨年度にひき続くもので，すでにA・H・Gの各トレンチは掘削済みであった(H・Gトレンチは，それぞれ



第56図　南稲八妻城跡平面図（原図は奥田氏作成1981）

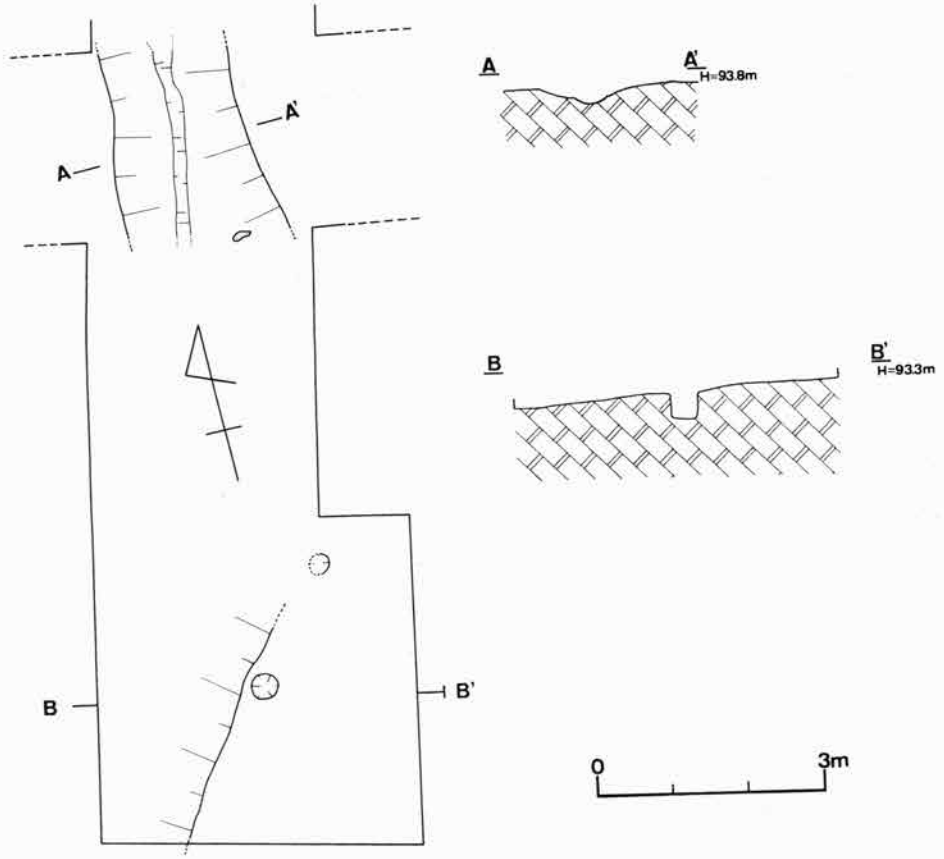


第57図　B地点トレンチ配置図

B・Cトレンチとしてすでに報告(注4)。3つのトレンチのうち，Aトレンチの上位で黄褐色粘質土の地山面から掘り込まれた溝状遺構を一条検出していた。今回，この溝状遺構を城館に関するものと予想し，これの続き具合を調査することに一つの主眼を置いた。したがって，この溝状遺構を含めてAトレンチに直交するトレンチ(A′トレンチ)をまず設定した。続いてK・L・Mという3つの郭が想定されている平坦部および斜面，郭と郭をつなぐ尾根筋などにトレンチを入れた(第56・57図)。トレンチ数は前年度のものを含め合計9本で，調査面積は約300m²となった。調査前の測量・写真撮影を行った後，すべて人力で掘削を開始した。掘削の結果，標高約95mを測る最も高位のA・A′トレンチから，黄褐色粘質土の地山が地表下約10～15cmで露出した。耕作土直下が地山であるという状況は，Cトレンチを除くすべてのトレンチで確認された。地山の土砂質は，上の平坦地では黄褐色粘質土・赤褐色砂粒であり，斜面地および尾根筋部では赤褐色風化礫・黄白色砂礫の層である。いずれも非常に堅くしまった層で，特に礫を含む層は岩盤質であった。B・Fトレンチの斜面から裾部にかけて，わずかに質の違う層の重なりが観察されたが，いずれも地山中の質の差によるものであり，人為的になされたものではないと判断した。土塁や横堀の痕跡もなかった。

東西方向に続くものと考えていた溝状遺構は，A′トレンチに明瞭な痕跡をとどめず，後世の削平を受けたようである。A′トレンチでは，西端部で2基の柱穴状遺構を検出した。

さらに，Cトレンチ西端には，溜池(空)の堤が土塁状を呈していた。この堤部分も削り，土層断面を調べた。淡赤褐色系粘質土の重なりを観察したが，防禦用土塁とするには，いささか低くかつ堅固さを欠くものであった。各トレンチの写真撮影・遺構実測を行った後に埋め戻し，作業を終了した。



第58図　検出遺構実測図（A・A'トレンチ）

3. 遺構と遺物

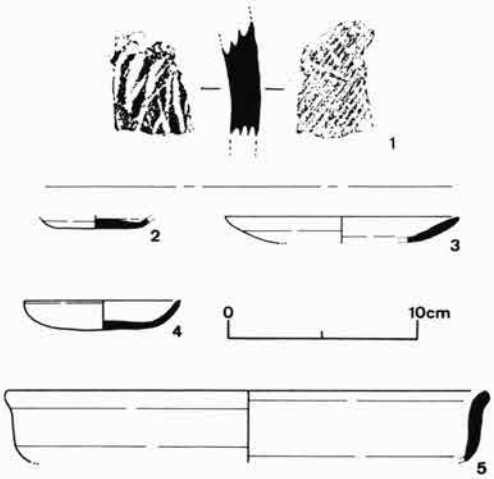
今回検出した遺構は，A・A′トレンチからの溝状遺構および柱穴状の土坑である(第58図)。溝状遺構は，幅約2m・深さ約30cmを測り，およそトレンチ幅の2.5m分検出している。溝の埋土は，黄褐色粘質土である。遺物は出土せず，形の整った花崗岩の自然石が1点あったのみである。いかなる目的の溝であるかはわからない。

柱穴状の土坑は2基ある。直径は，それぞれ30cmと35cmを測る。黄白色粘土を埋土とし，深さはどちらも約40cmである。表土層直下から掘り込まれている。遺物は出土せず，有機質を帯びた自然遺物や炭・焼土などもまったくなかった。筒状に垂直に掘られている。新しい時期のものであろうか。

出土遺物は，A・C両トレンチからのものである(第59図)。量的に極めて少ない。1は，須恵器甕の破片である。裏面の青海波文痕は明瞭に残っている。2～4は土師器質皿である。完形品は4のみである。4の口径は，8.2cmを測る。3点とも手づくね成形による。

2・3は，口縁と底部をそれぞれ欠損する。これら土師器質皿の所属時期は，形態的特徴からみて，16世紀後半から17世紀初頭くらいに位置されるようである。(注5)

5は，土師器質の鍋形土器である。口縁端部が外反する。表裏面ともナデ成形を施す。胎土・焼成は精良かつ堅緻なものと言える。口径は推定25cmを測る。



第59図　出土遺物実測図(1のみ1/2)

4. ま　と　め

今回の調査では，推定南稲八妻城館跡の三つの郭とされるK・L・M郭(奥田1981)にトレンチを入れた。その結果，A・A′トレンチ上位平坦部から，溝状遺構一条と柱穴状土坑を2基検出した。両方の遺構内から遺物の出土はみられず，城館跡に伴う施設とするには無理がある。他のトレンチでは主に表土直下で地山面が露出した。全体に出土遺物は，僅少であり，細片で不明なものを除き，ことごとく稲八妻城の成立年代とそぐわないものであった。先の奥田氏の見解は，南稲八妻城の範囲全体をながめた場合，確かに傾聴に値する貴重な視点が盛り込まれているようである。特に空堀や土塁らしき遺構を備える本丸・見張台などのか所については，なお慎重に対処すべきである。今回の限られた調査範囲からは少なくとも山城と積極的に断定する証拠は得られなかったとしておきたい。

(黒坪一樹)

注1　調査補助員　佐藤正之・長田康平
　　調査協力者　穎娃ちか子・梶本真由美・地上松一・白川つる子

注2　奥田裕之「山城国南稲八妻城と守護所について——京都府相楽郡精華町南稲八妻の山城跡の検討一」(『桃山歴史・地理』18　京都教育大学史学会)　1981.4

注3　黒坪一樹「京奈バイパス関係遺跡昭和61年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第24冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1987

注4　同上

注5　伊野近富「かわらけ考」(『京都府埋蔵文化財論集』第1集　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1987

7. シゲツ窯跡・シゲツ墳墓群発掘調査概要

1. はじめに

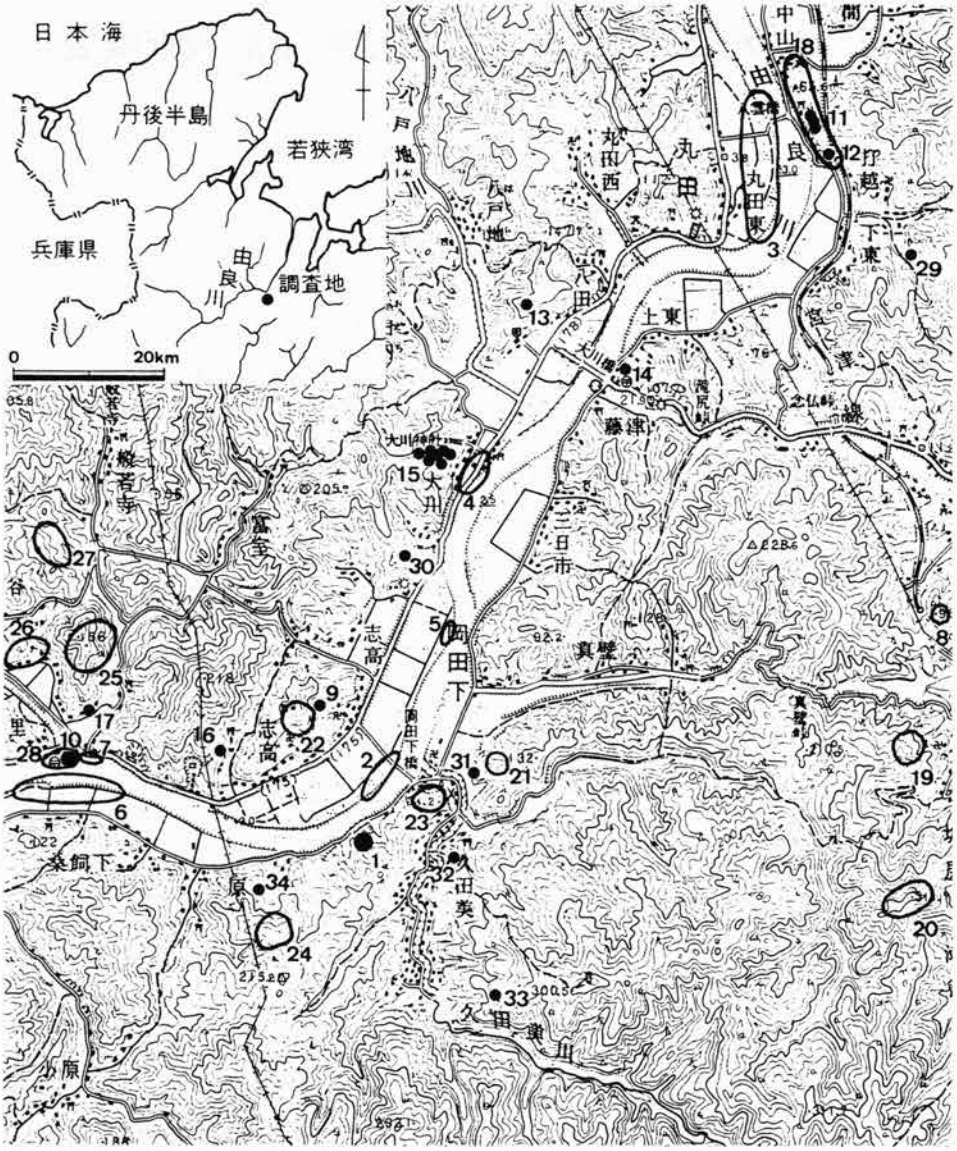
シゲツ窯跡・シゲツ墳墓群は，舞鶴市字志高に所在し，由良川右岸の丘陵上に立地する7世紀後半の須恵器窯跡および弥生時代後期から古墳時代前期にかけての墳墓群である。今回，京都府土木建築部の行う府道舞鶴福知山線の道路改良工事が行われることになった。このため同土木建築部の依頼により，当調査研究センターは文化庁長官あてにシゲツ窯跡として発掘届を提出し，シゲツ窯跡(1号窯)の発掘調査と周辺の試掘調査を行った。現地調査は，調査第2課調査第1係長辻本和美・同調査員肥後弘幸が担当した。遺構・遺物の撮影は，調査第1課資料係調査員田中彰及び肥後が行った。調査期間は昭和62年9月21日から昭和63年1月21日まで，調査面積は約240m^{2}である。本概要報告は，2を岸岡貴英，4(2)を田中史生，その他を肥後が執筆した。遺構・遺物等のトレースは，荒堀裕巳が行った。今回試掘調査で新たに確認した墳墓群は，周知の遺跡であるシゲツ遺跡の一部と考えられるが，その性格上シゲツ墳墓群と称して扱うことにした。なお，調査にあたっては，舞鶴市教育委員会，舞鶴市史編纂室，京都府教育委員会，京都府立丹後郷土資料館，京都府中丹教育局，京都府舞鶴地方振興局，志高地区，久田美地区の方々等のご協力を得た。また，多くの方々に作業員・調査補助員・整理員として参加していただいた。(注1) くわえて，多くの方々にご指導・ご助言いただいた。(注2) 記して感謝の意を表します。

なお，本調査に係る経費は，京都府土木建築部が負担した。

2. 位置と環境(第60図)

シゲツ窯跡・シゲツ墳墓群は，由良川の河口から約11kmの下流域右岸に立地する。由良川を挟んで対岸には，縄文時代前期から江戸時代に至る複合集落遺跡である志高遺跡が存在する。

由良川は，京都府北桑田郡美山町に源を発する全長146kmの近畿北部最大の河川である。その中流域においては，河谷平野の発達を見るものの，下流域においては，狭い谷部を大きく蛇行して流れ，日本海に注ぐまで沖積平野の発達を見ない。下流域では，たびたび繰り返される洪水による海抜6～7mの自然堤防を形成し，丘陵性山地の山麓に接する。このため，古代においては，集落の立地を川沿いの自然堤防上にしか求めることができなかった点に由良川下流域の集落形成の特色がある。



第60図　　シゲツ窯・シゲツ墳墓群の位置と周辺の遺跡（1/50,000）

生産遺跡　1. シゲツ窯　8. 城屋窯　9. 志高炭鉱跡
自然堤防上の集落遺跡　2. 志高遺跡　3. 八雲遺跡　4. 大川遺跡　5. 花ノ木遺跡　6. 桑飼下遺跡　7. 岡田由里遺跡
丘陵上の墳墓遺跡（古墳時代以前）　1. シゲツ墳墓群　10. 水無月山遺跡
古墳　11. 中山1～3号墳　12. 打越古墳　13. 八田古墳　14. 藤津古墳　15. 徹光山古墳群　16. 薬師谷古墳　17. 枝宮古墳
城館・山城　18. 中山城　19. 城屋城　20. 城屋別城　21. 土穴城　22. 志高城　23. 久田美城　24. 原城　25. 荒張城　26. 岡田由里砦　27. 岡田由里城　28. 水無月山城
その他の遺跡　29. 宝篋印塔　30. 小津田経塚　31. 久田美遺跡　32. 林渓寺裏山中世墓　33. 宝篋印塔　34. 五輪塔

由良川下流域の遺跡

ここで，周辺の遺跡を概観してみる。前述したように由良川下流域においては，居住域は古代においては，たびたび洪水にみまわれる自然堤防上に限られる。墓域は，弥生時代後期以降，集落から隔絶して，周辺の丘陵地に広がっていくようすがうかがえる。

縄文時代の遺物は，由良川河床から多く出土しており，遺跡数はかなりの数を数えることができる。今まで発掘調査が行われているのは，桑飼下遺跡(注3)・三河宮の下遺跡(注4)・志高遺跡(注5)の3か所である。桑飼下遺跡では，縄文時代後期の炉跡48基をはじめとする集落が検出されている。特筆すべき遺物としては，約600点にのぼる打製石斧があげられる。三河宮ノ下遺跡では，縄文時代後期の住居跡が検出され丹後で類例のない土偶の頭部が出土している。志高遺跡では，縄文時代早期末から前期及び後期の遺構・遺物が見つかっている。前期においては，炉跡4基をはじめとする遺構および100箱にもおよぶ遺物が出土しており，非常に興味深い資料である。

弥生時代においては，Ⅰ様式新段階以降いくつかの集落が自然堤防上に営まれていたようである。やはり由良川の河床から遺物が多く採集されている。弥生時代の遺跡で著名なものとしては，中期に一大集落を形成したと考えられる志高遺跡があげられる。志高遺跡では，多数の円形住居からなる居住域と，方形周溝墓群・貼石墓からなる2つの墓域が確認されている。中期の集落内からは，銅剣形石剣が多数出土している。なお，志高遺跡には場所を変えて後期集落も存在する。

下流域における中期の集落の検出例は現在のところ志高遺跡に限定されるが，後期になると，大川・桑飼上にも集落が営まれ，墓域は水無月山遺跡等(注6)，丘陵上へと墓域が移っていくようである。水無月山遺跡は，由良川を望む独立丘陵上に営まれた後期前半の墳墓群である。この墳墓群は，区画等一切持たない土坑墓群から構成されている。

古墳時代の集落遺跡は，現在，志高遺跡・花ノ木遺跡・桑飼下遺跡・桑飼上遺跡・三河宮の下遺跡・高川原遺跡等(注7)で見つかっている。また，古墳も由良川を望む丘陵上で確認され，現在行われている舞鶴市の踏査で，その数は数倍に増加しそうである。

奈良時代の遺跡としては，志高遺跡・桑飼下遺跡・大川遺跡(注8)・桑飼上遺跡等が確認されており，掘立柱建物跡等の遺構が検出されている。

平安時代以降の遺跡は，経塚以外に顕著なものが見られないが，中世の山城が現在の各集落に伴って点在している。

北丹波地域の須恵器生産

北丹波地域とは，旧丹後国加佐郡および旧丹波国天田・何鹿両郡をさす。現在，北丹波地域で確認されている須恵器窯は，14窯におよぶ。このうち発掘調査が行われているのは，

今回のシゲツ窯だけである。この地域の研究は，現在表採資料を中心に行われているのが現状である。(注9)

この地域最古の窯は，福知山市賀茂野窯である。この窯の操業年代は，6世紀前葉～7世紀初頭と推定される。この賀茂野窯は，小規模ではあるが府下では園部窯跡群に次ぐ古い生産地であり，須恵器生産の地方への波及をさぐる上で重要な窯である。他に古墳時代にさかのぼるものに綾部市西原窯がある。6世紀後半～奈良時代に操業され，一時期瓦陶兼用の窯も操業していたようである。

天田郡夜久野町夜久野末窯跡群は，いくつかの支群からなる40基以上の窯が分布し，篠窯跡群と並ぶ京都府下最大の窯跡群である。生産の初現は，7世紀中葉までさかのぼることが判明しているが，年代推定できる大部分の資料から考えると，8世紀～9世紀前葉にかけて急激な拡大をみせるようである。

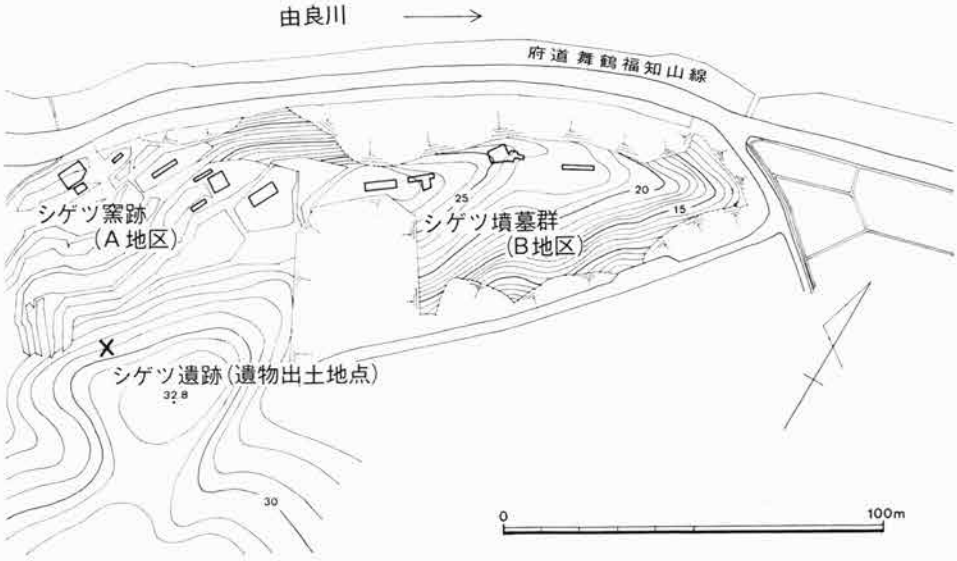
シゲツ窯に最も近接する舞鶴市城屋窯跡は，通称真壁谷の丘陵地に立地する。窯は，南向きに並列した2つの丘陵の東斜面に築かれている。落ち込みや灰原および窯の前庭部と推定されるものが確認され，採集された須恵器片は多数にのぼる。操業年代は，8世紀頃と考えられる。

他に8世紀代にさかのぼるものとして綾部市東光院窯などがある。加えて現状では年代推定が困難ではあるが，古墳時代末期もしくは奈良時代にさかのぼるものとして，舞鶴市行永窯跡がある。平安時代のものとしては，大江町尾頭窯がある。杯・皿・把手付壺などが採集されている。これらのほかに年代推定の困難なものとして，舞鶴市小倉窯・夜久野町上町窯・福知山市稲子谷窯・綾部市三坂窯・大谷窯・須恵器窯・安場窯などがある。

(岸岡貴英)

3. 調　査　経　過(第61図)

今回の調査地内には周知の遺跡であるシゲツ窯が存在していた。また，隣接して古墳時代前期の遺物が表採されているシゲツ遺跡が存在していた。そのため，調査は窯本体の調査と窯の関連遺構の検出および他の時代の遺構の有無の確認を目的として実施した。なお，シゲツ窯(1号窯)および関連遺構の調査を行ったA地区の現状は，梨畑の開墾によって階段状を呈していた。調査は，まず窯体の一部が露出していた地点に第1トレンチを設置して窯体の検出作業を行った。それに平行して周辺の平坦地に第2・第3・第4トレンチを設置して関連遺構の検出に努めた。その結果，第1トレンチでは焼成部の一部と燃焼部・焚き口および灰原が失われた1号窯を検出できた。また，第2トレンチでは工房跡の一部と考えられる柱穴群を検出できた。その後，第2トレンチの上に第5～第8トレンチを設



第61図　調査位置関係図(1/2,000)

置して調査を行ったが遺構・遺物等を検出するに至らなかった。

周知の遺跡であるシゲツ遺跡は，今回調査を行った丘陵の頂部の古墳状隆起の存在する付近である。この丘陵の北側にのびる尾根線上の樹木の伐採を行ったところ，3基の古墳状隆起と一つの平坦地を確認することができた。この4か所に尾根に平行して，トレンチ(第9～第12トレンチ)を設定して調査を行った。その結果，2基の古墳状隆起では墓坑を検出できなかったものの，古墳時代前期の土師器が出土した。また，平坦地では弥生時代後期の墓坑を検出することができた。

なお，調査期間中の11月21日に現地説明会を行い，地元を中心とする多くの人々の参加を得ることができた。

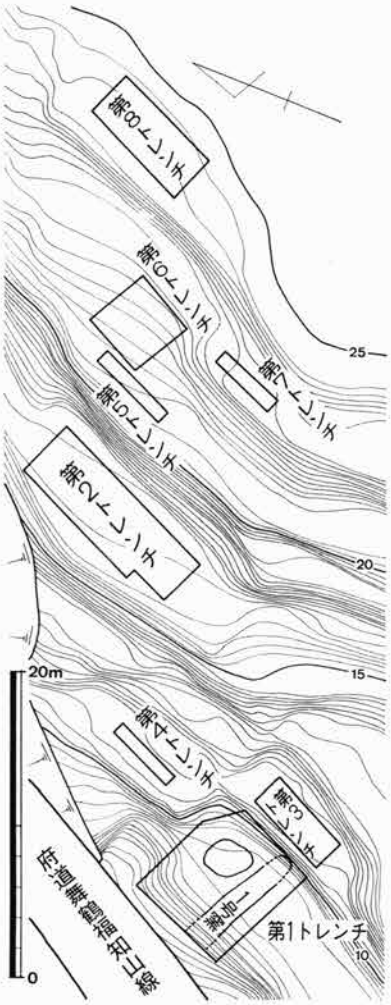
4. シゲツ窯跡(A地区)の調査

第1～第8トレンチで調査を行い，第1トレンチで1号窯と焼土坑を，第2トレンチで柱穴群を検出した。遺物は，須恵器を中心に第1トレンチから整理箱約9箱分，第2トレンチから同約1箱分出土した。

(1) 検出遺構

1号窯(第63図・第64図)　1号窯は，調査以前から窯体の一部が露出しておりシゲツ窯跡として知られていたものである。今回の調査において，将来付近から窯跡が発見されることを予想して1号窯と仮称した。

1号窯は，西に開く小さな谷部の中央部に自然地形を利用して営まれた半地下式の無段



第62図　シゲツ窯跡（A地区）
トレンチ配置図

の窖窯である。府道の改良と梨畑の開墾によってその一部が既に失われていた。調査によって検出できたのは，焼成部および窯尻部分のみである。焼成部の天井部はすでに陥没していた。焼成部の現存長は7.5m・最大幅は1.7m・現存高0.7mを測る。焚き口部分から窯尻までの全長は9m近くあったものと考えられる。焼成部の傾斜角度は約26度を測る。床面は，幅の広いまま窯尻付近まで続く平面形を呈する。窯尻から5.7m付近から焚き口部に向かって土坑が存在し，この部分の窯壁は一部盛り土の上から構築されている。

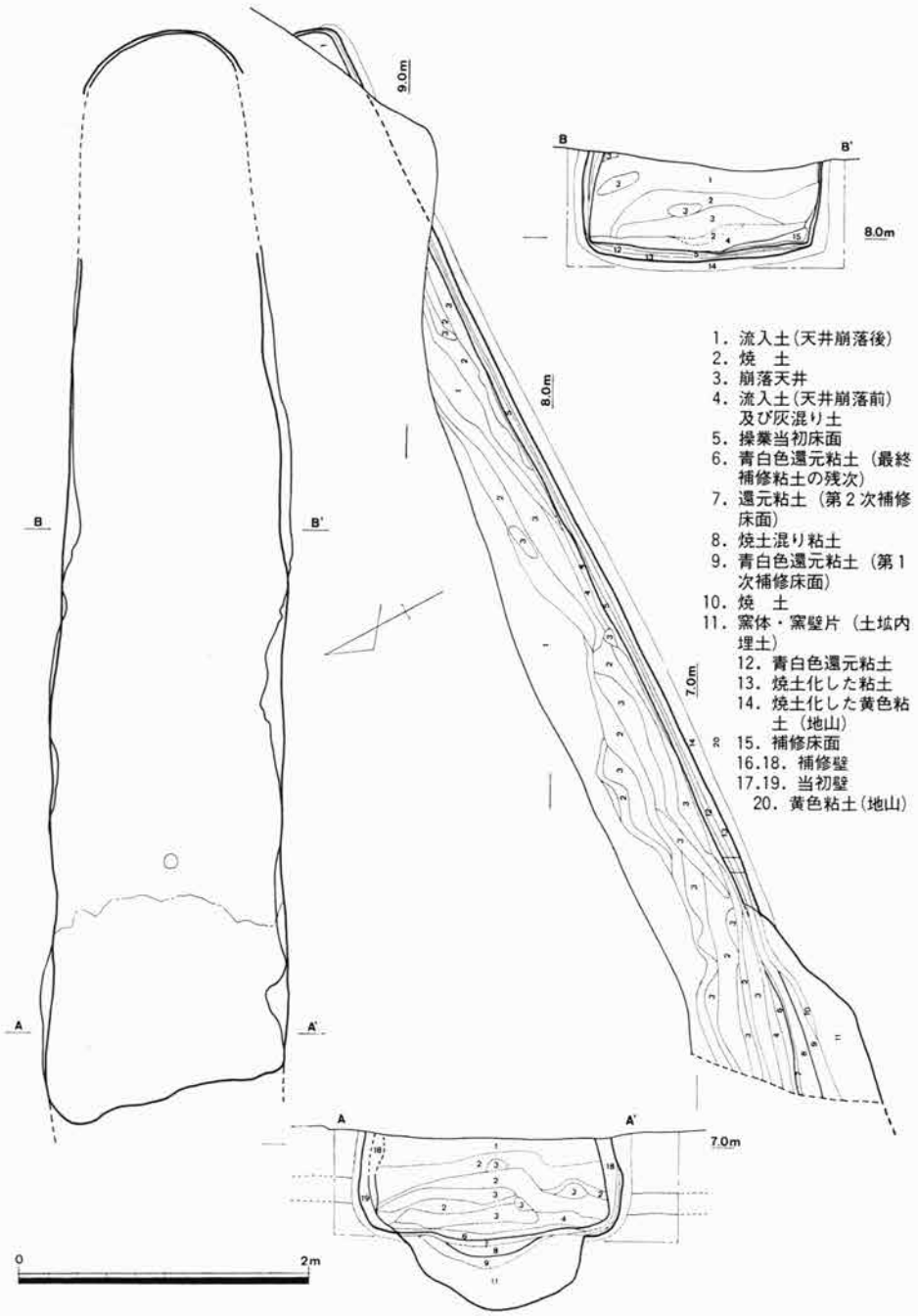
窯壁は，床面と直交してほぼ直上に立ち上がる。スサ入り粘土によって構築されており，1～2回の補修の痕跡が観察できた。特に，土坑の存在する部分は補修が著しく，地山の上から構築されている他の部分と状態を異にしている。

天井部は，すべて崩落した状態で検出した。スサ入り粘土によって構築されていたことがうかがえ，燃焼部に近い天井部の破片には，スサの含有量が多かったためか炭化しているものも見られた。

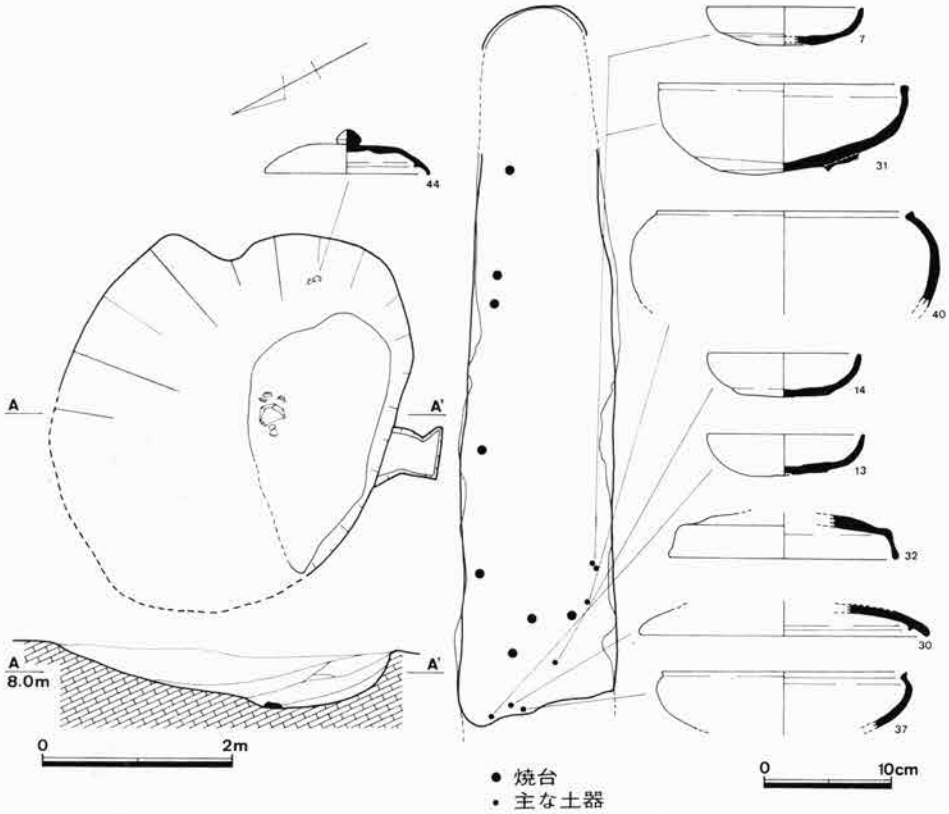
窯尻は，比較的良好な状態で検出できたが，煙道等は失われていた。

床面は，窯尻から土坑直上の5.7m付近までは部分的な補修が見られるものの，窯操業開始時の床面を残していた。窯尻から5.7m付近から焚き口部分にかけては，複雑な構造が観察できた。この部分では最終補修床面はほとんど失われていた。最終補修床面の下には，その多くを失った第2次補修床面と考えられる還元粘土層が存在した。その下には，還元していない粘土層を挟んで，第1次補修床面と考えることのできる還元した粘土層が存在した。ここまでの粘土層には少量の須恵器片が塗り込まれていた。

土坑は，第1次補修床面の下で検出した。窯尻から5.7m付近から最終操業時の焚き口部分に向かってのびていたようである。土坑内には，須恵器片を含んだ窯滓が詰っていた。第1次補修床面と接している部分は，熱を受けて焼土化していた。土坑底の地山(蛇紋岩・



第63図　シゲツ3号窯実測図



第64図　　焼土坑実測図および１号窯最終操業面遺物出土位置図

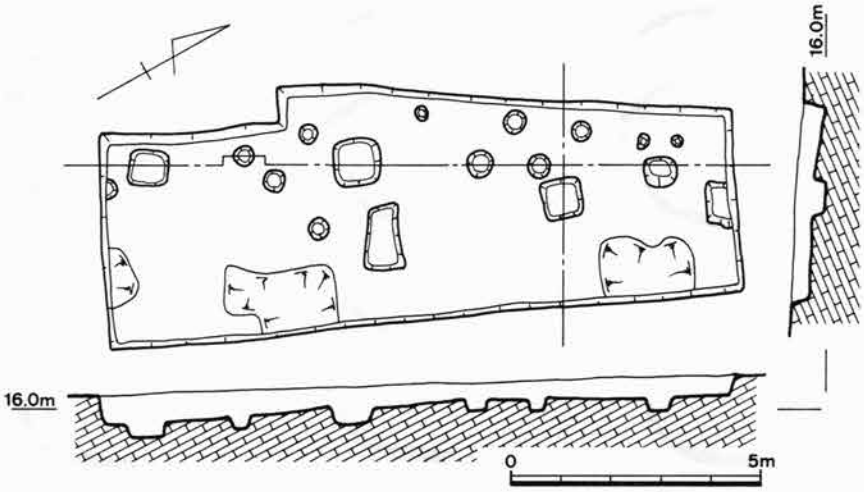
黄色粘土からなる)は，ほとんど熱を受けていなかった。第１次補修床面から地山までの深さは，窯尻から7.3mのところで約0.6mを測る。

最終操業面上には，焼き台と焼成途中もしくは窯出し時に破損したと考えられる須恵器片が残っていた。床面上の遺物の多くは，焼成部下半部に集中している。焼き台に用いられていたのは，須恵器甕体部が癒着した窯体片と山石である。

窯体を縦に立ち割った時に，窯尻から5.2mのところで直径10cmを測る杭穴状の小ピットを検出した。このピットは，補修粘土によって埋められていた。窯築造時に天井部を支えていたなんらかの施設に伴う可能性が指摘できる。

焼土坑　１号窯のすぐ北側の斜面上で検出した。直径約4mを測る不整形な円形を呈する土坑である。土坑の上層には，炭・灰およびスサ入り粘土からなる窯体片を含んだ焼土が堆積していた。下層には，スサ入り粘土からなる窯滓を含んだ焼土が厚く堆積していた。土坑底付近から少量の須恵器が出土した。

柱穴・ピット群(第65図)　１号窯の北側の尾根上に存在する平坦地に第２トレンチを設置した。この第２トレンチ内で方形を呈する大型のピット群と，円形を呈する小型のピッ



第65図　第２トレンチ検出遺構実測図

ト群を検出した。ピット群は，建物・柵列等を構成していたと考えられるが，その構造を推定することはできなかった。なお，窯操業時は，この平坦地がさらに西側に広がっていて，後世の開墾や道路工事によって削平されたと考えられる。表土内およびピット内から１号窯とほぼ同時期の須恵器が整理箱約１箱分出土した。これらの遺物の多くは，焼成不良のものである。調査当初，その出土状態から灰原の一部ではないかと考えて，第２トレンチの上方東側に第５～第７トレンチを設置して調査したが，遺構・遺物とも皆無であった。第２トレンチで検出したピット群は，１号窯に伴う工房跡の一部であると考えられる。

その他の関連遺構　１号窯窯尻の北側に第３トレンチを設置して調査を行ったが，排水用の溝等は検出できなかった。

(2) 出土遺物

遺物は，１号窯及び焼土坑，第２トレンチを中心にして須恵器・土師器・弥生土器１・石刃１が出土した。なお，弥生土器については，シゲツ墳墓群の項で紹介する。

須恵器　須恵器は以下のように分類することができる。

杯A (13)――高台をもたないもの

杯B (23)――口縁部が緩やかなS字状を描き，高台を有するもの。

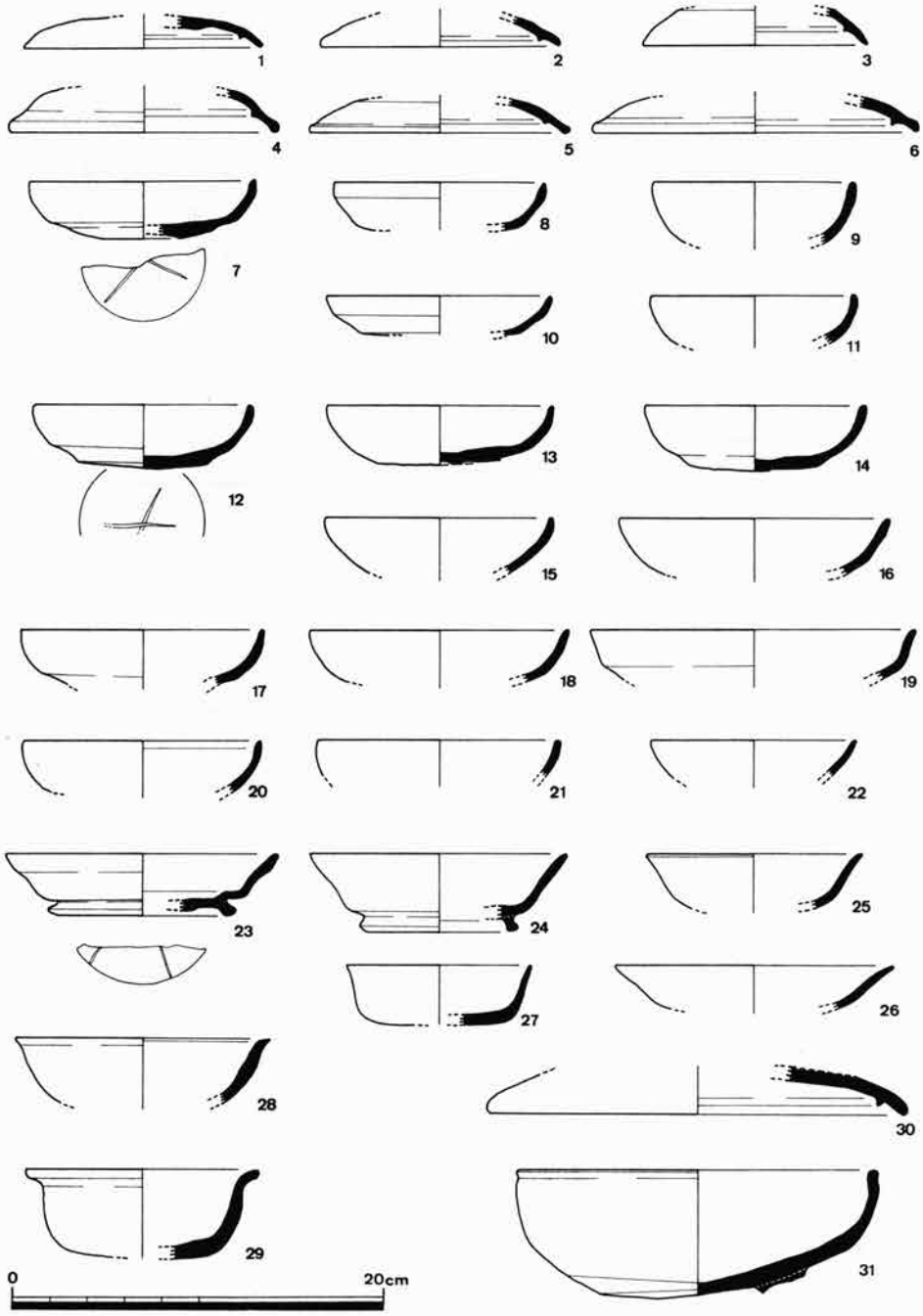
杯D (27)――口縁が斜め上方に立ち上がる小型のもの。

椀A (28)――外反する口縁端部に面をもつもの。

椀B (29)――器壁は厚く，口縁端部を斜め上方に外反させるもの。

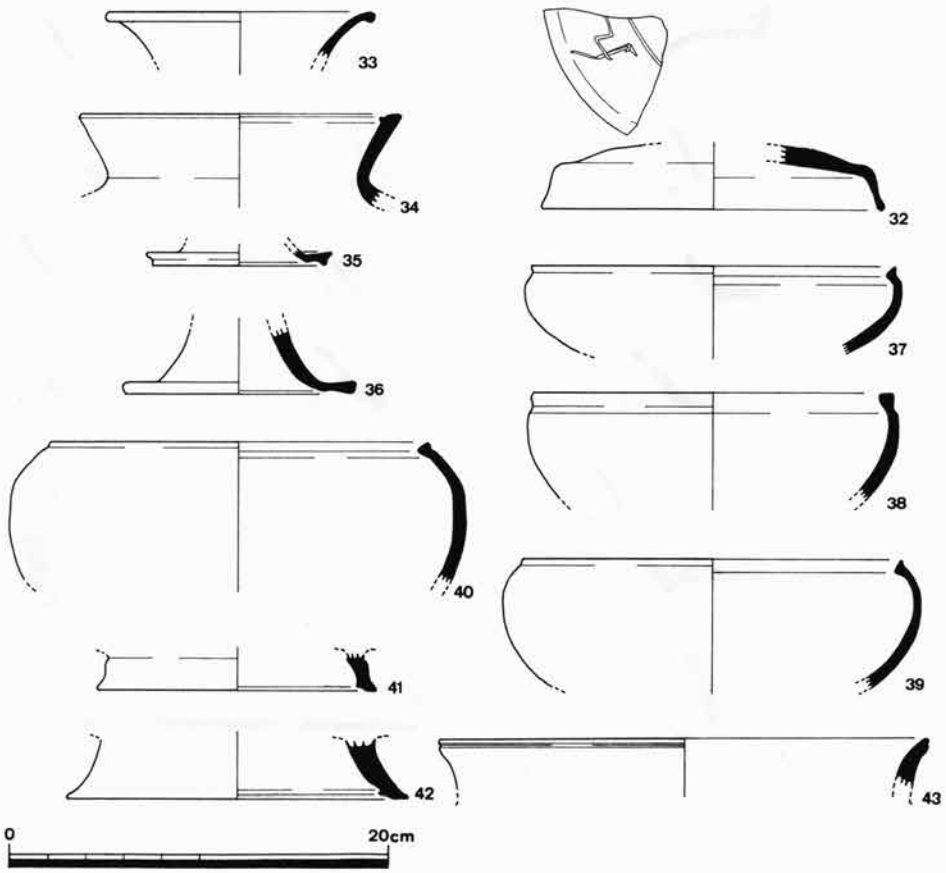
椀C (31)――端部が直立する大口径のもの。蓋Cが伴うと思われる。

蓋A (２)――宝珠つまみがつき，口縁内面にかえりを有するもの。



第66図　1号窯出土遺物実測図(1)

蓋A1～6，杯A7～22，杯B23～26，杯D27，椀D27，椀A28，椀B29，蓋C30，椀C31
最終操業面　7・8・11～19・28・30・31・37・40・41；土坑　1～3・6・20～22・24～27・29
第2次補修床面 5；第2次補修床面に塗り込まれたもの 23；最終補修床面に塗り込まれたもの 4；1号窯体内埋土 9・10



第67図　1号窯出土遺物実測図(2)
蓋D32，壺33・34，高杯35・36，鉢37～40，脚部(高台)41・42，土師器甕43
最終操業床面32・37・39～41；土坑33・34；第2次補修床面に塗りこまれたもの36・42；
1号窯埋土38・43

蓋C(30)――蓋Aの大型品。椀Cとセットになると思われる。

蓋D(32)――かえりのない大型品，天井部外面にヘラ記号を有する。蓋でない可能性もある。

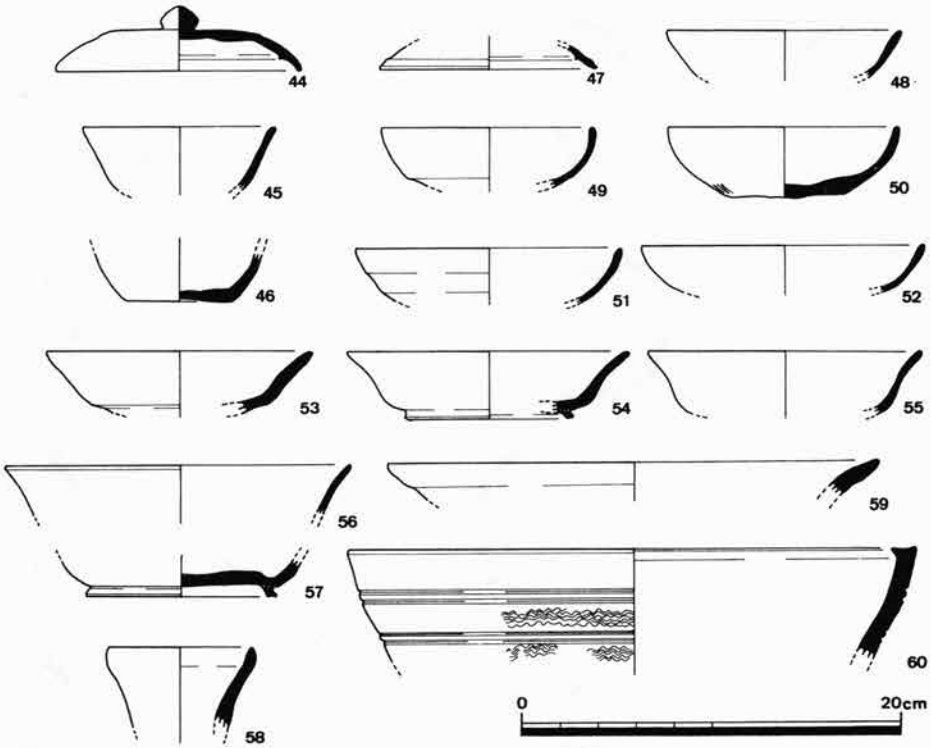
高杯(36)

鉢(40)――口端部は肥厚し，口縁部は内湾するもの。

以上の他に壺・瓶および鉢に伴うとみられる高台(41・42)が存在する。

1) 1号窯最終操業面出土遺物(第66図・第67図)　杯A(7・8・11～19)，杯B，椀A(28)，椀C(31)，蓋A，蓋C(30)，甕等があり，その中で杯Aの占める割合は高い。

7・12は，底部に「×」のヘラ記号を有する杯Aである。32(蓋D)は壺蓋と思われる。天井部は厚く，端部へ行くに従い薄くなる。端部は肥厚し丸くおさまる。天井部にはヘラ



第68図　焼土坑・第２トレンチ出土遺物

蓋A44・47，杯A46・48～52，杯B53～57，瓶58，甕59・60，焼土坑44～46；第２トレンチ47～60

記号と沈線がみられる。37～40(鉢)は肥厚した端部を内湾させたものである。37は端部をつまみ上げたものである。42(高台)は比較的脚部の広いものである。

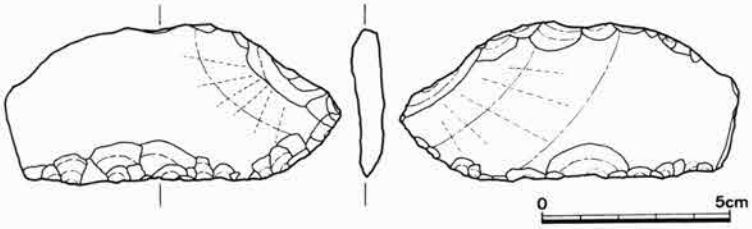
2)　**その他の１号窯出土遺物**(第66図・第67図)　杯A(9・10・20～22)，杯B(23～26)，杯D(27)，椀B(29)，蓋A(1～6)，壺(33～34)，高杯(36)，鉢(37)があり，その内，土坑からは杯B・蓋Aが多く出土している。24(杯B)は緩やかに外反する口縁をもち，高台は丸みを帯びた台形を呈する。第２次補修床の下から出土した23は比較的器形が低く，肥厚した口縁部は，24よりも緩やかに外反する。底部外面にはヘラ記号が，内面には段がみられる。36は第２次床面に塗り込まれた高杯の脚部である。裾部は緩やかに広がり，端部は水平方向に屈折し，広い接地面をなして肥厚し丸くおさまる。３(蓋A)は，比較的器高の高いもので，かえりは消失しつつある。４(蓋A)は，最終床面に塗り込まれていたもので，器高は比較的高く，端部は肥厚して丸くおさえる。６のみ他の蓋(A)より口径が大きい。33・34は，壺の口縁である。33の口縁部は，大きく外反する。34の頸部は外反し，端部は幅広の平面となり，内面で短く内屈する。

3)　**焼土坑出土遺物**(第68図44～46)　蓋A(44)と杯A(45・46)がある。44は，蓋Aであ

付表3　出土須恵器計測表

No.	器種	口径	器高	方向	備考	No.	器種	口径	器高	方向	備考
1	蓋A	12.8	—	—		31	椀C	19.5	—	←	
2	〃	12.9	—	—		32	蓋D	18.2	—	←	ヘラ記号あり
3	〃	11.8	—	→		33	壺	13.8	—	—	
4	〃	14.4	—	→		34	〃	16.8	—	—	
5	〃	14.0	—	←		35	高杯	—	—	—	
6	〃	17.6	—	—		36	〃	—	—	—	
7	杯A	12.4	—	→	ヘラ記号あり	37	鉢	19.1	—	—	
8	〃	11.4	—	—		38	〃	20.0	—	←	
9	〃	12.2	—	—	焼成やや軟	39	〃	20.0	—	—	
10	〃	12.0	—	—		40	〃	14.6	—	—	
11	〃	11.2	—	—		41	高台	18.0	—	—	
12	〃	11.8	—	→	ヘラ記号あり	42	〃	25.8	—	—	
13	〃	12.2	—	→		43	—	—	—	—	—
14	〃	11.9	—	←		44	蓋A	13.0	3.45	→	胎土はやや粗い
15	〃	12.2	—	—		45	杯B	10.2	—	—	
16	〃	14.2	—	—		46	杯A	—	—	←	
17	〃	13.2	—	—		47	蓋A	11.5	—	—	
18	〃	14.0	—	—		48	杯A	12.4	—	—	焼成軟
19	〃	17.6	—	—	焼成やや軟	49	〃	11.6	—	—	焼成やや軟
20	〃	12.8	—	—		50	〃	12.4	—	→	
21	〃	13.0	—	—		51	〃	14.0	—	—	焼成やや軟
22	〃	11.0	—	—		52	〃	15.0	—	—	焼成軟
23	杯B	14.8	3.3	—	ヘラ記号あり	53	杯B	14.0	—	—	焼成やや軟
24	〃	14.0	—	←		54	〃	15.0	—	→	
25	〃	14.4	—	—		55	〃	14.4	—	←	
26	〃	15.0	—	←		56	〃	18.4	—	—	
27	杯D	10.0	—	—		57	〃	—	—	←	
28	椀A	13.9	—	—		58	瓶	7.4	—	—	
29	椀B	12.6	—	—		59	甕	26.0	—	—	焼成軟
30	蓋C	22.7	—	—		60	甕	30.0	—	—	波状文あり

※方向は見た目の砂粒の動きである。(単位はすべてcm)



第69図　第２トレンチ出土石器

る。宝珠つまみを有し，天井部は肥厚する。かえりは内傾する。46は，杯Ａの底部で，底部に回転ヘラ切りを施す。

4)　２トレンチ出土遺物(第68図47～60)　杯Ａ(48～52)，杯Ｂ(53～57)，蓋Ａ(47)，瓶，壺または甕があり，大半は焼成不良品である。50は，底部をヘラ切りしている。底部にはハケ状工具の圧痕がみられる。端部はやや尖り，自然釉が一部に付着する。49は，薄手のもので，端部が肥厚し丸くおさまる。54の高台は，断面方形を呈する。57は，底部内面が肥厚するものである。蓋Ａは，47のみである。かえりは短小化し，器壁も出土した蓋Ａ中最も薄い。58は，口径7.4cmを測る平瓶の口縁かと思われる。59は，甕の口縁である。焼成は，軟質で外面は強いナデにより段をなす。60は，甕の口縁と思われる。口縁外面に沈線と波状文が見られる。端部は面をもち内側に拡張する。　(田中史生)

土師器・石器(第68図・第69図)

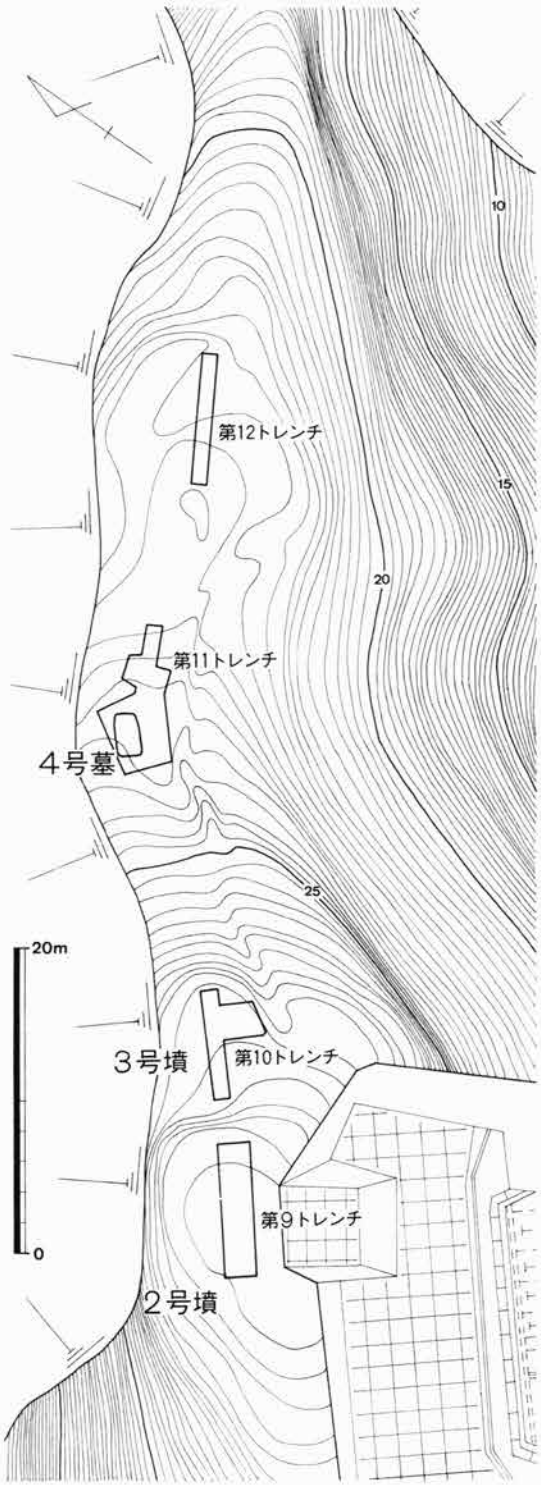
須恵器以外に１号窯埋土内から土師器の甕の口縁部(43)が出土している。口縁端面には一条の沈線がある。第２トレンチ内からは，粘板岩製の石器(第69図)が出土している。

(3)　小結

今回の調査では，周知の遺跡であるシゲツ窯の構造・性格等を解明する資料を得ることができた。

シゲツ窯(１号窯)は，由良川に向かって張り出す，極めて小さな２つの尾根に挟まれた谷部の中央部に営まれた，須恵器を焼成した無段の窖窯である。周辺の調査および踏査から現在確認できる窯は，この１基のみである。他に窯が存在したとしたら，１号窯より下の斜面に存在したと考えられる。１号窯は，操業途中に大幅な改造が行われていることが燃焼部に近い焼成部付近の複雑な構造からうかがえる。その改造の性格を考える上で留意すべき点は以下の通りである。①土坑の周囲がほとんど熱を受けていない。②土坑内に窯体片が詰っていることから，土坑が埋められる以前にすでに窯が存在している。③土坑の上の窯壁部は盛り土によって支えられている。

１号窯で生産された須恵器の器種は，小型品の杯身・杯蓋・高杯をはじめ中型品の椀・鉢，大型品の甕と多種にわたる。これらの出土遺物から，１号窯の操業時期は中村編年でいう３形式２段階に相当し，７世紀後半に位置付けられよう。周辺地域の編年と対比させ



第70図　シゲツ墳墓群（B地区）測量図

ると，綾部市綾中廃寺の編年案の綾中2期に位置付けられよう。(注10)

1号窯に隣接して検出した焼土坑は，その立地・出土遺物等から1号窯と密接な関係にあるものと思われるが，その性格等は不明である。篠窯跡群でも類似した遺構が検出されている。

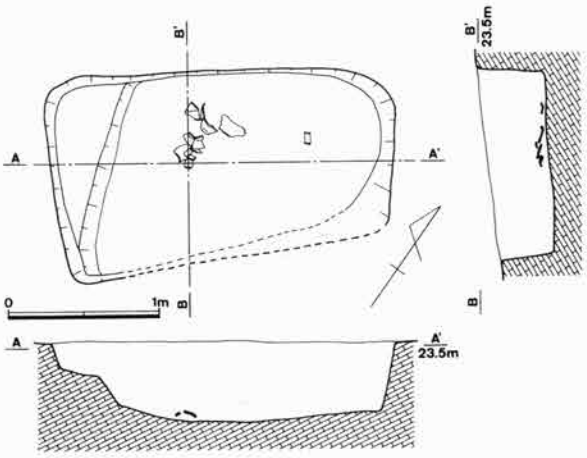
5. シゲツ墳墓群（A地区）の調査

シゲツ墳墓群は，由良川にほぼ平行して北西方向にのびる丘陵上に存在する。調査地外である丘陵頂部には古墳状隆起が存在し，周知の遺跡であるシゲツ遺跡の遺物は，この古墳状隆起に伴うものと考えられる。この古墳状隆起を1号墳として扱い，今回の調査で確認した墳墓を2・3号墳・4号墓として扱うことにする。なお，調査は，当初古墳状隆起と考えた3か所と，平坦地の1か所にトレンチを設置して行った。なお，古墳状隆起として調査を行った第12トレンチでは，遺構・遺物ともに検出できなかった。

(1) 検出遺構

2号墳　調査地内の最高地点，標高29m付近に位置する。ここに第9トレンチを設置して調査を行ったが，主体部と考えられる遺構は検出できなかった。表土直下から壺形土器が出土した。主体部は流失したかトレンチ外に存在するものと考えられる。

3号墳　2号墳に接して標高28m付



第71図　4号墓実測図

近に位置する。ここに，第10トレンチを設置し調査を行った。中央部付近から鉢形土器・器台形土器等が出土したが，主体部等は検出できなかった。

4号墓(第71図)　2・3号墳から少し下った標高23m付近の平坦地(テラス状地形)に位置する。ここに第11トレンチを設置して調査を行ったところトレンチの端で落ち込みを検出したので一部拡張を行った。その結果長辺2.4m・短辺1.2m・検出面からの深さ0.5mを測る墓坑を検出した。墓坑底からやや遊離して，弥生時代後期の水差し形土器が破砕された状態で出土した。棺等の施設は検出できなかった。

(2) 出土遺物(第72図)

シゲツ墳墓群に伴うと考えられる遺物は，第3トレンチ・第9トレンチ・第10トレンチ・第11トレンチから出土している。また，舞鶴市教育委員会保管のシゲツ遺跡出土遺物も併せてここで紹介する。

遺物は，時期的区分によって大きく2群に分けることができる。

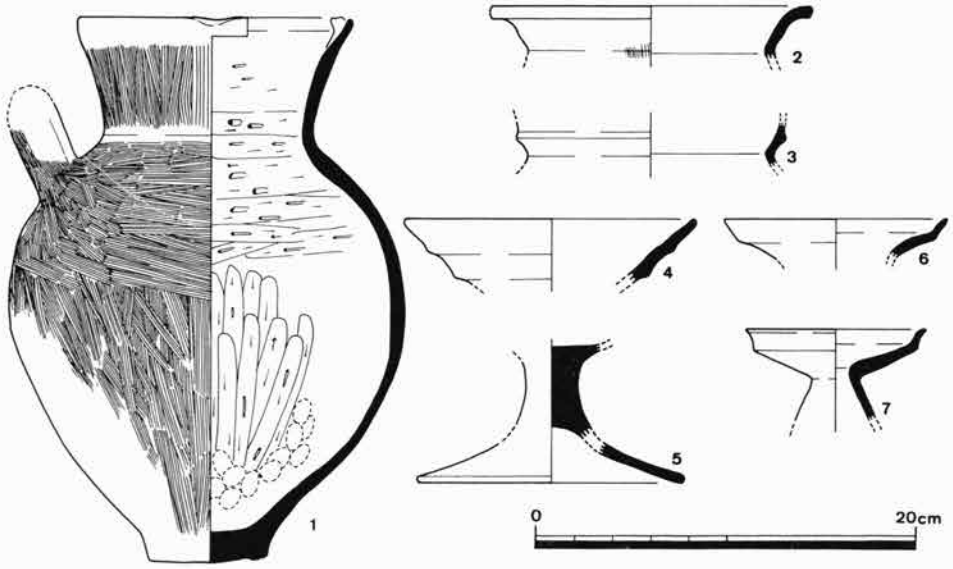
弥生時代の遺物　4号墓墓坑内から，水差し形土器(1)が出土している。片口の口縁部を有し，片口と対角線上の体部には把手を持つ。底部は，やや小さめの突出ぎみの平底を呈する。口径は14.6cmを，器高は28.5cmを測る。外面は，全面にハケが施され，内面は，口縁部までヘラケズリが行われている。底部内面には，指頭の圧痕が残されている。この遺物の時期は，対岸の志高遺跡の資料との比較から弥生時代後期初頭に位置付けられよう。

壺形土器の口縁部(2)は，第3トレンチから出土した。口径約17cmを測る。4号墓出土の水差し形土器とほぼ同時期のものと考えられる。

古墳時代前期の遺物　2号墳(第9トレンチ)から壺形土器の口縁部(3)が出土している。

3号墳(第10トレンチ)から壺形土器の口縁部(6)・鉢形土器もしくは高杯形土器と思われるもの(4)・高杯形土器の脚部が出土している。他にも，比較的多くの土器が出土しているがいずれも著しく磨滅しており，実測できなかった。出土した土器群は，2号墳のものも含めて古墳時代前期のものと考えられる。

舞鶴市教育委員会にシゲツ遺跡出土遺物として保管されていたのは，7の器台である。



第72図　シゲツ墳墓群出土遺物
弥生土器壺1・2，土師器3～7
4号墓1，第3トレンチ2，2号墳3，3号墳4～6，シゲツ遺跡7

出土地点は，1号墳の下の丘陵西側斜面である(第61図参照)。器台は，口径8.6cmを測る小型のものである。2・3号墳出土の遺物とほぼ同時期のものである。

(3) 小結

シゲツ墳墓群(A地区)の調査では，弥生時代後期と古墳時代前期の墳墓を検出した。

弥生時代の墳墓は，調査以前にはほとんどその存在が予想できなかったものである。由良川左岸の水無月山遺跡でも弥生時代後期の同様な墳墓が検出されている。また，由良川中流域の綾部市久田山遺跡でも方形周溝墓以外に，同様の土坑墓からなる墳墓群が検出されている。これらはいずれも丘陵上の平坦地に営まれた溝等の外部施設(区画施設)を持たない土坑墓群であると考えられる。

古墳時代の墳墓(古墳)については，今回の調査は，この地域の古墳時代の墓制を考える上で貴重な調査例となった。近接する丹後地域においては，丘陵上に古墳時代前期の目立った墳丘を持たない古墳群が数多く存在する。前期古墳が少ないといわれる由良川下流域においても丹後地域と同様に，同様の古墳群が存在することを示唆することができる。

6. まとめにかえて

シゲツ窯跡の調査においては，7世紀後半の由良川下流域における須恵器生産の様相について解明する資料を得ることができた。今後，志高遺跡をはじめとする集落遺跡におけ

る出土遺物との検討を通して当時の経済流通範囲を解明することができよう。また，須恵器生産という点で，すでにこの時期生産を開始している夜久野町末窯跡群や8世紀に操業を開始する舞鶴市塩屋窯跡群との関係も注目される。焼土坑や1号窯内の土坑の性格は，現在のところ不明であるが，将来資料の増加によって，須恵器生産の様相を解明する一つの資料となりえよう。

シゲツ墳墓群の調査においては，この地域における墓制を考える上で貴重な資料を得ることができた。　（肥後弘幸）

注1　調査に参加していただいた方は次の通りである。（敬称略・五十音順）
作　業　員　碇　弥生・井上英子・今西アヤノ・今西和子・今西タキ・今西ひさ江・梅原トシ江・瓜生初枝・河崎和子・小谷弥太郎・永野澄慧・永野久枝・牧　鈴子・真下朝野・真下重子・真下チセノ・真下トメ子・真下幸枝・水口和子・村上千里・森野石子・山崎源治
調査補助員　荒木尚之・岸岡貴英・田中史生

注2　御指導・御助言いただいた方は次の通りである。（敬称略・五十音順）
岡田晃治・立花正寛・長谷川達・波多野徹・山田邦和・吉岡博之

注3　渡辺　誠ほか『京都府舞鶴市　桑飼下遺跡発掘調査報告書』舞鶴市教育委員会　1972

注4　竹原一彦ほか「三河宮の下遺跡発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第2冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1982

注5　吉岡博之『志高遺跡―昭和56年度花ノ木・スド口・薮下地区および久田美地区の調査概要―』（舞鶴市文化財報告　第6集　舞鶴市教育委員会）　1982
吉岡博之ほか『志高遺跡―昭和57年度カキ安地区の調査概要―』（舞鶴市文化財報告　第4集　舞鶴市教育委員会）　1983
吉岡博之『志高遺跡―昭和58年度カキ安・舟戸地区の調査概要―』（舞鶴市文化財調査報告　第7集　舞鶴市教育委員会）　1984
岩松　保「志高遺跡昭和59年度発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第17冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1985
肥後弘幸「志高遺跡第6次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第21冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1986
肥後弘幸「志高遺跡第7次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第26冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1987

注6　増田信武・杉原和雄・釋　龍雄『水無月山遺跡発掘調査報告書』京都府立丹後郷土資料館　1980

注7　中谷雅治ほか『高河原遺跡発掘調査報告書』大江町教育委員会　1975

注8　『大川遺跡現地説明会資料』舞鶴市教育委員会　1986

注9　杉原和雄「丹後地域における須恵器生産について」（『丹後郷土資料館館報』2　京都府立丹後郷土資料館）　1981
山田邦和「京都府下の須恵器」（『マムシ谷窯跡発掘調査報告書』同志社大学）　1983

注10　小山雅人「丹波綾中廃寺の創建年代」（『京都府埋蔵文化財論集』第1集　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1987

8. 泉源寺遺跡発掘調査概要

1. はじめに

泉源寺遺跡は，昭和60年度に舞鶴市教育委員会が行った分布調査により確認された遺跡である。この遺跡は，JR舞鶴線東舞鶴駅から北東へ約2.3kmのところに位置し，愛宕山から南東方向に派生する丘陵裾部の高台にあたる。この範囲内に，奈良時代から平安時代にかけての土器類が散布していたことから，その頃の集落跡が存在すると考えられた。

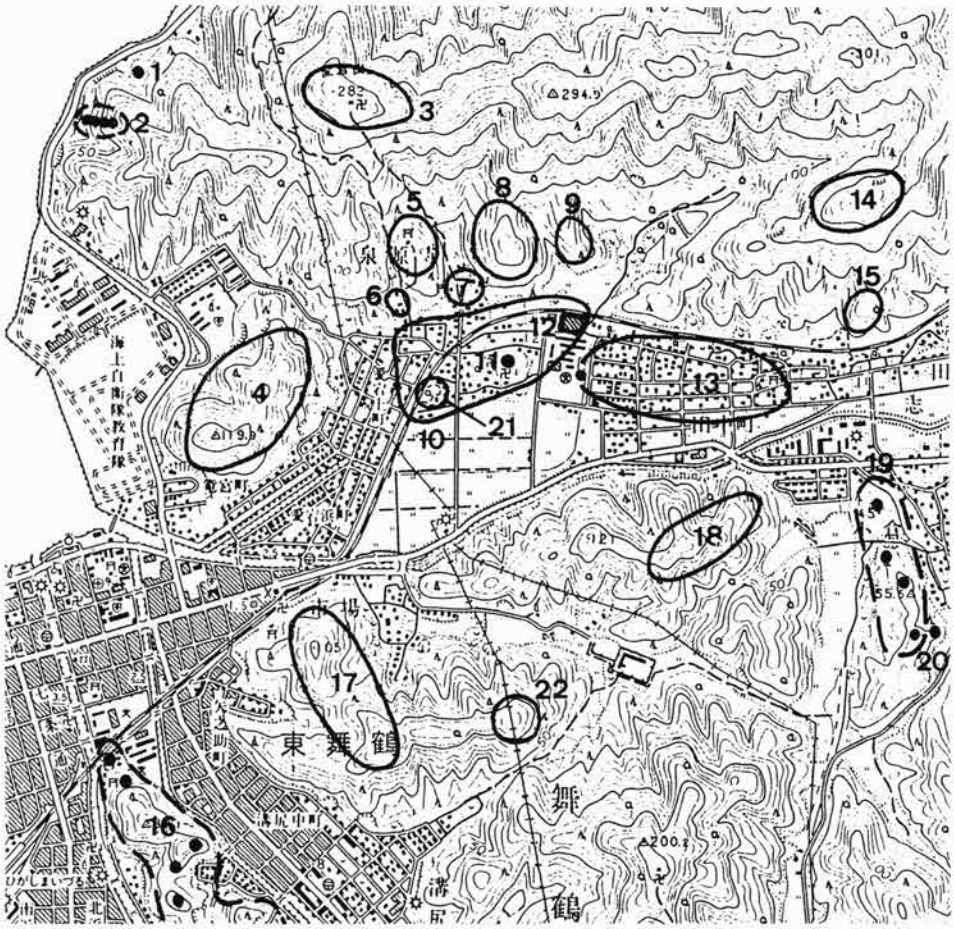
今年度，京都府教育委員会は，府立東舞鶴高等学校に球技コートの造成を計画したが，予定地が，この泉源寺遺跡の東端にかかるため，今回の試掘調査を実施するに至った。

調査は，京都府教育委員会の依頼を受けて，当調査研究センターが実施した。まず，遺構の有無や広がりの確認を目的とした試掘調査から始め，その結果，特に遺構の集中するところを一部拡張し，規模・性格・時期等の確認を行った。調査期間は，昭和62年10月9日～12月18日までで，当調査研究センター調査第2課調査第2係長水谷寿克，調査員岡崎研一が担当した。その間，調査補助員・整理員として有志学生の協力を受けた。(注1) また，調査にあたっては，舞鶴市教育委員会・府立東舞鶴高等学校・地元各地区をはじめ多くの方方の協力を得た。記して感謝の意にかえたい。なお，調査に係る経費は，全額京都府教育委員会が負担した。

2. 位置と環境

舞鶴市は，京都府北部にあり，舞鶴湾に沿って，東から東舞鶴・中舞鶴・西舞鶴の市街地がある。綾部から伊佐津川沿いに北上すると，西舞鶴の市街地に入る。西舞鶴から西へ行くと，由良川を渡り宮津市に至る。また，東に行くと，白鳥峠を越えて東舞鶴の市街地に入る。東舞鶴の常新町，溝尻，市場からと朝来川沿いに，さらに東方へのびる狭小な平地がある。中でも，市場から泉源寺・田中・安岡・吉坂を経ると，大飯郡に入り，敦賀に至る。現在も，国道27号線やJR小浜線が，このルートを通っており，北陸への交通の要所にあたっている。

東舞鶴の市街地の北東に，標高294mの愛宕山がある。この愛宕山から南方に派生する丘陵があり，泉源寺遺跡は，この丘陵裾部に広がる高台に位置する(第73図)。現在は，高台南側に志楽川が西流し，川に沿って国道27号線が通っている。また，JR小浜線が泉源寺遺跡中央を横切っている。



第73図　調査地位置図及び周辺主要遺跡分布図

1. 滝ケ浦古墳　2. 滝ケ浦南古墳群　3. 泉源寺大谷城跡　4. 高屋城跡　5. 泉源寺愛宕城跡　6. 泉源寺此御堂跡　7. 泉源寺跡　8. 泉源寺金比羅城跡　9. 泉源寺的場支城跡　10. 泉源寺遺跡　11. 泉源寺1号墳　12. 調査地　13. 田中西遺跡　14. 田中城跡　15. 田中支城跡　16. 溝尻古墳群　17. 市場城跡　18. 小倉西城跡　19. 小倉古墳群　20. 大神宮古墳　21. トアミ城跡　22. 市場支城跡

今回の調査地は，泉源寺遺跡の東端にあたり，高等学校とJR小浜線に囲まれた御霊神社東側のところである(第74図)。この付近は，愛宕山と吉野から派生する丘陵によって生じた谷筋に長く土砂が堆積したとみられ，扇状地地形を呈していた。調査前は，段々状に田畑が営まれていた。このあたり一帯は，鎌倉時代には「志楽荘」と言われ，奈良・西大寺の荘園の一つとして知られているところである。また，西大寺の末寺・泉源寺があった。現在，この「泉源寺跡」は，調査地の北西約200mのところにあったと推定されている。(注2)

周辺の遺跡としては，泉源寺遺跡の東側に隣接して田中西遺跡があり，その南東の丘陵斜面には小倉古墳群がある。また，この付近の丘陵裾部や頂部には，中・近世の城跡がい

たるところに存在する(第73図)[注3]。

このように，泉源寺遺跡の位置する狭小な平地部は，古くから栄えたところであり，現在に至るまで北丹と北陸を結ぶ，要衝の地であったことを窺うことができ，これらに関連した遺構・遺物が検出されるものと，期待された。

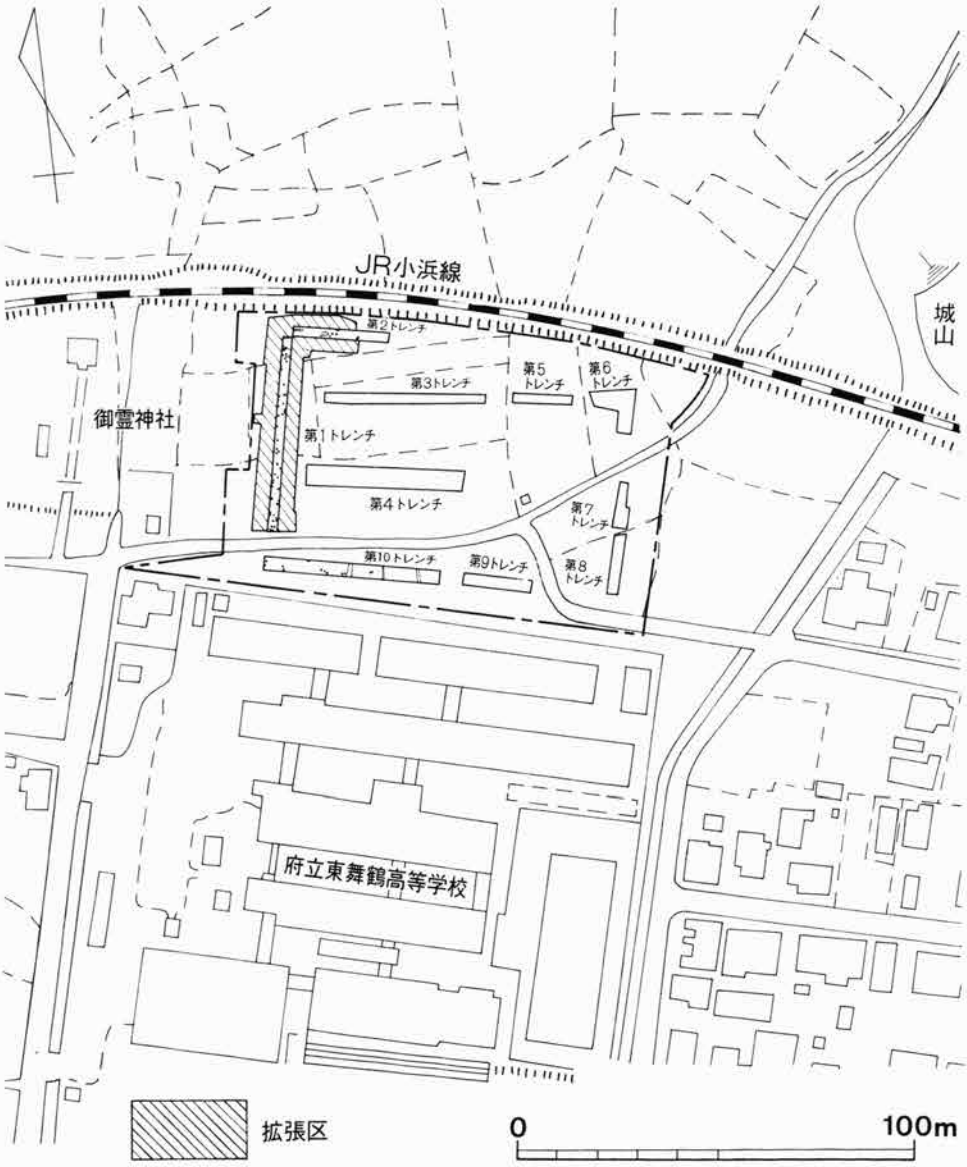
3. 調 査 概 要

遺構の有無・範囲を確認するため，調査対象地に，幅2mの試掘トレンチを10か所に設定した。重機による耕土の除去から始めた(第74図)。調査地西側(第1・2・10トレンチ)では耕土層下すぐに岩盤となり，柱穴・土坑・溝を検出した。特に第1・2トレンチ付近は遺構の残りがよく，周囲の田畑より一段高まっていることから，この付近には建物跡などの遺構があるものと思われた。このことより第1・2トレンチ両側を拡張し，掘削することにから，遺構の時期・範囲・性格等が解明できると考え，実施した(図版第46)。

精査したところ，当初，試掘調査時に検出した溝跡が，横穴式石室の羨道部の掘形であることが判明した。横穴式石室の残りはひじょうに悪く，石材は羨門付近に見られただけで，玄室・羨道部の石はすべて抜かれていた。徐々に掘り下げたところ，石の抜き取り穴の輪郭から左片袖であることがわかった。また，玄室内・羨門付近から，須恵器(杯身・杯蓋・高杯・提瓶・長頸壺等)と鉄器(刀・鏃)が出土した。これらの内，玄室内出土の遺物は拳大の敷石上から，羨門付近出土の遺物は，羨道部の円形土坑内から発見したものである。羨門付近の石は，羨道部の石が崩れたものか，あるいは閉塞石と考えられたが，調査終了間際に石を取り除いたところ，石で押し潰された土師器(壺)を発見した。この土師器や羨道部の円形土坑内出土の遺物は，祭祀的要素の濃い遺物と思われ，土師器を押し潰していた石は，祭祀後に閉塞した石と思われる。

この古墳は，今回初めて見つかったものである。字泉源寺に所在しており，周知の遺跡として調査地南西に泉源寺古墳があることから，泉源寺古墳を「泉源寺1号墳」，今回発見した古墳を「泉源寺2号墳」とした。墳形については，後世の削平が著しく明確でない(図版第49)。

その他の遺構としては，掘立柱建物跡1棟・柵列跡1列・土坑18基・溝跡3条を検出した。第1トレンチ中央部で検出した掘立柱建物跡の規模は，南北に3間，東西に1間以上であり，一部拡張することにより東西が2間以上であることが判明した。さらに西側に続くと思われたが，調査対象地外になるため建物跡の規模を解明することはできなかった。柵列跡は，建物跡に平行して発見した(図版第48)。土坑は，拡張区のいたるところから見つかったが，時期のわかるものはSK13のみであった。SK01・02・04・08・09・10はごく



第74図　トレンチ配置図

最近のものである。溝跡は，泉源寺２号墳閉塞石付近から南に向かうもの(SD01)と，掘立柱建物跡から南に向かうもの(SD02)と，SK15から南に向かうもの(SD03)と，３か所で検出した。SD02・03からは，出土遺物がなく，時期不明である。SD01は，泉源寺２号墳と切り合っていたが，その前後関係は，後世の削平により確認することはできなかった。切り合い付近からは，泉源寺２号墳から流れ堆積したと思われる古墳時代の須恵器が出土している(第75図)。

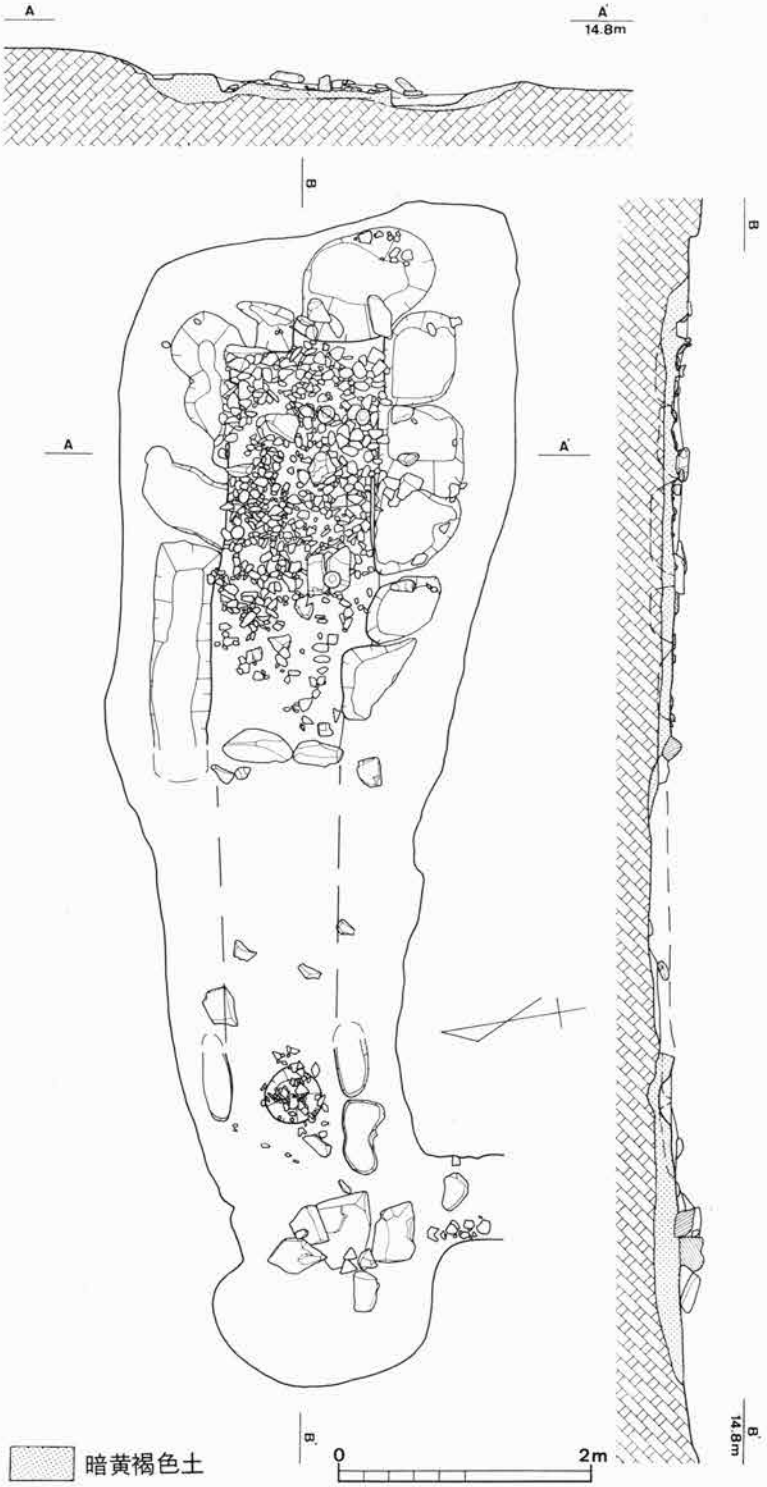
他のトレンチを精査したところ，第10トレンチでは，溝跡3条・土坑1基・柱穴11か所を，第3トレンチでは柱穴7か所を検出したが，拡張区よりもまばらであった。これは，後世にかなりの削平を受けており，深い遺構でないかぎり，すでに無くなっているものと思われた。第6トレンチでは，深さ約2m掘削したが岩盤は見られず，山手から流出した砂礫が堆積していた。第7・8・9トレンチでも，耕土下すぐに砂礫が堆積していたことから，調査地北東の丘陵(城山)裾部から南方に大きな谷がのびていたものと思われる。発掘調査で検出した遺構は，この谷に張り出した高台に広がっている。

第75図　拡張区遺構配置図

4. 検出遺構

今回の調査で検出した遺構は，古墳1基(泉源寺2号墳)・掘立柱建物跡1棟(SB01)・柵列跡(SA01)・土坑18基(SK01～18)である。

泉源寺2号墳　試掘調査時に東西方向にのびる溝跡



第76図　泉源寺2号墳実測図

と思われた遺構が，拡張したところ古墳であることを確認した。泉源寺２号墳と名付けた。調査地北西端で発見した(第76図)。

横穴式石室を主体部とする古墳である。後世の削平により，床面から10数cmしか遺存しておらず，石はほとんど抜かれていた。かろうじて，棺を安置する棺台敷石・副葬品(須恵器・鉄器)などを検出した。

拳大の敷石の途切れる付近で石の抜き取り穴が敷石の幅よりも内に入っていたことから，片袖式の横穴式石室であることが判明した。石の抜き取り穴から測定した石室の規模は，全長約6.8m・玄室長約2.4m・奥壁での幅約1.3m・羨道部長約4.4m・幅約1m・羨門部での幅約0.8mを測る。羨門付近にのみ，石が集積していた。これは，羨道部の石が崩れたものか，あるいは閉塞石と思われた。石を除いたところ，墓前祭祀を暗示するような土師器(壺)が出土したことから，墓前祭祀後の閉塞石と考えられた。(注4) 羨門部は，この閉塞石北側で掘形がわずかに「く」の字になっていることから，この付近が羨門であったと思われる。

玄室床面には，拳大の石が密に敷かれており，副葬品(杯身・杯蓋・刀・鏃)は，この敷石上から出土した。石室内の堆積状況・出土遺物から追葬はされていないと思われる。副葬品の形態から，泉源寺２号墳は６世紀後半の古墳であることがわかった。

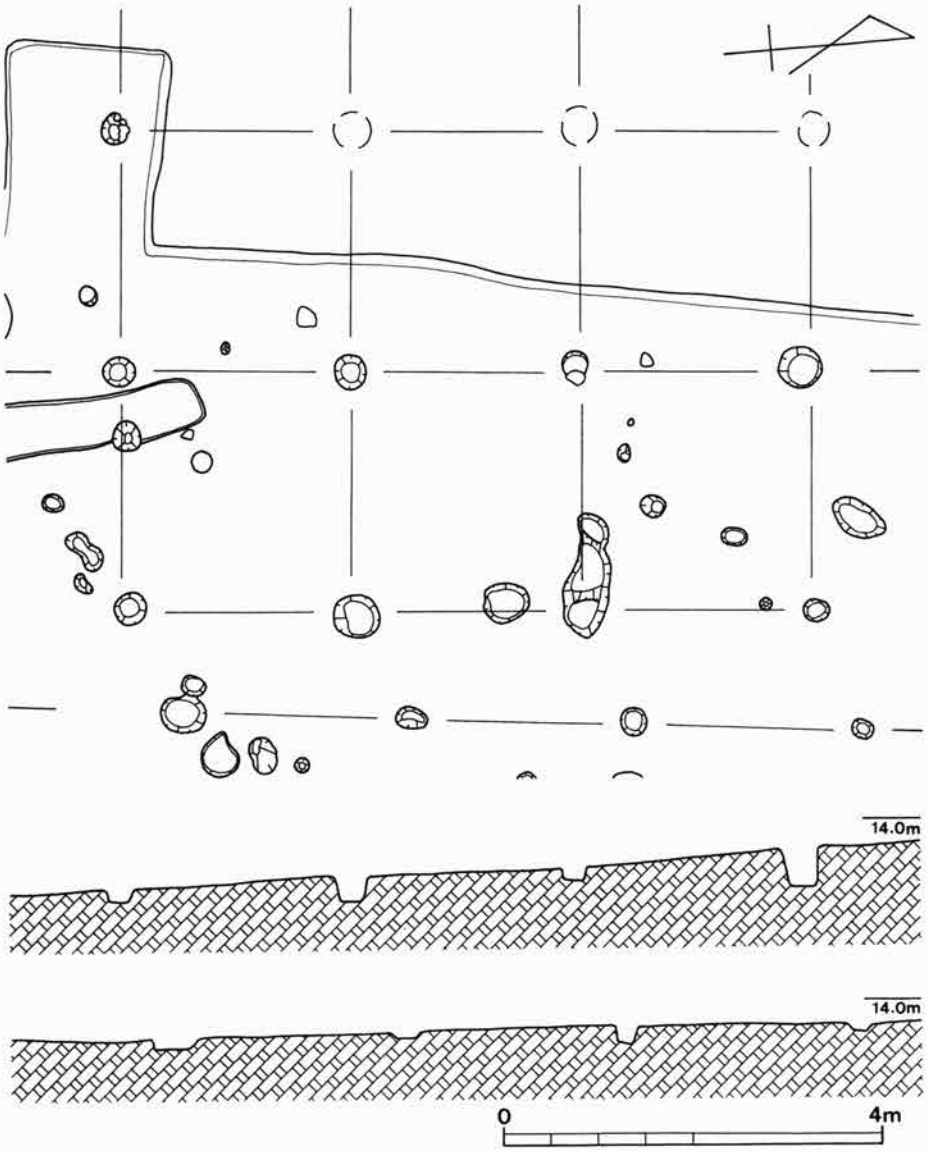
羨道部の大半は，試掘調査時に掘形まで掘削したが，拳大の石はなく敷石は玄室だけであった。羨門部手前に径約40cmの円形土坑があり，土坑内から須恵器(高杯・提瓶・台付き長頸壺・器台等)が，押し潰された形で出土した。前述の閉塞石下の土師器(壺)と考え合わせると，円形土坑やこの遺構に伴う出土遺物は，墓前祭祀に関連するものと思われる。

敷石を剝したところ，地山を整形した後，暗黄褐色土を15～20cm敷いて拳大の石をならべており，そのまわりに岩盤まで達する穴を掘り，石組していたと思われる。

墳形は，後世の削平により確認することはできなかった。

掘立柱建物跡(SB01)　第１トレンチを精査したところ，建物跡ではないかと思われる柱穴の並びを検出した。拡張したところ，南北３間・東西２間以上の建物跡であることがわかった。発見した場所が調査対象地の西端であったため，建物跡自体の規模を明らかにすることはできなかった。しかし，建物跡を検出したところからは，現在高等学校で見えないものの，志楽川沿いの田園風景を一望のもとに眺めることができる高台であり，居住には最適の場所と言える。高台はさらに四方に続いており，この辺り一帯には，SB01のような建物跡が遺存していると思われる(第77図・図版第48)。

建物跡の時期は，柱穴内出土の遺物が破片であったため，限定することはできなかったが，鎌倉～室町時代にかけての中世の建物跡であることが判明した。これは，この辺り一帯が「志楽荘」として栄えた頃にあてはまるが，今回掘立柱建物跡(SB01)１棟を検出し



第77図　SB01・SA01実測図

たにすぎず，「志楽荘」と関連するかは，今後検討したい。

柵列跡(SA01)　第1トレンチで検出した掘立柱建物跡(SB01)に並ぶ。南北方向の柵列で，建物跡とほぼ同一方向であることから，時期は建物跡と同じと思われる。柱穴からの出土遺物はなかった(第77図・図版第48)。

土坑(SK01～18)　拡張区から検出した土坑は，18基ある。時期のわかるものは，SK13のみで，建物跡と同じ中世の遺構である。土坑の性格については，不明である。SK01・

02•08•09からは，電柱を支えるワイヤーの束や，丸木などが出土した。これは，検出した土坑にごく最近のものも含まれることを示している。

溝跡(SD01～03)　調査概要の項で記しているため，ここでは各規模を記すにとどめる。

SD02は，幅50cm・残存長3.8mを測る。かなりの削平を受けており，深さは約3cmあった。遺物は，出土していない。SD03もかなりの削平を受けており，幅40cm・残存長1.2m・深さ約7cmを測る。SD01は，幅80cm・残存長約3.5m・深さ約10cmを測る。溝内から，古墳時代の須恵器が出土した。泉源寺2号墳から流れ込んだものと思われる。

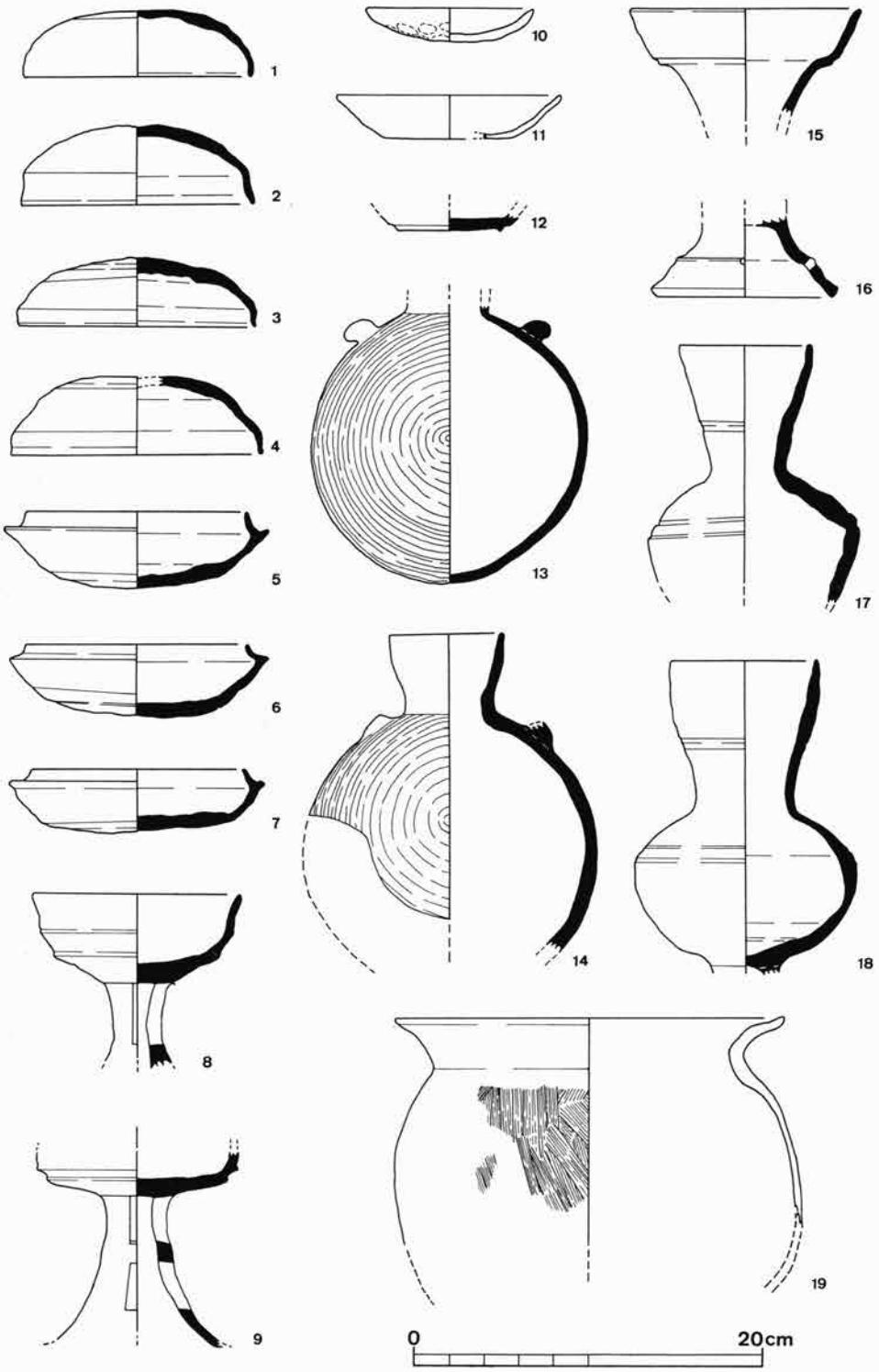
5. 出土遺物(図版第50・51図)

今回の調査で出土した遺物の主なものは，須恵器(杯蓋4点・杯身3点・高杯2点・提瓶2点・器台1点・台付き長頸壺2点・甕1点)，土師器(壺1点•皿2点)，中近世陶器1点，鉄器(刀1点・鏃5点)である。その大半は，泉源寺2号墳から出土したものである。出土位置別に記すと，横穴式石室玄室内出土の遺物は，第78図1～7・第79図1～6，羨道部の円形土坑内出土の遺物は，第78図8・9•13～18，閉塞石下出土の遺物は，第78図19である。鎌倉～室町時代の遺物は破片が多く，時期の判別のつくものとしてはごく数点であった。第78図10・11は，SK03出土で，12は表採遺物である。

杯蓋(第78図1～4)　1は，天井部から丸味を帯びて口縁部に至り，端部は丸く下方を向く。2・3・4は，天井部から丸味を帯びて口縁部に至り，屈曲する。口縁部は下方を向く。端部は，外下方に尖っている。手法上の特徴は，マキアゲ・ミズビキ成形後天井部外面1/2を回転ヘラ削り調整している。他は，回転ナデ調整を施す。いずれも，陶邑の第2型式第4段階に該当する。(注5)

杯身(第78図5～7)　5は，内湾しながら立ち上がり，受部に至る。受部は，内上方に立ち上がる。6・7と比べて底部はやや深く，丸い。6は，平坦な底部から内湾しながら立ち上がり，受部に至る。受部には，凹線を巡らさずに，内上方に立ち上がる。7は，平坦な底部から外上方に内湾しながら立ち上がり，受部に至る。受部は，内上方に立ち上がる。手法上の特徴は，マキアゲ・ミズビキ成形後底部外面1/2を回転ヘラ削り調整している。他は，回転ナデ調整を施す。陶邑の第2型式第4段階に該当する。(注6)

高杯(第78図8・9)　長脚二段スカシの高杯である。8は，外反しながら立ち上がる細い脚部に，内湾しながら立ち上がる杯部を貼り付けたものである。杯部の半ばに凸線が2条巡る。9よりも8の方が杯は深く，丸い。手法上の特徴は，マキアゲ・ミズビキ成形後，杯底部外面を回転ヘラ削り調整している。他は，回転ナデ調整を施す。杯部半ばの凸線上部をヘラで回転ナデ仕上げしている。



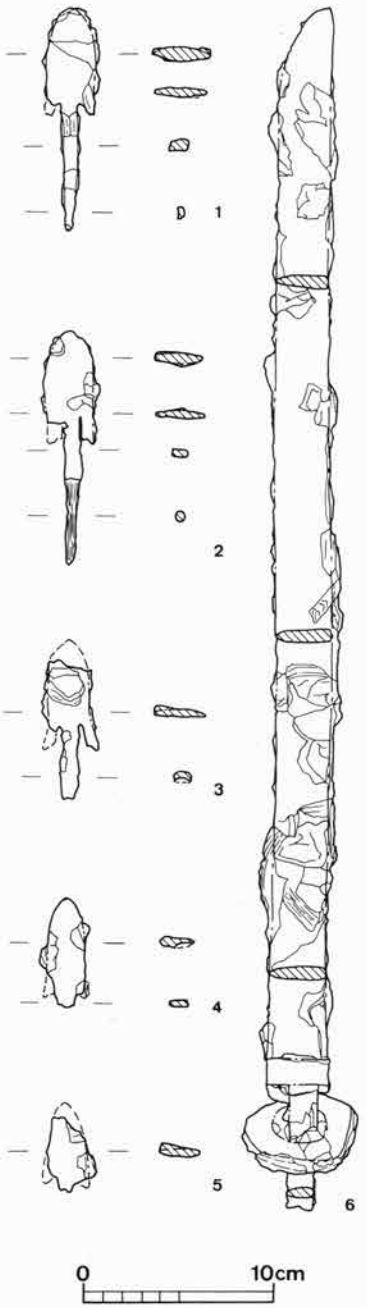
第78図　出土遺物（須恵器1～9・12～18，土師器10・11・19）

提瓶(第78図13・14)　口頸部は，やや外傾して立ち上がり，端部は丸い。体部は内湾しながら立ち上がり，体部1/2に最大径がくる。肩部に小さな把手を付す。手法上の特徴は，マキアゲ・ミズビキ成形後口頸部を回転ナデ調整する。体部にロクロ回転を利用したカキ目調整を行う。

器台(第78図15・16)　焼成・色調・胎土等から，同一個体と思われる。脚部は，外反しながら外下方に降り，「く」の字にわずかに屈曲して，さらに外下方に降りる。端部は平坦である。「く」の字に屈曲するところに，小さな円形のスカシがある。上半部は内湾しながら立ち上がり，「く」の字に屈曲して外上方に立ち上がる。端部は丸い。屈曲部に1条の凹線が巡る。手法上の特徴はマキアゲ・ミズビキ成形後回転ナデ調整を施す。

台付長頸壺(第78図17・18)　口頸部はやや外傾して立ち上がり，端部は丸い。口頸部半ばに，1条の凹線が巡る。体部は肩部で「く」の字に緩やかに屈曲し内湾しながら脚部に至る。体部の1/2に最大径を有し，凹線2条が巡る。17には，凹線間に刺突文を施す。17•18とも，脚部は欠損している。手法上の特徴は，マキアゲ・ミズビキ成形後回転ナデ調整を施す。体部下半を回転ヘラ削り調整している。

土師器・壺(第78図19)　体部は，内湾しながら立ち上がり，頸部で大きくゆるやかに外反して，口縁部は外上方を向く。端部は，丸い。手法上の特徴は，体部外面に縦方向のハケ目を施し，内面はナデ調整している。



第79図　出土遺物(鉄器)

土師器・皿(第78図10・11)　丸味を帯びながら外上方に立ち上がり，口縁端部は丸い。底部外面に指圧痕が残る。

中近世陶器(第78図12)　平坦な底部から外上方に立ち上がる。底部内側に断面三角形の高台が巡る。底部しか残っておらず，また表採遺物であるため，今回検出した遺構に伴う

ものか，詳細は不明である。

鉄刀・鉄鏃(第79図１～６)　鉄刀は，残存長63cm・幅約3cmを測る。柄が折れているため，70cm前後の刀であったと思われる。鍔も残っており，長辺6cm・短辺5cmを測る。この他に鉄鏃５点も出土しているが，全体的に錆がかなり付いており，残りは悪い。かろうじて形のわかるものは，逆刺のある有茎式の鏃である。

6. ま　と　め

今回の発掘調査の結果，次のような成果を得ることができた。

(1)　昭和60年度に舞鶴市教育委員会が行った分布調査では，奈良～平安時代にかけての遺跡と思われていた泉源寺遺跡は，古墳時代から中世にかけての複合遺跡であることが判明した。

(2)　調査地東端で谷地形，西側で建物跡等を検出したことは，泉源寺遺跡の東端を示すものである。

(3)　横穴式石室を主体部とする古墳を発見した。古墳は，後世にかなり削平されていた。しかし，今回の発見によって，志楽川沿いに古墳がきわめて少ないのではなく，今なお田畑の下に遺存している可能性が指摘できる。

(4)　調査地西端で検出した中世の遺構(建物跡・柵列跡・土坑等)は，さらに西側の高台につづくことが明らかになった。これらの検出遺構に加えて，調査地北西約200mの高台にあったと推定される奈良・西大寺の末寺である泉源寺跡の存在は，志楽荘との関連を窺わせるものである。

以上のような調査成果は，発掘調査例の少ない東舞鶴において貴重な資料を提供したと同時に，今後の近辺調査に期待される。　(岡崎研一)

注１　調査補助員　毛利雅一
　　作　業　員　村田敬一・横山一成・尾関　鼎・奥本ふじ子・神原さつき・堯部芳枝・公文謹子・崎山由美子・崎山芳子・左近栄子・中田志津子・樋口君子・前田まき子・椋本泰江・村田光江・森田泰子・森下美由紀・森下ゆく枝・森本八江子・森本玲子・森本サカエ・山崎房子・横山万智子・岩山節子・公文カヨ・松岡恵美子・佐々木久美子・中瀬房子・古川真澄　(以上，敬称略)

注２　『京都府の地名』日本歴史地名大系26　平凡社　1981

注３　『京都府遺跡地図』第２分冊（第２版）　京都府教育委員会　1987

注４　松浦俊和「ミニチュア炊飯具形土器論――古墳時代後期・横穴式石室墳をめぐる墓前祭祀の一形態――」(『史想』第20号　京都教育大学考古学研究会)　1984.1　69～71頁

注５　「陶邑Ⅱ」(『大阪府文化財調査報告書』第29輯　財団法人大阪文化財センター)　1977

注６　注５と同じ

9. 八ケ坪遺跡第3次発掘調査概要

1. はじめに

八ケ坪遺跡第3次調査は，京都府木津土木事務所が施工している一般地方道木津平城線拡幅工事に伴う事前調査である。この道路は，通称「歌姫街道」と呼称されており，奈良県境にある皿池から現行の畦畔に沿って北上し，相楽の集落に至るルートをとる。今回の調査地は，曽根山一里塚から近鉄高の原駅周辺に至る都市計画道路に入るまでの部分に当たり，道路自体は，現行の畦畔に対し45°の角度をもっている。

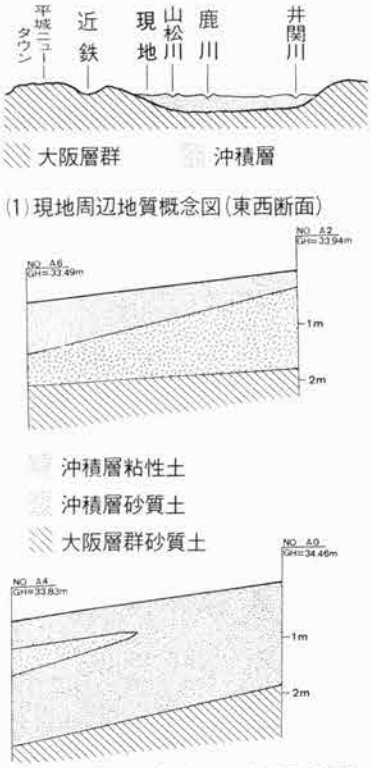
調査は，京都府土木建築部の依頼を受けて，調査第2課調査第3係長　小山雅人，同調査員小池　寛が担当し，本概要の執筆・編集は小池が行った。なお，現地調査及び整理作業期間中，多くの方々の御協力を得た。(注1) また，京都府木津土木事務所・木津町教育委員会からは，終始，援助を受けた。記して感謝の意を表したい。なお，調査に係る経費は，全額京都府土木建築部が負担した。

2. 調査の経過

調査は，歌姫街道の東西に沿って，幅2.5mのトレンチを設定して行った。第1トレンチは，道路の東側に設定したもので，東西農道を挟んだ北側に1.5m×4mの小トレンチと，農道南側に3m×95mのトレンチからなる。排土を1か所に集積する必要が生じたため，幅3mのうち，表土剝ぎのみで終了した部分もある。掘削は，表土・床土を重機によって剝ぎ，床土下を人力により精査した。なお，湧水が著しいため，全面を精査するには至らず，特に，南半部分は，3か所の断ち割り坑を設定し，写真撮影・図化により土層堆積状況の把握に努めた。第1トレンチは，明確な遺構・遺物の検出がないことと道路建設の日程等から昭和62年11月9日から同年11月24日まで調査を行い，関係諸機関の説明会開催後，引き渡しを行った。第2トレンチは，道路の西側に幅1.5m・長さ90mの範囲に設定し，表土剝ぎを重機で行い，以下，人力で精査を行った。南半は，第1トレンチと同じく湧水が著しく，表土剝ぎの後，写真撮影・平板測量を行い，土層観察に努めた。トレンチ北半では，中世溝・奈良時代の遺物包含層を確認したため，随時，写真撮影・図化作業を行った。第2トレンチは，昭和62年12月11日に関係者説明会を行い，引き渡しを終了した。第3トレンチは，都市計画道路の南側に設けたもので，重機搬入が困難であることや，第1次調査地に隣接し，遺構・遺物の検出が確実視されていたため，全掘削作業を人力で行った。排

土は，第３トレンチ内に集積する空間がないため，第２トレンチを埋め戻しながら行った。第３トレンチは，80m²の範囲であるが，奈良時代・鎌倉時代の遺構・遺物を検出することができた。随時，写真撮影等の作業を行い，昭和62年12月23日に，すべての現地調査を終了した。本概要に使用する土層・遺構番号は，その性格に関係なくLocus Numberの略号L. N.を冠して表した。なお，土層についてはL. N. 1を耕作土，L. N. 2を床土，L. N. 3を遺構検出面として認識した。一方，遺構番号にはL. N. 11以上の番号を当て，遺物取り上

第80図　調査地位置図（1／25,000）



第81図　地質・土層関係参考図
(注2より転載・追記)

曽根山一里塚近影（南から）

げ等を行った。

文中のLocus Numberは，現地調査で使用したものと一致している。

3. 位置と環境

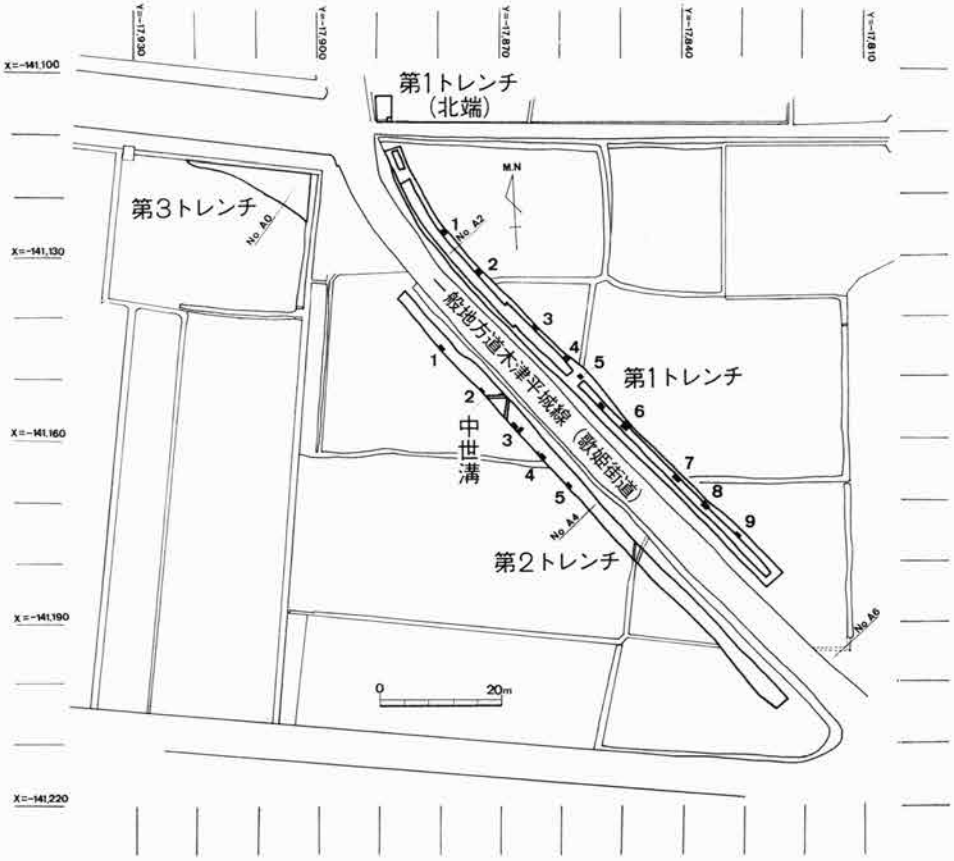
八ケ坪遺跡は，京都府相楽郡木津町大字相楽小字八ケ坪に所在する。本遺跡は，木津川の南方に広がる沖積地の西端に位置している。大阪層群が基層となり，沖積層上に山松川・鹿川が流れている。位置的には，丘陵端と山松川のほぼ中間に立地している。周辺は，平坦な低地と小起伏状の丘陵地にわけられる。平坦な低地は，鹿川・山松川により形成された扇状地と木津川の氾濫による。一方，小起伏状丘陵地は，木津川に沿う山麓に広がる地形で，山城一帯が山城湖と呼ばれる湖底であったことを窺わせる。地質学的な調査は，この道路建設に伴うボーリング調査がある(注2)。調査は，スウェーデン式サウンディング試験で行われ，その結果，土層は沖積層粘性土⇒沖積層砂質土⇒大阪層群砂質土の層相をなすことが判明した。沖積層粘性土は，道路西側で2m前後，東側で0.3～1mと東西で大きく様相が異なっている。沖積層砂質土は，主に東側に厚く堆積しており，北側で1.7m・南側で0.8mを測り，現表土と比較して急傾をなしている。大阪層群砂質土は，基本的に水平堆積であり，地表下から2m前後に最上層が確認されている。大阪層群上に厚く堆積する沖積層粘性土の最上層および中間層には沖積層砂質土層が堆積しており，流入土として認識される。

歴史的環境は，散布地としての曽根山遺跡・鶴ノ町遺跡等が周辺に所在しており，その

遺跡群では奈良時代の土師器・須恵器が表面採集されている。また，本遺跡の北方にある相楽遺跡では，古墳時代中期から奈良時代の遺構が確認されており，特に，奈良時代の集落は，周辺に類例がないことから重要な資料となっている。また，相楽遺跡内には，式内社である相楽神社が鎮座している。歌姫街道沿いに立地していることから，歌姫街道の成立時期にも大きく係わっていると考えられる。また，式内社との関連によって周囲の遺跡を解釈することは，奈良時代における八ケ坪遺跡周辺の重要性を明らかにする手立てにもなる。

八ケ坪遺跡は，今までに2回の調査が行われている。以下，それらの調査について概観し，問題点を整理しておきたい。

第1次調査(注3)……1981年7月から11月にかけて木津町教育委員会が調査を行った。検出した遺構は，掘立柱建物跡1棟・溝等である。掘立柱建物跡は，東西4間×南北1間以上，北側に中央2間分の庇が付くものであることが判明した。ピット周辺から土師器・杯Aが出土しており，時期的には平城宮式Ⅲ期に比定できる。今回，調査を行った第3トレンチ



第82図　　トレンチ及び断ち割り拡設定図

北側に位置しており，どのように関連していたかを後述したい(第92図)。

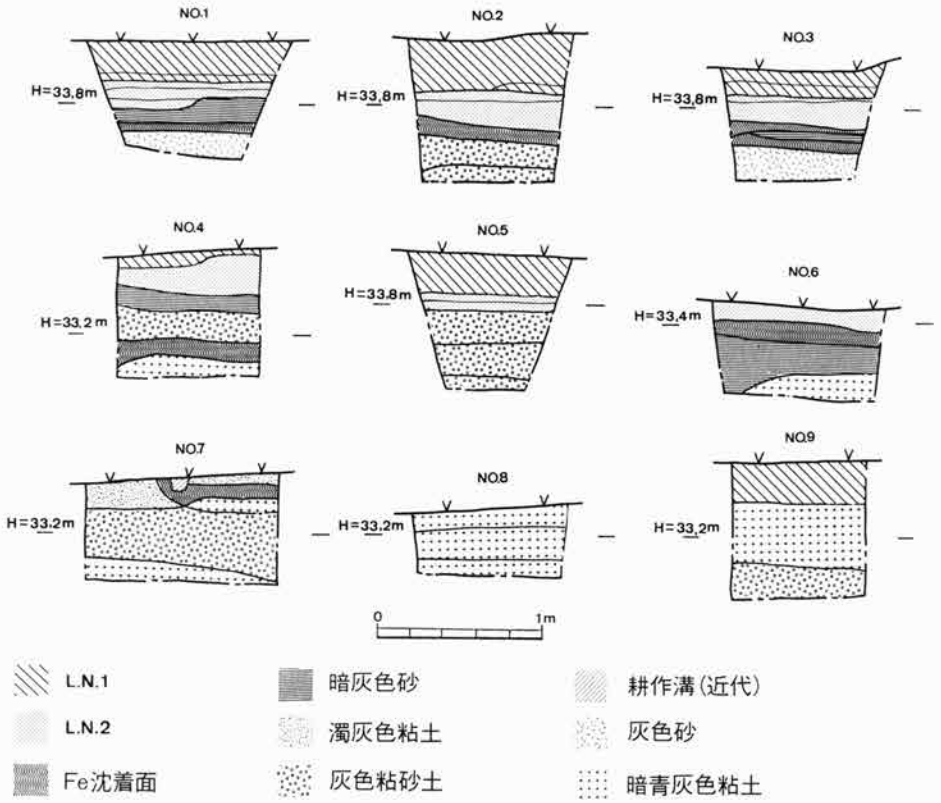
第2次調査(注4)……1986年8月から12月にかけて，当調査研究センターが行った。南北に長い調査地で，中世段階の溝（条里水田遺構）・古墳時代の溝等を確認している。この地域の条里水田の分割が半折型であることは，歴史地理学の分野からの指摘があるが，この調査において，南北100mを越える中世条里水田遺構が確認された。これらの溝は，まさに相楽条里と深く関係するものと考えられている。他に，弥生・奈良時代の土器等も出土している。

4. 検 出 遺 構

今回の調査は，上述のように合計3か所にトレンチを設定して行った。第2・3トレンチは，中世・奈良時代の遺構を検出したが，第1トレンチについては，顕著な遺構がなく，土層堆積状況を把握するにとどめた。以下，各トレンチについて記述したい。

第1トレンチ(図版第52(1)・53(1))

トレンチを設定した部分は，一部畑地があったものの大半は水田であり，著しい湧水が



第83図　第1トレンチ断ち割り断面東壁実測図

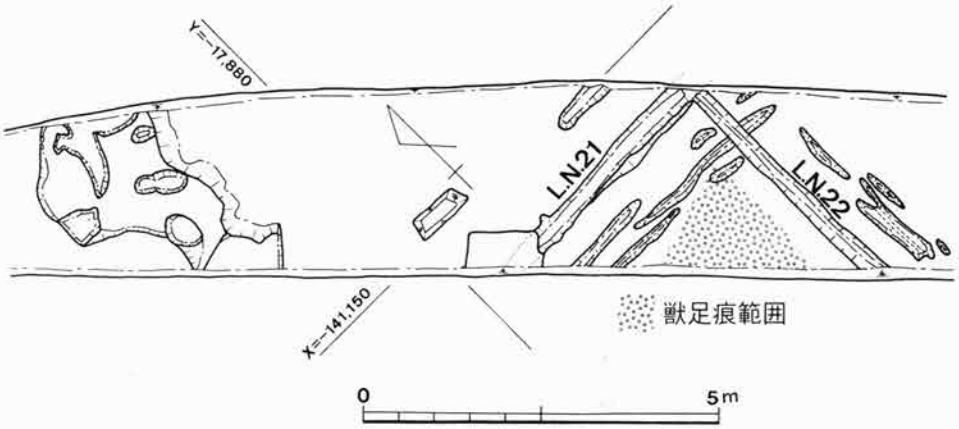
あった。表土及び床土中には，近代の遺物が包含されていた。床土下の土層は，断ち割りNo.1では，濁灰色粘砂土の下層にFe沈着層・灰色砂が堆積している。この層序関係は，南半部分を除き，基本的には全断ち割りで確認している。しかし，細かく見れば，床土下に堆積する濁灰色粘砂土の厚さとFe沈着面の有無などに違いがあり，旧地形を復元する際に有効な資料になる。これは，先述した沖積層粘性土の範ちゅうに入り，堆積状況を正確に観察することにより氾濫の方向や広がりを推定する場合に良好なデータになる。南半部分は，床土下に濁青灰色粘土が厚く堆積する。この濁青灰色粘土の上面にはFe沈着面があり，仮に一定時間の溜水を考えた場合，耕作土・床土搬入以前においての耕作を疑う必要が出てくる。また，この層下に灰褐色粘質土・暗青灰色粘土層が厚く堆積していることからも，耕作不可地を肯首するものと考えてよい。

第１トレンチにおいては，L. N. 3(遺構検出面)は確認していないが，断ち割りNo.4からNo.5付近では奈良時代の遺物が僅少ながら出土しており，耕作土・床土搬入以前には存在していた可能性が高いと言える。また，トレンチ南半の濁青灰色粘土層は，第２次調査においても確認されており，一帯に広がりを見せている。地形図を見ると，細い凹部が観察でき，東西方向に時期は確定できないものの，小河川が流れていた可能性がある。断ち割りNo.7～No.9の最下層には，一部において灰褐色砂利層ないし砂層が堆積しており，小河川の存在を窺わせている。

第１トレンチ調査終了後の道路建設工事において，軟弱地盤を排除するために，地表下2mまで掘り下げた状況を観察すると，黒褐色粘土が厚く堆積し，一部，礫層と互層をなしている。その範囲の広がりを確認することは，今後の大きな課題となる。

第２トレンチ(図版第52(2)・53(1)・54)

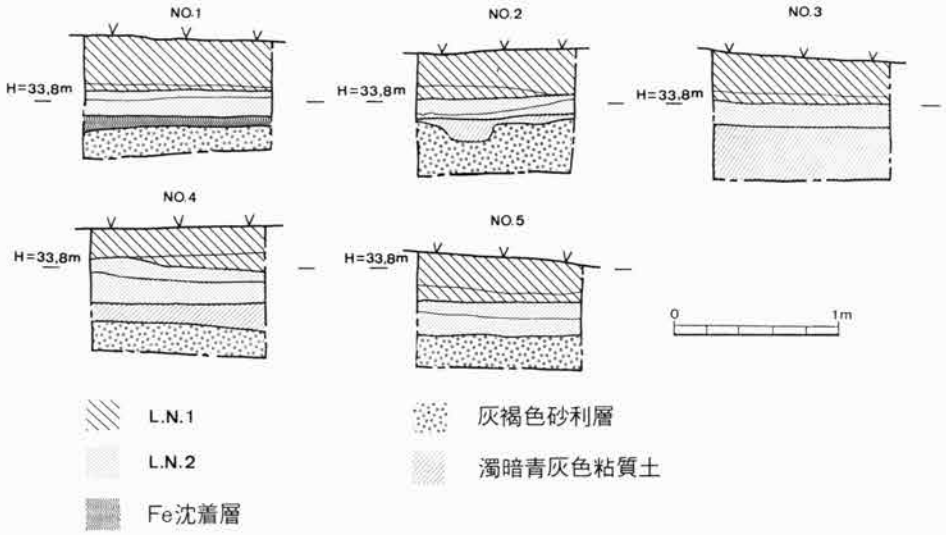
道路西側に幅3m 前後の範囲において設定したもので，大略は第１トレンチと同じく濁



第84図　第２トレンチ遺構実測図

青灰色粘土層が広がっている。しかし，その濁青灰色粘土層の広がりは，第1トレンチと比べれば範囲は狭く，トレンチ中央部分では安定した暗茶褐色土層(L. N. 3)を検出することができた。基本的な堆積状況は，第1トレンチに比べ，Fe沈着層が薄いものの酷似している。これは，第1トレンチとの地表高差は50～90cmを測り，削平が第1トレンチほど激しくはなかったことを示している。遺構は，L. N. 3を切り込んで掘られた溝・ピット等であり，L. N. 3の上層には，奈良時代の遺物包含層(L. N. 3a)が堆積している。溝(L. N. 21)は，東西方向に幅40cm・深さ30cmの規模で直線的に掘り込まれている。溝の主軸線は，真北から90°振っており，断面形態は「U」字形を呈している。溝の中央部分は，二段に掘られており，少し深くなっている。溝の埋土は，暗灰褐色粘質土が主体となっているが，間層には，薄く灰褐色砂が入っており，この溝が急激に埋まったものではなく，徐々に埋まったと考えられる。溝内からの出土遺物は，中世の瓦質土器や瓦器等があるが，細片であり，器表面の磨滅が著しく良好な資料とは言えない。溝(L. N. 21)の周辺には，平行して穿たれた溝状遺構を数条検出している。溝状遺構は，長いもので2.5mを測るに過ぎず，耕作に伴い掘り込まれたものと考えられる。なお，溝状遺構からの遺物は出土していない。

溝(L. N. 22)は，真北方向と主軸線が一致する。溝の幅は，25cm・深さは20cmを測り，断面形態は，浅い「U」字形を呈している。溝内の埋土は，溝(L. N. 21)と同じく暗灰褐色粘質土であり，間層には灰褐色砂が数層入っている。溝内からの出土遺物には中世須恵器の細片が数点あるが，年代設定ができる資料ではない。この溝の東側には，長さが1m前後の溝状遺構が4条穿たれているが，先述したように耕作に伴うものと考えられる。溝

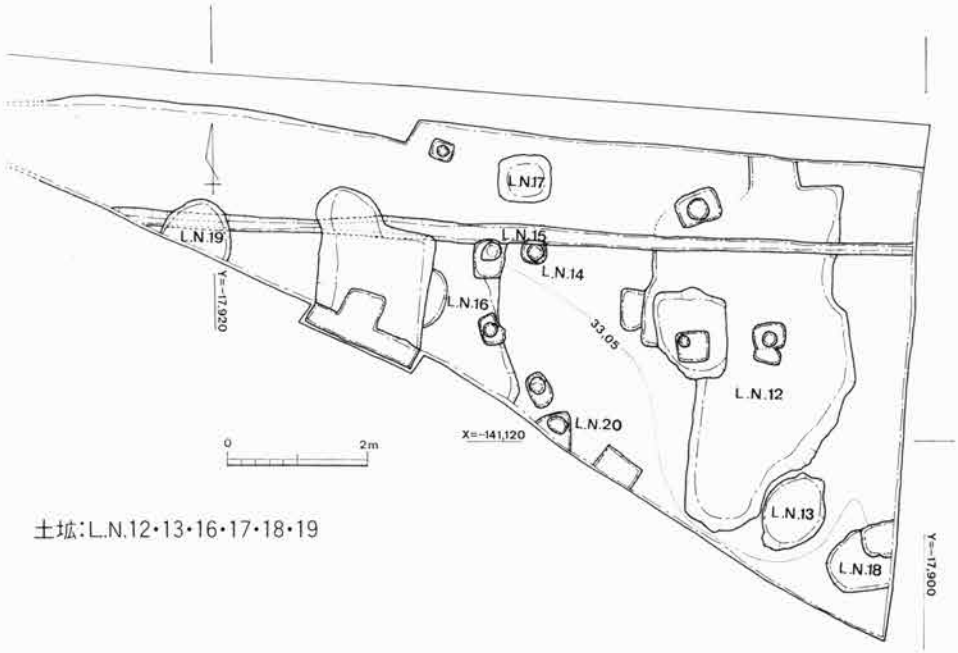


第85図　第2トレンチ断ち割り断面西壁実測図

(L. N. 22)は，溝(L. N. 21)の周辺に掘り込まれた溝状遺構を切って穿たれており，少なくとも溝(L. N. 21)を掘り，その溝に平行した土地整備が終了した後に，穿たれたと考えられる。しかし，双方の溝の切り合い関係は，土層断面からは明らかにできず，極めて短時間に行われた可能性がある。溝(L. N. 21)と溝(L. N. 22)に挟まれた南西部分には，獣足痕が確認できた。その足痕の方向は一定しておらず，進行方向を見い出すことはできない。獣足痕の範囲は，溝(L. N. 21)に平行して走る溝状遺構より南側であり，また，溝(L. N. 22)とも一定の距離をおいていることから，区画整備が終了した後の耕作に伴うものであると考えられる。溝(L. N. 21)と溝(L. N. 22)の溝底面の高低差は10cmを測り，仮に条里水田遺構の基準が深く掘られたと仮定した場合，東西方向に走る溝(L. N. 21)がその基準であった可能性は高くなる。これは，第2次調査においてもある程度確認された事項でもある。

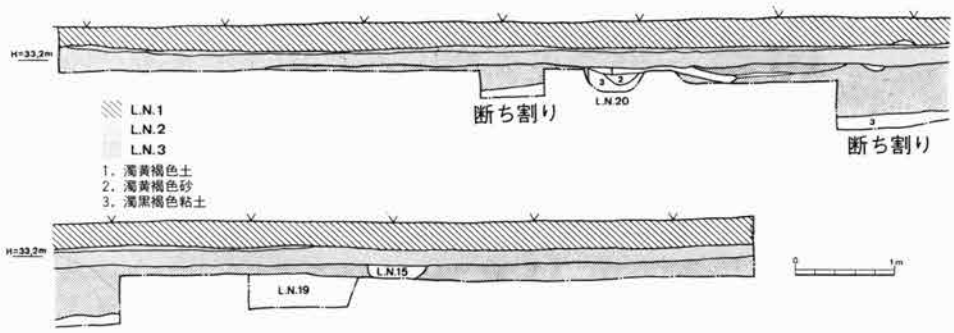
第3トレンチ

調査地で最も北端に位置するトレンチであり，歌姫街道に隣接する部分である。掘削面積は最も狭いが，遺構・遺物をほぼ全面において検出している。土層堆積状況は，L. N. 1・L. N. 2下に遺構検出面(L. N. 3)が全面に広がっていることが確認できた。また，一部では，L. N. 3の直上に，遺物包含層L. N. 3aが5cm程度堆積していることも確認できた。包含層内の遺物は，奈良時代の土師器が圧倒的に多いが，遺存状態は極めて悪く，器形等の詳細を明らかにするには至らなかった。検出した遺構は，土坑・柱穴・中世溝等である。



第86図　第3トレンチ遺構実測図

土坑(L.N.12 図版第56(1))は，南北4.4m×東西2.4mの規模を有している。深さは一定しないが，最深部で30cm，最浅部で15cmである。平面プランは，北側部分は方形を呈しているが，南側部分は不整形の楕円形である。土坑本来の形態は，北側部分のように方形を呈していたと考えられる。土坑の大半は，後世の削平を受け残存していないが，北側の方形部分に何らかの施設があり，南側部分は，それに至るスロープであったと考えることもできる。土坑の埋土は，濁暗茶褐色粘質土を主体とし，底部には薄く褐色粘土が堆積している。上層には褐色砂利層が入っており，水流によってもたらされたと解釈できる。遺物は，土坑底面から奈良時代の須恵器・土師器片が出土している。破片間で復元できる資料もあることから，土坑の性格としては，生活一般に係わる廃棄物を投棄する目的をもっていたと考えられる。土坑(L.N.13)は，直径1m・深さ20cmを測り，楕円形を呈している。底部は平らな面をもち中央部分が若干，深く掘り込まれている。土坑の埋土は，濁暗茶褐色粘質土1層である。坑内からの出土遺物はないが，先述した土坑(L.N.12)と隣接していることや埋土の質が酷似することから，奈良時代に属するものと考えられる。土坑(L.N.18)は，第3トレンチの西端で検出したもので，農道下にその約半分が入り全容は明らかではない。時期的には，他の土坑群と同一と考えられる。土坑群の土層堆積状況から，自然埋没とは考えられず，人為的に埋められたと考えられる。土坑(L.N.16)は，濁暗茶褐色土を埋土とするものであるが，大半が攪乱を受け正確な規模等は不明である。坑内から土師器の杯・甕が完形に近い状態で出土している。しかし，土器自体の遺存状況は極めて悪く，軟化したものが大半である。先述した土坑群とは完形に近い状態の土器が入っている点で性格も異なる。意図的に，土器を埋納した祭祀的な性格を持っていたとも考えられよう。土坑(L.N.19 図版第56(2))は，北側半分の検出であったが，直径1mの正円形を呈していると考えられる。底面は平らで，土坑の周囲壁は直立しており，坑内からは，奈良時代の須恵器片が数点出土している。この土坑は，他の土坑群では確認できなかった複雑な堆積状況を示している。基本的な堆積状況は，L.N.3以上は同一であるが，確実に



第87図　第3トレンチ南西壁断面図

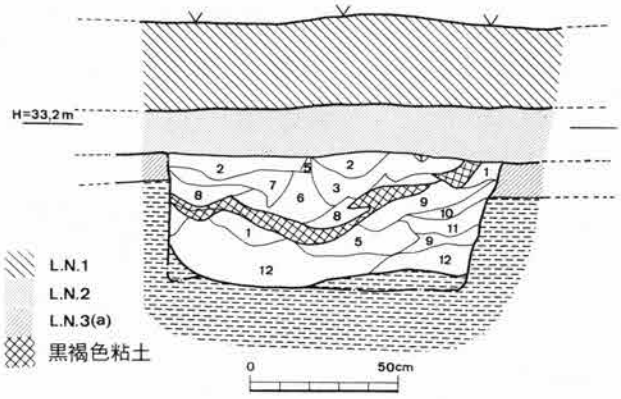
L.N.3を切っていることが判明した。坑内の堆積状況は，最下層に黒褐色緻粘土(第88図12)が堆積し，濁黄褐色粘土ブロックが薄く間層として入っている。また，褐色粘土や砂層も薄く入っている。特に，土坑中央部分が，凹状堆積を呈する黒褐色粘土は，他の層が断続的であるのに対し，帯状をなしている。これは，土坑の底部に何らかの有機質を素材にした施設が腐食し，陥没した段階で凹状を呈したものと解釈できる。なお，堆積層は細分できることから，人為的に埋められたと考えられる。土坑の性格は，これだけの要素で断判することは危険であるが，土坑(L.N.16)のような祭祀的性格を有していた可能性もある。

柱穴は，トレンチ内で10基確認している。基本的な規模は，50cm×40cmの長方形である。柱穴内からの出土遺物はないが，土坑(L.N.12)を完掘後に柱穴を2基確認していることから，概ね奈良時代に比定できる。柱穴ごとの主軸線は一定せず，掘立柱建物跡としての復元は不可能である。柱穴間の切り合い関係は，明らかにできなかったが，2時期以上にわたっていると考えられる。隣接地域での調査に期待したい。

溝(L.N.15)は，主軸線がほぼ真北より90°振るものであり，第2トレンチの溝(L.N.21)と同一方向である。溝内の埋土は暗灰褐色粘質土で，出土遺物には中世土師器・須恵器や白磁椀等がある。溝の周辺には，第2トレンチで検出したような溝状遺構はない。

第3トレンチにおいて検出した遺構・遺物の概要は以上であるが，包含層の広がりは，掘削範囲内で確認できたことから，第3トレンチ周辺を中心に奈良時代の諸施設が存在する可能性は極めて高いと言える。

各時期の遺構は，中世の条里水田遺構に関係する溝とそれに伴う溝状遺構，奈良時代の柱穴・土坑等である。前者は，第2次調査との関連で考えるべきもので，中世の土地区画事業が周辺一帯にかなり広い範囲で行われていたことを明らかにでき，出土遺物から年代が判明した。また，後者に関しては，歌姫街道に隣接する地域でもあり，北方に所在する相楽遺跡および相楽神社にも近在することから，交通の要衝地であることが，各遺構の成立要因であったと考えられる。



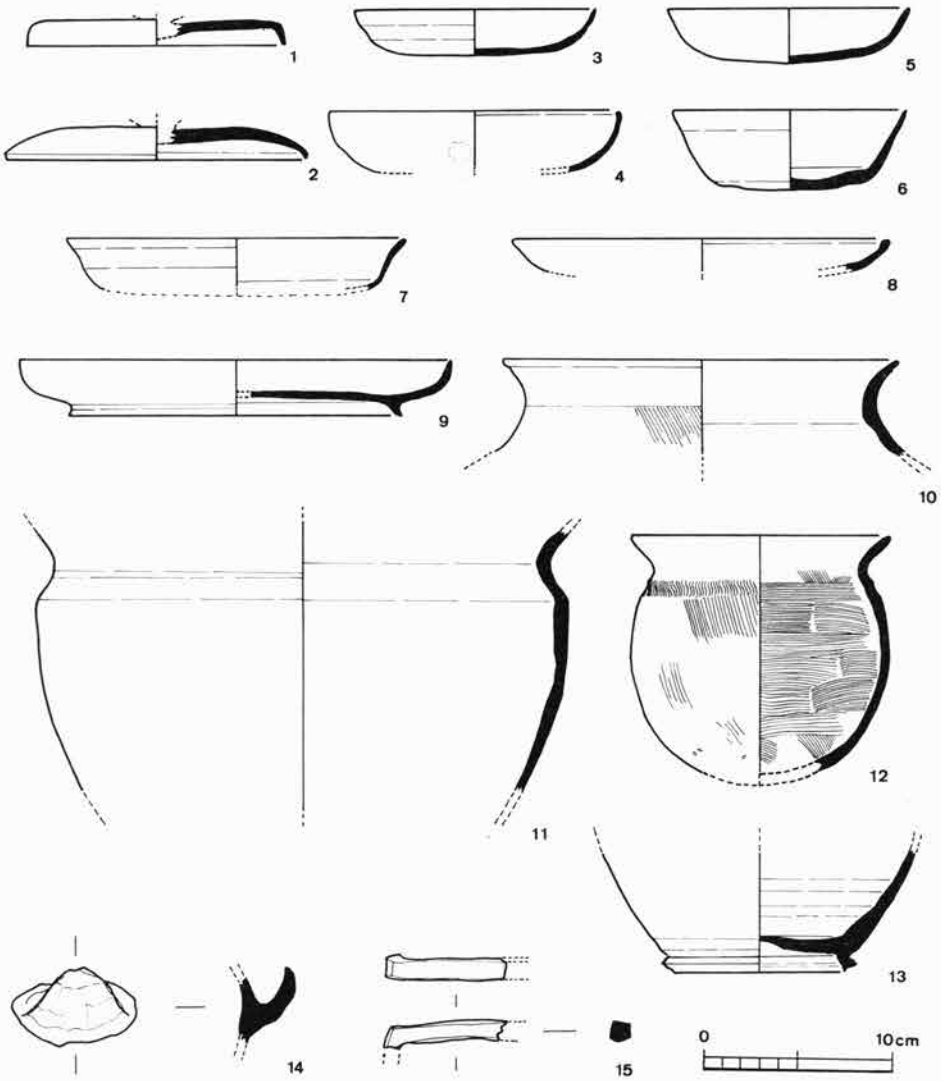
第88図　第3トレンチL.N.19西南壁断面図

1. 黄褐色粘土　2. 濁暗茶褐色土　3. 暗茶褐色土　5. 淡青灰色粘土　6. 濁灰色土　7. 淡黄褐色砂質土　8. 黒色土　9. 灰色砂　10. 濁茶褐色土　11. 10より砂質　12. 黒褐色緻粘土

5. 出 土 遺 物(図版第57)

調査地全域からの土器の出土量は，整理箱で換算すれば3箱である。なお，土師器に関しては，遺存状態も悪く，かろうじて外形実測ができたにすぎず，最終の成形・調整等は，不明な点も多い。各個体の法量は出土遺物法量表に譲り，ここでは，各個体のアウトラインについて記述することとする。

須恵器・蓋(第89図1・2)　1(図版第57-1)は，口唇部から内傾直立する口縁部と平らな天井部をもつ。天井部にはつまみが付く。2は，内面に肥厚する口唇部をもち，天井部



第89図　出 土 遺 物 実 測 図

1・2・9・11～14; L·N·12, 3・6; L·N·16, 他は包含層

にはつまみが付く。概して8世紀でも前半期に比定できる。

須恵器・杯身(第89図6，図版第57-2)　底部から直線的に外傾し，口唇部は尖頭状である。

土師器・杯・椀・皿(第89図3・4・5・7・8・9)　3(図版第57-5)は，内湾する杯部と平らな底部をもつ。4は，内湾する体部をもち，口唇部は内面に肥厚する。5は，底部と体部に稜線が入り，底部は安定性を欠く。7は，平らな底部と体部に稜がはしり，外湾する口縁部を持つ。8は，ほぼ水平に近い底部で，口唇部内面は肥厚する。9(図版第57-4)は，底部から屈曲し直立する口縁部をもつ。高台は，外方へ直線的に開く。

付表4　出土遺物法量表

図番号	種別	器種	口径	底径	器高	胎土	色調	焼成	残存率
89-1	須恵器	蓋	14.0	—	—	密	青灰色	硬質	40%
89-2	須恵器	蓋	16.0	—	—	密	淡青灰色	硬質	20%
89-3	土師器	杯	12.9	—	2.45	粗	茶褐色	軟質	60%
89-4	〃	杯	15.4	—	3.3	粗	淡茶褐色	軟質	5%
89-5	〃	杯	13.0	—	2.95	粗	淡黄茶褐色	軟質	60%
89-6	須恵器	杯	12.35	—	4.1	密	淡青灰色	硬質	40%
89-7	土師器	皿	17.9	—	3.0	密	淡茶褐色	軟質	15%
89-8	〃	皿	19.8	—	—	粗	淡茶褐色	軟質	5%
89-9	〃	杯	22.8	(高) 17.7	3.0	粗	淡黄茶褐色	軟質	30%
89-10	〃	甕	26.0	—	—	粗	淡茶褐色	軟質	5%
89-11	〃	甕	28.2	—	—	粗	(外)淡茶灰色 (内)暗灰褐色	軟質	20%
89-12	〃	甕	13.7	—	13.2	粗	淡茶褐色	軟質	40%
89-13	須恵器	壺	—	(高) 10.4	—	密	淡青灰色	硬質	20%
89-14	土師器	把手	—	—	—	粗	淡茶褐色	軟質	5%
89-15	須恵器	平瓶把手	—	—	—	密	青灰色	硬質	5%
91-1	瓦器	皿	8.4	—	2.3	粗	淡黄茶褐色	軟質	20%
91-2	土師器	皿	10.6	—	1.8	密	淡赤褐色	軟質	15%
91-3	瓦器	椀	8.5	—	—	密	(外) 灰白色 (内) 淡灰色	軟質	10%
91-4	〃	椀	14.0	—	—	密	(外) 黒灰色 (内) 灰白色	軟質	10%
91-5	白磁	椀	16.0	—	—	密	灰褐色	硬質	5%
91-6	土師器	羽釜	つば径 27.0	—	—	密	黄褐色	硬質	5%

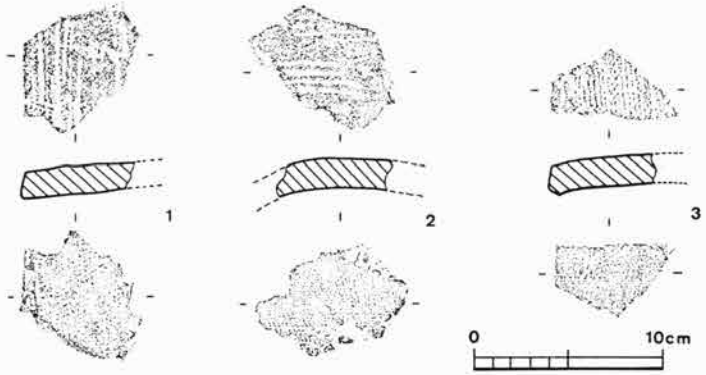
(単位はすべてcmである)

土師器・甕(第89図10・11・12)　10は，頸部で直立した後，外湾する口縁部をもつ。頸部外面に右下がりのハケ目が観察できる。11は，口縁部と底部を欠く。胴体部は，肩が張らず，頸部から外湾する口縁部をもつ。12(図版第57-6)は，丸底で，胴部は球体を呈している。口縁部は，外方へのびる。外面は縦方向にハケ目があり，内面は横方向のハケで調整している。概して，ていねいな調整を施しており，遺存状態も良好である。なお，内面全面にタール状の付着物が観察できる。特に，底部は，5mmの厚さがある。分析によらなければ素材については言及できないが，漆の可能性もある。

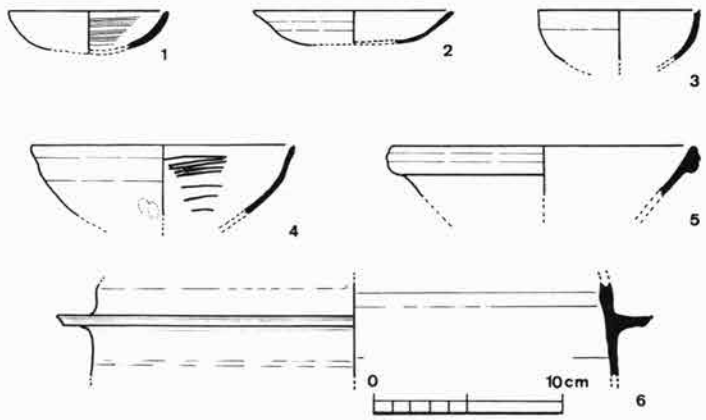
須恵器・壺(第89図13，図版第57-3)　高台の断面が不整形の台形を呈しており，やや内湾気味の胴部下半にはロクロナデの稜が入る。

土師器・把手(第89図14，図版第57-8)　側面観は，正三角形に近似し，把手の外面には成形痕であるナデが顕著に残る。断面では，鋭く上方にのび，端部は屈曲している。

須恵器・平瓶把手(第89図15，図版第57-7)　断面が四角形を呈しているが，平瓶天井部とのジョイント部分までは残存していない。



第90図　出土瓦拓影（包含層出土）



第91図　出土遺物実測図（包含層・溝内出土）

瓦片(第90図1・2・3)　1(図版第57-9)は，外面には，粗い縄目叩き目が観察できるが，全面には残っていない。内面は，布目圧痕が残る。2は，1と同じように粗い縄目叩き目が残り，内面には細かい布目圧痕が観察できる。3(図版第57-10)は，細かい縄目叩き目で，内面には布目圧痕が残る。これらの瓦片は，焼成が堅緻である。出土層位と共伴遺物から奈良時代に比定できる

資料である。

瓦器(第91図1・3・4)　1は，瓦器の中でも最終末に近い時期の皿で，内面にわずかな暗文が残る。3は，口唇部に明瞭な稜線が入る椀である。4は，外面に指頭圧痕，内面に暗文が残る椀である。中世条里溝からの出土である。

土師器・皿(第91図2)　平らな底部から外方へ直線的にのびる口縁部をもっている。

白磁・椀(第91図5，図版第57-11)　細片資料のため，口径等に問題点があるが，釉は比較的厚くかかっている。

土師器・羽釜(第91図6)　鍔は，水平にのびており，端部上縁は尖頭状を呈している。器表面のハケ目は，極めて細かいものである。

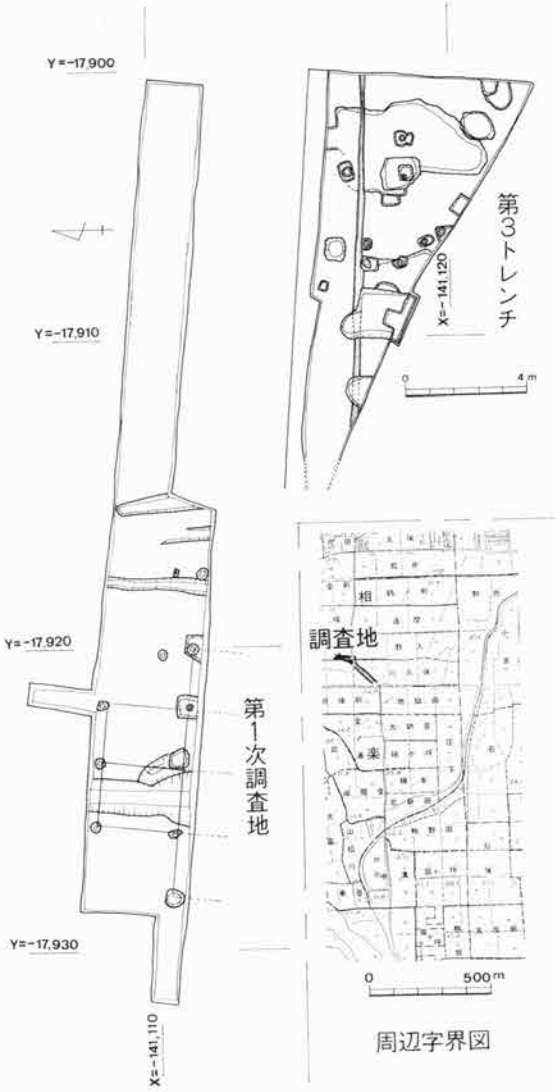
奈良時代の出土遺物は，広義に解釈すれば，日常雑器がその大半を占めている。時期設定ができる資料としては，文中においても指摘したように須恵器・蓋(第89図2)がある。概ね8世紀前半期として考えてよい資料である。一方，土師器については，暗文等が観察できないため，正確な型式を記述することはできないが，杯(第89図4)の口唇部が内面に肥厚する特徴から，8世紀の中葉を前後する時期と考えることもできる。土師器・甕(第89図12)は，残存率が40%であり，その内面には，タール状の付着物が確認できた。また，外面には，2次的な火を受けた煤が残っていることから，確実に周辺で煮焚きを行ったと考えられる。瓦片は，セピア色のものも出土しているが，量的には少ない。これらの瓦片のみでは，八ケ坪遺跡の性格の一端さえも明らかにし得ないが，言及を許されれば，当地周辺に瓦で屋根を葺いた掘立柱建物が存在していた可能性も指摘できる。

中世段階の土器群には，時期設定が可能な資料として，白磁・椀(第91図5)がある。概ね，鎌倉時代に比定できよう。この時期にあって白磁が貴重な食器であると仮定すれば，周辺に建物が存在した可能性が出てくる。皿等の日常雑器が出土することも考えなければならない。

6. 小　　結

八ケ坪遺跡が所在する沖積地には，遺物散布地として登録されている遺跡が点在しているが，その具体的な性格が明らかになっているものはごくわずかである。その中において，相楽遺跡の存在は大きな意義がある。遺跡内には，式内社である相楽神社が鎮座しており，相楽遺跡の調査で確認された遺構の成立と深く係わっていると考えられる。今回の調査においても同時期の遺構を検出しており，どのような関係があったかが注目される。相楽遺跡と八ケ坪遺跡を直線的に結ぶルートとしては，いわゆる，歌姫街道がある。歌姫街道の成立時期・元位置は解明されていないが，仮に，現行のルートと一致するならば，双方の関係は肯首できる。第3トレンチで検出した柱穴・土坑は，その性格を明らかにし得るも

のではないが，八ケ坪遺跡第1次調査では，庇をもつ掘立柱建物跡が確認されている。この時期に庇をもつ掘立柱建物が構築されることは重要な意味があり，第3トレンチでは復元できなかったが，そのような掘立柱建物跡が周辺に広がっている可能性はある。しかし，1次調査で検出した掘立柱建物跡は，規模がかなり異なっている柱穴を1棟の掘立柱建物跡として復元しており，柱穴内出土遺物がないにも係わらず，同時期と判断している等の問題点も多い。第3トレンチ内で検出した柱穴は，方向性がなく，土坑を完掘後にあらたに柱穴が確認できたことや，土坑の遺物の中に8世紀中葉を前後する土器が出土すること，また，新たに確認した柱穴の時期が他の柱穴より古くなることなどから，庇をもつ掘立柱建物跡の存在を再検討する必要がある。これらの問題点は，調査面積にも大きく関係するが，歌姫街道の成立時期にも大きな影響を及ぼすことは必至であり，周辺の調査は，今後，慎重に行われねばならない。今回の調査においては，第1次調査の成果と第3トレンチの遺構を結び付けることはできなかったが，曽根山遺跡・相楽遺跡との関連で掘立柱建物跡の主軸線等細かな点について考察しなければならない。



第92図　第1次調査・第3トレンチ平面図

中世段階の遺構には，条里水田遺構がある。第2トレンチで検出した溝(L.N.21)は，深く掘り込まれており，条里の基準として認識できる。特に，相楽条里が，半折型であることは，歴史地理学の分野からの指摘があり，(注5)第2次調査においても確認されている。溝(L.N.21)が半折型の東西を区画する水田遺構と考えた場合，一町東西を二分する位置関係と合致する。また，南北を五分割したラインと溝(L.N.22)は，少しの相違

はあるものの，広い意味で一致すると言える。第3トレンチで検出した溝(L. N. 15)も，半折型の東西溝と考えられ，幅・深さの点でも溝(L. N. 21)と一致している。相楽条里がどの範囲にまで及んでいるかは，歴史地理学の立場で研究が進展しているが，考古学的調査でその広がりを確認できたことは，大きな成果であったと言えよう。なお，現行の条里に対して45°の角度で存在する歌姫街道のこの部分は，それからも新しい要素であると言えるが，道路に隣接する部分で中世溝(L. N. 21・L. N. 22)を検出し，更に，第2次調査とも結び付くことから，この道路は，中世以降に敷設されたと考えられる。状況から判断すると中世以降でもかなり新しい時期である可能性が極めて高いと言えよう。これについては，曽根山一里塚の存在も重要である。

第1・2トレンチの南半部分で確認した青灰色粘土の落ち込みは，第2次調査でも確認されている。換言すれば，南半部分は，中世以前から湿地であったと言える。この部分の水田一筆毎の字名を見れば，「川久保」「地獄田」と言う湿地及び水に関する字名がある。しかし，周辺には，「柿ケ坪」「北新田」「野入」「石塚」のようにそれらとの関係がない字名が見られる。考古学的な調査によって湿地であったことが証明されたが，そのような状況が，字名に残り，両者が一致したことは，発掘調査を進める上で，字名が非常に重要であることを教示してくれている。ほ場整備事業が進展する中，旧来の字名を保存していくことは，地域研究の上で重要なことである。　（小池　寛）

注1　調査参加者　井上直樹・佐藤正之・藤本忠嗣・島原みどり・坂田千晶
　　調査協力者　宮本純二・中西　修・吉川啓太・石田真一・高橋美久二

注2　この調査は，道路建設工事に伴い，軟弱地盤を除去する必要土量のデータを得るため，京都府木津土木事務所が，株式会社関西土木技術センターに委託して行われた。京都府木津土木事務所の特別の配慮により，以下の報告書の提供があった。記して深謝する次第である。「住宅宅地関連公共施設整備促進土質調査委託報告書」1987年11月

注3　木津町『木津町史　史料篇』1986

注4　松井忠春「八ケ坪遺跡第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』　第23冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1987
　　なお，上記の文献以外に松井忠春氏からは，遺構の解釈や基本事項について，極めて多くの御教示を受けた。小結の記述にあたっても参考になる同氏の見解を得た。記して感謝の意を表したい。

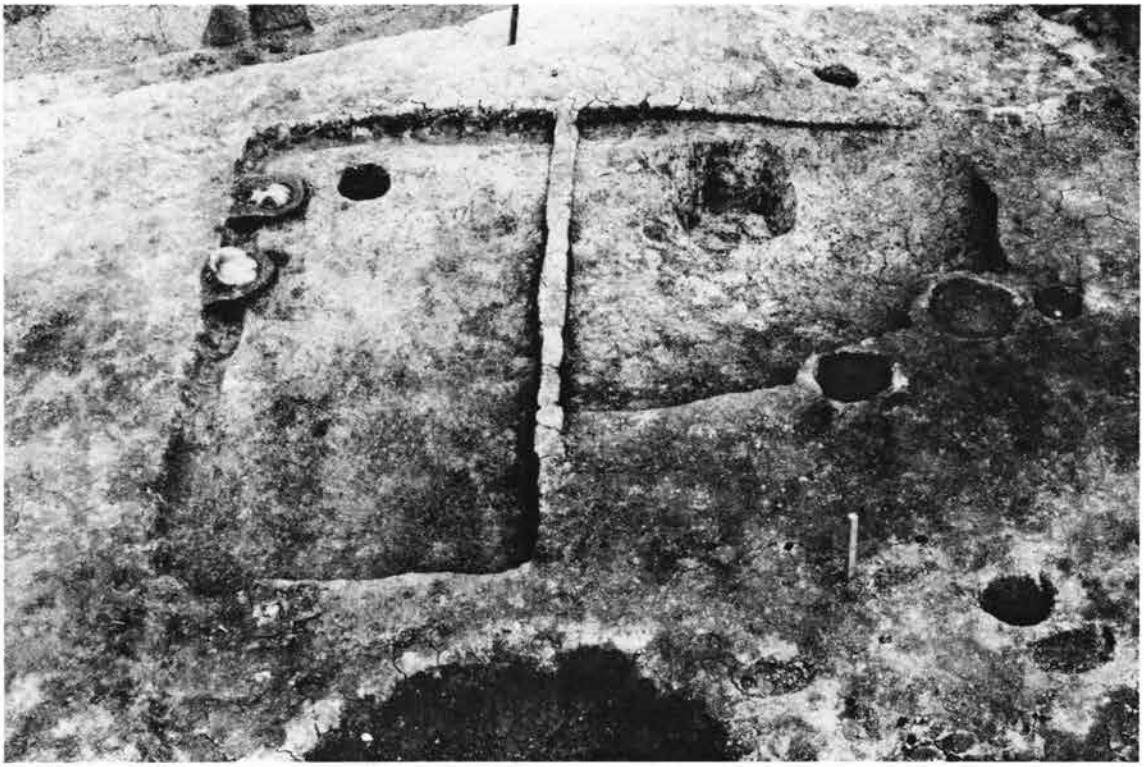
注5　谷岡武雄『平野の開発――近畿を中心にして――』(昭和39年　東京)

※八ケ坪遺跡の略号は，「KSH」である。これは第1次調査から踏襲されており，今後の調査でも，同一記号を使用することが望ましい。

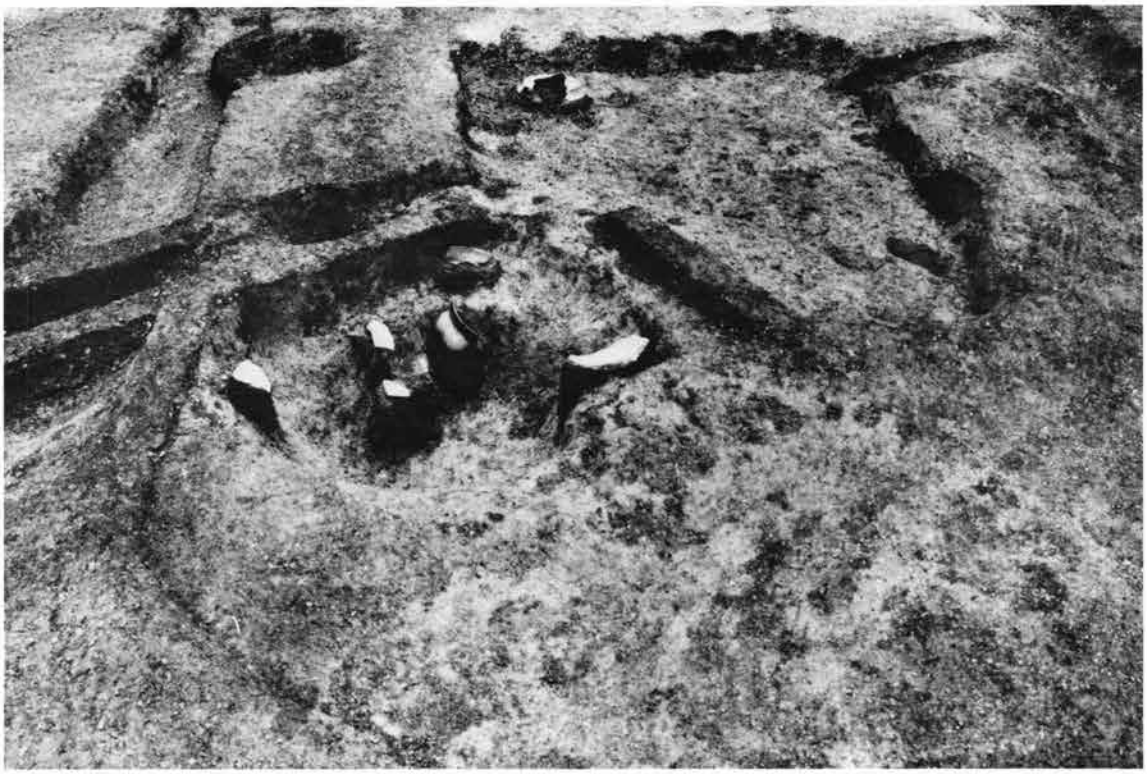
図　　版

図版第１　　谷内遺跡第４次

(1)　調査地遠景（西から）



(2)　８トレンチＳＨ05（西から）

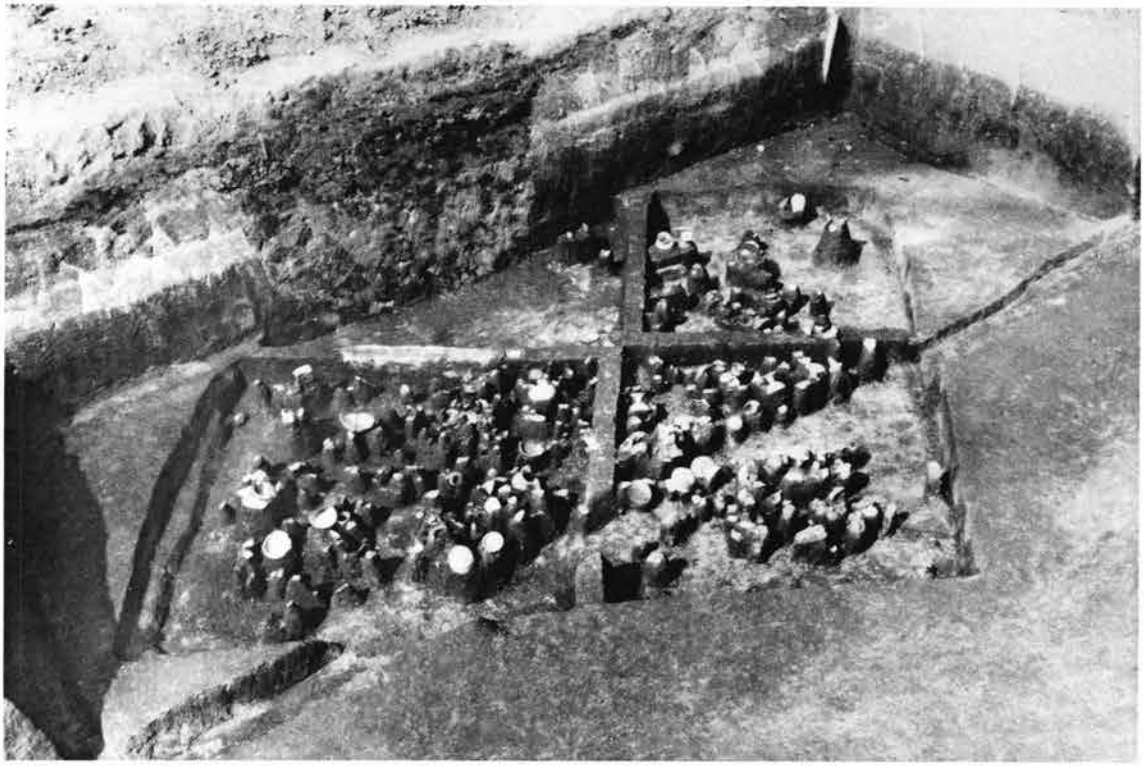


(1)　９トレンチＳＨ13(ＳＫ09)，ＳＫ10ほか（西から）

(2)　13トレンチＳＨ16（西から）

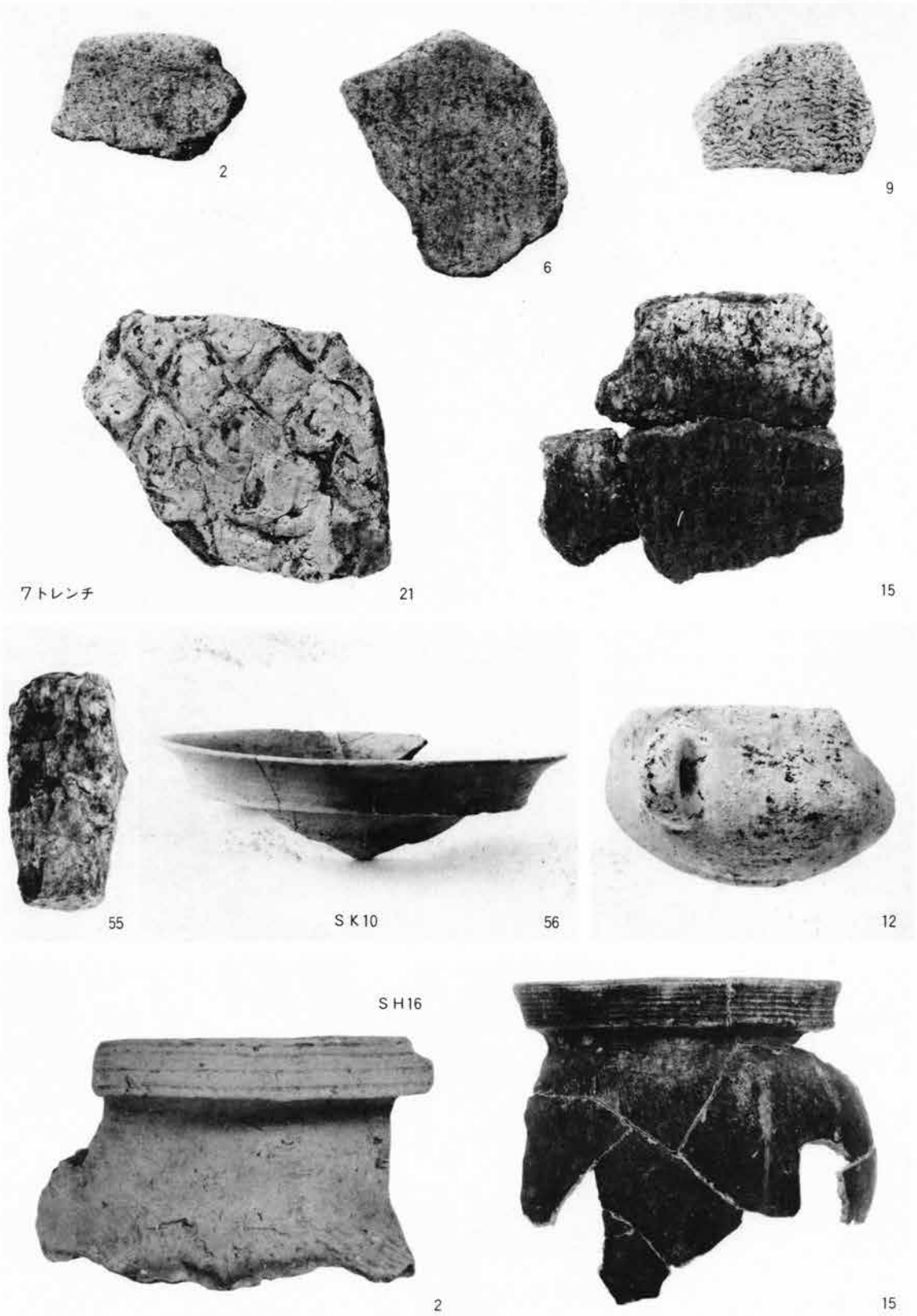
図版第３　　谷内遺跡第４次

(1)　13トレンチＳＨ15（完掘状況、南から）



(2)　13トレンチＳＨ15（遺物出土状況、南から）

図版第４　　谷内遺跡第４次



縄文土器・ＳＫ10・ＳＨ16出土遺物（番号は実測図番号）

24

26

25

45

43

42

ＳＨ15出土遺物　(1)

32

34

39

36

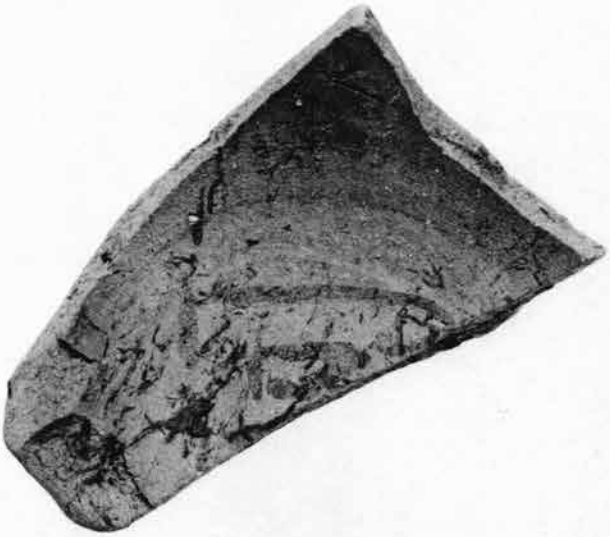
48

47

ＳＨ15出土遺物　(2)

54

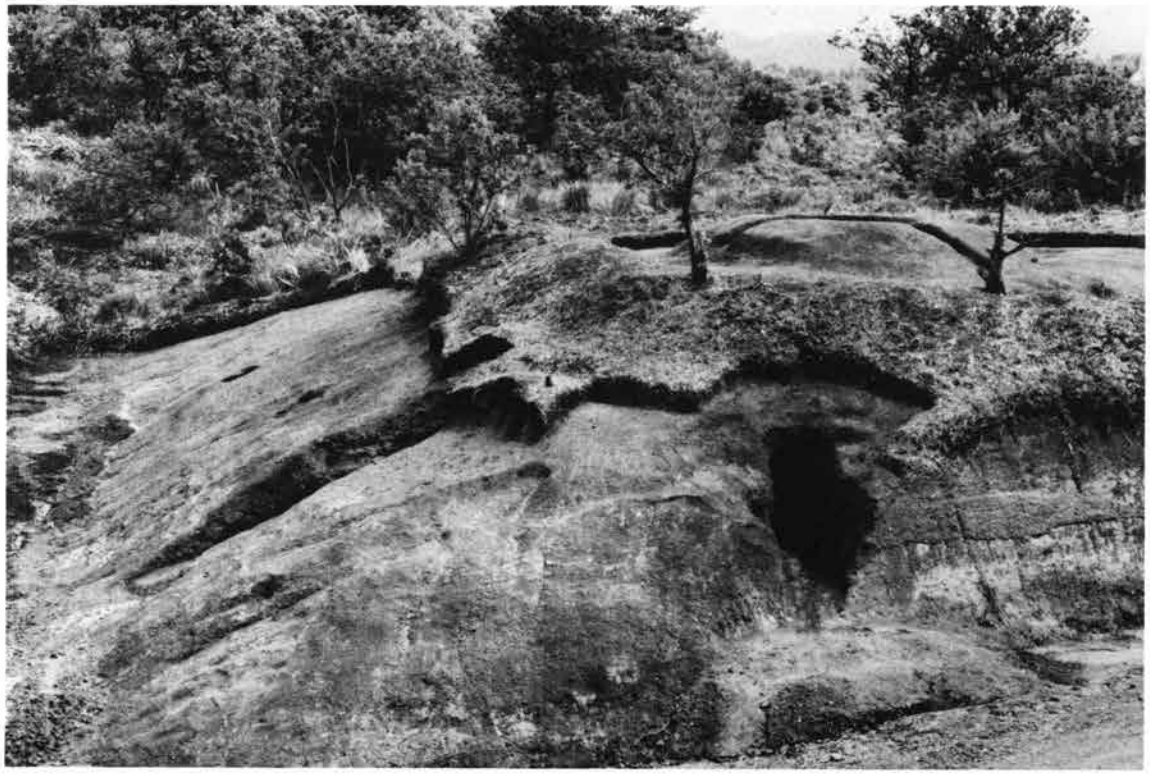
53



53

墨書土器

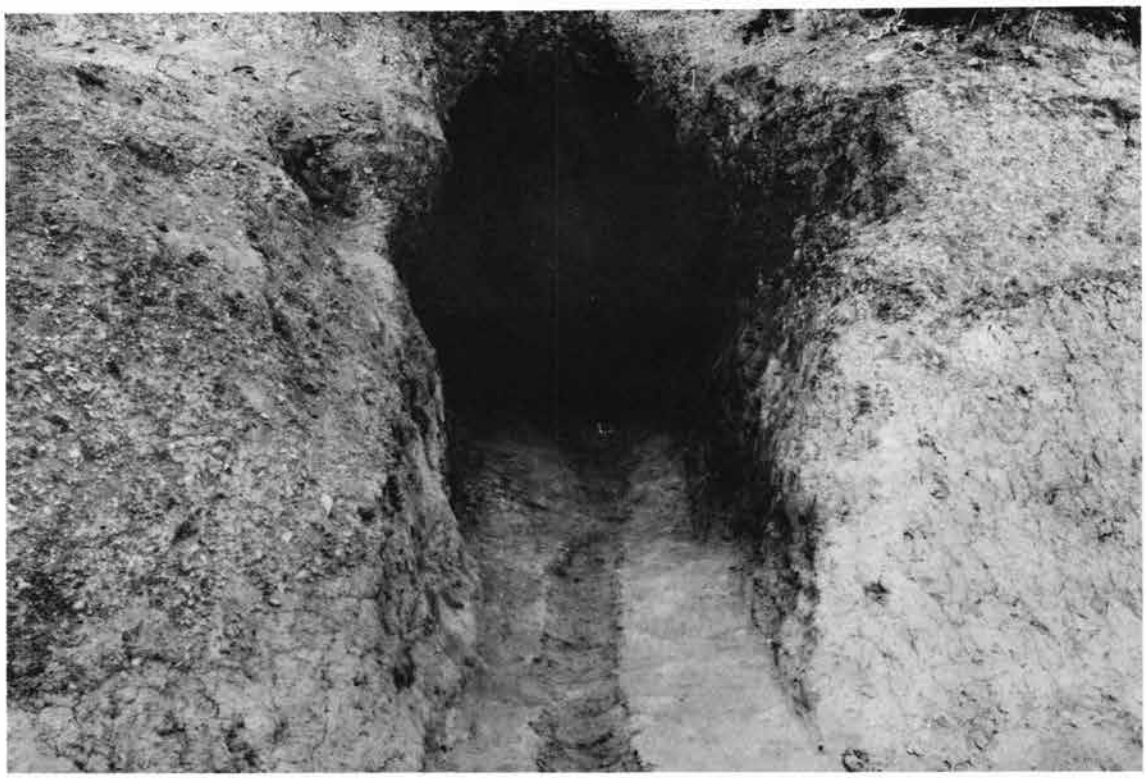
図版第8　栗ヶ丘横穴群



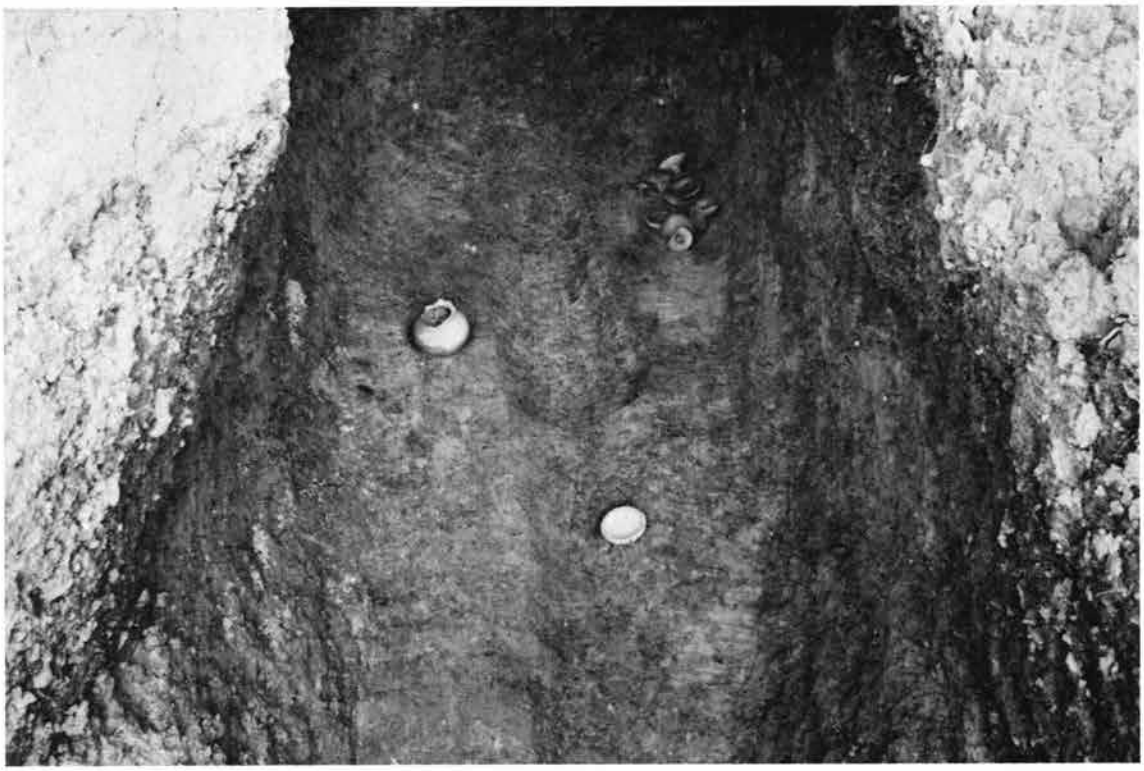
(1) 調査地南半部（西から）

(2) 調査地北半部（南から）

図版第９　　栗ヶ丘横穴群

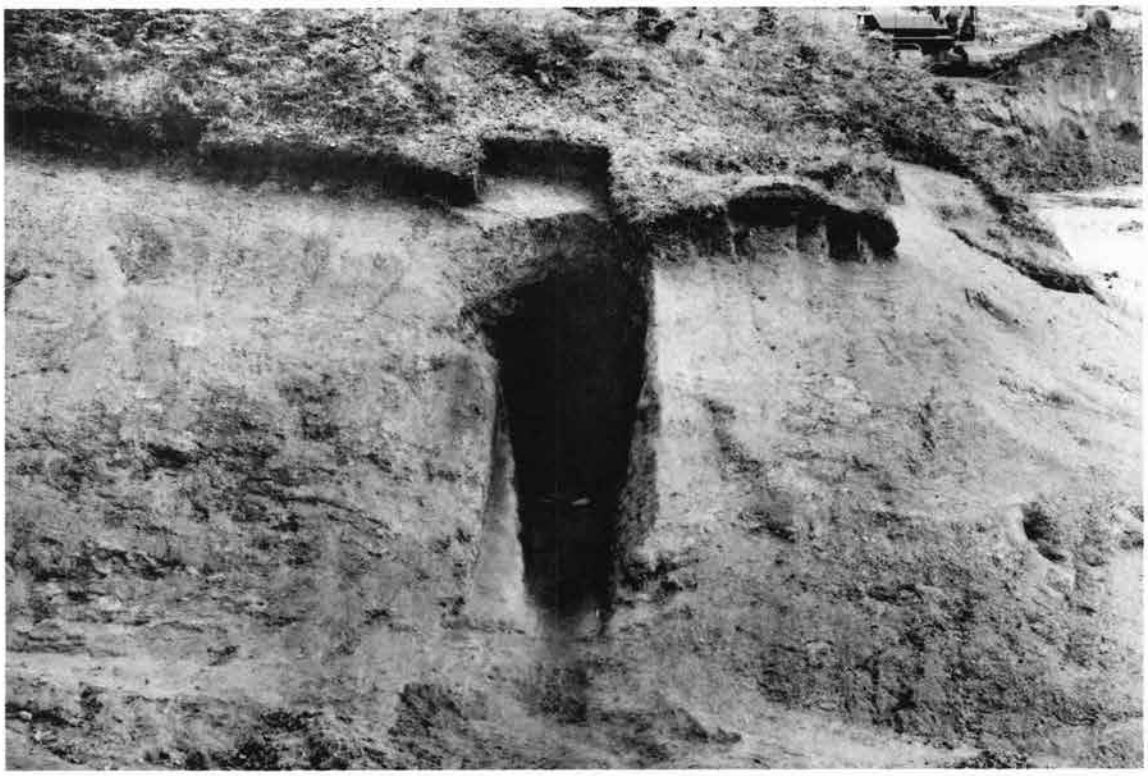


(1)　１号横穴全景（西から）



(2)　１号横穴玄室（西から）

図版第10　栗ヶ丘横穴群

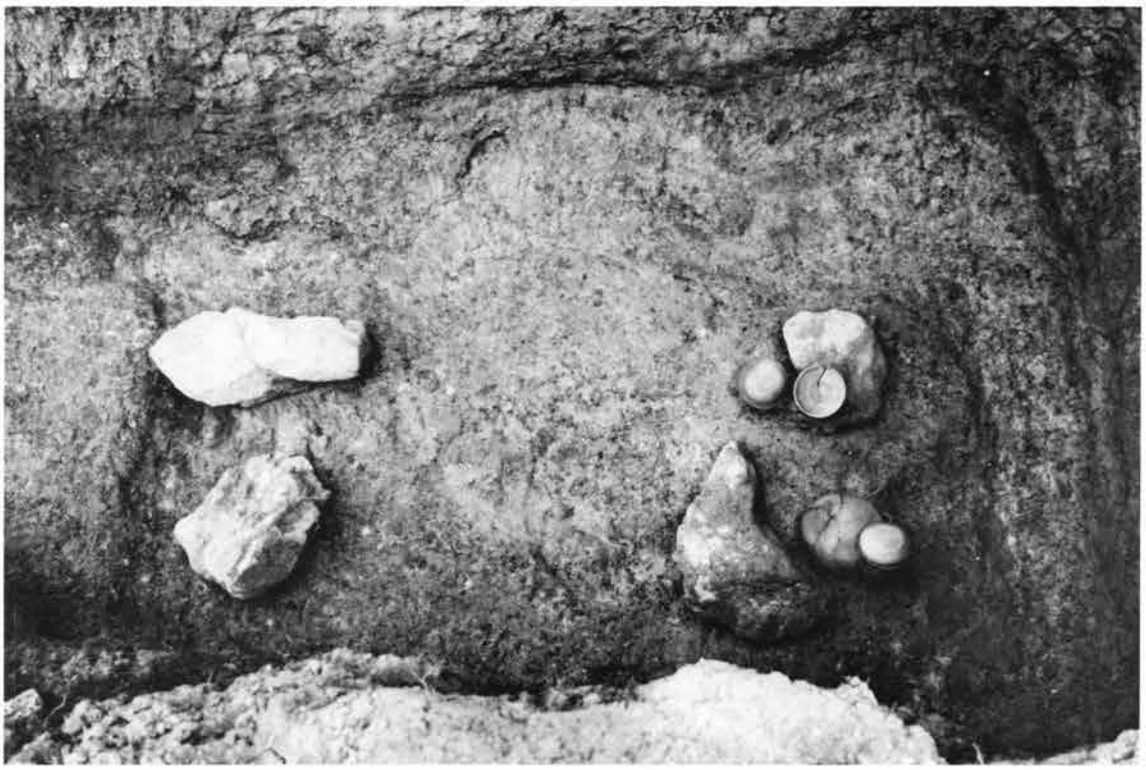


(1)　2号横穴全景（北から）

(2)　2号横穴玄室（西から）

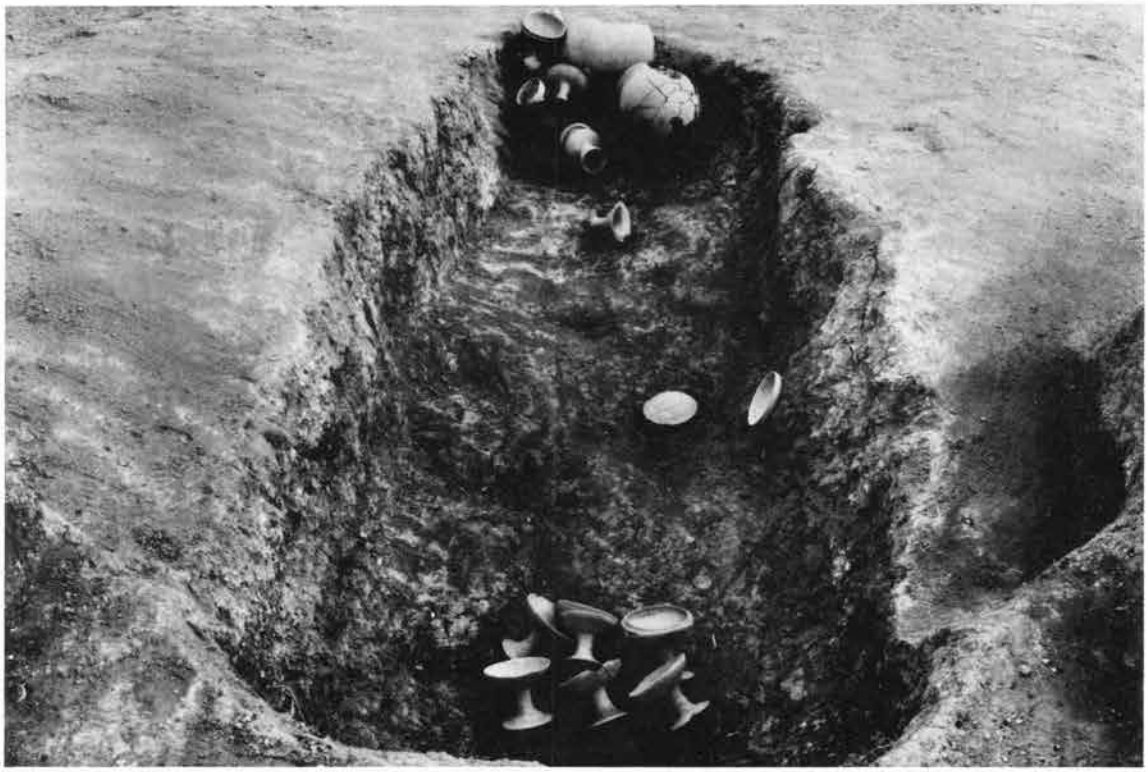
図版第11　栗ヶ丘横穴群

(1)　3号横穴全景（南西から）



(2)　3号横穴玄室（北東から）

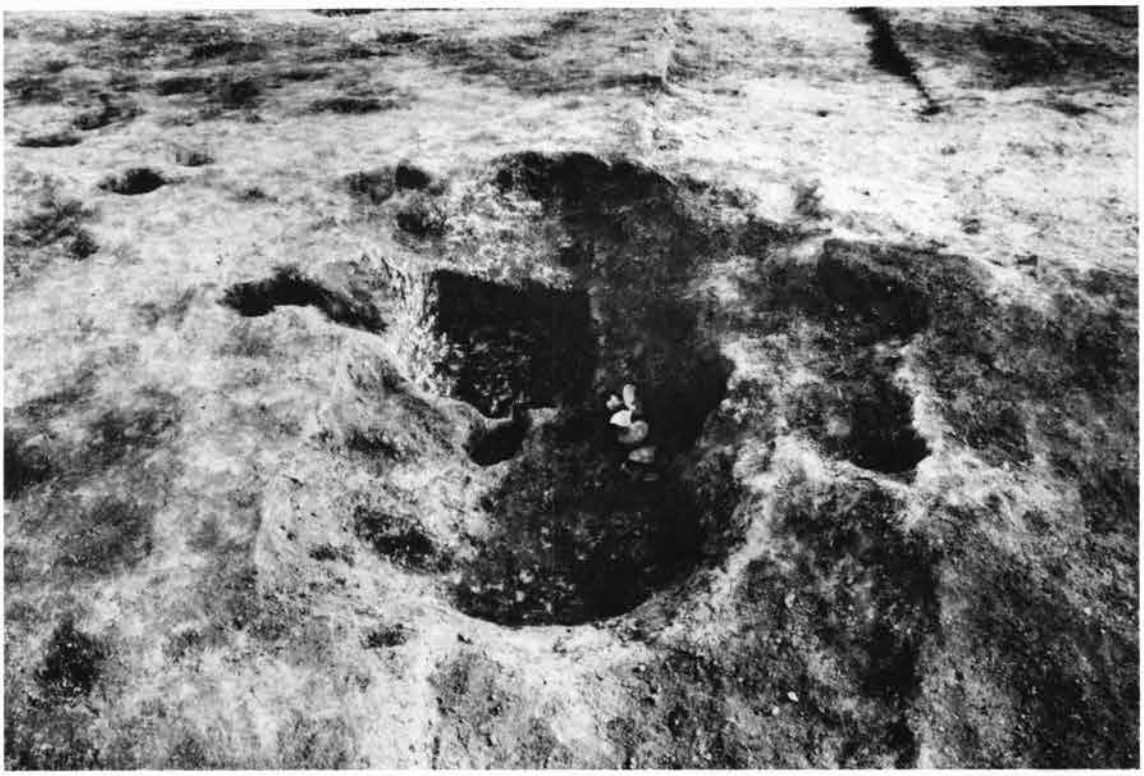
図版第12　栗ヶ丘横穴群



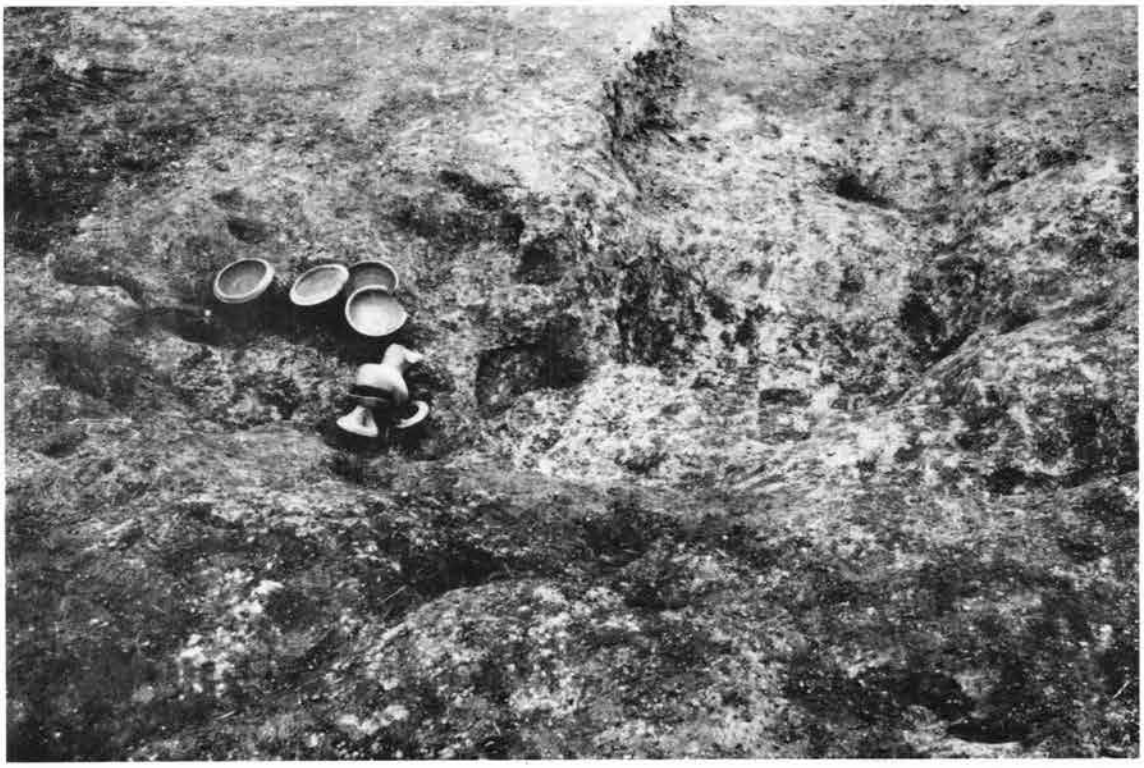
(1) 土坑1（北から）

(2) 土坑1遺物出土状況

図版第13　栗ヶ丘横穴群

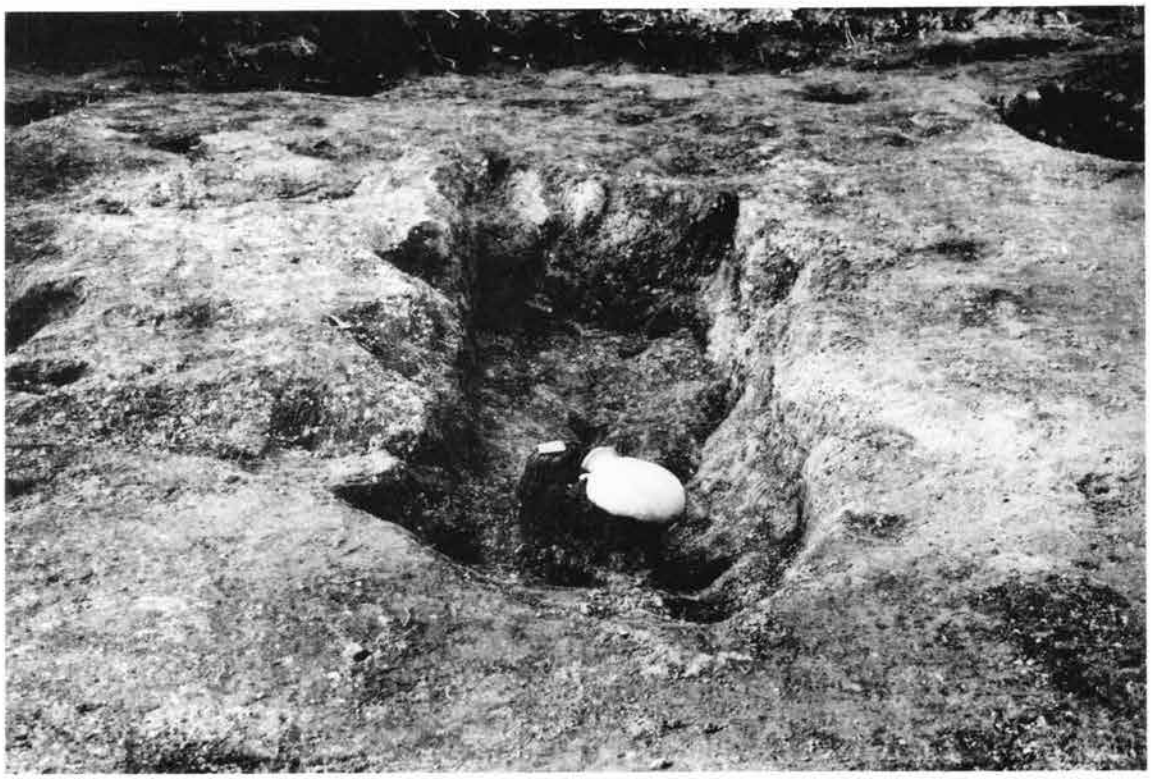


(1) 土坑３（北から）

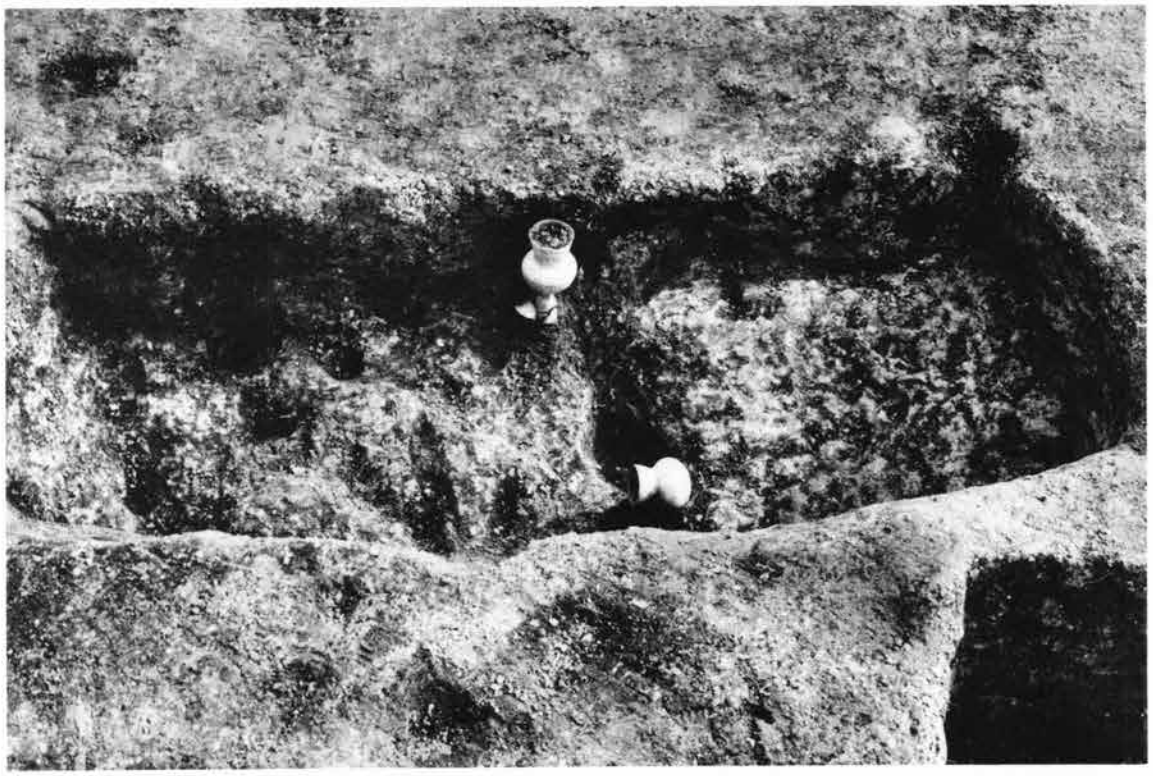


(2) 土坑４（北から）

図版第14　栗ヶ丘横穴群



(1) 土坑５（南から）



(2) 土坑６（北から）

図版第15　栗ヶ丘横穴群

横穴出土遺物

図版第16　栗ヶ丘横穴群

土坑出土遺物　(1)

35

36

52

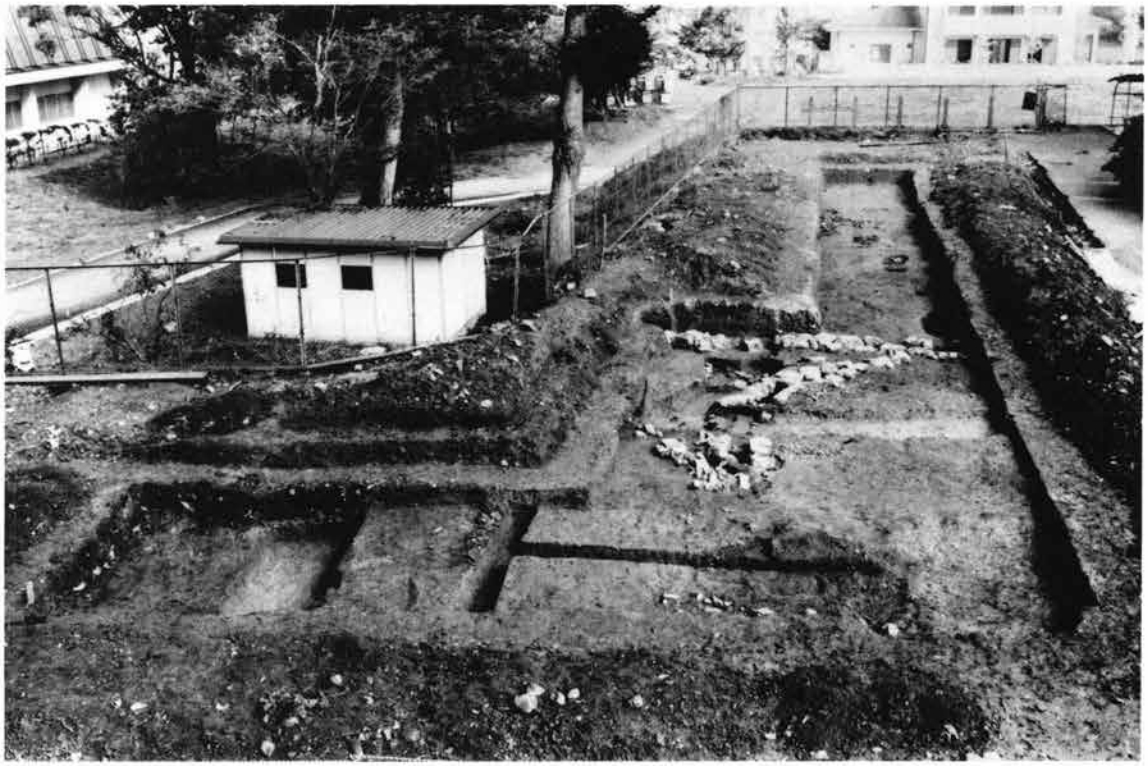
42

49

土坑出土遺物　(2)

図版第18　園部城跡第２次

(1)　調査地調査前全景

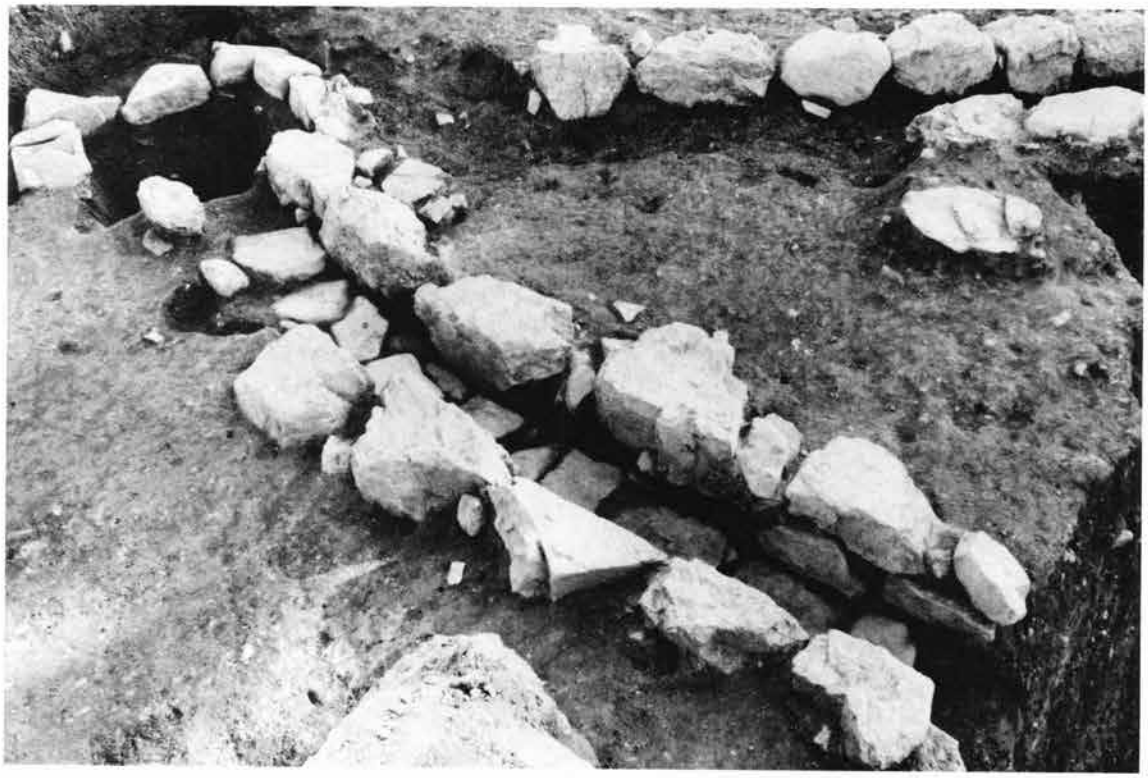


(2)　調査地全景

図版第19　園部城跡第２次

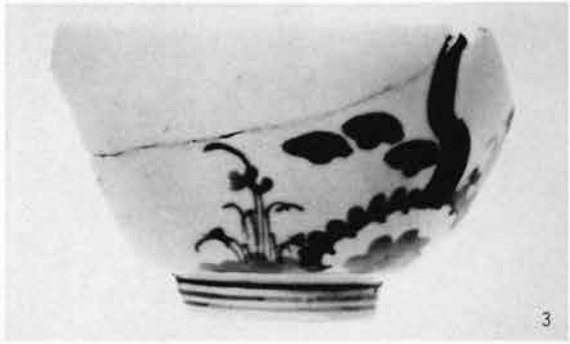
(1) 石組み溝（ＳＤ01～ＳＤ03）検出状況

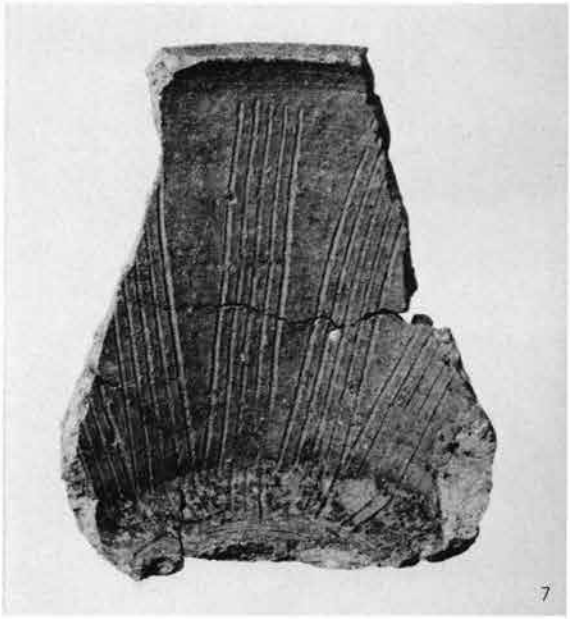
(2) ＳＤ01北半部検出状況（蓋石除去前）

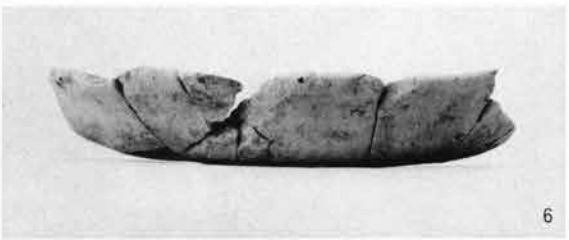


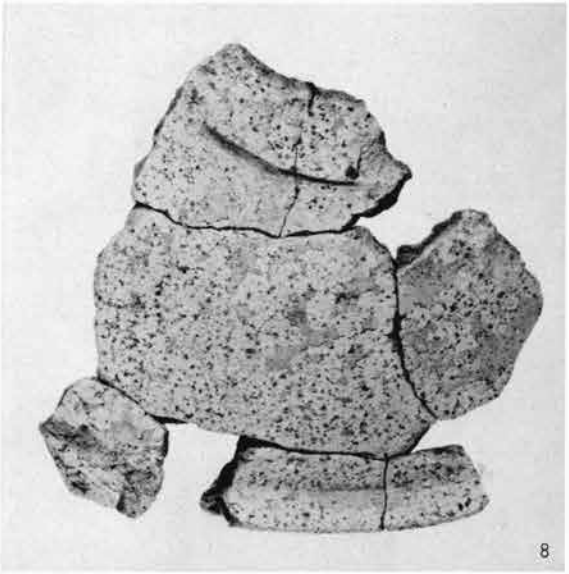
(1)　ＳＤ01南半部検出状況

(2)　ＳＥ01検出状況



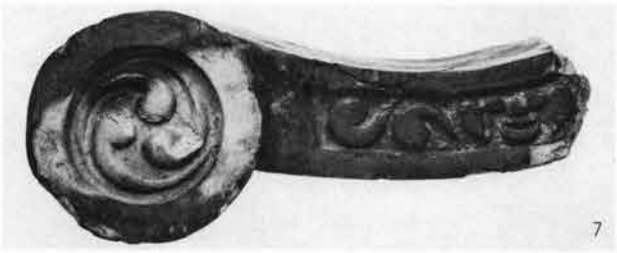






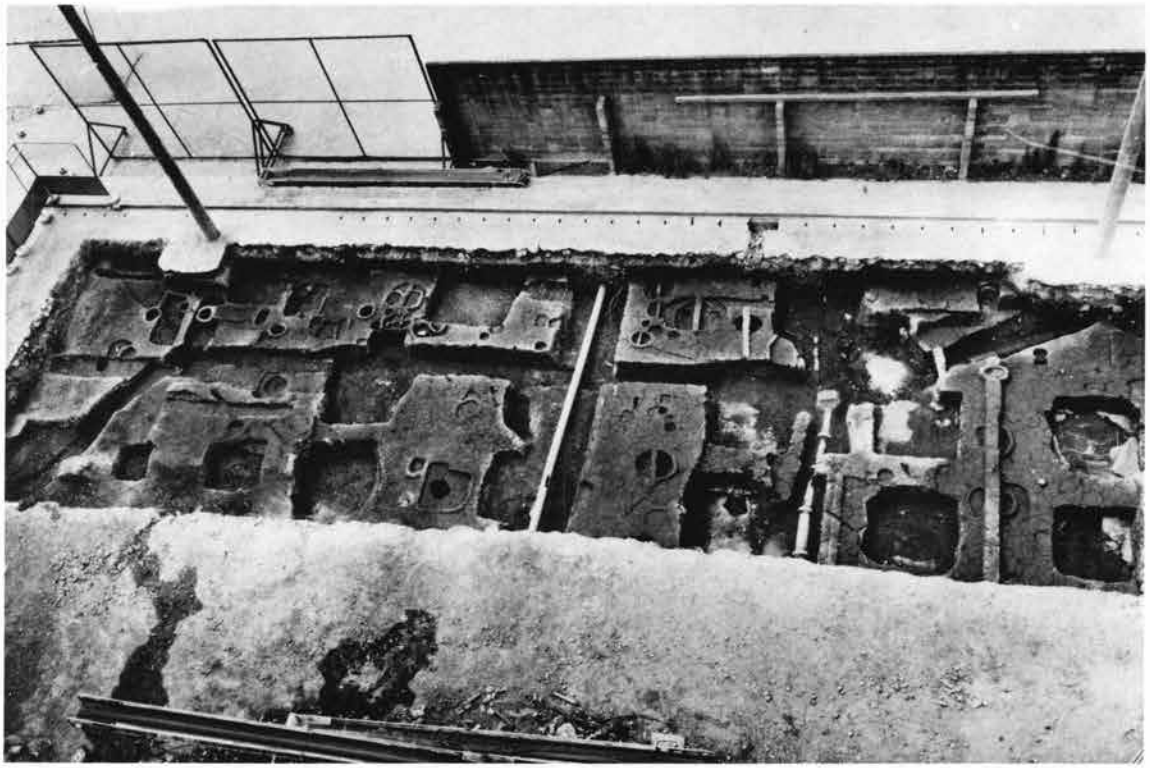
出土遺物

図版第22　園部城跡第２次



出土遺物

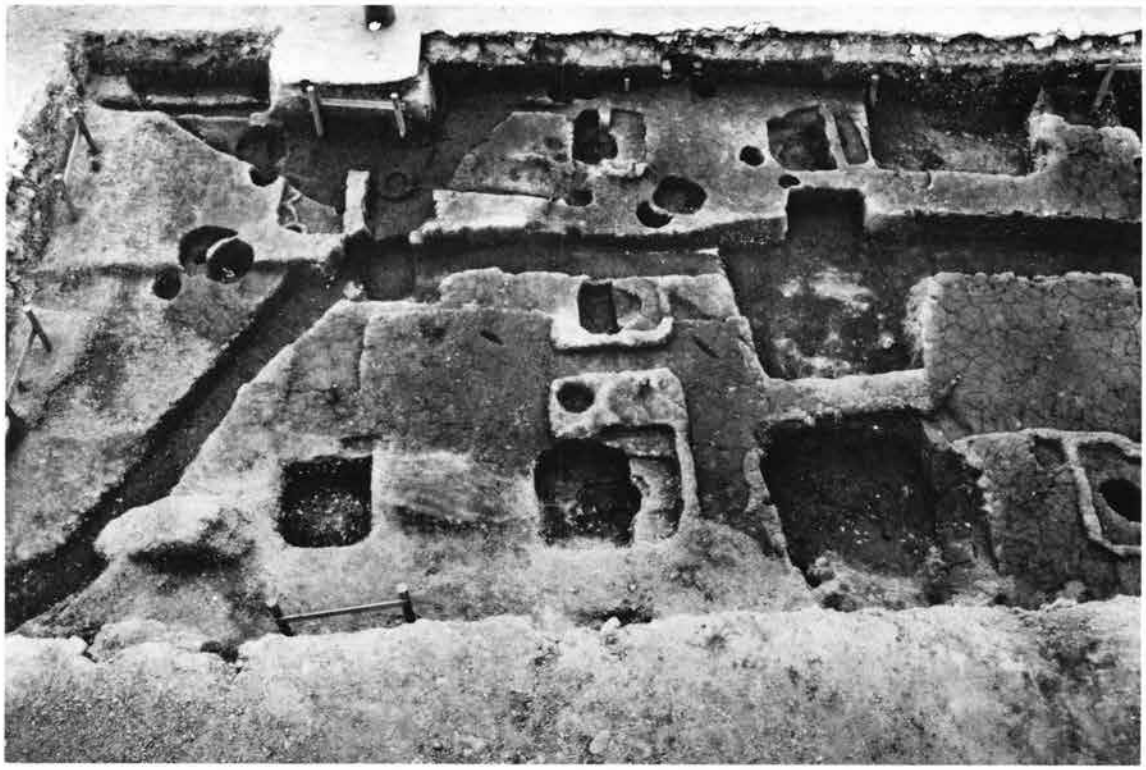
図版第23　平安京右京一条三坊九町



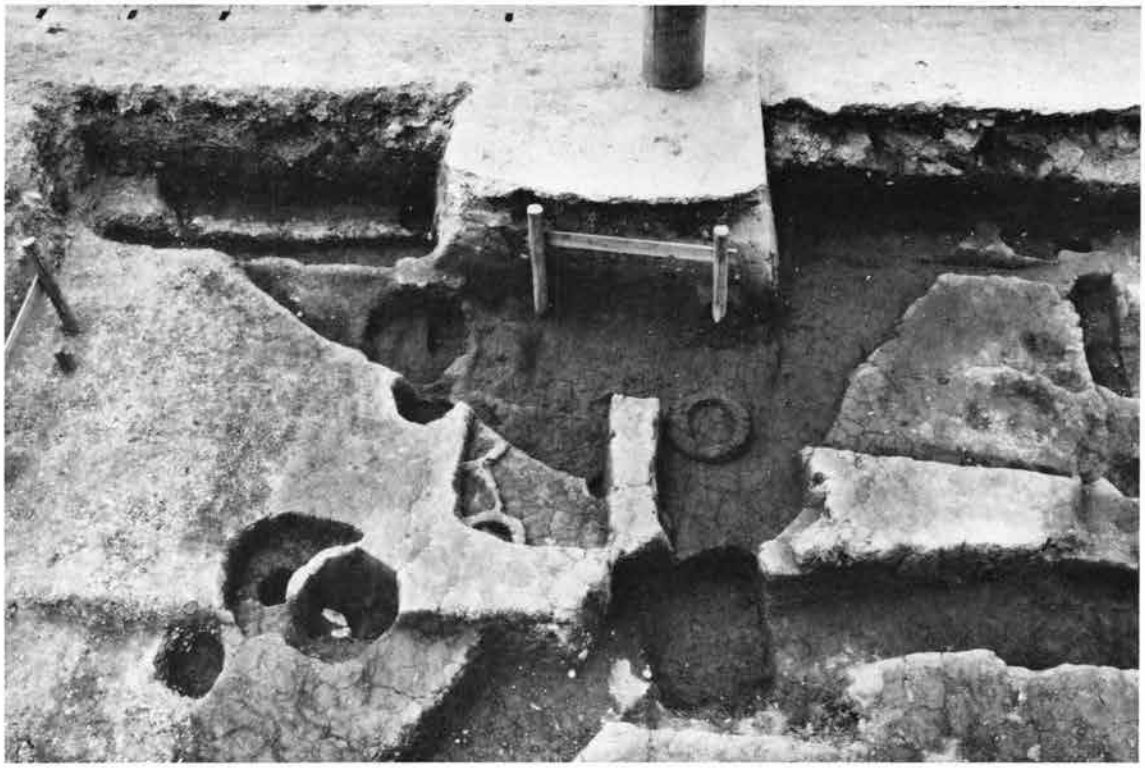
(1) Aトレンチ調査地全景（北から）

(2) 同上（東から）

図版第24　平安京右京一条三坊九町

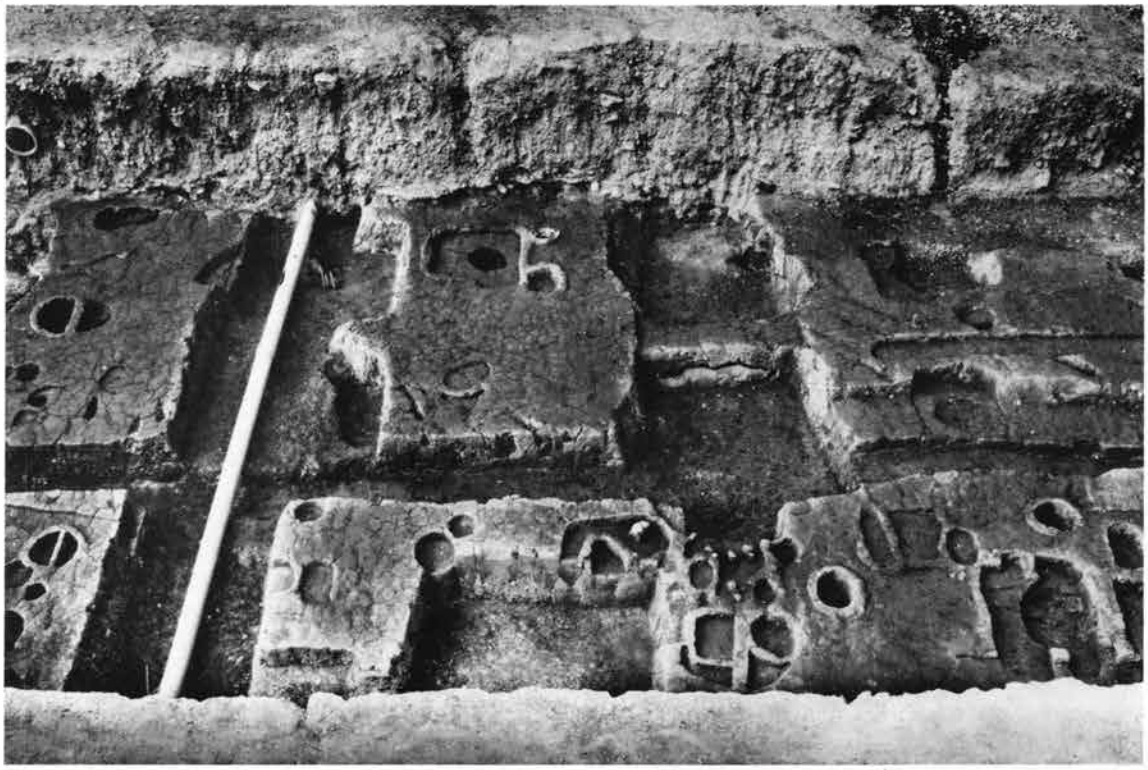


(1)　Aトレンチ東半部（北から）

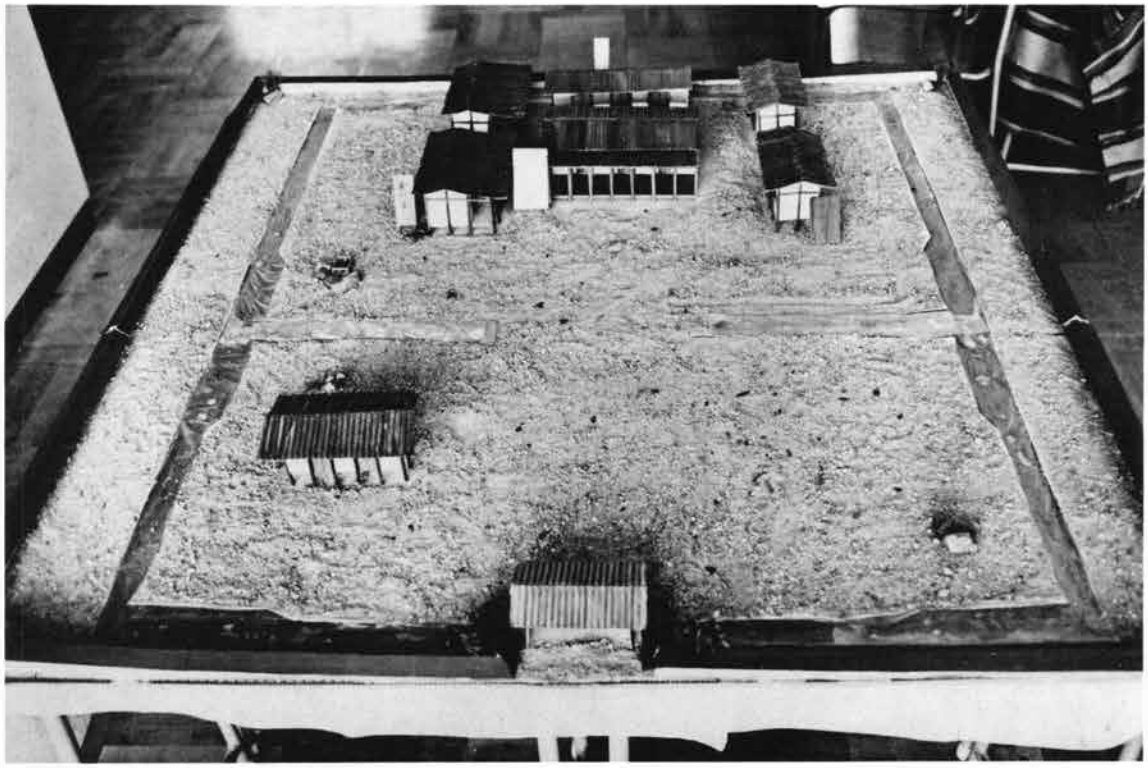


(2)　AトレンチSB0766・0771完掘状態（北から）

図版第25　平安京右京一条三坊九町



(1)　AトレンチSB0733（南から）



(2)　第Ⅲ期建物群、復原模型（山城高校歴史クラブ作成）

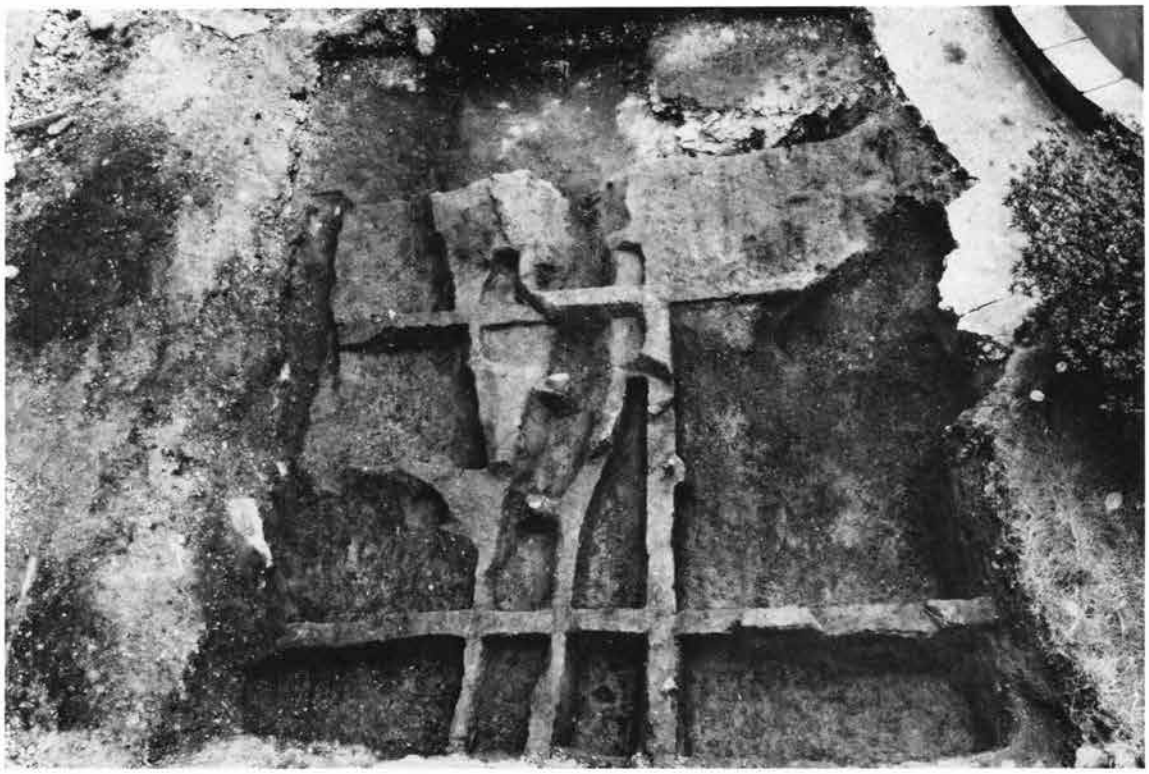
(1)　ＳＢ33、13Ｚ区掘形（南から）

(2)　ＳＢ33、９Ｘ区掘形（西から）

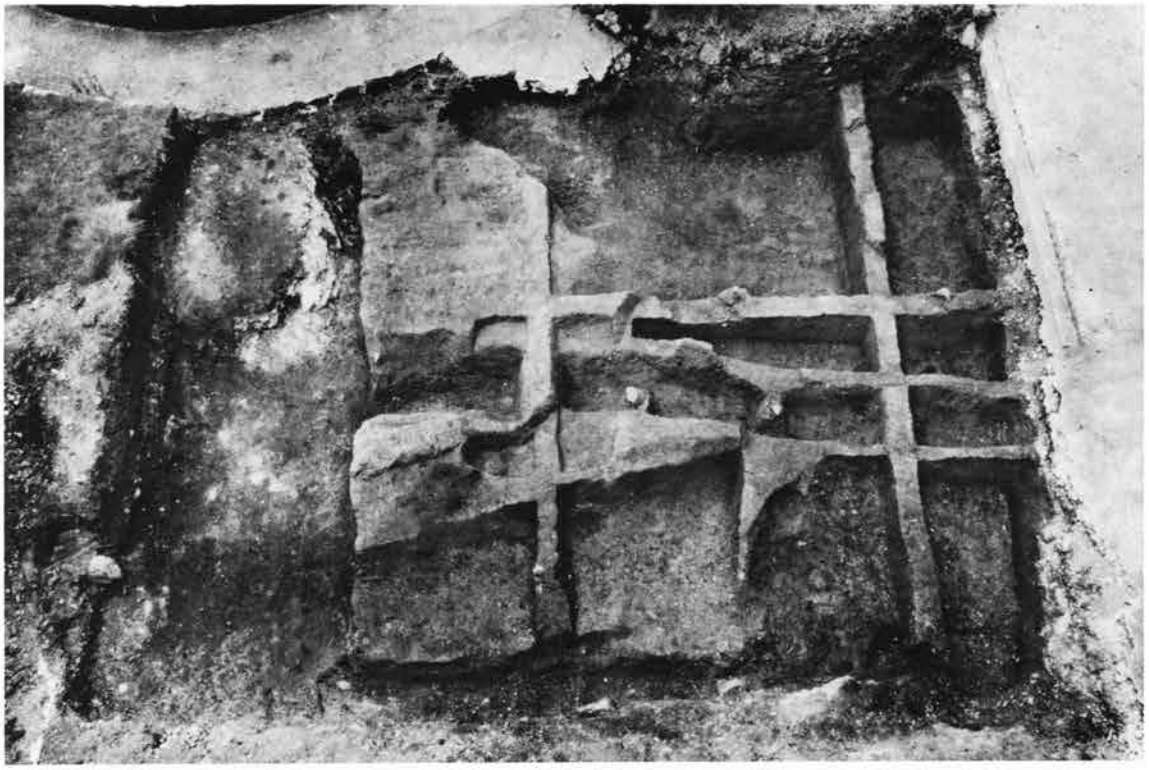
(3)　ＳＢ33、12Ｚ区掘形（東から）

(4)　ＳＢ33、13Ｙ区掘形（西から）

図版第27　平安京右京一条三坊九町



(1) Bトレンチ全景（北から）



(2) 同上（東から）

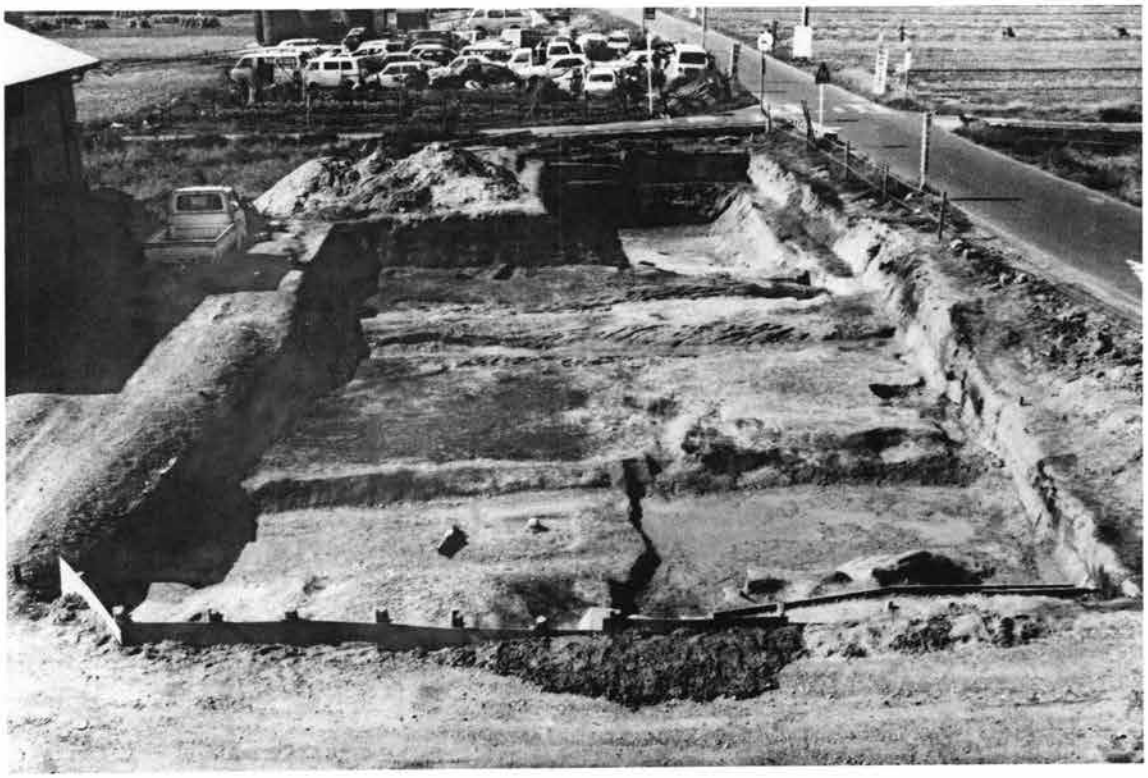
図版第28　八後遺跡・恭仁京跡(作り道)

(1) 調査前風景（Bトレンチ周り、北西より）

(2) 調査前風景（Cトレンチ周り、東から）

図版第29　八後遺跡・恭仁京跡(作り道)

(1)　Aトレンチ全景（東から）



(2)　Bトレンチ全景（東から）

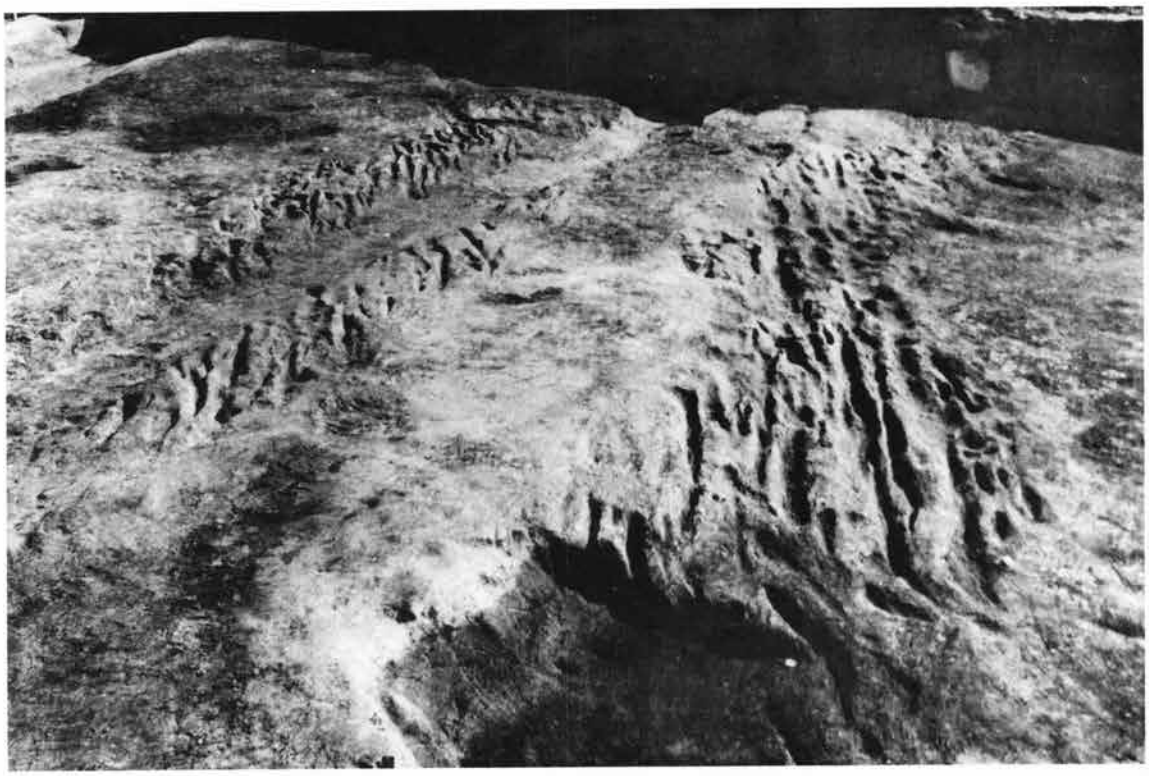
図版第30　八後遺跡・恭仁京跡(作り道)

(1)　BトレンチSD04全景（北から）

(2)　BトレンチSD08（東から）

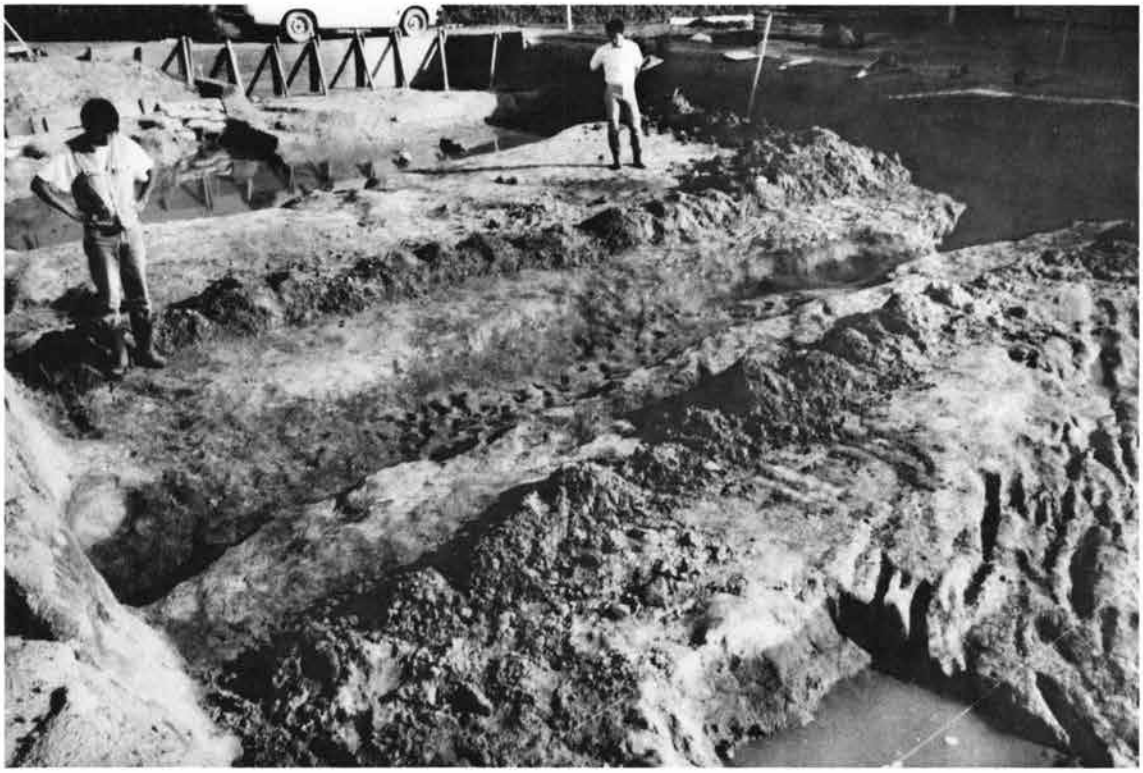
図版第31　八後遺跡・恭仁京跡(作り道)

(1)　Bトレンチ S D06・08・轍跡全景（南東から）

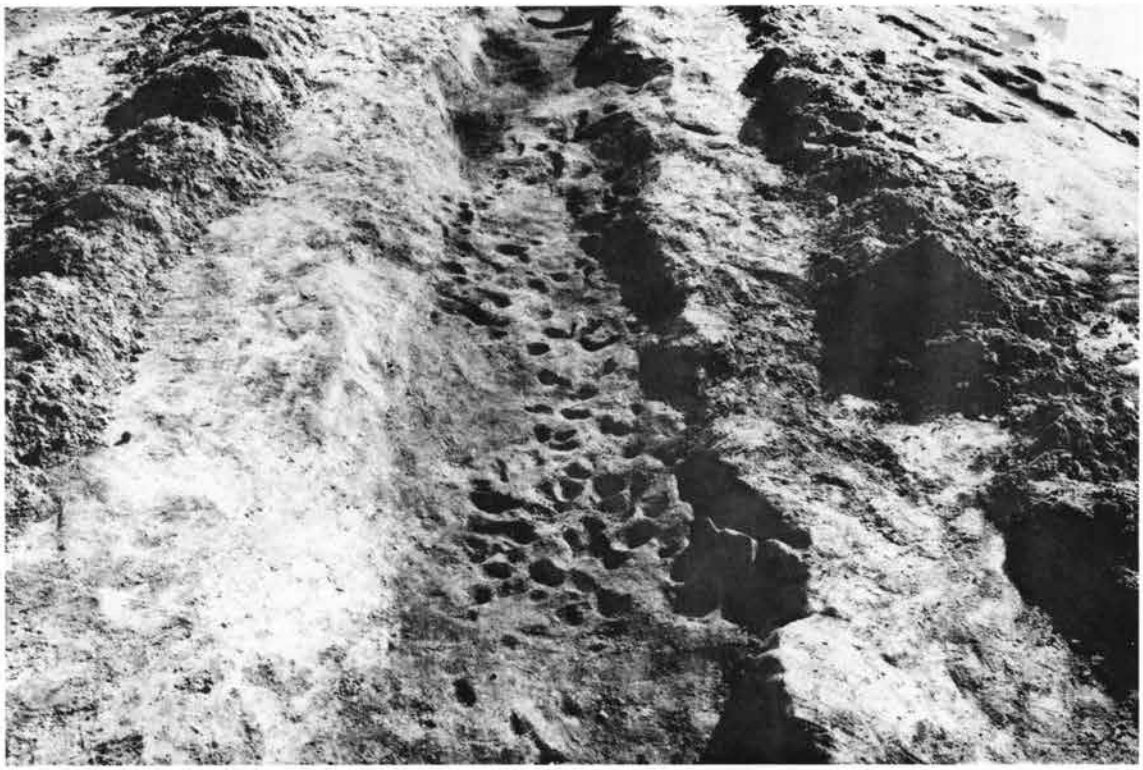


(2)　Bトレンチ轍跡（北西から）

図版第32　八後遺跡・恭仁京跡(作り道)



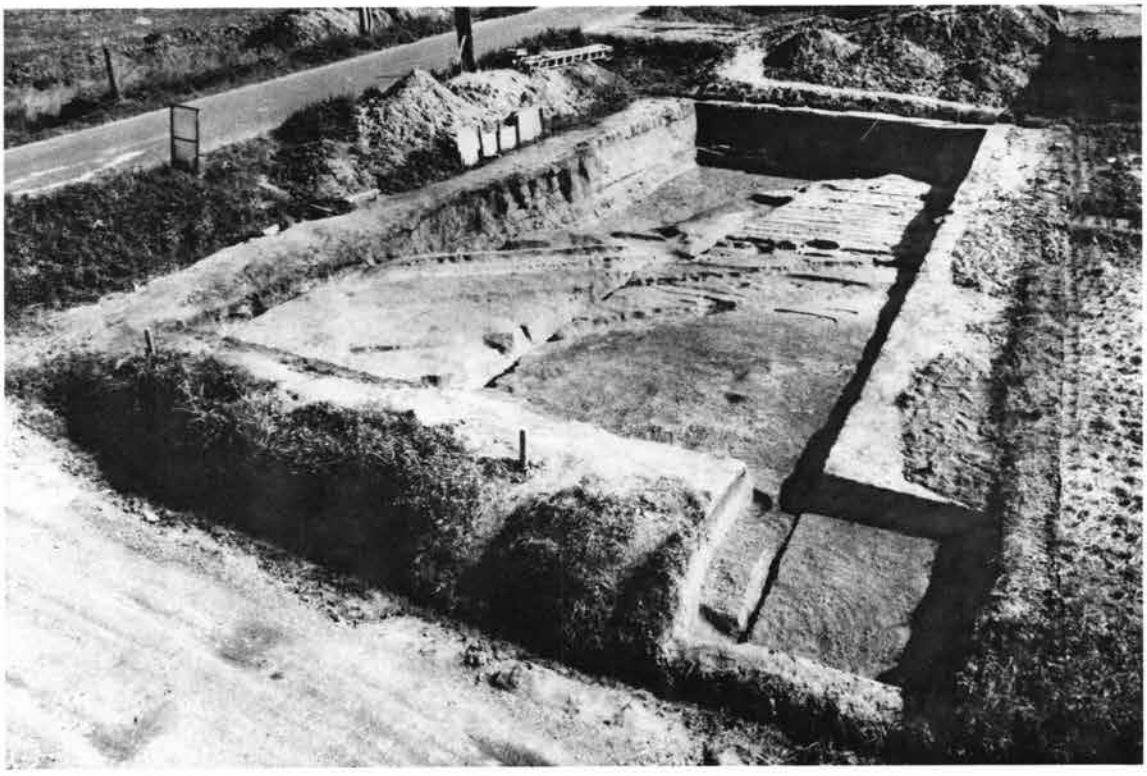
(1)　BトレンチSD06完掘状況（北西から）



(2)　BトレンチSD06底面検出足跡（北から）

図版第33　八後遺跡・恭仁京跡(作り道)

(1)　Cトレンチ全景（東から）



(2)　Cトレンチ全景（南西から）

図版第34　八後遺跡・恭仁京跡(作り道)

(1)　CトレンチＳＦ17全景（北西から）

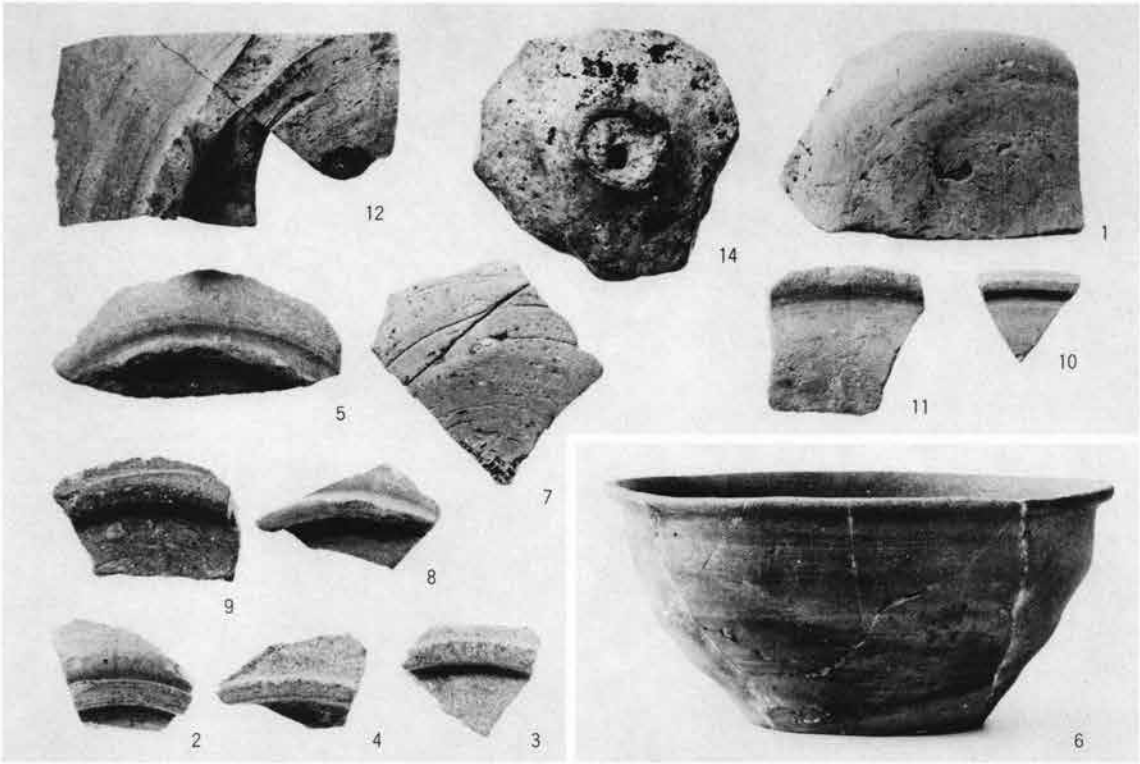
(2)　CトレンチＳＤ02・ＳＤ03（北西から）

図版第35　八後遺跡・恭仁京跡(作り道)

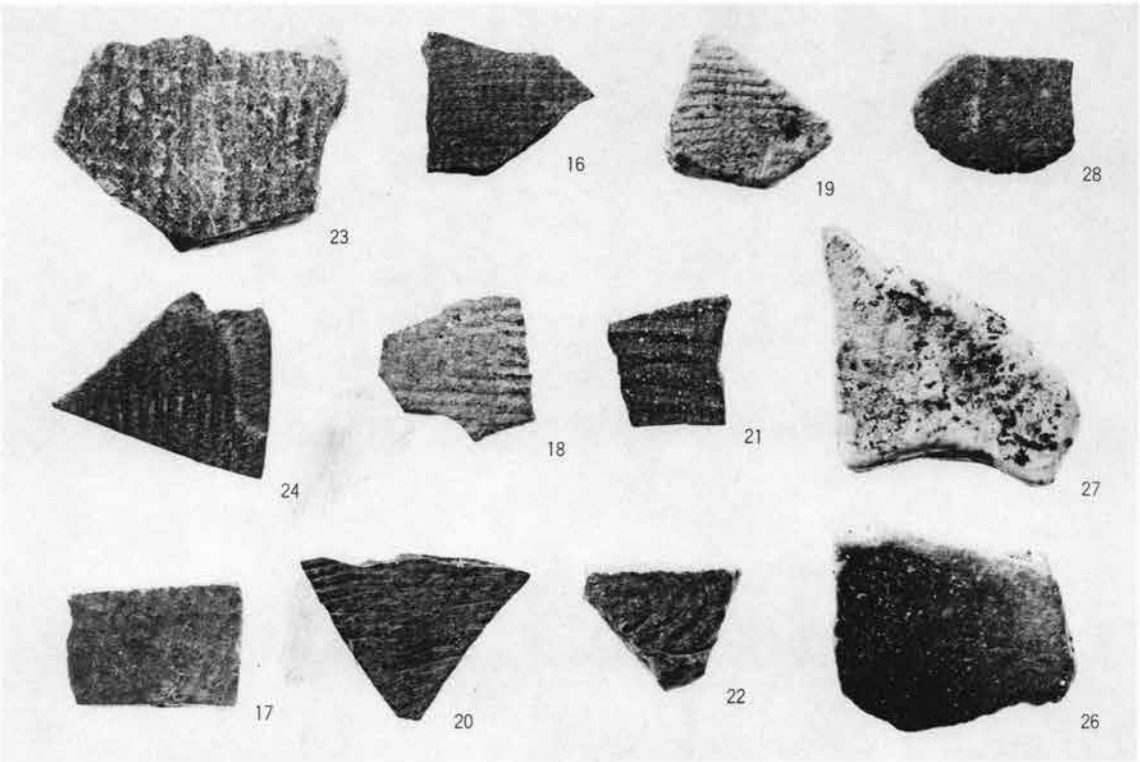
(1)　Eトレンチ全景（東から）

(2)　Dトレンチ全景（東から）

図版第36　八後遺跡・恭仁京跡(作り道)



(1)　出土遺物（第52図）



(2)　出土遺物（第53・54図）

図版第37　京奈バイパス関係遺跡（南稲八妻城跡）

(1) 調査地風景（東から）

(2) 柱穴状遺構検出状況（A′トレンチ南端）

(1)　Cトレンチ掘削状況（北から）

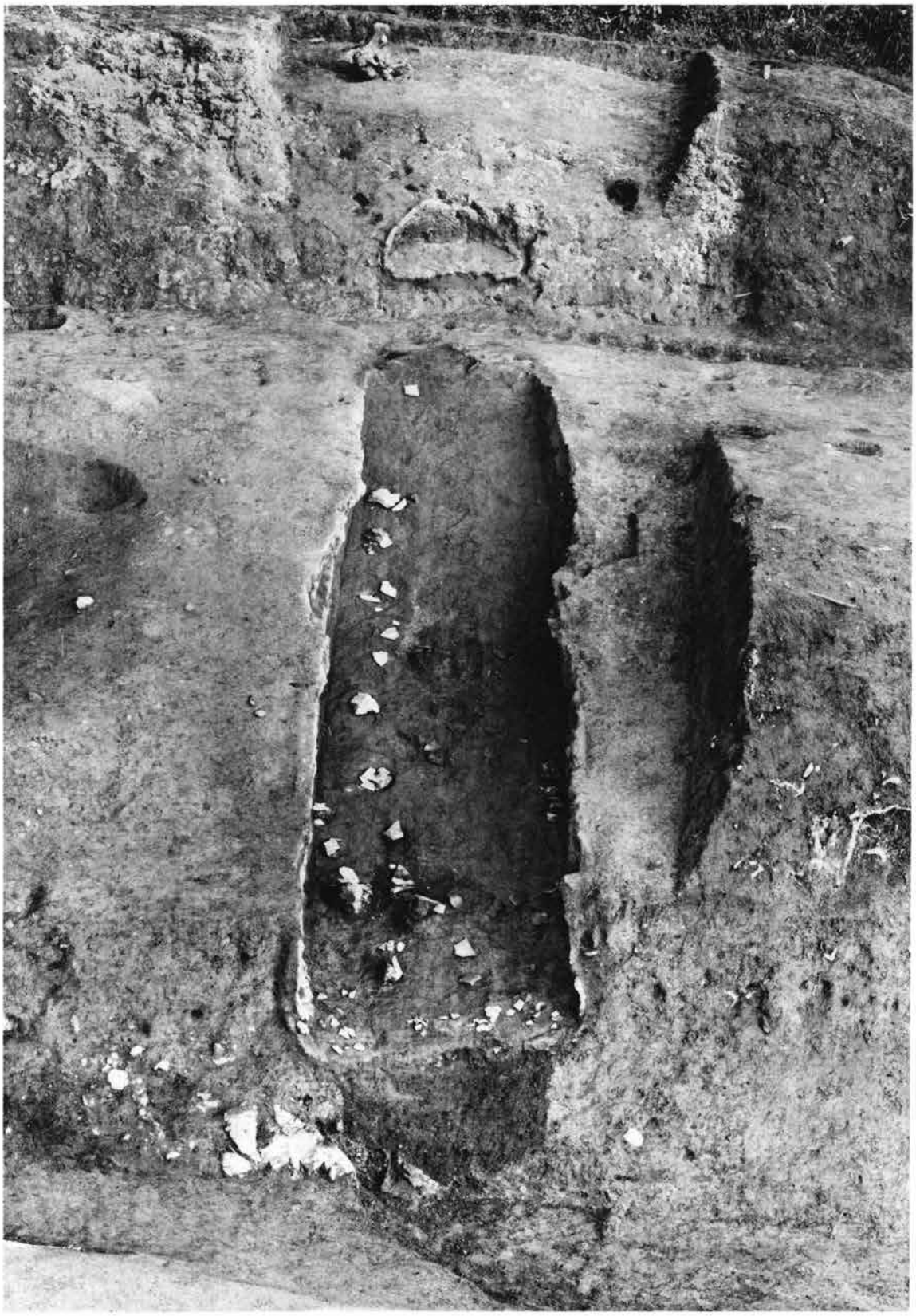
(2)　土師器皿出土状況（Aトレンチ）

図版第39　　シゲツ窯跡・シゲツ墳墓群

(1)　シゲツ窯跡調査前遠景

(2)　シゲツ１号窯検出状況

図版第40　　シゲツ窯跡・シゲツ墳墓群

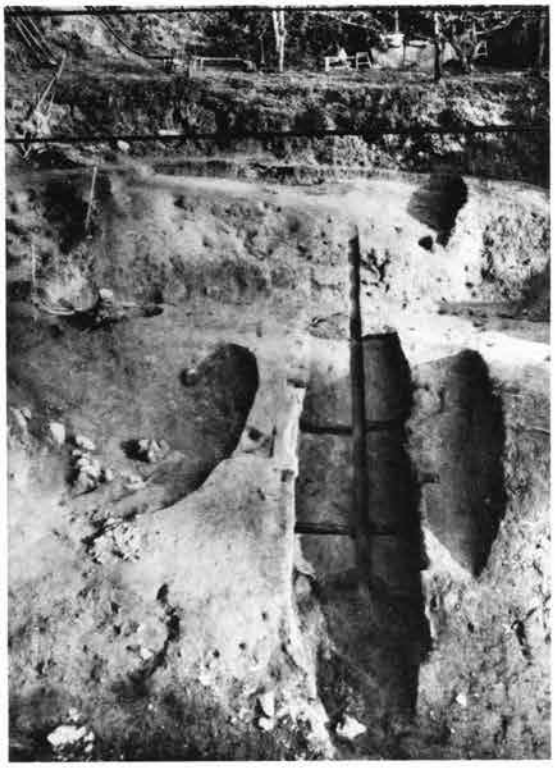


シゲツ１号窯全景

図版第41　シゲツ窯跡・シゲツ墳墓群

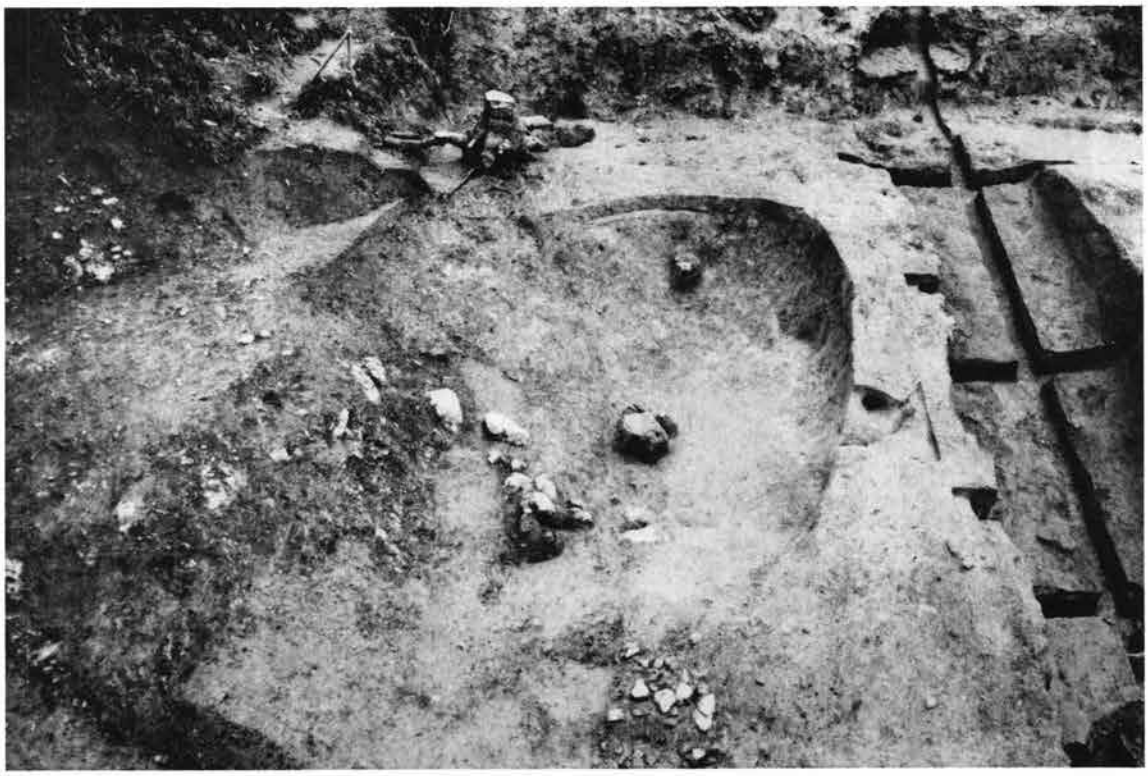
(1) 土坑完掘状況

(2) 杭跡検出状況



(3) 第1トレンチ完掘状況

図版第42　シゲツ窯跡・シゲツ墳墓群



(1) 焼 土 坑

(2) 第2トレンチ全景

図版第43　シゲツ窯跡・シゲツ墳墓群

(1) シゲツ墳墓群遠景

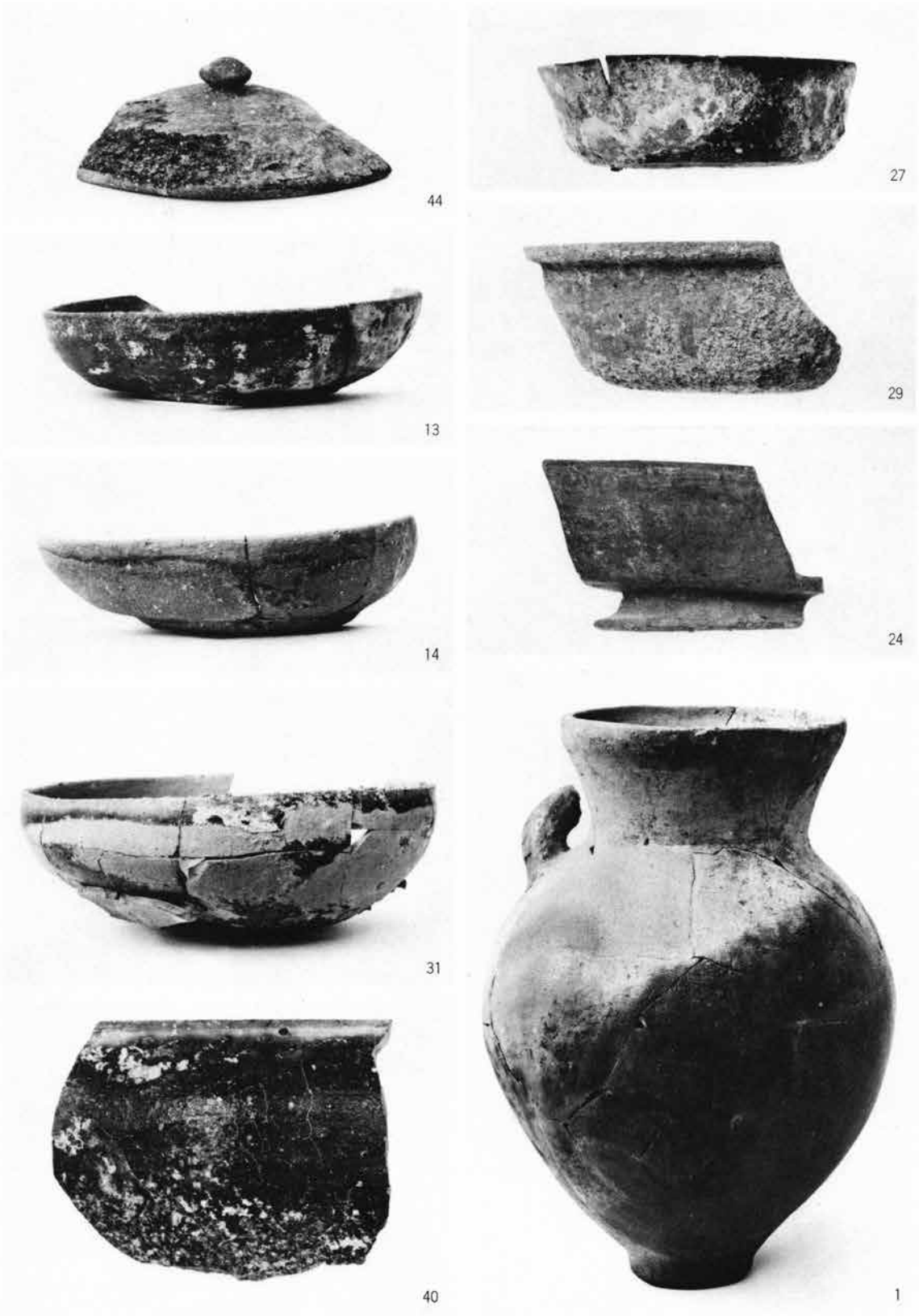
(2) シゲツ墳墓群から志高遺跡を望む

図版第44　シゲツ窯跡・シゲツ墳墓群

(1)　2・3号墳・4号墓近景

(2)　4号墓完掘状態

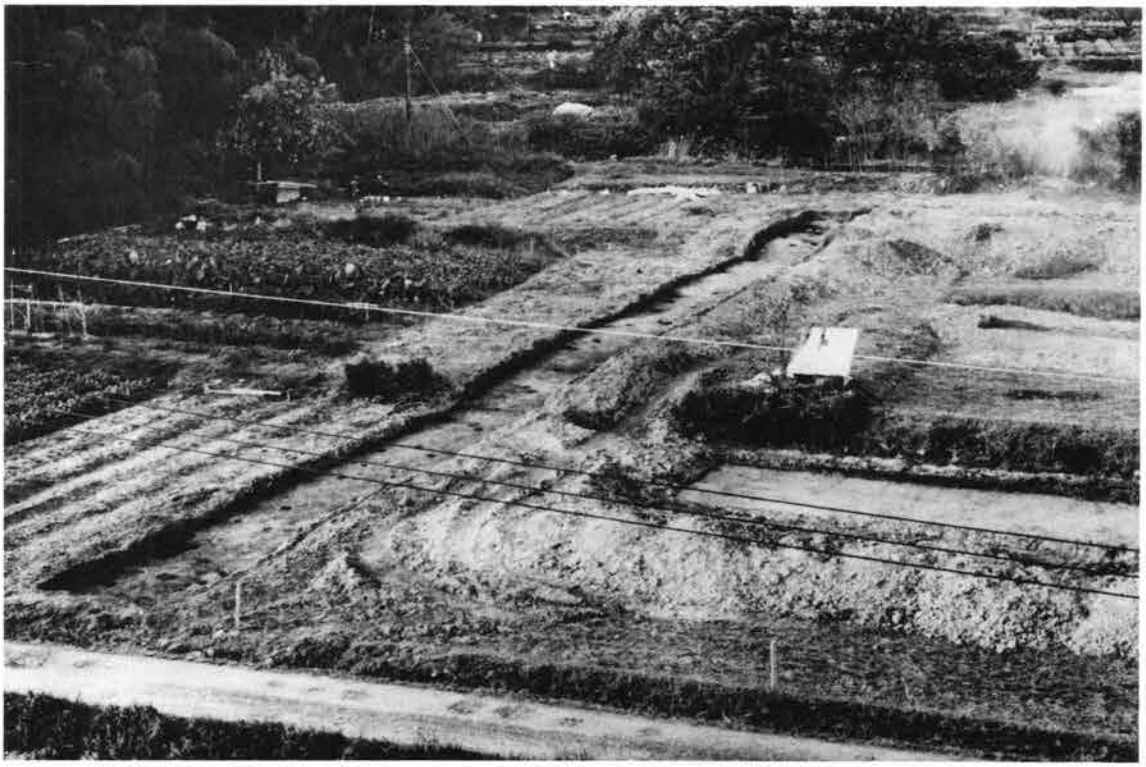
図版第45　シゲツ窯跡・シゲツ墳墓群



13・14・31・40・27・29・24：1号窯，44：焼土坑，1：4号墓主体部

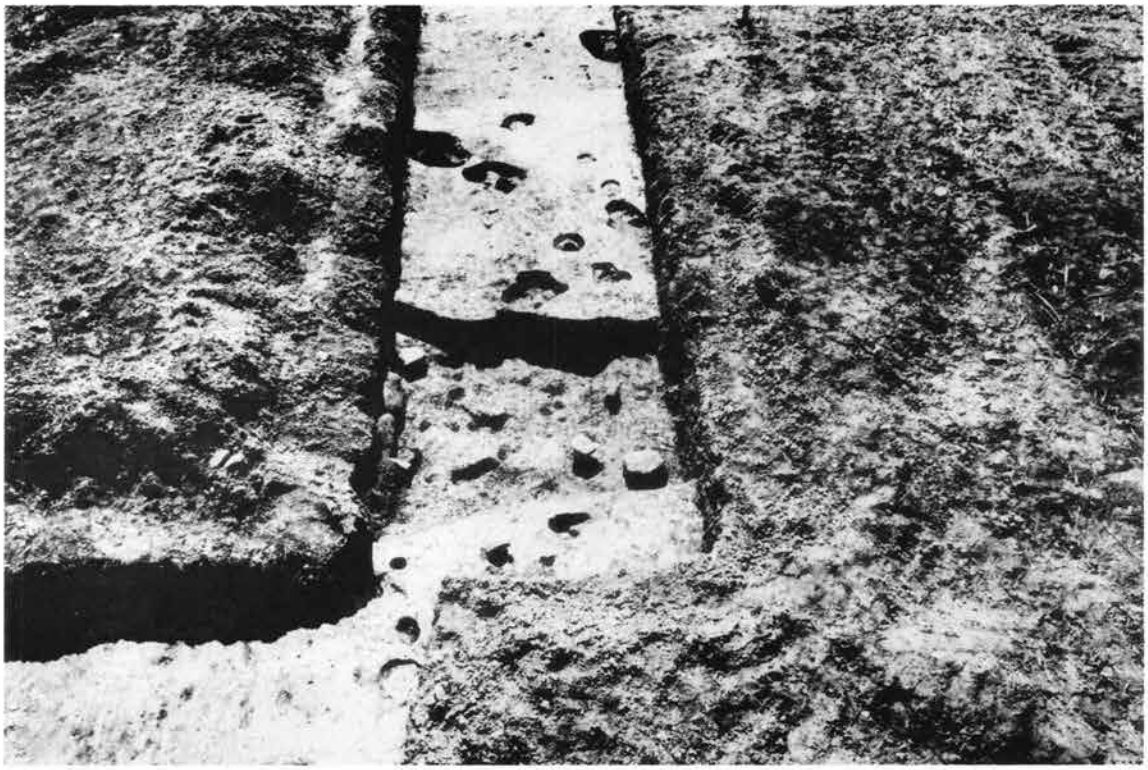
図版第46　泉源寺遺跡

(1) 調査地全景（西から）



(2) 第1トレンチ試掘状況（南東から）

図版第47　泉源寺遺跡



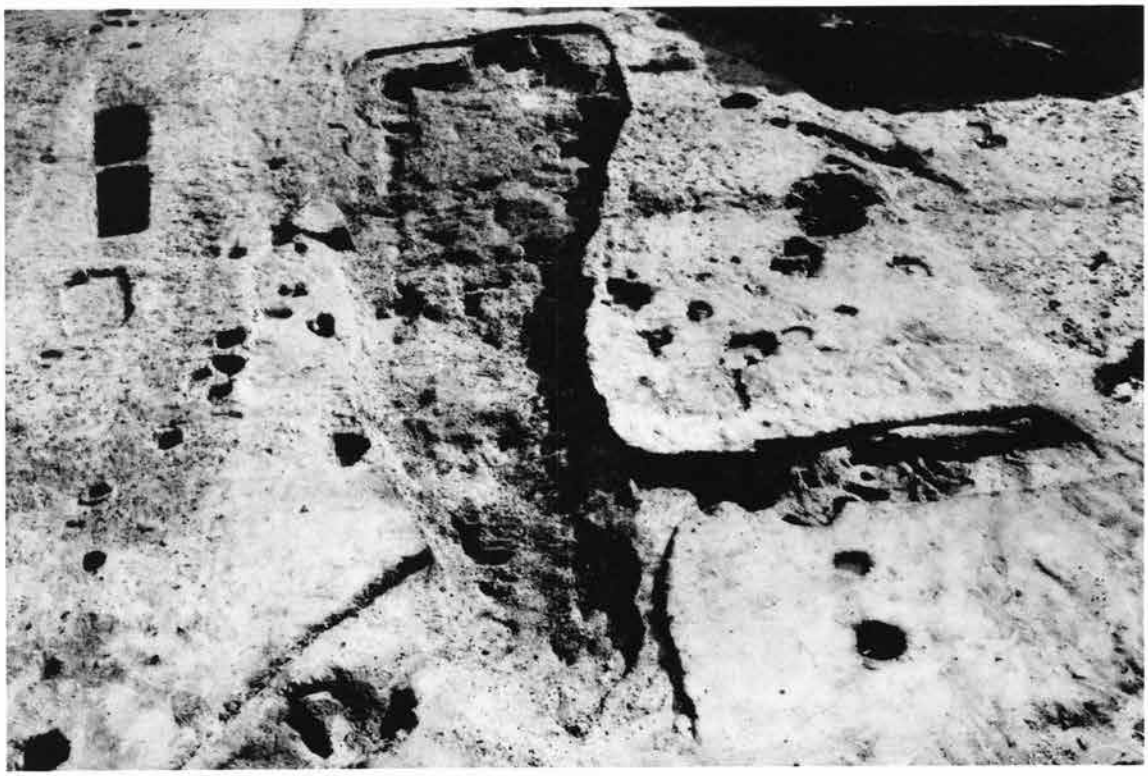
(1) 泉源寺２号墳検出状況（北北東から）

(2) 第２トレンチ付近拡張区掘削状況（北西から）

(1)　第１トレンチ付近拡張掘削状況（南南西から）

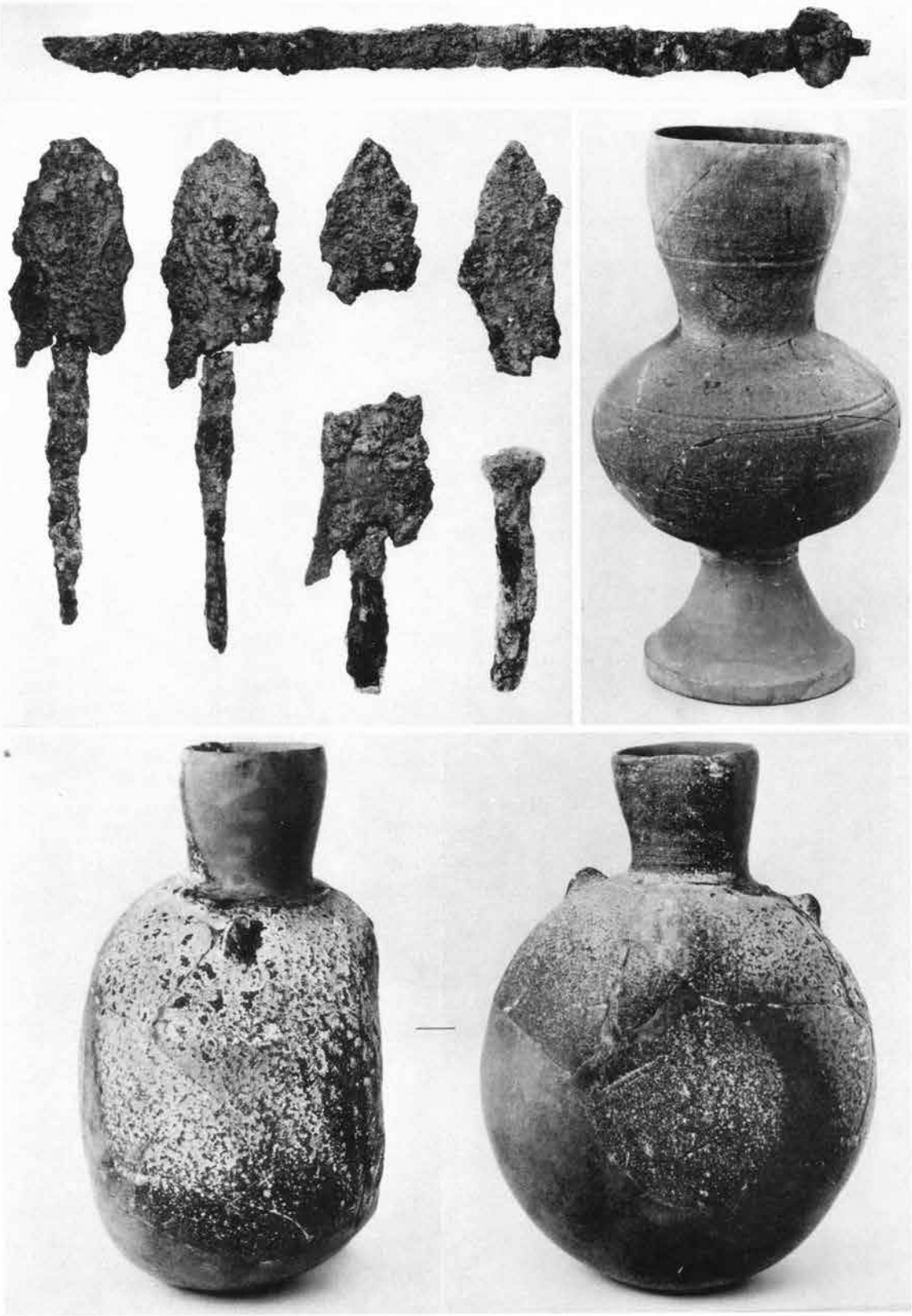
(2)　ＳＢ01・ＳＡ01検出状況（南南西から）

(1)　泉源寺２号墳検出状況（北西から）



(2)　泉源寺２号墳掘形完掘状況（北西から）

出土遺物（須恵器・土師器）



出土遺物（須恵器・鉄器）

図版第52　八ヶ坪遺跡第３次

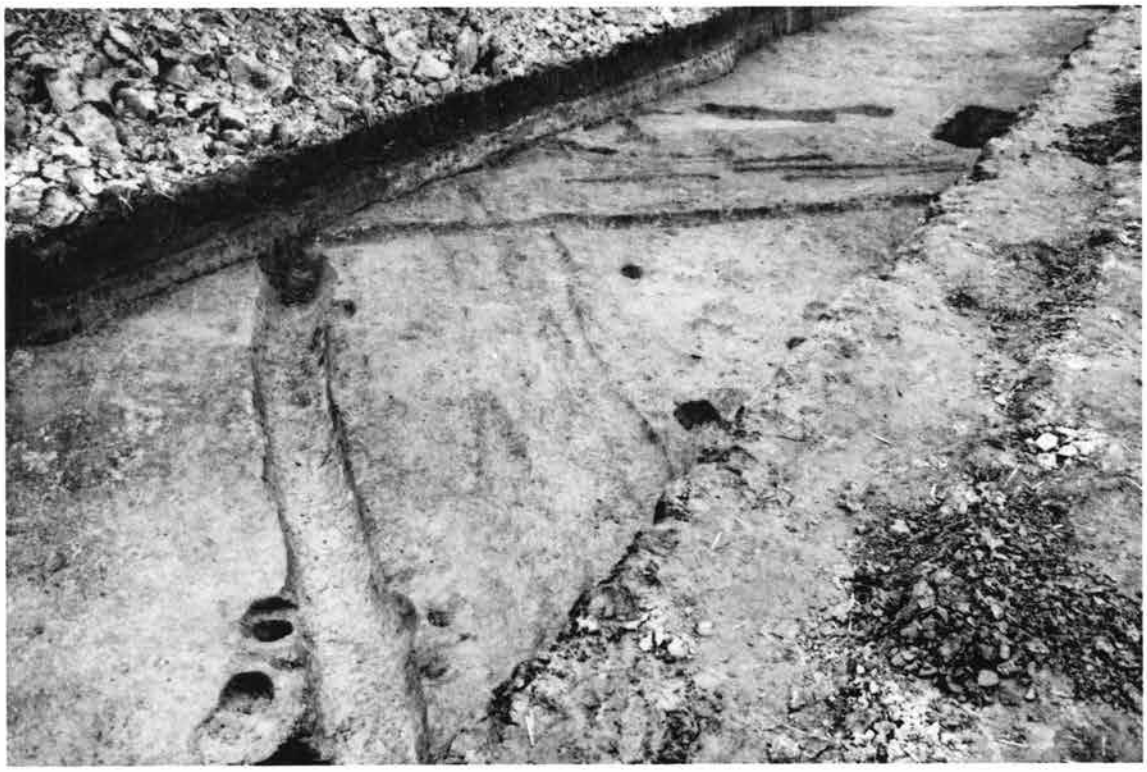
(1) 第１トレンチ全景（北から）

(2) 第２トレンチ調査前全景（北から）

(1)　第２トレンチ断ち割り坑№３　土層堆積状況（西から）

(2)　第１トレンチ断ち割り坑№１　土層堆積状況（西から）

(1) 第２トレンチ中世溝完掘状況（北西から）

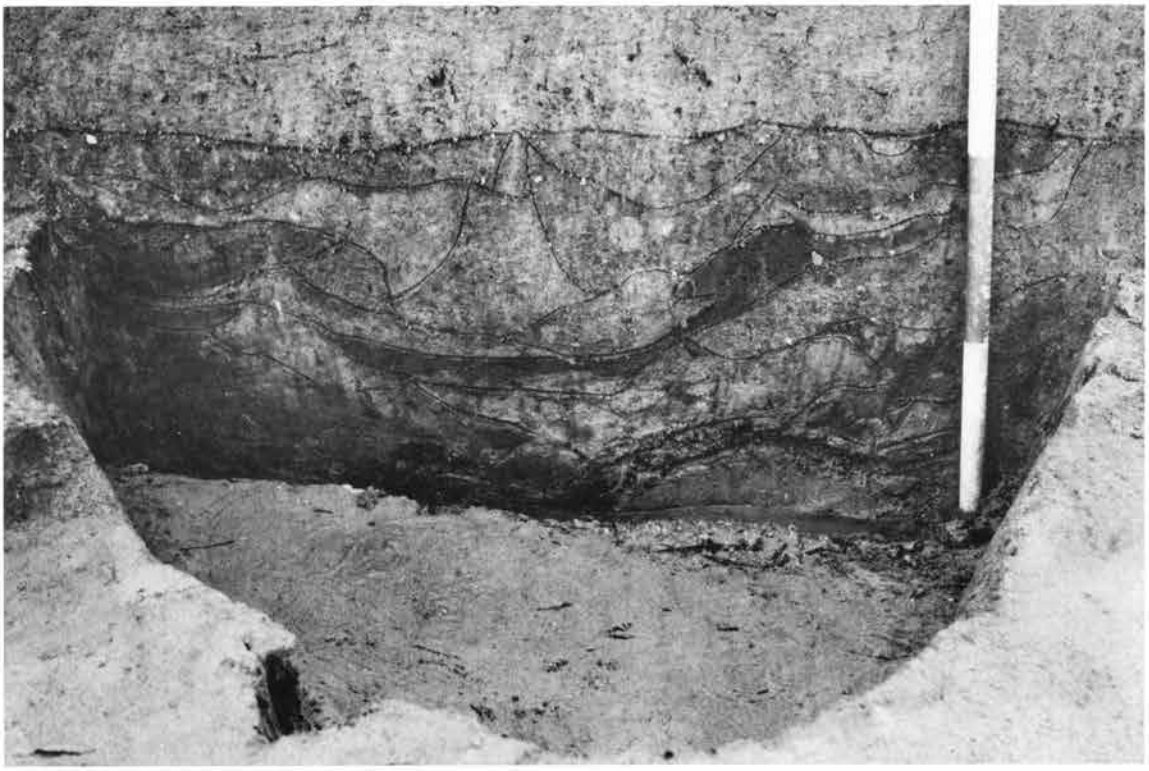


(2) 第２トレンチ中世溝完掘状況（西から）

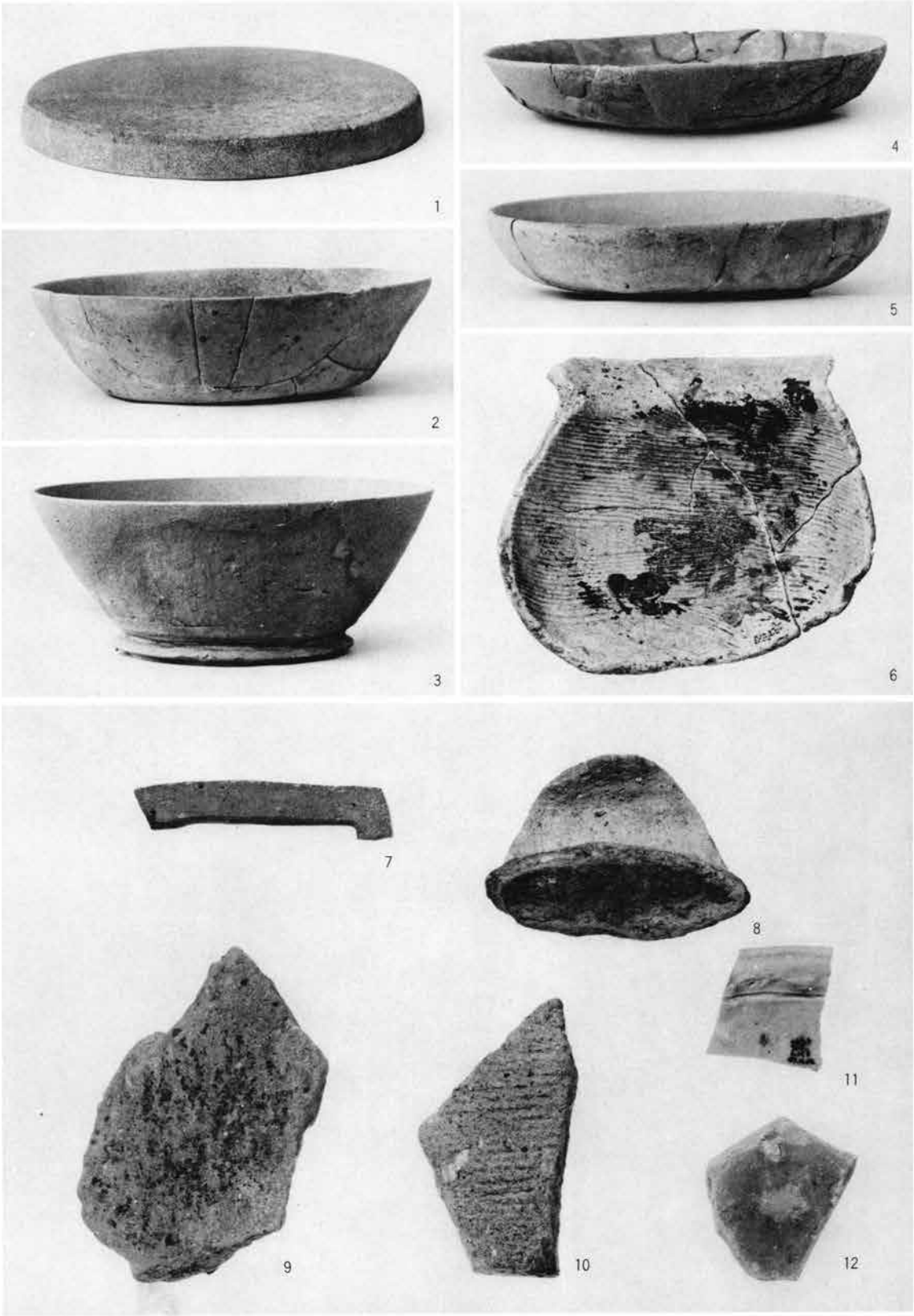
(1)　第３トレンチ遺構完掘状況（東から）

(2)　第３トレンチ遺構完掘状況（北西から）

(1)　L.N.12遺物検出状況（北西から）



(2)　L.N.19南壁断面（北から）



出土遺物　1～3・7．須恵器　4～6・8．土師器　9・10．瓦　11．白磁　12．青磁

京都府遺跡調査概報 第28冊

昭和63年3月25日

発行　(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617 京都府向日市寺戸町南垣内40の3
TEL (075)933-3877

印刷　中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075)441-3155 (代)